

# 京都府遺跡調査概報

## 第 66 冊

1. 上野古墳群・滝谷遺跡
2. あじわいの郷関係遺跡
  - (1) ニゴレ遺跡
  - (2) 鳥取峠1号墳
3. 金谷古墳群(1号墓)
4. 定山遺跡第4次
5. 引地城跡
6. 丹波亀山城跡第4次
7. 長岡京跡右京第474次

1 9 9 5

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



(1) 上野1号墳石室全景（北東から）



(2) 上野2号墳石室全景（南から）

## 序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、昭和56年4月の設立以来、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

近年、公共事業の増大に伴い、発掘調査も単に件数の増加だけでなく、その内容もとみに大規模化の傾向にあります。当センターでは、こうした状況に対応するため、徐々にではありますが、組織や調査体制の強化を進め調査・研究の充実を図ってまいりました。発掘調査については、『京都府遺跡調査報告書』・『京都府遺跡調査概報』・『京都府埋蔵文化財情報』などの各種刊行物によってその成果を公表するとともに、毎年、展覧会や埋蔵文化財セミナーを開催し、各遺跡の調査内容や出土遺物などを広く府民に紹介し、普及・啓発活動にも意を注いでいるところであります。

本書は、平成5年度に実施した発掘調査のうち、京都府丹後土地改良事務所、京都府農林水産部、京都府土木建築部、京都府道路公社、京都府教育庁管理部、京都府乙訓土木事務所の依頼を受けて行った、上野古墳群・滝谷遺跡・石ヶ原古墳群、丹後あじわいの郷関係遺跡、金谷古墳群(1号墓)、定山遺跡第4次、引地城跡、丹波亀山城跡第4次、長岡京跡右京第474次に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかのお役にたてば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、京都府教育委員会、丹後町教育委員会、弥栄町教育委員会、峰山町教育委員会、岩滝町教育委員会、大江町教育委員会、亀岡市教育委員会、長岡京市教育委員会、向日市教育委員会、(財)長岡京市埋蔵文化財センター、(財)向日市埋蔵文化財センターなどの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成7年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター  
理事長 福山敏男

## 凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。

- |               |                 |         |
|---------------|-----------------|---------|
| 1. 上野古墳群・滝谷遺跡 | 2. 丹後あじわいの郷関係遺跡 |         |
| 3. 金谷古墳群(1号墓) | 4. 定山遺跡第4次      | 5. 引地城跡 |
| 6. 丹波亀山城跡第4次  | 7. 長岡京跡右京第474次  |         |

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1. 上野古墳群・滝谷遺跡 (1)上野古墳群	竹野郡丹後町三宅小字上野	平5.7.19～ 平6.2.9 平6.10.7～ 平7.2.24	京都府土地改良事務所	河野一隆
(2)滝谷遺跡・石ヶ原古墳群	竹野郡丹後町三宅小字上野	平6.10.7～ 平7.2.24		筒井崇史
2. 丹後あじわいの郷関係遺跡 (1)ニゴレ遺跡 (2)鳥取峠1号墳	竹野郡弥栄町鳥取・木橋 竹野郡弥栄町鳥取・木橋	平6.4.18～ 平7.2.24	京都府農林水産部	岡崎研一
3. 金谷古墳群(1号墓)	中郡峰山町鱒留小字金谷	平6.4.25～ 9.2	京都府土木建築部	石崎善久
4. 定山遺跡第4次	与謝郡岩滝町弓木	平6.6.22～ 7.23	京都府道路公社	黒坪一樹
5. 引地城跡	加佐郡大江町矢津	平6.10.7～ 11.22	京都府土木建築部	黒坪一樹
6. 丹波亀山城跡第4次	亀岡市北古世町1丁目	平6.9.21～ 平7.2.28	京都府教育庁管理部	尾崎昌之
7. 長岡京跡右京第474次	長岡京市天神1丁目13-7・15-8	平6.7.6～ 9.5	京都府乙訓土木事務所	野島 永

3. 本書の編集は、調査第1課資料係が当った。

## 目 次

1. 上野古墳群・滝谷遺跡発掘調査概要-----	1
(1) 上野古墳群-----	3
(2) 滝谷遺跡・石ヶ原古墳群-----	41
付載 滝谷遺跡の花粉化石-----	48
2. 丹後あじわいの郷関係遺跡平成6年度発掘調査概要-----	51
(1) ニゴレ遺跡-----	53
(2) 鳥取峠1号墳-----	68
3. 金谷古墳群(1号墓)発掘調査概要-----	71
4. 定山遺跡第4次発掘調査概要-----	103
5. 引地城跡発掘調査概要-----	115
6. 丹波亀山城跡第4次発掘調査概要-----	121
7. 長岡京跡右京第474次発掘調査概要-----	135

# 挿 図 目 次

## 1. 上野古墳群・滝谷遺跡

第1図	調査地位置図及び周辺遺跡分布図	2
(1) 上野古墳群		
第2図	上野1～3号墳位置関係図	3
第3図	上野1号墳墳丘測量図	4
第4図	上野1号墳土層断面図	5
第5図	上野1号墳石室実測図	7
第6図	上野1号墳閉塞石平面・断面図	9
第7図	初葬時閉塞石実測図	10
第8図	上野1号墳玄室内遺物出土状況図	11
第9図	上野1号墳出土遺物実測図(1)	13
第10図	上野1号墳出土遺物実測図(2)	14
第11図	上野1号墳出土遺物実測図(3)	15
第12図	上野1号墳出土遺物実測図(4)	16
第13図	上野1号墳出土遺物実測図(5)	17
第14図	上野1号墳出土遺物実測図(6)	19
第15図	上野1号墳出土遺物実測図(7)	20
第16図	上野1号墳出土遺物実測図(8)	21
第17図	上野1号墳出土遺物実測図(9)	22
第18図	上野1号墳出土遺物実測図(10)	23
第19図	上野1号墳出土遺物実測図(11)	24
第20図	上野1号墳出土遺物実測図(12)	25
第21図	上野1号墳出土遺物実測図(13)	26
第22図	上野2号墳墳丘測量図	27
第23図	上野2号墳墳丘・外護列石実測図	29
第24図	上野2号墳閉塞石平面・断面図	30
第25図	上野2号墳石室実測図	31

第26図	上野2号墳玄室内遺物出土状況図	34
第27図	上野2号墳出土遺物実測図(1)	35
第28図	上野2号墳出土遺物実測図(2)	36
第29図	上野2号墳出土遺物実測図(3)	37
第30図	上野2号墳墳丘断ち割り断面図	38
第31図	上野2号墳墳丘復原想定図	39
<b>(2) 滝谷遺跡・石ヶ原古墳群</b>		
第32図	滝谷遺跡遺構配置図	42
第33図	滝谷遺跡出土遺物実測図(平成5年度)	43
第34図	竪穴式住居跡SH01平面図	44
第35図	滝谷遺跡出土遺物実測図(平成6年度分)	45
<b>2. 丹後あじわいの郷関係遺跡</b>		
第36図	調査地位置図及び周辺遺跡分布図	51
<b>(1) ニゴレ遺跡</b>		
第37図	調査地配置図	53
第38図	B地区遺構配置図	55
第39図	住居跡1実測図	57
第40図	住居跡2実測図	57
第41図	住居跡19実測図	58
第42図	ニゴレ1号炉地形図	59
第43図	ニゴレ1号炉実測図	60
第44図	ニゴレ2号炉地形図	61
第45図	ニゴレ2号炉実測図	62
第46図	ニゴレ3・4号炉地形図	63
第47図	ニゴレ3・4号炉廃滓場堆積断面図	64
第48図	祭祀遺構実測図	65
第49図	小型炭窯実測図	67
<b>(2) 鳥取峠1号墳</b>		
第50図	鳥取峠1号墳位置図	68
第51図	鳥取峠1号墳墳丘測量図	68
第52図	鳥取峠1号墳主体部実測図	69

### 3. 金谷古墳群(1号墓)

第53図	調査地位置図及び周辺主要弥生時代遺跡分布図	72
第54図	調査前地形測量図及び遺跡配置図	74
第55図	調査後地形測量図及び墳丘断面図	75
第56図	第1主体部実測図	78
第57図	第2主体部実測図	79
第58図	第3主体部実測図	80
第59図	第4主体部実測図	81
第60図	第5主体部実測図	82
第61図	第6主体部実測図	83
第62図	第7主体部実測図	84
第63図	第8主体部実測図	84
第64図	第9主体部実測図	85
第65図	第10主体部実測図	86
第66図	第11主体部実測図	86
第67図	第12主体部実測図	87
第68図	第13主体部実測図	88
第69図	第14主体部実測図	89
第70図	第15主体部実測図	90
第71図	第16主体部実測図	91
第72図	第17主体部実測図	92
第73図	出土土器実測図(1)	93
第74図	出土土器実測図(2)	94
第75図	出土土器実測図(3)	95
第76図	出土鉄器実測図(1)	98
第77図	出土鉄器実測図(2)	99
第78図	出土玉類実測図	100

### 4. 定山遺跡第4次

第79図	調査地及び周辺主要遺跡分布図	105
第80図	トレンチ配置図	106
第81図	検出遺構平面図	106
第82図	土層断面図	107



第83図	S X 01平面図	108
第84図	弥生土器実測図	109
第85図	須恵器実測図	110
第86図	土師器実測図	111
第87図	木器実測図(1)	112
第88図	木器実測図(2)	113
第89図	石器実測図	114
第90図	S X 01実測風景	115

#### 5. 引地城跡

第91図	調査地周辺遺跡分布図	117
第92図	調査地地形図	118
第93図	調査地平板測量図	120
第94図	出土遺物実測図	121
第95図	郭部調査風景	122

#### 6. 丹波亀山城跡第4次

第96図	調査地及び周辺遺跡分布図	124
第97図	調査地位置図	125
第98図	調査地平面図	126
第99図	調査地北壁断面図	127
第100図	土坑実測図	128
第101図	石列遺構実測図	129
第102図	瓦実測図	130
第103図	石製品実測図	131
第104図	三ノ丸復原図(案)	134

#### 7. 長岡京跡右京第474次

第105図	調査地位置図	137
第106図	1 トレンチ東壁セクション図	138
第107図	2 トレンチ東壁セクション図	138
第108図	第1 トレンチ下層遺構図	139
第109図	第1 トレンチ上層遺構図	140
第110図	S K 47405土壌墓実測図	141
第111図	S K 47419土坑実測図	141

第112図	第2トレンチ遺構図-----	142
第113図	S B474201-----	143
第114図	須恵器器台-----	144
第115図	出土土器実測図-----	145
第116図	軒平瓦・平瓦実測図-----	146
第117図	礎板実測図(1)-----	147
第118図	礎板実測図(2)-----	148

## 付 表 目 次

### 3. 金谷古墳群(1号墓)

付表1	金谷1号墓検出主体部一覧表-----	77
付表2	出土土器観察表-----	96

## 図 版 目 次

### 1. 上野古墳群・滝谷遺跡

#### (1) 上野古墳群

図版第1	(1)上野1・2号墳全景(北東から)	(2)上野1号墳全景(北東から)
図版第2	(1)上野1号墳発掘風景(北東から)	(2)上野2号墳発掘風景(南から)
図版第3	(1)上野1号墳発掘前状況(南東から)	(2)上野1号墳発掘前状況(北東から)
図版第4	(1)上野1号墳検出状況(北東から)	(2)上野1号墳羨道部大甕出土状況(北西から)
図版第5	(1)上野1号墳羨道部遺物出土状況(北東から)	(2)上野1号墳閉塞石検出状況(南西から)

- 図版第6 (1)上野1号墳玄室内遺物出土状況(北東から)  
(2)上野1号墳玄室内遺物出土状況(中央部)
- 図版第7 (1)上野1号墳玄室内遺物出土状況(南西から)  
(2)上野1号墳玄室内遺物出土状況(奥壁左隅)
- 図版第8 (1)上野1号墳玄室内遺物出土状況(奥壁左隅)  
(2)上野1号墳玄室内遺物出土状況(奥壁右隅)
- 図版第9 (1)上野1号墳初葬時閉塞石検出状況1(北東から)  
(2)上野1号墳初葬時閉塞石検出状況2(左側が玄室)
- 図版第10 (1)上野1号墳閉塞石除去状況(北東から)  
(2)上野1号墳玄室内遺物出土状況(北東から)
- 図版第11 (1)上野1号墳玄室内石材配列状況(北東から)  
(2)上野1号墳完掘状況(北東から)
- 図版第12 (1)上野1号墳奥壁状況(北東から) (2)上野1号墳袖部状況(西から)
- 図版第13 (1)上野1号墳完掘状況1(真上から)  
(2)上野1号墳完掘状況2(北東から)
- 図版第14 (1)上野1号墳奥壁背面盛り土状況(北東から)  
(2)上野1号墳石室左側壁背面盛り土状況(北東から)
- 図版第15 (1)上野1号墳羨道右側面裏込め状況(北西から)  
(2)上野1号墳羨道右側面盛り土状況(北東から)
- 図版第16 (1)上野1・2号墳全景(南から) (2)上野2号墳全景
- 図版第17 (1)上野2号墳発掘前状況(北から) (2)上野2号墳発掘前状況(北から)
- 図版第18 (1)上野2号墳検出状況(南から) (2)上野2号墳完掘状況(南から)
- 図版第19 (1)上野2号墳遺物出土状況(南から)  
(2)上野2号墳遺物出土状況(北から)
- 図版第20 (1)上野2号墳羨門部全景(南から) (2)上野2号墳羨門部検出の壘
- 図版第21 (1)上野2号墳石室側壁石積み変化部分(西から)  
(2)上野2号墳閉塞石検出状況(西から)
- 図版第22 (1)上野2号墳石垣状列石全景(北西から)  
(2)上野2号墳周溝内堆積状況(西から)
- 図版第23 (1)上野2号墳全景(南西から)  
(2)上野2号墳上段列石検出状況(南から)
- 図版第24 (1)上野2号墳墳丘断ち割り状況(上段列石部分)

(2)上野2号墳基底部断ち割り状況(東から)

- 図版第25 (1)北辺列石状況(北から) (2)西辺列石状況  
(3)西辺列石の区画石(2番目) (4)西辺列石の区画石(3番目)
- 図版第26 上野1号墳出土土器(1)
- 図版第27 上野1号墳出土土器(2)
- 図版第28 上野1号墳出土土器(3)
- 図版第29 上野1号墳出土土器(4)
- 図版第30 上野1号墳出土土器(5)
- 図版第31 上野1号墳出土土器(6)
- 図版第32 上野1号墳出土土器(7)
- 図版第33 上野2号墳出土土器
- 図版第34 上野1・2号墳出土土器
- 図版第35 上野1号墳出土鉄製品(馬具)
- 図版第36 上野1号墳出土鉄製品(馬具・弓束金具・針)
- 図版第37 上野1・2号墳出土鉄製品(刀・刀子)
- 図版第38 上野1号墳出土鉄製品(鉄鏃)
- 図版第39 上野1号墳出土鉄製品(鉄鏃)
- 図版第40 上野1・2号墳出土装身具(耳環・勾玉・切子玉・ガラス玉)

## (2) 滝谷遺跡・石ヶ原古墳群

- 図版第41 (1)滝谷遺跡調査前(北から)  
(2)滝谷遺跡試掘トレンチ掘削作業風景(西から)
- 図版第42 (1)滝谷遺跡SH01掘削作業風景(北東から)  
(2)滝谷遺跡SH01完掘状況(北から)
- 図版第43 (1)石ヶ原古墳群掘削作業風景  
(2)石ヶ原古墳群F地点完掘状況(南西から)
- 図版第44 (1)滝谷遺跡・石ヶ原古墳群現地説明会風景 (2)滝谷遺跡出土遺物

## 2. 丹後あじわいの郷関係遺跡

### (1) ニゴレ遺跡

- 図版第45 (1)B地区全景(北東から) (2)B地区住居跡2近景(南東から)
- 図版第46 (1)B地区住居跡19近景(北西から) (2)B地区柱穴群近景(北西から)
- 図版第47 (1)ニゴレ1号炉調査前検出状況(南から)  
(2)ニゴレ1号炉全景(北東から)

- 図版第48 (1)ニゴレ1号炉近景(北西から)  
(2)ニゴレ1号炉内粉炭堆積状況(南西から)
- 図版第49 (1)ニゴレ2号炉近景(南東から) (2)ニゴレ2号炉近景(南西から)
- 図版第50 (1)ニゴレ3・4号炉、祭祀遺構全景(南西から)  
(2)ニゴレ3号炉廃滓場全景(東から)
- 図版第51 (1)ニゴレ3号炉廃滓場堆積状況(北東から) (2)祭祀遺構全景(南から)
- 図版第52 (1)祭祀遺構近景(西から) (2)祭祀遺構近景(南から)
- 図版第53 (1)祭祀遺構内砂鉄堆積状況(西から)  
(2)祭祀遺構内鉄滓・鉄塊状遺物・炭堆積状況(南東から)

## (2) 鳥取峠1号墳

- 図版第54 (1)鳥取峠1号墳全景(西から) (2)鳥取峠1号墳主体部近景(西から)

## 3. 金谷古墳群(1号墓)

- 図版第55 (1)金谷1号墓調査後全景(上空東から)  
(2)金谷1号墓調査後近景(上空東から)
- 図版第56 (1)金谷1号墓調査前遠景(南から)  
(2)金谷1号墓墳頂部作業風景(北から)
- 図版第57 (1)東側テラス部調査後全景(北西から)  
(2)第1・第2主体部全景(北から)
- 図版第58 (1)第1主体部全景(北から) (2)第2主体部全景(北から)
- 図版第59 (1)第3主体部全景(南から) (2)第5主体部全景(東から)
- 図版第60 (1)第6主体部全景(東から) (2)第7主体部全景(東から)
- 図版第61 (1)第10主体部全景(北から)  
(2)第10主体部墓壇上鉄製品出土状況(西から)
- 図版第62 (1)第11主体部全景(北から) (2)第11主体部玉類出土状況(北から)
- 図版第63 (1)第14主体部全景(東から) (2)第12主体部全景(北から)
- 図版第64 (1)第15主体部全景(西から) (2)第17主体部全景(東から)
- 図版第65 (1)第16主体部土器棺蓋検出状況(西から)  
(2)第16主体部土器棺身検出状況(西から)
- 図版第66 金谷1号墓出土遺物(1) 一土器(1)一
- 図版第67 金谷1号墓出土遺物(2) 一土器(2)一
- 図版第68 金谷1号墓出土遺物(3) 一鉄製品(1)一
- 図版第69 金谷1号墓出土遺物(4) 一鉄製品(2)一

図版第70 金谷1号墓出土遺物(5) 一玉類一

#### 4. 定山遺跡第4次

図版第71 (1)調査地全景(西から) (2)A区落ち込み(SX01)検出状況(南から)

図版第72 (1)須恵器甕出土状況 (2)須恵器高杯・木器出土状況  
(3)下駄・須恵器出土状況 (4)刳物出土状況

図版第73 (1)C区完掘状況(東から) (2)出土遺物(弥生土器)

図版第74 出土遺物(須恵器・土師器)

図版第75 出土遺物(木器)

図版第76 出土遺物(木器・石器)

#### 5. 引地城跡

図版第77 (1)調査地遠景(北西から) (2)調査地近景(西から)

図版第78 (1)郭・虎口部検出状況(南西から) (2)虎口部検出状況(南西から)

図版第79 (1)虎口部掘削状況(西から) (2)北斜面(郭)掘削状況(西から)

図版第80 (1)土塁・帯郭掘削風景(南西から) (2)西斜面掘削状況(西から)

図版第81 (1)土坑(SK01)検出状況(東から) (2)土坑(SK01)内染付出土状況

図版第82 (1)出土遺物 (2)出土遺物

#### 6. 丹波亀山城跡第4次

図版第83 (1)調査前全景(西から) (2)調査地全景(西から)

図版第84 (1)調査地全景(上が北)  
(2)調査地とその周辺(東から、右上隅が本丸)

図版第85 (1)調査地とその周辺(下が西) (2)SA401(西から)

図版第86 (1)SD143(西から) (2)SA402・SD403(東から)

図版第87 (1)石列(東から) (2)石列断面(南から)

図版第88 (1)SK188(南から) (2)SK65(南から)

図版第89 (1)SK212(北から) (2)SK212埋土断面(東から)

図版第90 (1)SK212遺物出土状況(東から) (2)SK212遺物出土状況(北から)

図版第91 (1)SK211(南西から) (2)SK329(南から)

図版第92 (1)SK184(東から) (2)SK356遺物出土状況(南から)

図版第93 出土遺物1(SK209)

図版第94 出土遺物2(SK209)

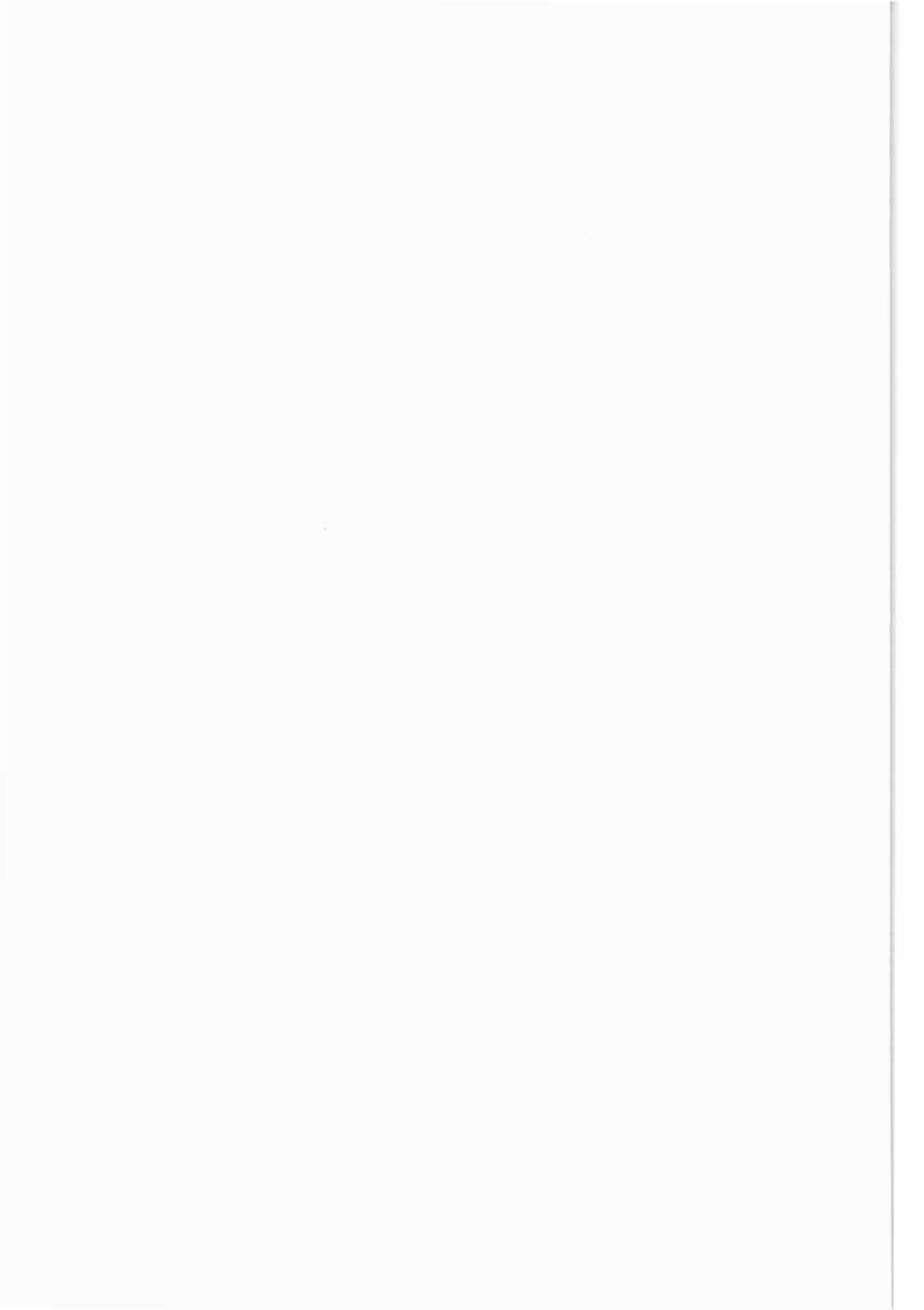
図版第95 出土遺物3(SK209)

図版第96 出土遺物4(SK209)

- 図版第97 出土遺物 5
- 図版第98 出土遺物 6
- 図版第99 出土遺物 7
- 図版第100 (1)山陰丹府桑田亀山図(寛政5年)  
(2)山陰丹府桑田亀山図部分
- 図版第101 (1)新御殿門(現亀岡市立千代川小学校校門)  
(2)家老屋敷門(亀岡市千歳町毘沙門)
- 図版第102 (1)土塁(矢田町、西から) (2)土塁断面(京町、北東から)

#### 7. 長岡京跡右京第474次

- 図版第103 (1)1トレンチ調査前近景(南から)  
(2)2トレンチ調査前近景(南から)
- 図版第104 (1)1トレンチS K05土墳墓  
(2)1トレンチS K19出土土器(瓦器椀・土師皿)
- 図版第105 (1)1トレンチ検出遺構(南から) (2)1トレンチ検出遺構(東から)
- 図版第106 (1)1トレンチS D474102出土土器  
(2)1トレンチS D474102(西から)
- 図版第107 (1)2トレンチS B474201(南から)  
(2)2トレンチS B474201 柱穴15(南から)  
(3)2トレンチS B474201 柱穴15(北から)
- 図版第108 (1)2トレンチS B474201 柱穴2(南から)  
(2)2トレンチS B474201 柱穴2(西から)  
(3)2トレンチS B474201 柱穴6(北から)  
(4)2トレンチS B474201 柱穴7(北から)
- 図版第109 (1)2トレンチS B474201 柱穴8  
(2)2トレンチS B474201 柱穴10(北から)  
(3)2トレンチS B474201 柱穴11(東から)  
(4)2トレンチS B474201 柱穴14(東から)
- 図版第110 (1)出土遺物(土器)(1) (2)出土遺物(土器)(2)
- 図版第111 (1)出土遺物(軒平瓦・土器)(3) (2)出土遺物(土器)(4)
- 図版第112 (1)出土遺物(平瓦)(5) (2)出土遺物(礎板)(6)





## 1. 上野古墳群・滝谷遺跡発掘調査概要

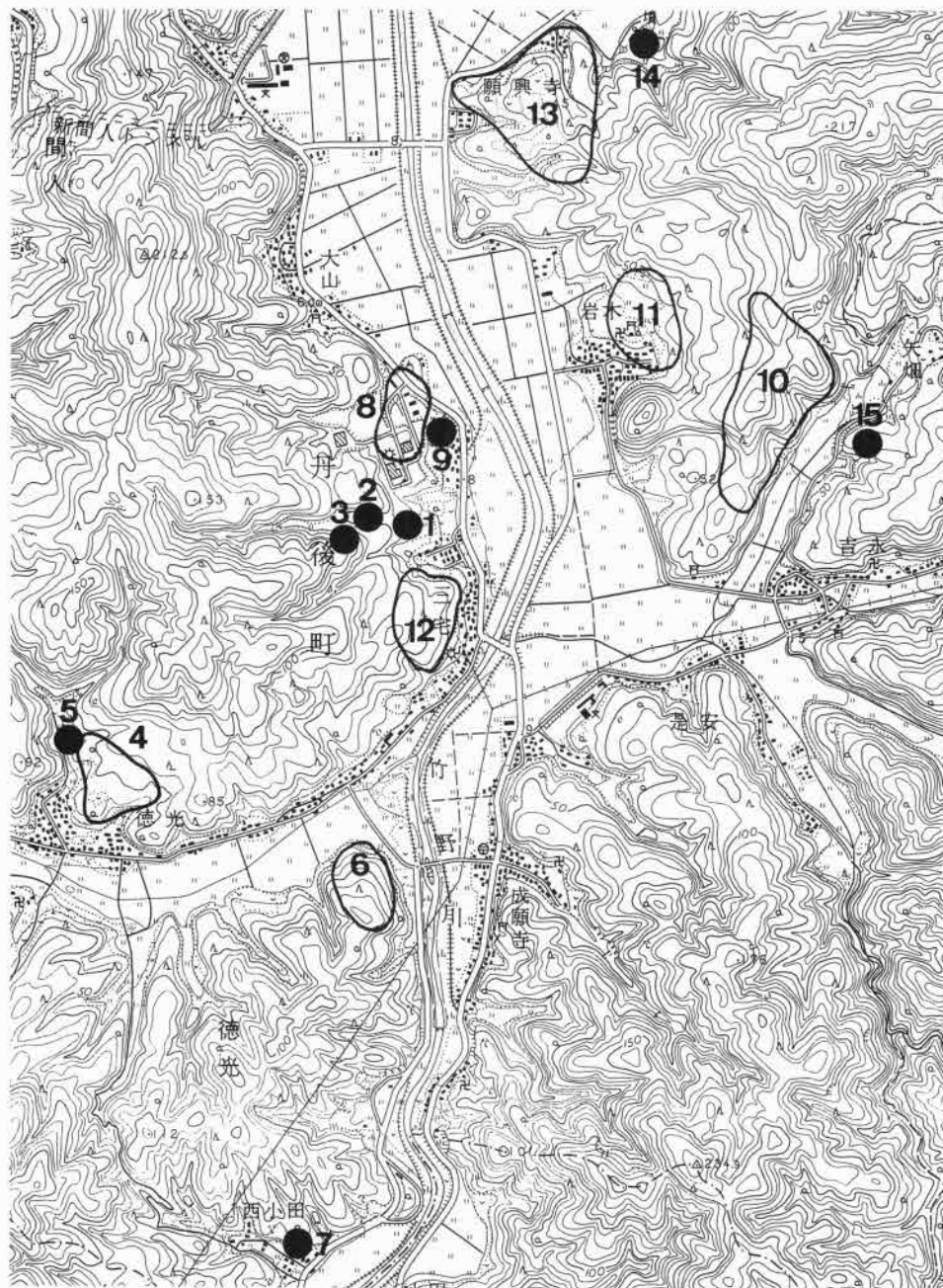
### はじめに

上野古墳群は、京都府竹野郡丹後町三宅小字上野に所在する。古墳群は、京都府丹後土地改良事務所が計画している「府営広域営農団地農道整備事業」に先だち、同事務所の依頼を受け実施したものである。調査対象となったのは、平成5年度に上野1・2号墳、中世墓状をなす集石遺構及び隣接する滝谷遺跡の試掘である。平成6年度には滝谷遺跡の面的な調査及び石ヶ原古墳群の試掘調査を実施した。本概要報告では平成5年度に調査を実施した上野1・2号墳、平成6年度に行った滝谷遺跡の調査概要を報告するものである。本事業に伴う調査は来年度以降も継続の予定である。

平成5年度調査は、平成5年7月19日～平成6年2月9日まで行い、当調査研究センター調査第2課調査第1係長伊野近富・同主任調査員増田孝彦・同調査員河野一隆が担当し、平成6年度調査は、平成6年10月7日～平成7年2月24日まで行い、調査第2課調査第1係長伊野近富・同調査員柴 暁彦・筒井崇史が担当した。本概要報告は、上野古墳群を増田と河野が討議の上執筆し、滝谷遺跡は筒井が執筆した。調査を進めるに当たっては、京都府丹後土地改良事務所、京都府教育委員会、丹後町教育委員会をはじめ関係諸機関からは多大な御協力を得た。また、調査補助員・作業員として地元の方々や学生有志の方々<sup>(註1)</sup>に協力していただいた。ここに記して謝意を表したい。なお、調査に係る経費は京都府が負担した。また、関係諸機関の御尽力により、上野2号墳が調査後保存されることになったことも、併せて記したい。

### 位置と環境

丹後半島最大の河川である竹野川は、肥沃な氾濫原を形成しながら弥栄町内を北流するが、丹後町境付近は狭隘部となっており、一旦氾濫原をせばめたのち間人の河口へと至る。この付近は、遺跡が集中する地点でもあり、弥栄町側には黒部銚子山古墳や、平成5年度から当調査研究センターが調査を実施している大規模な黒部製鉄遺跡<sup>(註2)</sup>がある。丹後町側は上野古墳群が位置する三宅地区であり、縄文時代以来の人々の往来が確認されている。また、ここは徳光・矢畑方面からの小河川が竹野川と合流する地点でもあり、間人方面はもちろんで徳光を経由して弥栄町・網野町方面へも通じている交通の要衝でもある(第1図)。



第1図 調査地位位置図及び周辺遺跡分布図(1/25,000)

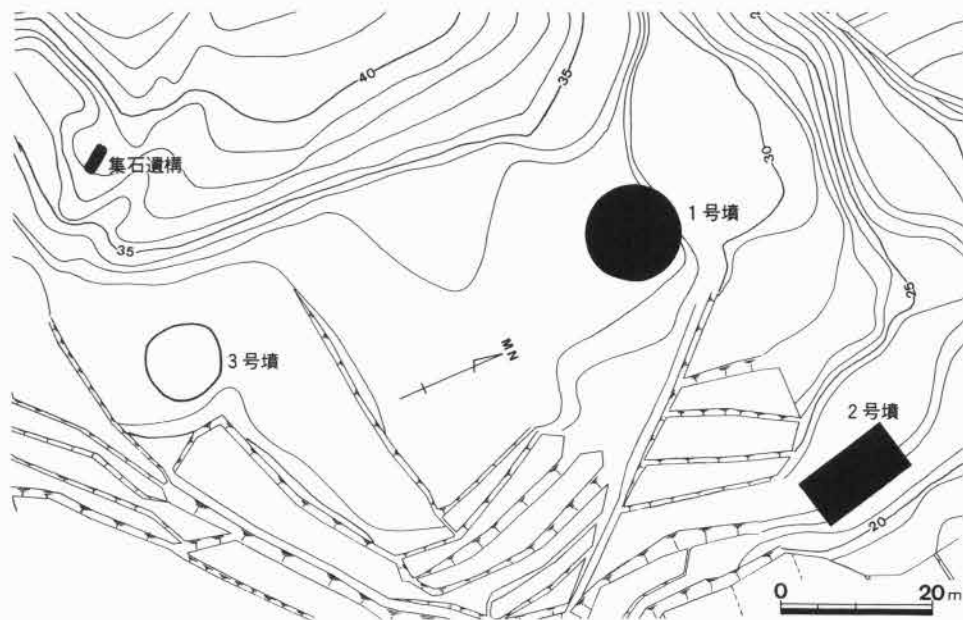
- |            |           |            |          |             |
|------------|-----------|------------|----------|-------------|
| 1. 上野1・2号墳 | 2. 滝谷遺跡   | 3. 滝谷古墳    | 4. 高山古墳群 | 5. 椿原古墳     |
| 6. 七ツ塚古墳群  | 7. 西小田遺跡  | 8. 大山墳墓群   | 9. 大山遺跡  | 10. 矢畑古墳群   |
| 11. 岩木遺跡   | 12. 三宅古墳群 | 13. 願興寺古墳群 | 14. 丸山古墳 | 15. 八坂神社西古墳 |

上野古墳群は、竹野川左岸の台地上に立地しているが、1989年度版の『京都府遺跡地図』には記載されておらず、台地周辺では上野1号墳の北西方に横穴式石室を内部主体とする滝谷古墳・滝谷遺跡が記載され、北側の隣接した丘陵上には弥生時代中期～後期の墳墓として著名な大山墳墓群がある。このため、造成に先立つ分布調査が京都府教育委員会により実施され、道路計画路線内及びその周辺で上野古墳群として2基(1・3号墳)、石ヶ原古墳群として7基の古墳、中世墓状をなす集石遺構が確認された。また、南西1.3kmには双龍環頭大刀や特殊扁壺などの出土で話題を集めた、高山古墳群が位置している<sup>(注4)</sup>。未調査ではあるが、南側には木棺直葬墳と考えられる三宅古墳群や七ツ塚古墳群があり、竹野川対岸の丘陵上には、26基前後の横穴式石室を内部主体とする矢畑古墳群がある。現在までに三宅地区周辺で確認されている古墳では、後期古墳が多い特徴がある。

## (1) 上野古墳群

### 1. 上野古墳群の分布状況

上野古墳群が立地する台地上は、早くから田畑として開墾されたようで、古墳が破壊されて石室が露出したものや、石材が抜き取られたものが田畑の随所に認められる。これら



第2図 上野1～3号墳位置関係図(1/500)

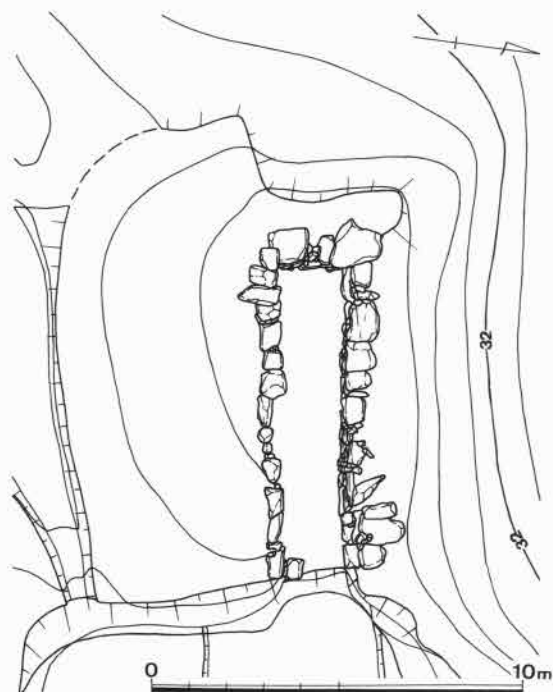
の石材が散乱したり、古墳状の隆起が認められる場所は8か所を数える。これらの古墳であったと思われる部分は50～60m間隔で点在しており、広範囲にわたる群構成であったと想像される。これは、後期古墳で見られる密集型の群集墳とは異なっており、高山古墳群の古墳分布と共通する。なお、『竹野郡誌』によれば、三宅地区の項には石室が露出しているとの記載があり、上野古墳群を指していると思われる<sup>(注5)</sup>。また、台地上では調査着手前に実施した遺物散布調査で、弥生時代～中世にかけての遺物が認められ、上野古墳群北西方で確認されている滝谷遺跡と一連のものと考えられる。そこで、古墳周囲も滝谷遺跡の一部に該当しているという想定で調査を行うこととした(第2図)。

## 2. 調査概要

### ①上野1号墳

#### (1)墳丘

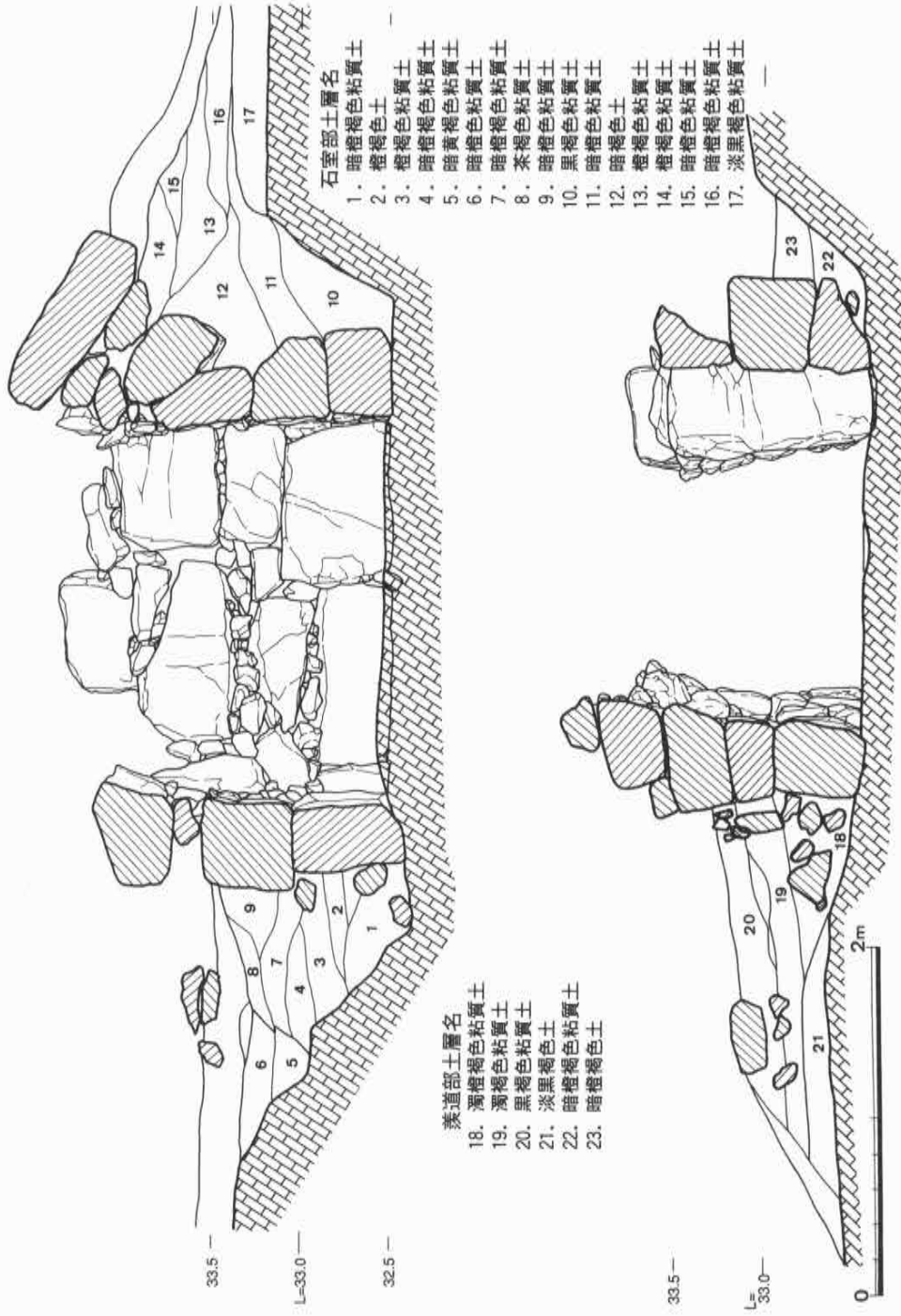
上野1号墳は、調査着手時点では開墾や採石によるため天井石及び石室側壁が地表上に露出していた。これらによる土砂を除去し、石室の輪郭を把握することに努めたが、天井石は玄室部分に2石、羨道部に2石の計4石が内部に落ち込んだり、一部架構された当時のまま残存していたが、調査上危険なためすべてを除去した。天井石除去後は、石室の



第3図 上野1号墳墳丘測量図(1/200)

形態ならびに開口方向の決定を急いだ。内部は、天井石採石に伴う土砂が落ち込んでおり、天井石を動かして石室内を荒らした形跡が認められなかったので、未盗掘であることが予想された。石室の形態・主軸が確定すると、墳丘盛り土観察用のあぜを主軸ラインと石室中央と、それに直交するラインとに設け、その他の部分は攪乱土の除去に努めた。

墳丘は、現状で直径13mを測る円墳であるが、石室開口部側は開墾により段となっている(第3図)。墳丘の南東～南西側



第4図 上野1号墳土層断面図(1/40)

には浅い「U」字状の溝を検出したが、墳丘北・東側が開墾により大きく削られているため、存在しない。旧地形からすると石室を中心に「C」字状にめぐっていたものと推定される。溝幅は南西側が最も広く5mを測るが、墳丘の大部分が削平されているため当初のものとは言いがたい。溝内には、厚さ5cm程度の黒褐色粘質土層の堆積が認められたが、石材がほとんどなく、葺石や外護列石などはなかったものと思われる。

墳丘のベース面は、赤褐色粘質土を主体として一部に黒ボクを交える土壌である(第4図)。これを、玄室部分は逆凸字形に、羨道部分は「L」字形にカットして、石室を構築する。墓壙の規模は、長さ10m・幅4.5mである。掘り込みの深さは約0.7mを測り、石室の1・2段目が地山下に据えられることになる。また、石室南側の掘形は、断面が一部で階段状となっており、天井石の架構に合わせて、地山が削られたことが推定される。墓壙は石室を覆うように外側から埋め戻されており、しまりが無い。また、人頭大の礫も裏込めとして一部に用いられるが、しっかりとしたものではない。

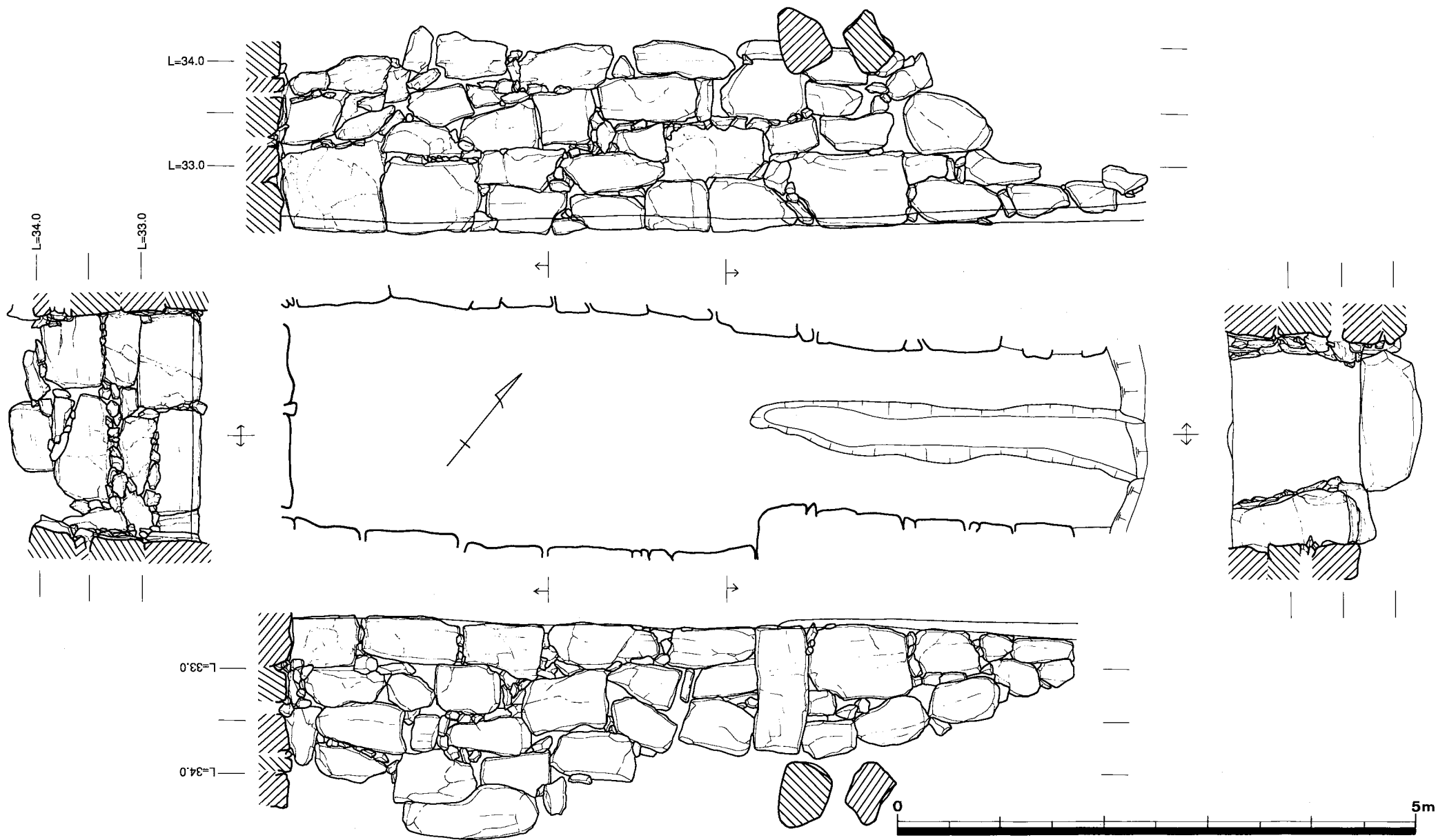
盛り土は、石室部の最も厚い部分で1.2mを測るが、天井石を覆うまで積み上げるならば、最低限2.0mが必要となる。おおむね、水平面を意識して積み上げられ、特に叩き締めたり、ブロック状に異なる土を積んだような状況は観察されなかった。

## (2)石室

石室は、墳丘のほぼ中央部に位置し、東側に袖を持つ片袖式横穴式石室で東北東に開口する(第5図)。使用される石材は、付近一帯に多く散乱している溶結性玄武岩である。遺存状況は良好であり、天井石と調査の安全上除去せざるを得なかった若干の石材を除けば、ほぼ完存しているといえるが、入り口付近は開墾により一部残存しないものと考えられる。石室主軸はN-50°-Eである。現存する石室の全長7.9m・玄室長4.6m・同幅2.1m・天井石までの高さ2.2m、羨道長3.3m・同幅1.6m、天井石までの高さ2mを測る。羨道部には、長さ3.8m・幅0.5mの排水溝を設けている。天井石は玄室内に1石、玄門付近に1石内部に落ち込んだ状態で検出し、羨道部には、2石が架構されていた。

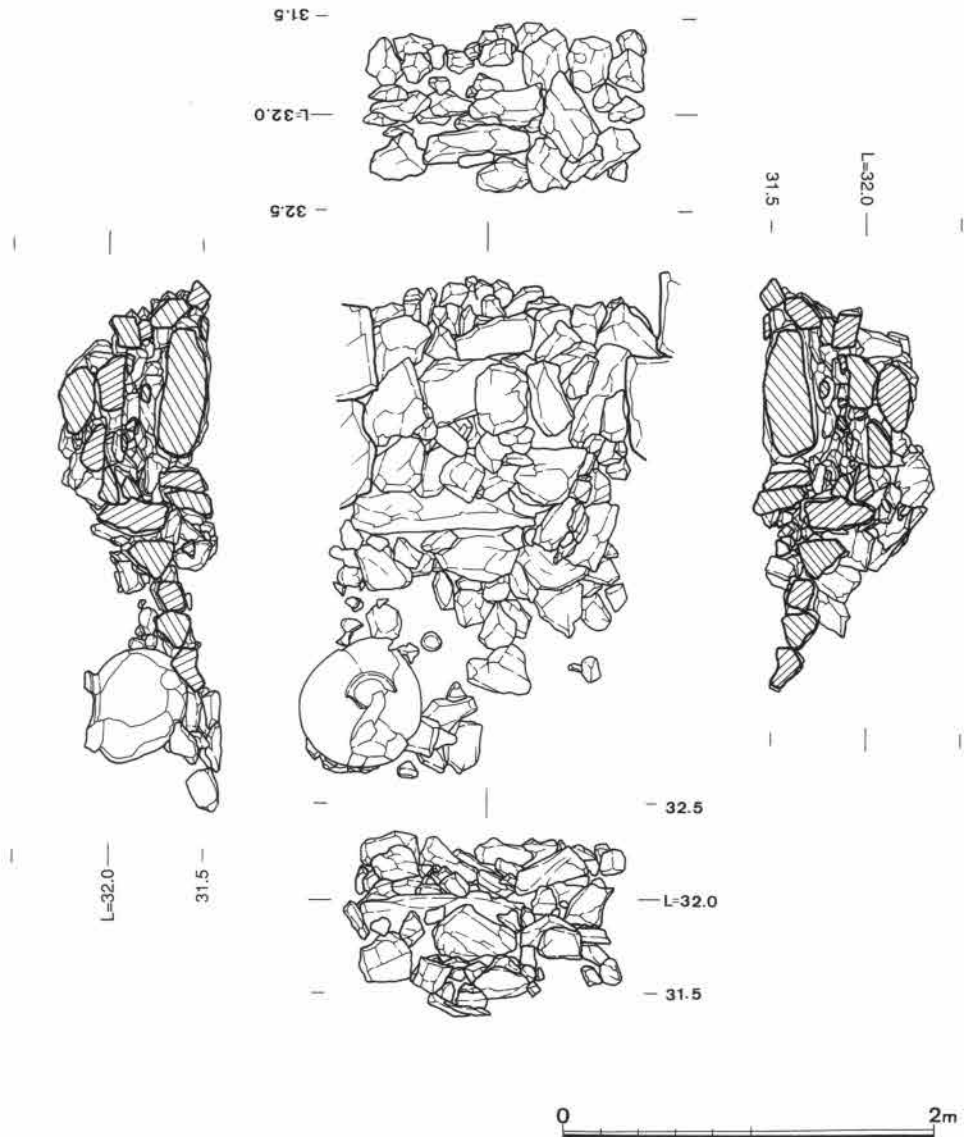
墳丘の盛り土は、石室の構築とともに行われているが、墳丘の1/2は地山を削り出し円形台を成形した後、「コ」字形の尾根に平行した、南側が深く北側が浅い墓壙を掘る。墓壙掘形は、両側壁とも比較的ゆるやかであるが、奥壁は垂直に近く掘り込まれる。玄室内面側は、基底石を安定させるため玄室掘形床面よりさらに約5cm垂直に掘り込まれる。床面は、ほぼ水平で玄門付近まで同レベルである。羨道部は、中央に幅50cm・深さ5cmの排水溝が設けられ、前面に向かってゆるやかな傾斜を持つ。裏込めの状況は、設置した石材まで一気に埋めており、縞状堆積による突き固めた痕跡は認められなかった。

玄室奥壁は、最下段に大小の2石を横置きし、側壁は北壁が10石、南壁が9石を横置き



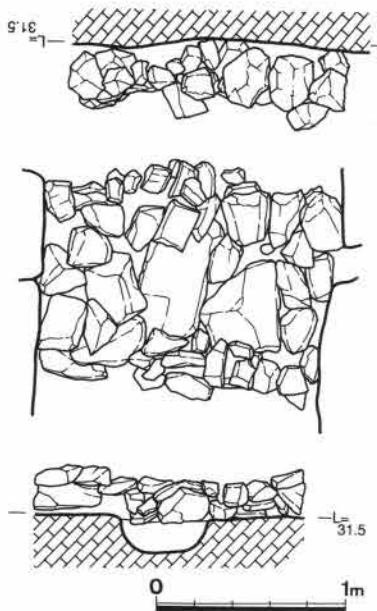
第5図 上野1号墳石室実測図(1/50)

し基底を構成する。石材の積み方は、水平方向にそろえつつ段積みしている。特に、西側コーナー付近の石材が最も大きく、他の部分はこの石材の高さに合わせて積まれている。このような石積みの単位行程は、天井石架構以前に最低4回認められる。なお、この石室で注目されるのは、石材の目地に拳大の礫を詰めていることである。これは後述する2号墳の石室とは異なった特徴であり、この時期の石室では珍しい。また、石室の南側コーナー一部では上半部に奥壁と側壁を渡るように石材が置かれるが、その他の部分は明瞭な狭角



第6図 上野1号墳閉塞石平面・断面図(1/40)





第7図 初葬時閉塞石実測図

することができた(第7図)。これは、石材の長軸を石室の主軸と同じ方向に置いて積み上げ、目地には拳大の礫をしっかりと詰めていた。これは、石室の石積み方法とも共通している。これらから、追葬は石室に入るのに可能な分だけ閉塞石をはずしたことがわかった。しかし、閉塞状況からは、何回の追葬が行われたかは確認できなかった。

閉塞石の石積みの中や外側には、石室内から掻き出された遺物が散乱していたが、閉塞に伴い何らかの儀礼で置かれたと推定されるものに、須恵器の大甕がある。これは、底部が転落した閉塞石の上に立位で置かれていたもので、初葬時のものが動かされたか、追葬時に置かれたものと思われる。また、排水溝の外側先端部には須恵器の小壺・杯身が伏せて置かれており、これも儀礼的なものであろうか。

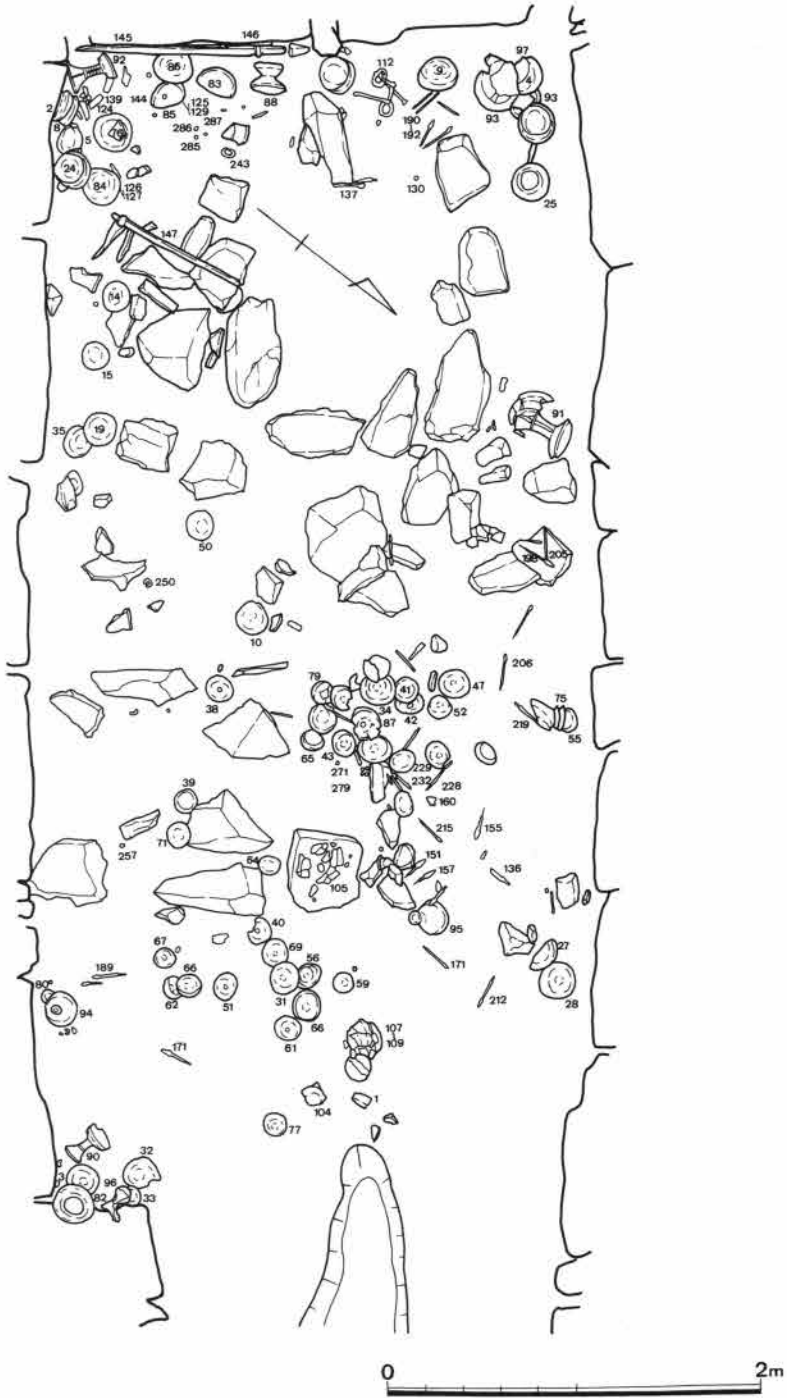
#### (4)遺物出土状況

石室内から出土した遺物は、玄室内を中心に武器類・馬具類・装身具・須恵器・土師器などがあり、総数300点以上にのぼる。これらは、大きく玄室奥壁付近、中央部付近、袖石付近に3大別することができる(第8図)。奥壁・袖石付近の一群は、追葬時にかたづけられたものと考えられる。中央部付近から出土したものは最も新しい遺物であり、正位で置かれた土器群であり、最終追葬のものとして判断される。トンボ玉1点や馬具飾り金具類が金銅張りである点が特筆される。これらは、7年前に環頭大刀柄頭・特殊扁壺の出土で話題をまいた高山古墳群の1号墳と遺物構成がよく似ている。なお、図面の番号は、出土遺

をなしている。袖部は、側壁から0.6m程度張り出した柱状の石材で作られる。羨道部は、石積みの高さが低いが玄室からの横目地が通るので、玄室と同時に築かれたと考えられる。

#### (3)閉塞石の状況

閉塞は、玄門部で塊石によってなされており、追葬に伴って数回積み直されていることが確認された(第6図)。現状では、長さ2.8m・高さ0.8mが残存する。閉塞石から玄室側では、最下段の石材にそって積み上げているのに対し、羨門側では、石材が縦に落ち込んだような状況が観察された。これは、追葬を繰り返したために、外側の石積みが乱れていったことを示している。また、閉塞石の石材の中から動いた石材を除去していくと、追葬によって乱されていない初葬時の閉塞石を確認



第8図 上野1号墳玄室内遺物出土状況図(1/40)

物の番号に対応している。また、玄室内には多くの石材があるが、これらの下部や上部にも遺物があり、追葬時に棺台として利用されたものと考えられる。

奥壁付近には、土器・刀・馬具などがあり、装身具や鉄鏃が散在していた。特に、刀2本が奥壁に接するように立てて置かれており、土器も奥壁回りに「コ」の字形となるように集められている。これらに囲まれた部分には遺物があまりないことから、奥壁と平行して1体の埋葬を想定することができた。また、この群中の須恵器には高杯が多く、新しい土器が混じっていない点などから、初葬時に近い被葬者の副葬品であったと思われる。馬具は、轡・鐙・辻金具・雲珠が近接して出土したが、飾り金具は南側コーナー部に集められていた。この一群からやや離れて、奥壁とは斜行した方向に、1本の刀が置かれている。この刀がのる石材の下には須恵器杯身がつぶれていた。袖石付近には、短頸壺・甕などの壺類が集中するが、雑然と積み上げられた状況であり、かたづけられている。だが、器種をみると、奥壁周辺と差が見られず、初葬時に何点かは袖石付近にも置かれていたと思われる。また、これらからやや奥壁寄りに大型の平瓶1点が床面からやや遊離した状況で出土したが、これは追葬時の遺物であろう。なお、この平瓶に近接してトンボ玉が検出されている。中央部の遺物群は、土器と鉄鏃が多い。特に土器は、圧倒的に正位で置かれたものが多く、しかも、床面の石材の上に置かれたものが多い。これは、奥壁寄りの一群と羨道寄りの一群とに分けられるが、前者に鉄鏃が多い以外、副葬品目の内容や形態の違いは認められない。鉄鏃は、平根・尖根の区別なく乱雑に散在しており、束ねたり、容器に入れたような状況は観察されなかった。耳環やガラス玉についても同様で、単独で石室全域から出土しており、頭の位置や装飾の復原が可能なものはなかった。

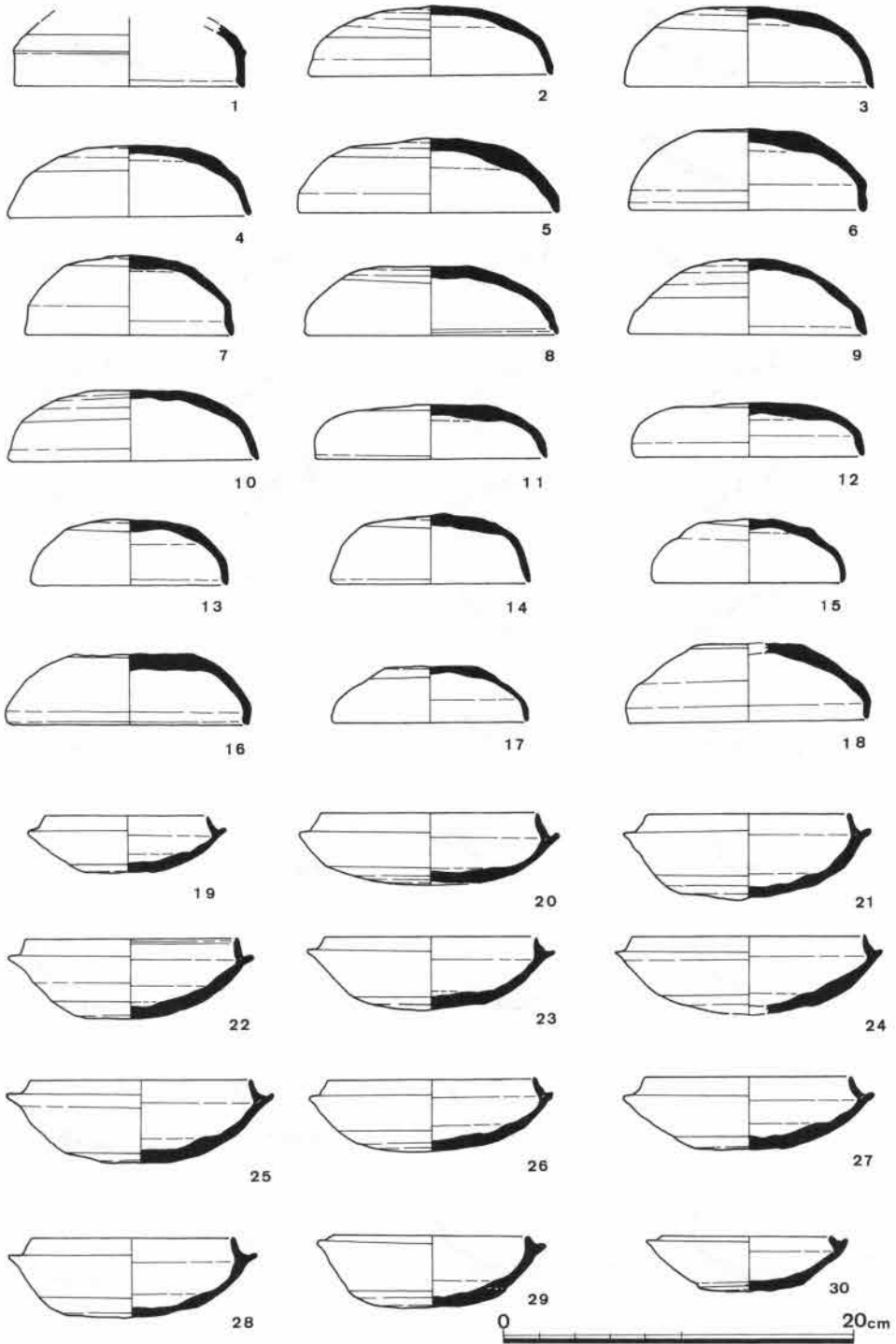
上野1号墳の石室内は、何度もの追葬でかなり遺物の移動を受けており、奥壁平行に遺物が置かれた可能性があるという以外、何回の追葬か、何人が埋葬されたのかは明確にすることはできない。また、鉄釘なども出土しておらず、棺の位置の想定もきわめて困難であった。

#### (5) 出土遺物

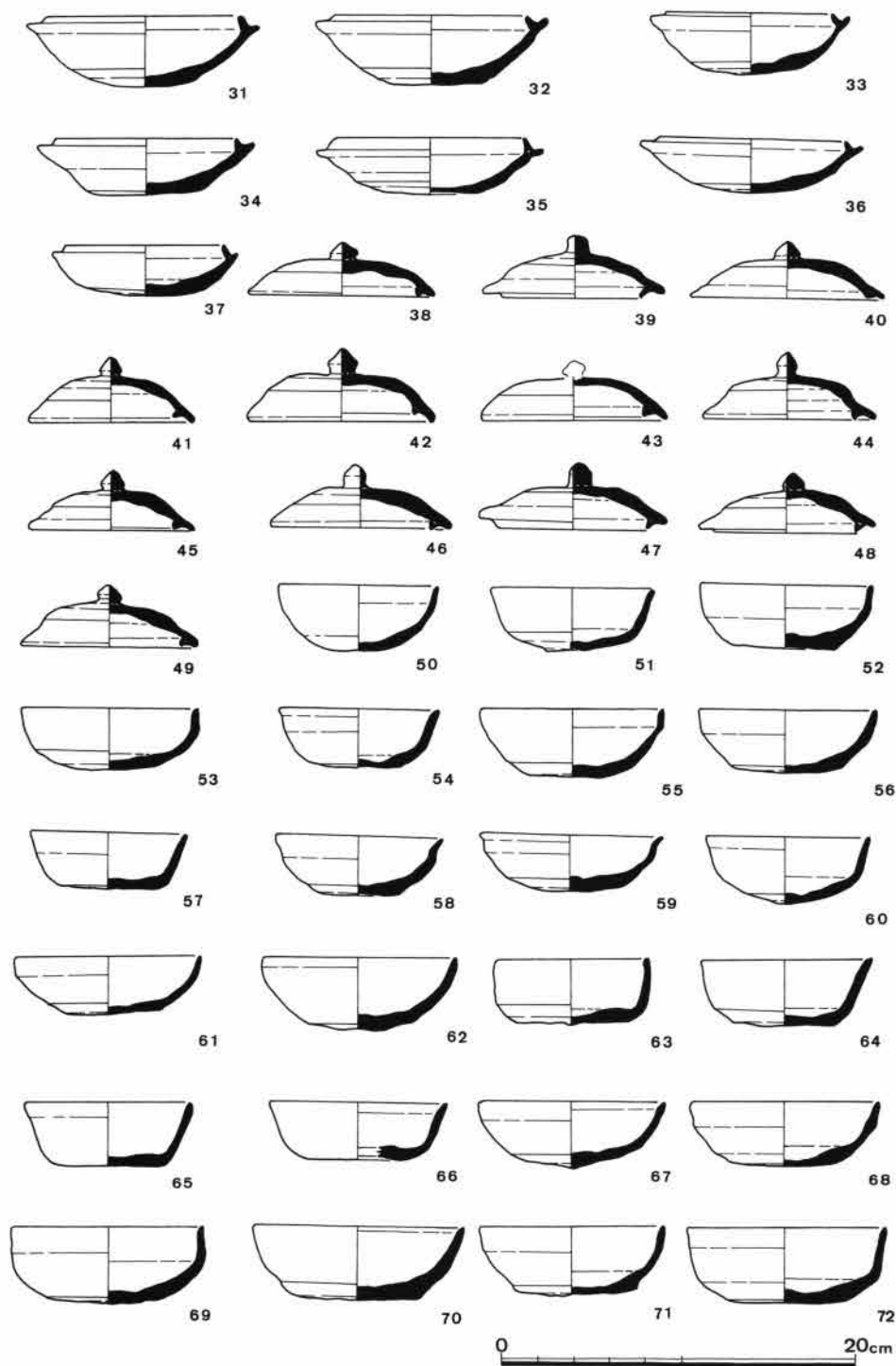
##### 須恵器(第9～13図)

上野1号墳から出土した須恵器は120点を数える。その構成は、杯h蓋18点以上、杯h身19点以上、杯a蓋12点以上、杯a身25点以上、小型椀4点、大型椀1点、短頸壺2点、同蓋2点、小壺1点、有蓋高杯6点、無蓋高杯5点、平瓶2点、甕2点、長頸壺2点、壺1点、甕1点を数える。ここに提示したものは、細片を除きできる限り図化した。その多くは完形に近いものであった。

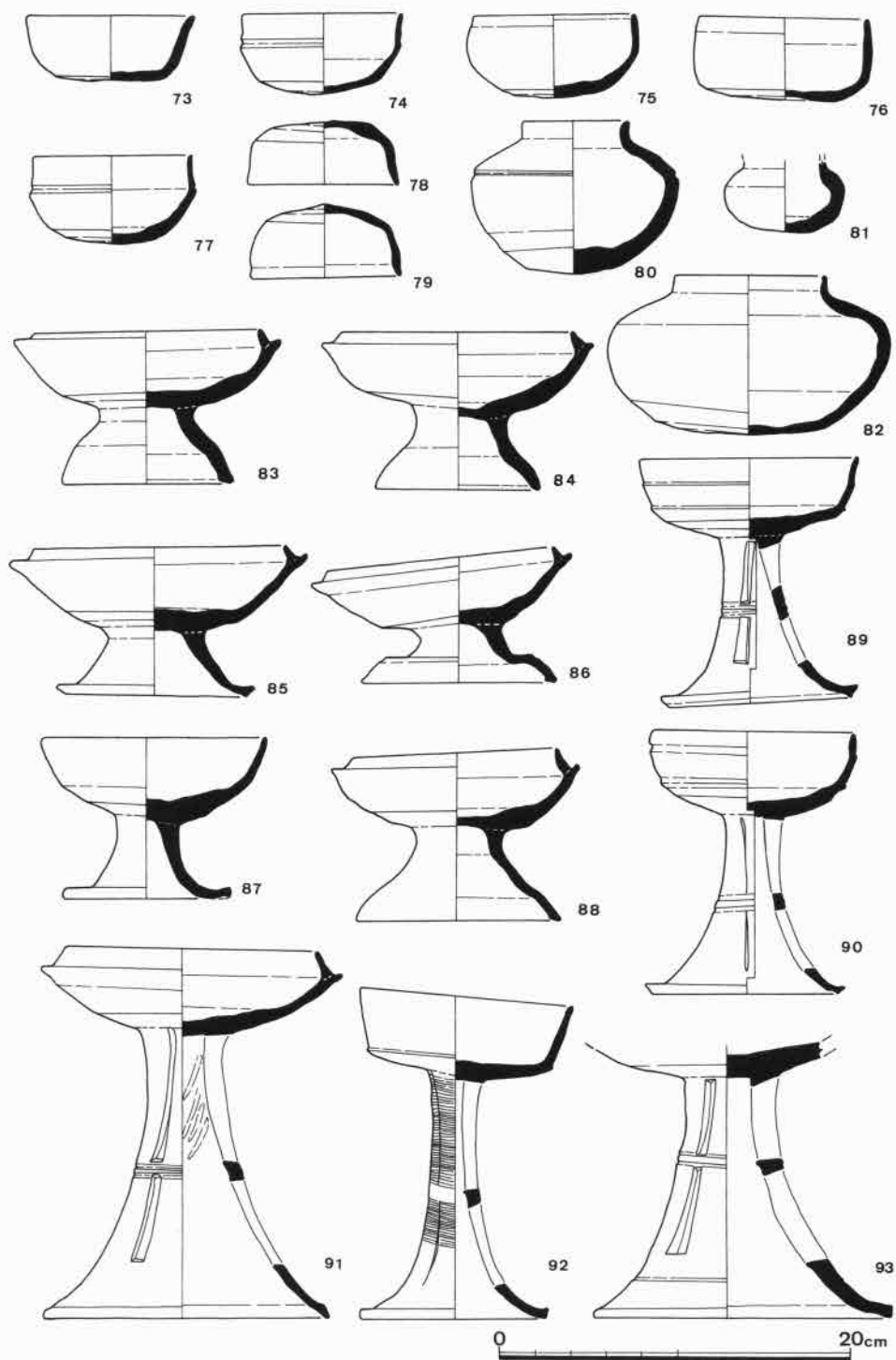
杯h 杯hは、1を除き、高くて口径の大きい蓋(2・10・16・18)と、深手で立ち上が



第9図 上野1号墳出土遺物実測図(1) (1/4)

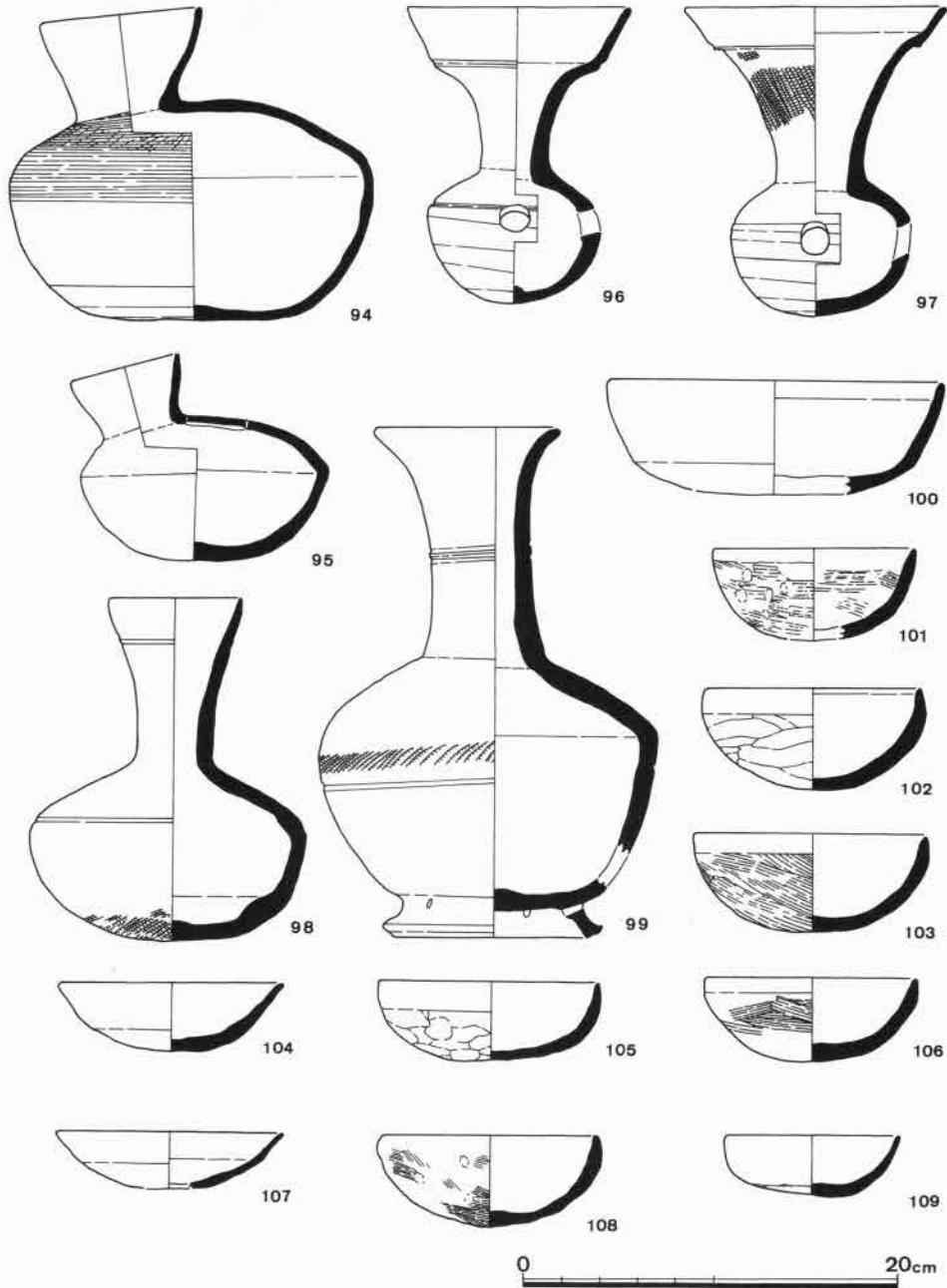


第10図 上野1号墳出土遺物実測図(2) (1/4)



第11図 上野1号墳出土遺物実測図(3) (1/4)

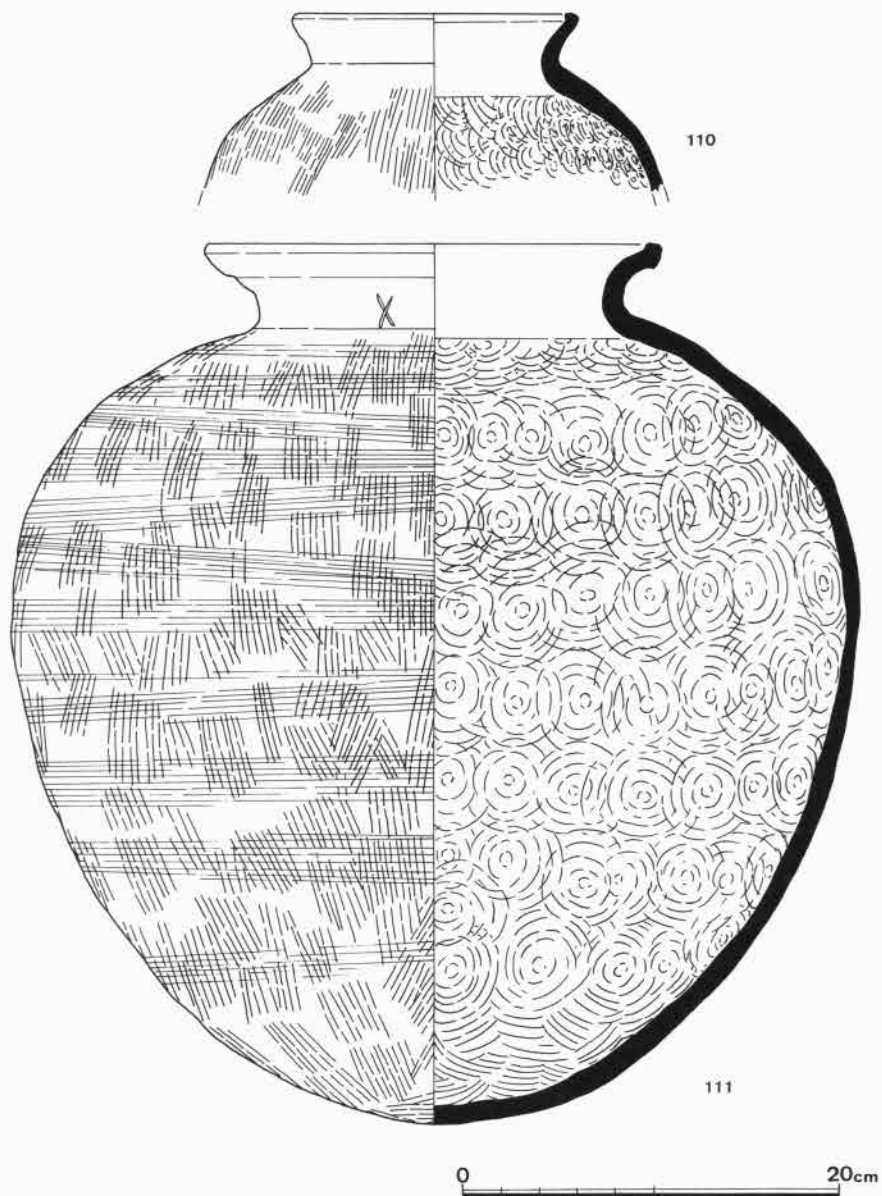
りのしっかりした身(20~28)とがセットになり、扁平で口径の小さな蓋(11~15・17)と立ち上がりが矮小化した身(19・29~37)とがセットとなる。これらは色調や硬度に差があり、複数の生産地から供給された可能性もあるが、この時期の須恵器窯は丹後半島では発見さ



第12図 上野1号墳出土遺物実測図(4) (1/4)

れていない。なお、1は、薄手で口縁部と天井部の境に小さな稜があり、他の蓋杯よりも古い特徴を持っている。

杯a 杯蓋はすべてにかえりが有り、宝珠形ならびにボタン状のつまみを持つ。かえりは口縁部接線よりも下方に突出するもの(39・47・48)としないもの(38・40~46)とがある。杯身は、ヘラ切り後にケズリ調整をするもの(51・53・55・56・58~64・67・69~71)



第13図 上野1号墳出土遺物実測図(5) (1/4)



としないもの(50・52・54・57・65・66・68・72・73)とがあるが、大型のものはケズリを施す傾向がある。ただし、ケズリも1～2重のものであり、補助的なものにとどまっている。

**小型椀** 小型椀は、口縁部が内湾するもの(75・76)と、口縁部と体部の境に沈線を持つもの(74・77)がある。いずれも、底部をケズリ調整している。

**短頸壺及び蓋** 短頸壺は、肩部に沈線を持つ80と、大型の82の2点がある。特に、80は厚手で重く、鈍重な作りである。短頸壺蓋は、口縁端部が切刃状で杯aよりもヘラケズリの範囲が広いものを選んだが、杯との区別は困難である。

**高杯** 有蓋高杯が6点、無蓋高杯が5点あるが、すべての個体が異なるほど多様である。有蓋高杯には、2段で3方向に長方形透かしを持つ91と、透かしのない83～86・88とがある。無蓋高杯には、透かしのない87と3方向に長方形透かしを持つ89・93、スリット状の3方向透かしを持った90・92にまとめることができる。

**平瓶** 大型で肩部にカキ目を持つ94と、小型の95の2点がある。いずれも、明瞭な肩部をつくらない。

**甕** 頸部が締め、口縁部がラッパ状に大きく開いた新しい形態の甕が2点ある。97は、口頸部外面に幅3cmの櫛歯状工具による間隔の短い波状文がある。

**大型椀** 閉塞石外側で検出したもので、古墳の副葬品とするか検討を要する。口径18cmを測る大型の椀として報告する。

**長頸壺** 鈍重な作りで、頸部上半と胴部にそれぞれ1条の沈線を持つ。98は、タタキ調整の一部をナデによって消している。99は、胴部最大径付近に櫛刺突文をめぐらせ、脚部には3方向にヘラ刺突による透かしを持つ。

**甕** いずれも閉塞石の外側から出土したもので、平行タタキによって調整したものである。厚手で作りにシャープさがない。

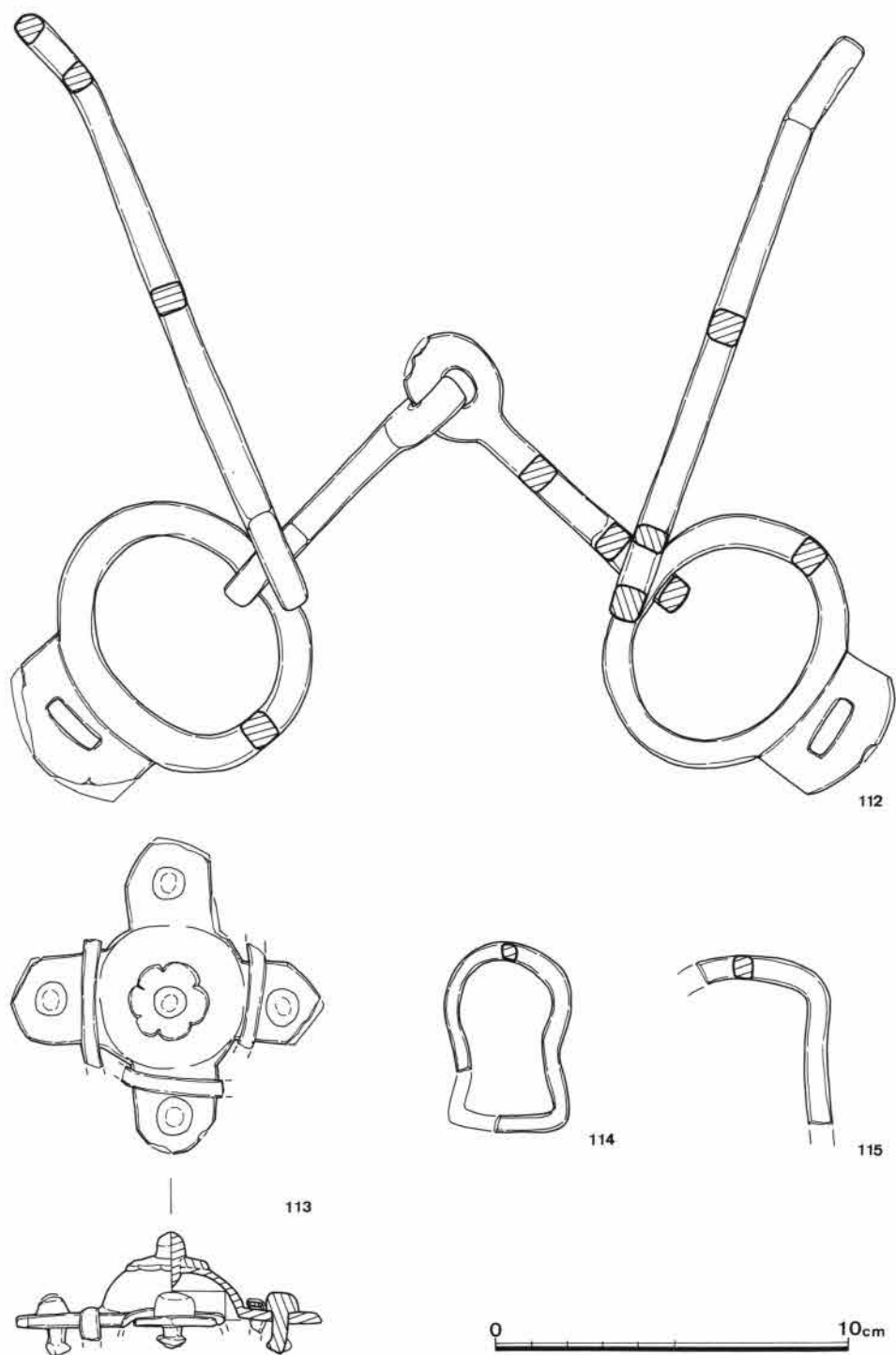
#### 土師器(第12図101～109)

いずれも椀で、体部下半を粗いハケあるいはケズリによって調整する。口縁端部は強いナデによって尖っておわるものが多い。

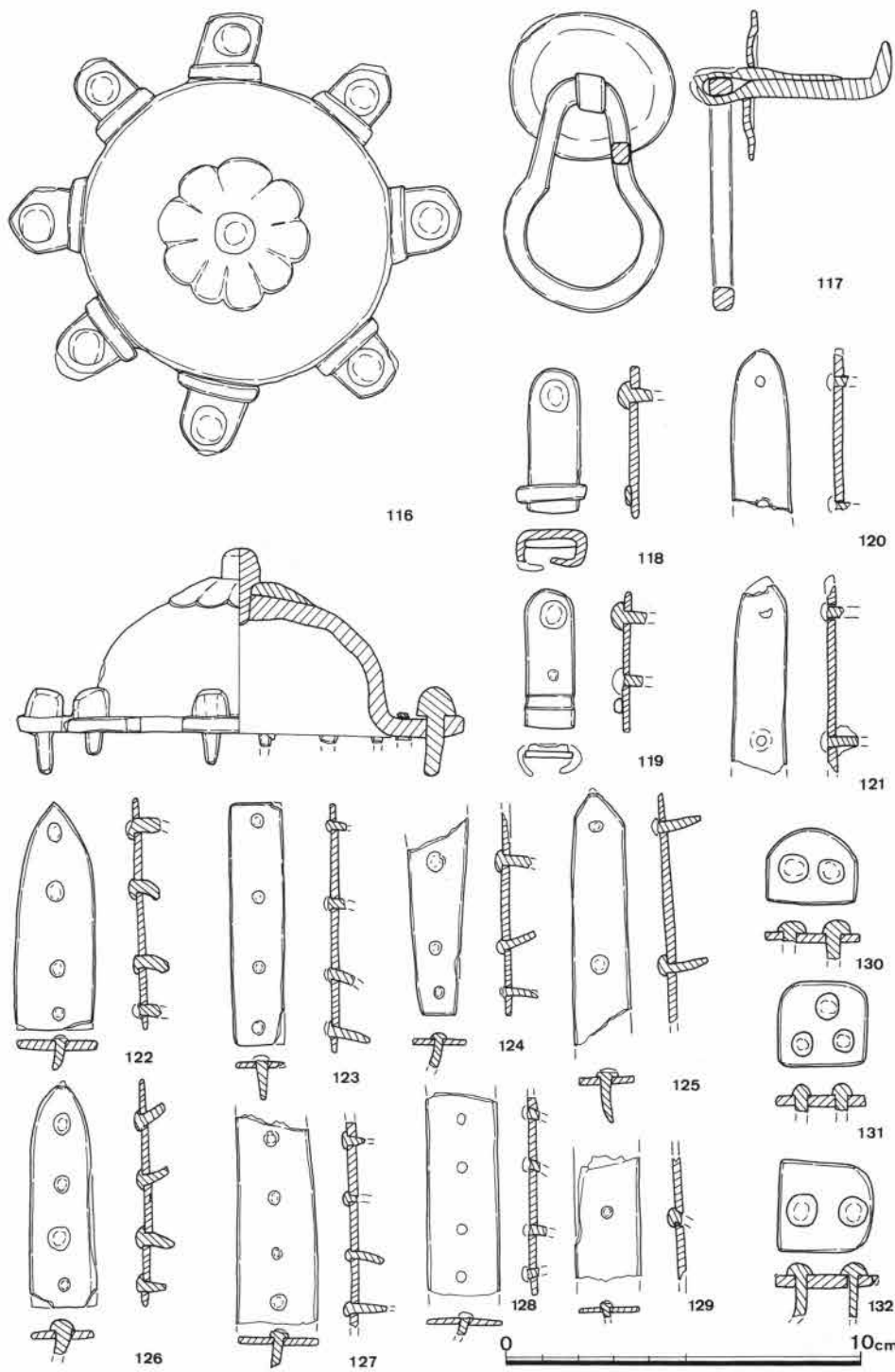
#### 馬具(第14～16図)

素環鏡板付轡1、壺鐙2、辻金具1、雲珠1、鞍1、革金具15以上、鉸具2がみられ、馬装一式が備わっている。これらは、奥壁沿いに集中し、初葬時の被葬者の副葬品であった可能性が高い。

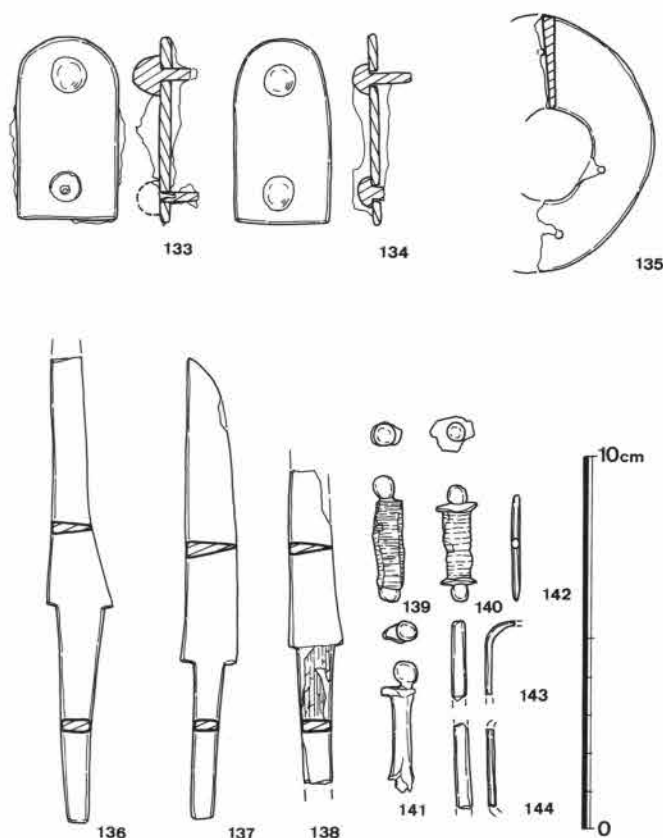
**轡(112)** 鏡板は径0.8cmの方形の鉄棒を曲げて、長径8cm・短径6.5cmほどの楕円形の素環をつくる。これに幅0.5cmの立開孔を開けた蒲鉾形の立開を鍛接している。引手は、単線の「く」の字引手で、全長は18cmを測る。引手は銜の端環と結合する。



第14図 上野1号墳出土遺物実測図(6) (1/2)



第15図 上野1号墳出土遺物実測図(7) (1/2)



第16図 上野1号墳出土遺物実測図(8) (1/2)

**辻金具(113)** 4脚を持つ鉄製の辻金具である。鉢の頂部には花形の鉄地金銅張の座金具に金銅製の鉾を打つ。4脚部の鉾及び責金具も金銅製である。鉾の先端は叩き潰されており、これから革の厚さが5mmであるとわかる。全長9cm。

**鉸具(114・115)** 2点ある。114は、面繫に付属したものと考えられ、長5.4cm・幅3.6cmを測る。118は、鐙の鉸具と考えられる。

**壺鐙(図版第35)** 杓子形壺鐙が1対ある。鉸具に3連の兵庫鎖で釣舌金具を垂下させる。  
**雲珠(116)** 1点ある。辻金具と同じく、座金具・鉾・責金具が金銅製で雲珠本体は鉄製である。全長12cmを測る。

**鞆(117)** 円形の座金具に釣金具を結合した簡素な作りのものである。全長8.5cmを測る。もう1点は細片のため図化をしていない。

**革金具(118~134)** 金銅鉾を打つもの(118・119・130~134)と鉄鉾を打つもの(120~129)の2類がある。奥壁左隅から一括して出土し、個別形態と装着位置の関係は不明である。

**武器・工具(第16~20図)**

後期の石室墳に通有のものだが、弓束金具の存在が目される。

**刀子(136~138)** すべて両関の刀子で、136は刃部がすり減っている。138は、茎部に木質が遺存している。

**弓束金具(139~141)** 鉄製で3点ある。両端が有頭の棒に革を小円形の鐙で止めている。弓束の両端2か所ずつを弓本体に固定するものである。

針(142) 鉄製で1点ある。全長3cmを測る。

黄金具(143・144) 鉄製で2点あり、辻金具の黄金具の可能性ある。

鐙形金具(135) 卵形の鉄製金具が1点あり、鐙と思われるが、2か所の円孔があつてこの機能は不明である。

刀(第17図) 3本あるが、146は破損が著しい。145は長さ84cm、146は長さ74cm、147は長さ58cmを測る。145と147は鉤金具、茎部には木質が遺存している。

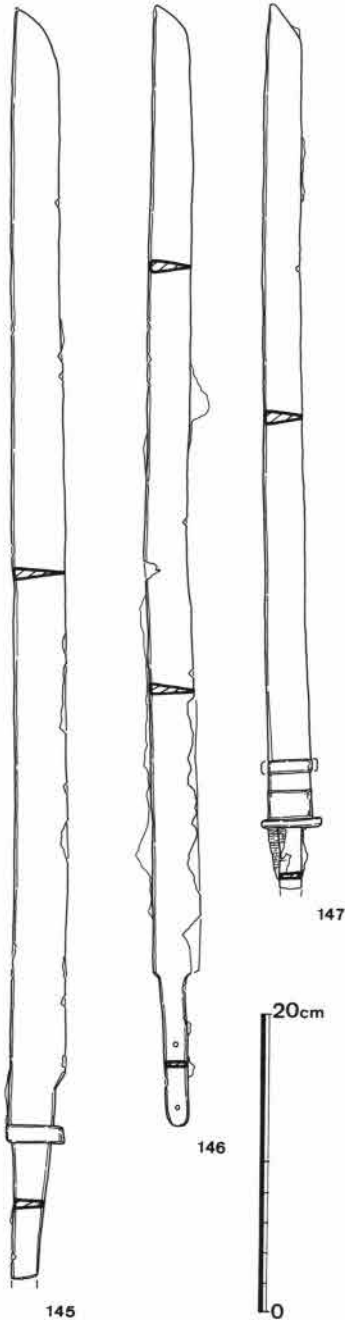
鉄鎌 平根鎌14本、長頸鎌54本以上ある。平根鎌は、台形関で重腸挟を持つものが主体である。長頸鎌の鎌身には腸挟三角形(162~166)、刀形(167~170)、五角形(171~173)、柳葉形(174~191・199~204)、舌形(193~198・205~217)など多様である。関部には台形関と棘状関の2種類があり、前者が多く、腸挟三角形の鎌身は後者である。

装身具(第21図)

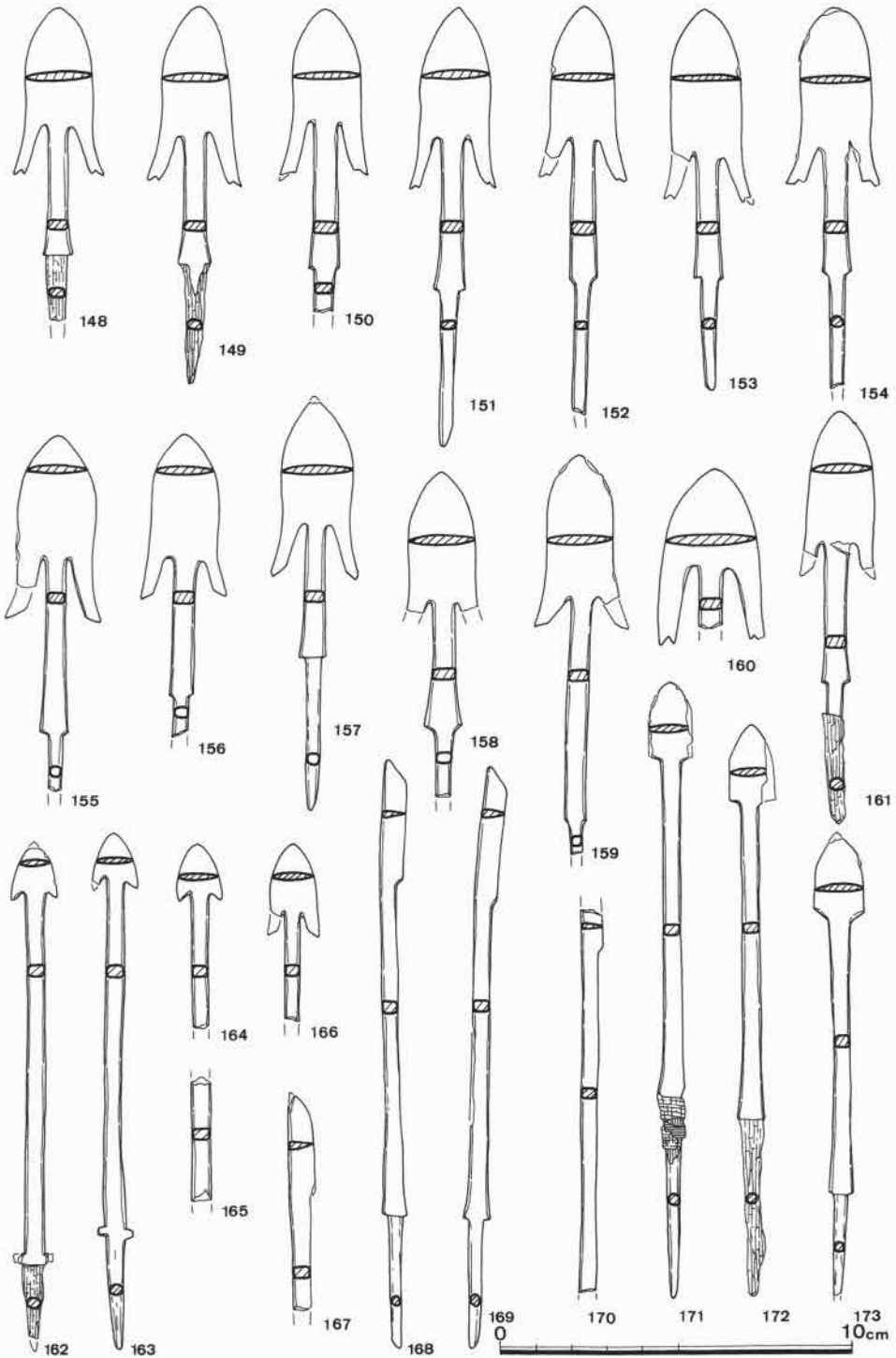
耳環(235~243)と勾玉(244~255)、切子玉(256)、ガラス玉(257~287)などがある。耳環は、銅身金張のものであり、太身のつくりである。勾玉は、濃緑色の碧玉及び水晶製のものである。ガラス玉は、すべて濃青色のものである。257は、トンボ玉で3か所にオレンジ色のガラスを入れている。

(6)まとめ

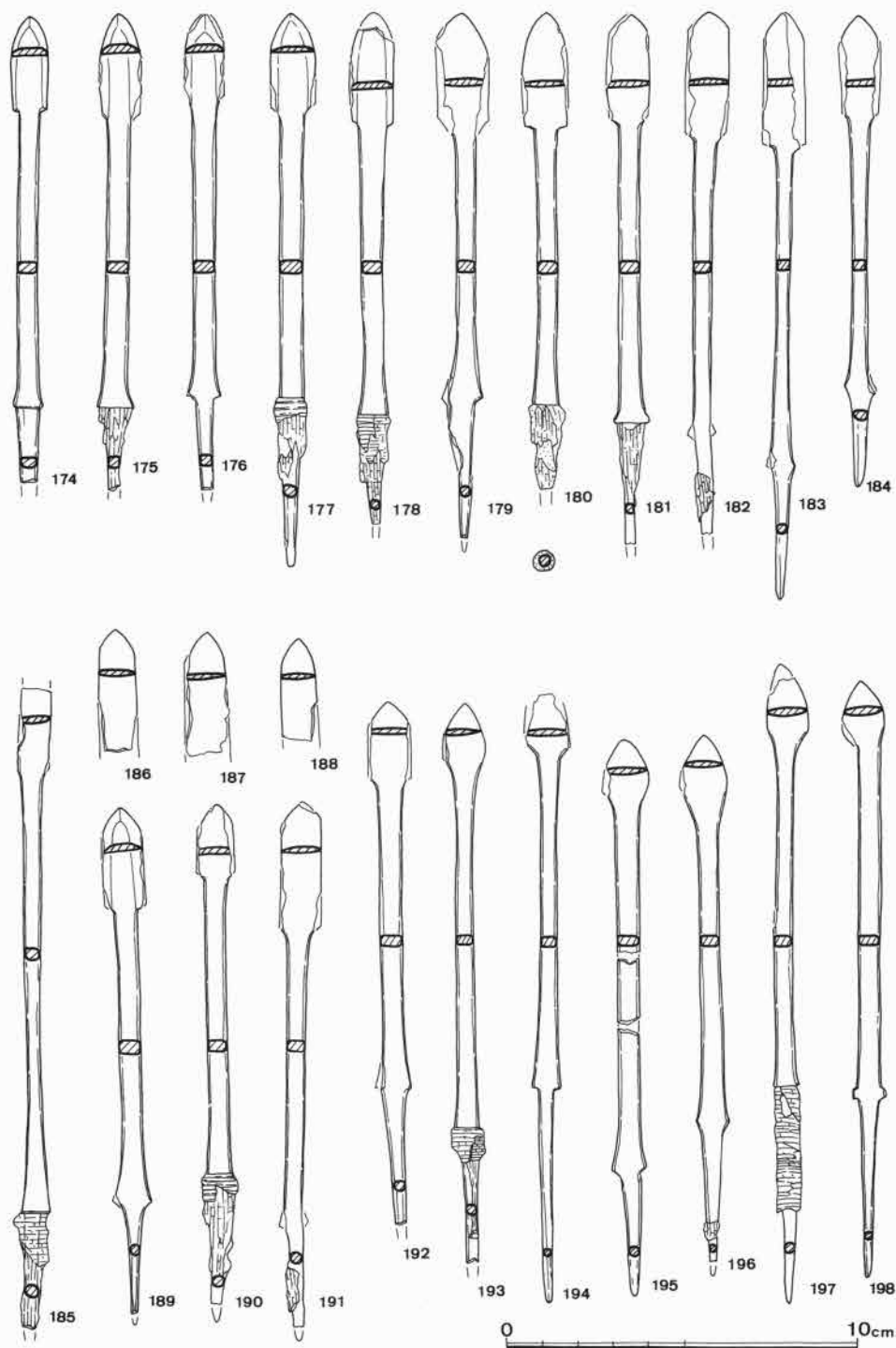
調査の結果、上野1号墳は6世紀後半の横穴式石室を持つ円墳であることがわかった。築造時期は6世紀後半で、7世紀前半まで追葬が行われ、羨門部では大甕を据えて閉塞の儀礼がなされていた。副葬品は、この時期の石室墳に通有のものだが、石室



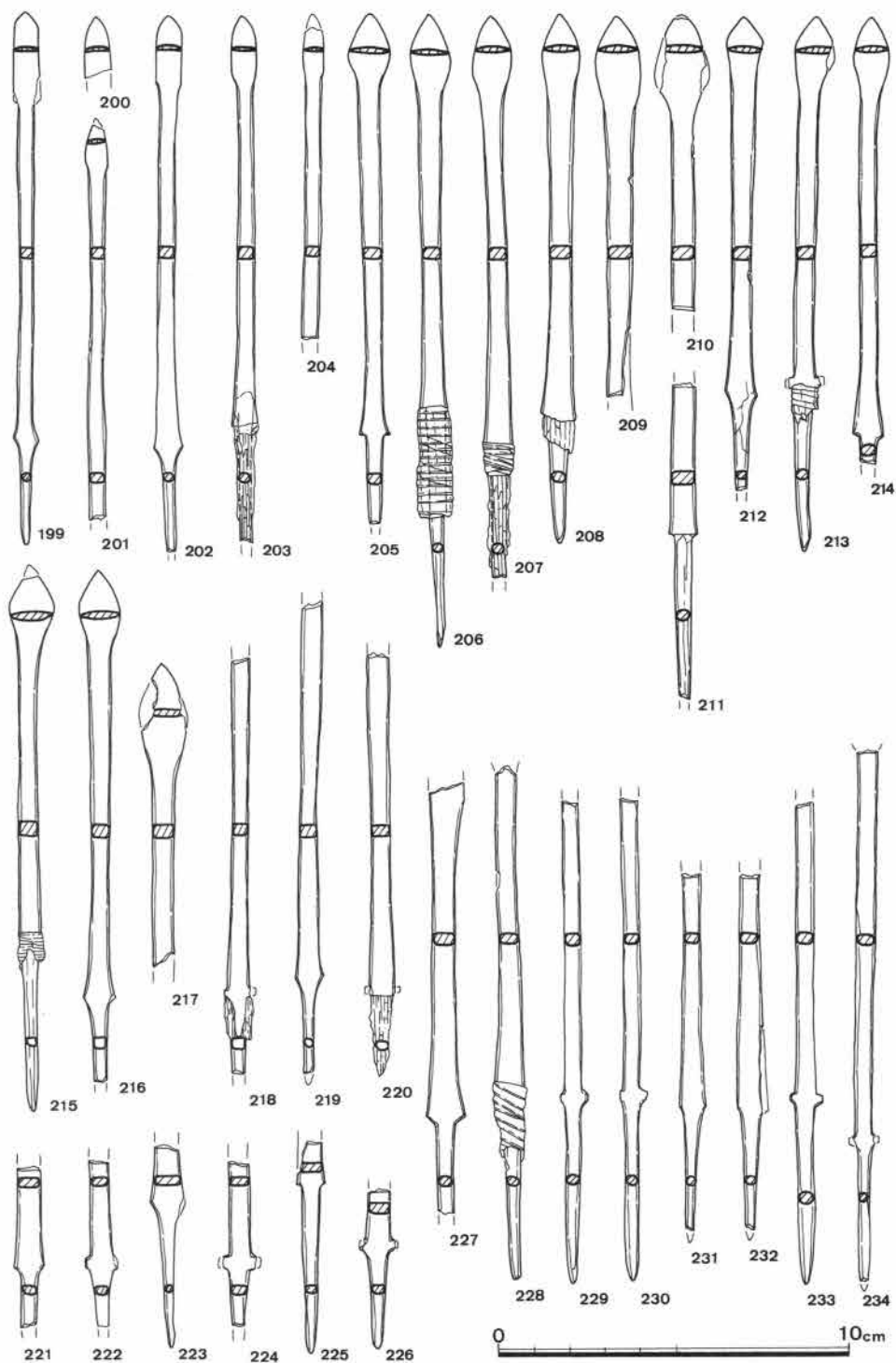
第17図 上野1号墳出土遺物実測図(9) (1/5)



第18図 上野1号墳出土遺物実測図(10) (1/2)

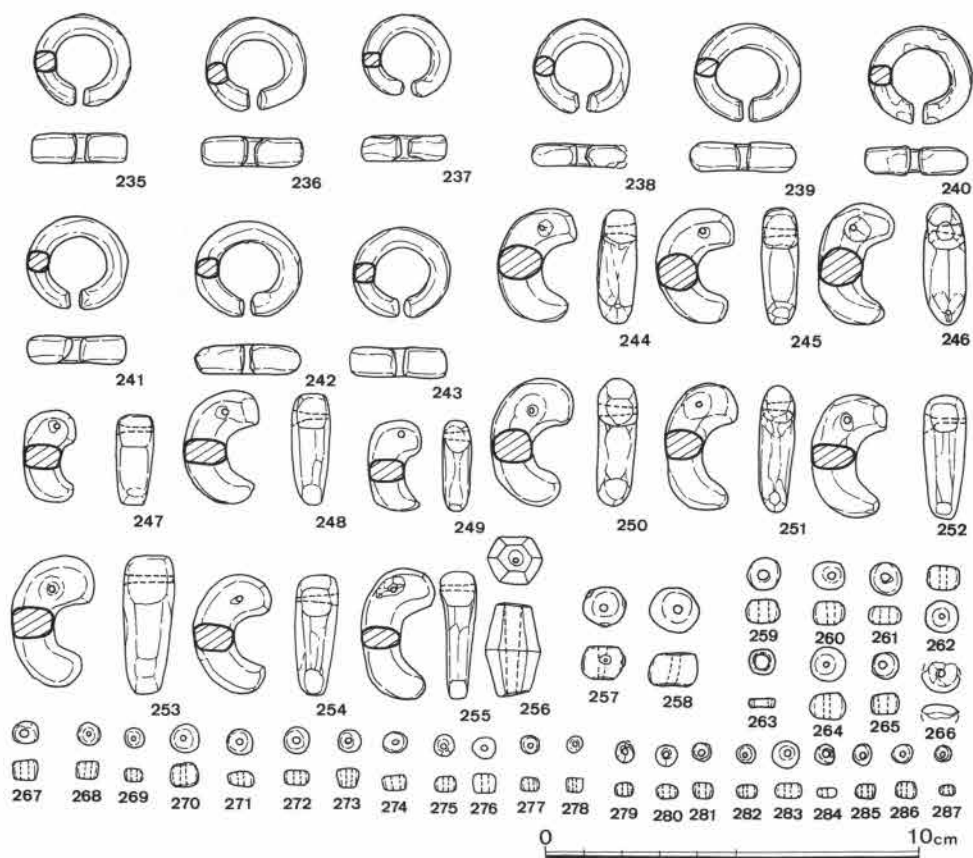


第19図 上野1号墳出土遺物実測図(11) (1/2)



第20図 上野1号墳出土遺物実測図(12) (1/2)





第21図 上野1号墳出土遺物実測図(13) (1/2)

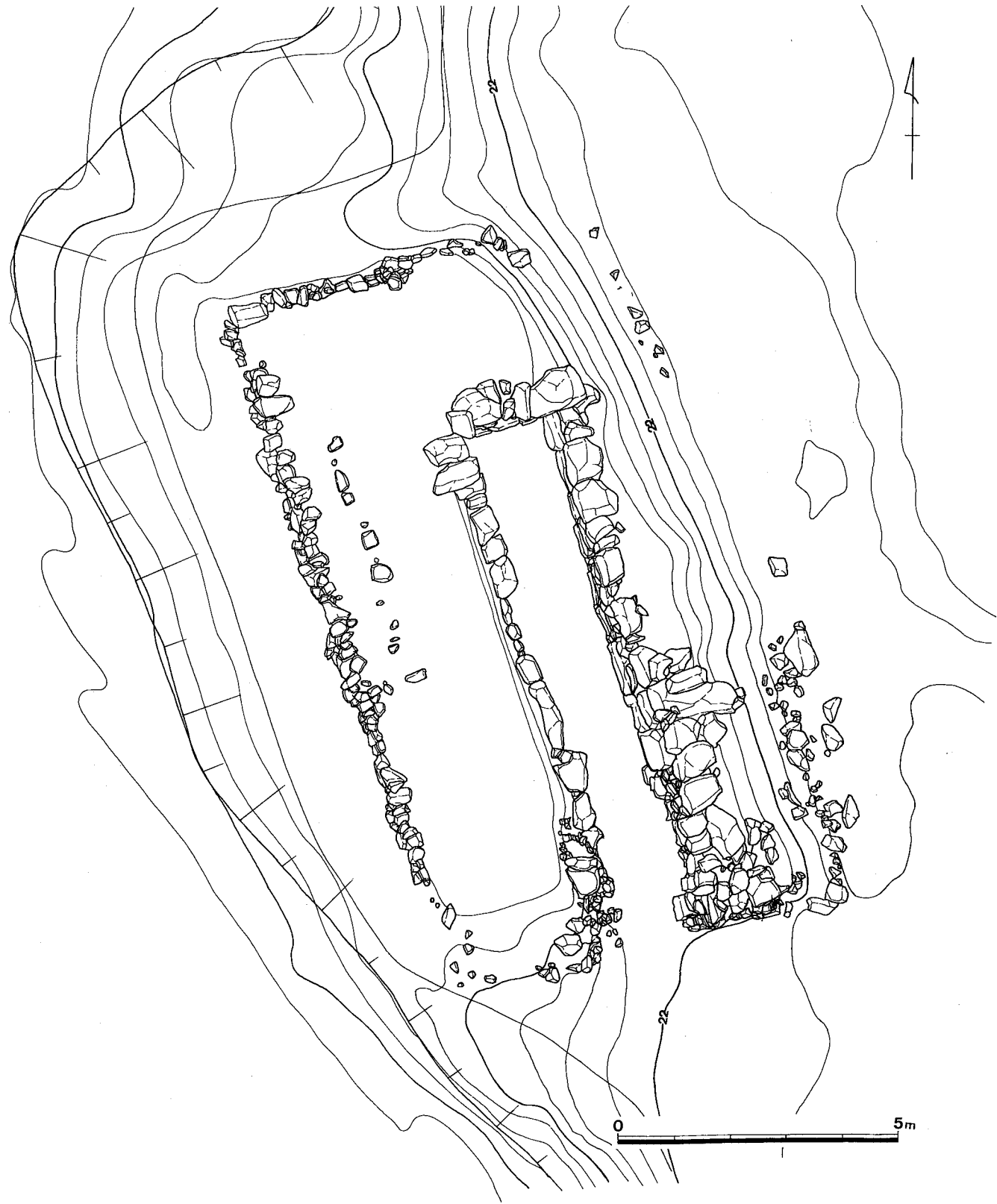
の石積みや玄門部で閉塞する点に古相が認められる。また、初葬時の閉塞石が良好に検出できた点も発掘調査の成果の一つといえよう。

## ②上野2号墳

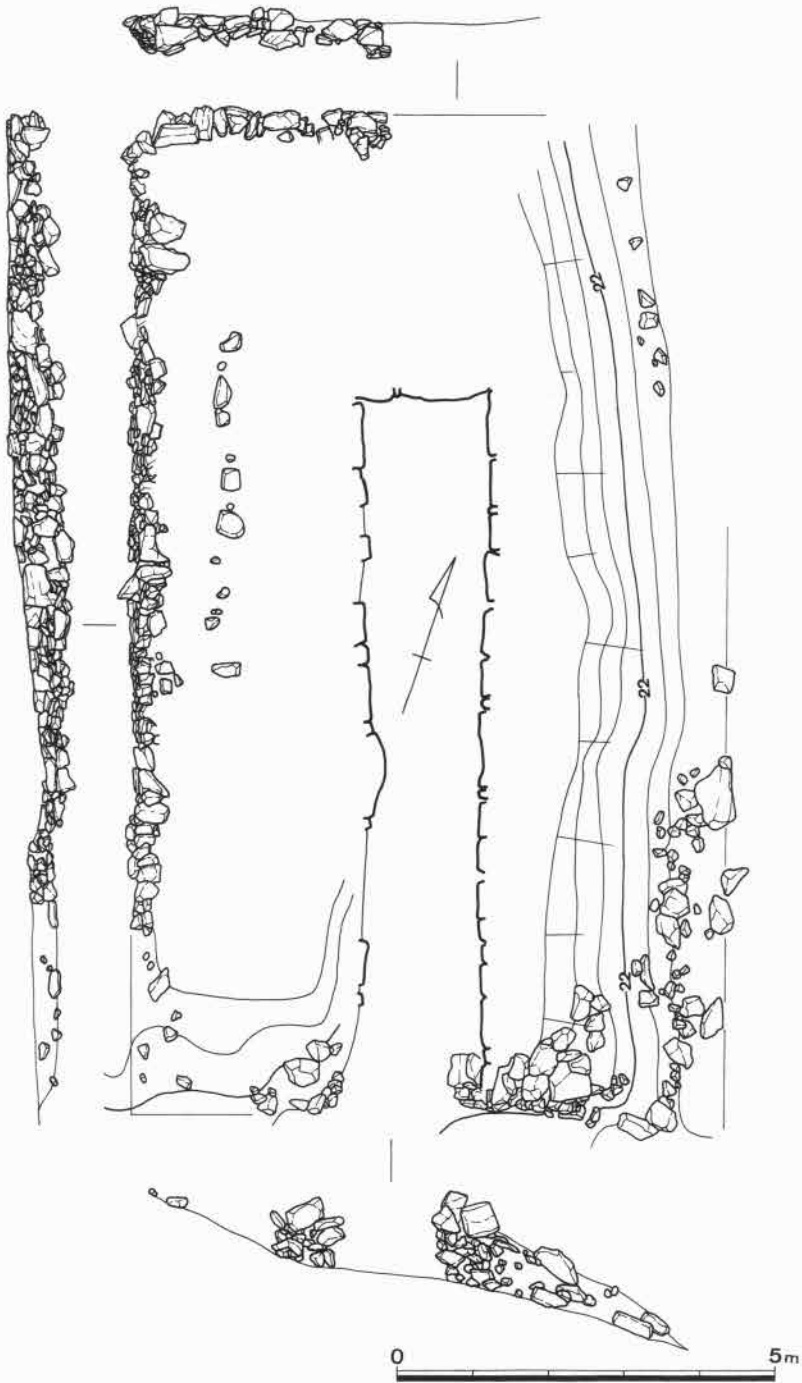
### (1)墳丘

1号墳の東下方40mに位置する(第2図)。当初、分布調査では確認されていなかったもので、1号墳の調査開始後に開墾により削平された畑の段部分に露出していた石材を観察した結果、天井石と側壁との間に小石がかませであり、古墳と判明した。墳丘頂部は、開墾により完全に削平され平坦化しており、北東側は下段の開墾に伴い大きく削られている。

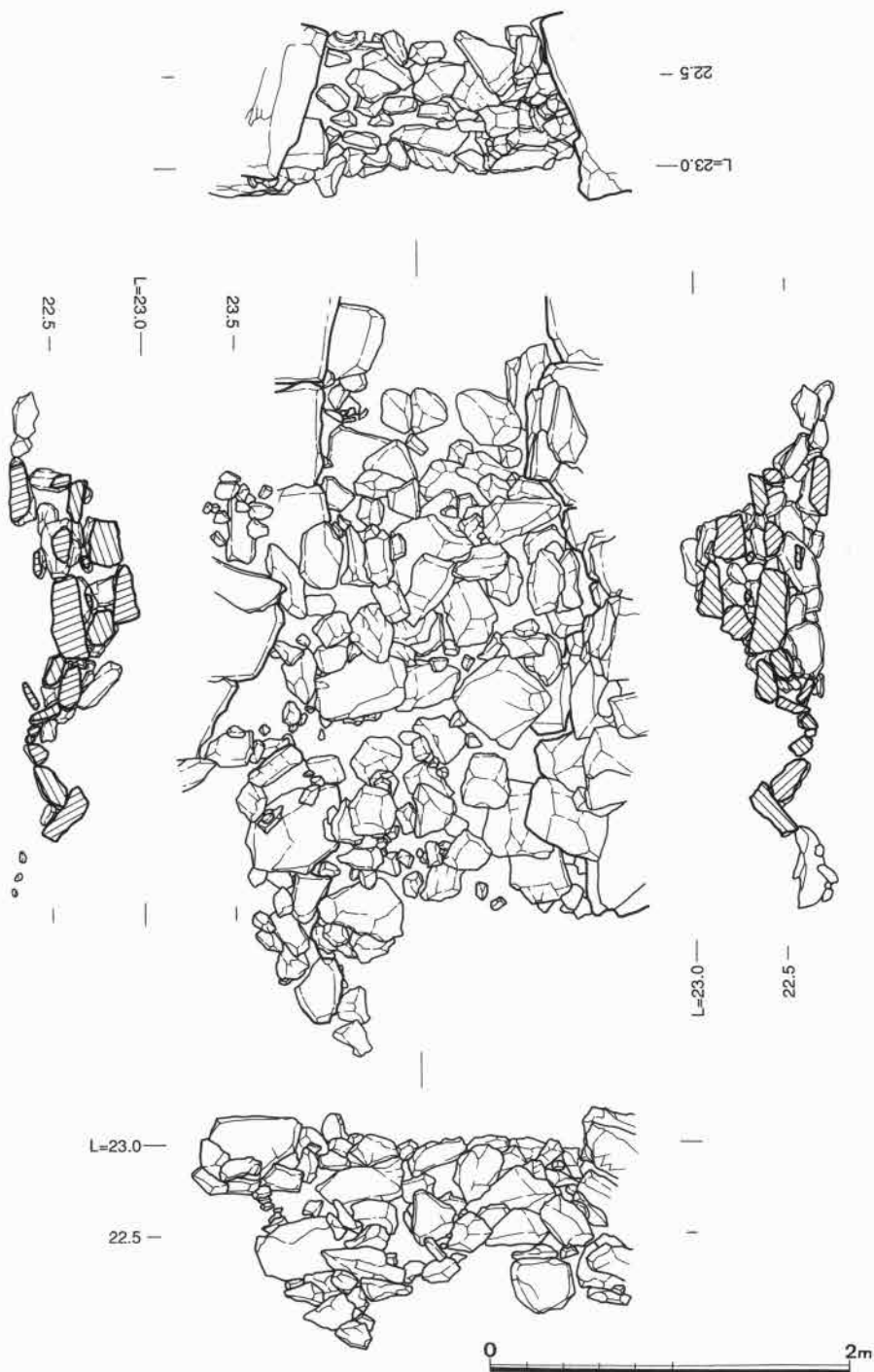
2号墳は、石垣状の列石で周囲を囲まれた2段築成の長方形墳である(第22図)。石室主軸を確定して発掘区を拡張した。列石は上段が7m×7m、下段が13m×8mの規模を有する。西側には、丘陵と区画する幅2~2.5mの溝が設けられている。列石は、最もよく



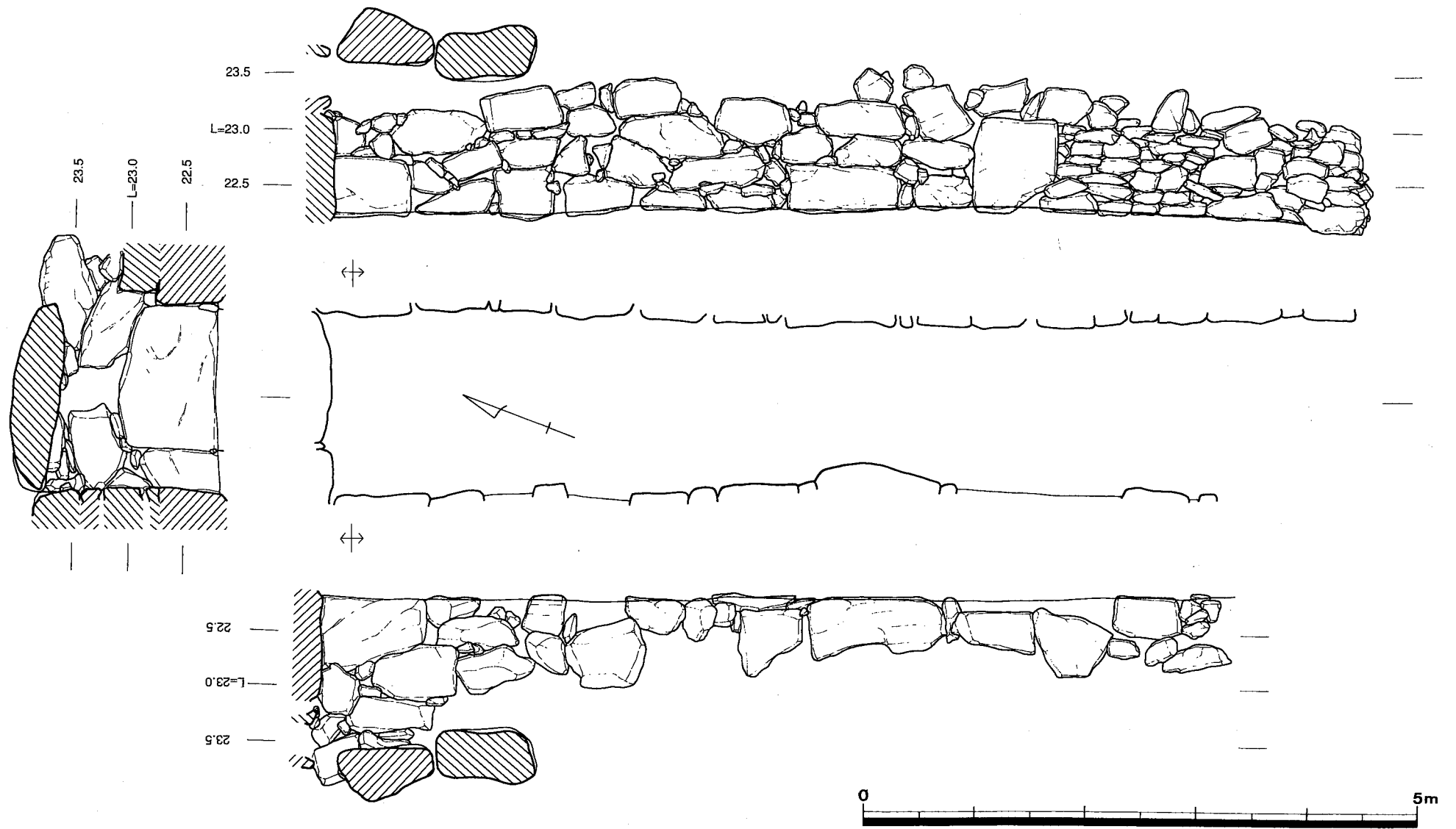
第22図 上野2号墳丘測量図(1/100)



第23図 上野2号墳墳丘・外護列石実測図(1/100)



第24図 上野2号墳閉塞石平面・断面図(1/40)



第25図 上野2号墳石室実測図(1/50)

残存する東側下段で約0.8m、上段は基底石のみ確認した。墳丘東側列石については、開壘により破壊され残存しないが、一部基底石のみ確認できた部分もある。また、南西側には、丘陵と区画するやや不整形な到卵形をなす幅2～2.5mの溝が設けられている。

天井石は、北西側開壘に伴う墳丘斜面には一部が露出していた。掘削を進めると、玄室奥壁付近で3石認められたが、現位置を保つものは、奥壁上にある1石のみで、あとは開壘などにより内部に落ち込んだりズレたりしていた。中央部～羨道部には天井石は残存していなかった。このため、調査上危険となる天井石側壁については、すべて除去した。

## (2)石室

石室は、無袖式横穴式石室で、南東に開口する(第25図)。遺存状況は不良で、開壘や地震によるためか石室全体が北東側に傾き多くの石材が崩落しており、天井石3石と、南西側壁の閉塞石までの石材は基底石を残し、調査の安全上除去せざるを得なかった。北東壁に関しては、開口部まで完存する。石室の主軸はS-32°-Eで、石室全長10.5m・奥壁幅1.65m、閉塞石付近の幅1.5m、天井石までの高さ1.4mを測る。玄室床面はほぼ水平であるが、閉塞石から外側にかけてはゆるやかに傾斜する。

保存が決定したため、石室の構築状況を知るための調査は実施できなかった。また、石室埋葬面までの調査しか行っていないため、築造時の面は不明である。

奥壁は、大小2石を置いて基底石とし、3段積む。側壁は、南東壁では基底石以外すべて除去したため上段は不明であるが、北東壁は完存する。奥壁から5.8mまではやや小ぶりの石材8石を横置きし、部分的に目地に拳大の礫を詰める。8石目では4段積まれているが縦目地が通る。9石目は他の石材より大型の石材を立て目地を遮断し、閉塞石付近から開口部にかけては人頭大の石材を用いるが乱雑な積み方となっている。天井石が架構されるまでの石積みの単位は3～4回である。縦置きされた石材から開口部にかけては、閉塞石部分を除いて規則性が認められない。このことから、縦置きされた石材を基点に奥壁側と入り口側とは別々に造られたものと考えられる。南東壁ではこのように分割された痕跡は認められなかったが、代わって北東壁に対応する石材部分からは、埋葬時の床面から上方に墓壙掘形底面があり、玄室側の基底石よりも遊離したような状態となっている。また、開口部から1.5m閉塞石寄りには石材がなく、地山の掘り込み面が側壁となっている。このことは、当初、両側壁とも地山上に構築されていたのに対し、古墳の改築後には北東壁が盛り土上に積み、南東壁は地山上となったため、このような差が生じたと考えられる。

開口部付近は、開壘によりかなり破壊を受けるが、基本的には両側の墳丘斜面とも地山の自然傾斜に沿って石垣状に2段にわたり積み重ねられていたものと考えられるが、墳丘南東側の石積みと同様、石積み方法に区画が認められる。

(3) 閉塞石の状況

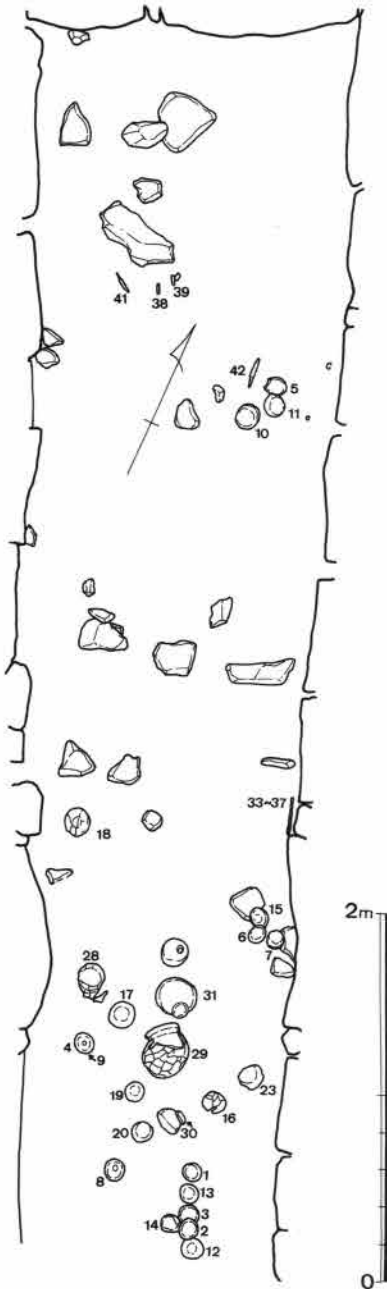
閉塞方法は、割り石を積み上げて行いが、何度も積み直された痕跡はなく、1号墳のものに比べて大型である(第24図)。閉塞部分には天井石が架けられておらず、石垣状の列石と一体となった前面観を呈していたことが想像される。羨門部には大甕が据えられていたが、転落した石材によって破碎されていた。また、短頸壺が開口部前庭から検出されたが、これ以外には土器はみられなかった。以上の閉塞部分の観察から、上野2号墳では追葬行為はなされなかった可能性が高いといえよう。

(4) 出土状況

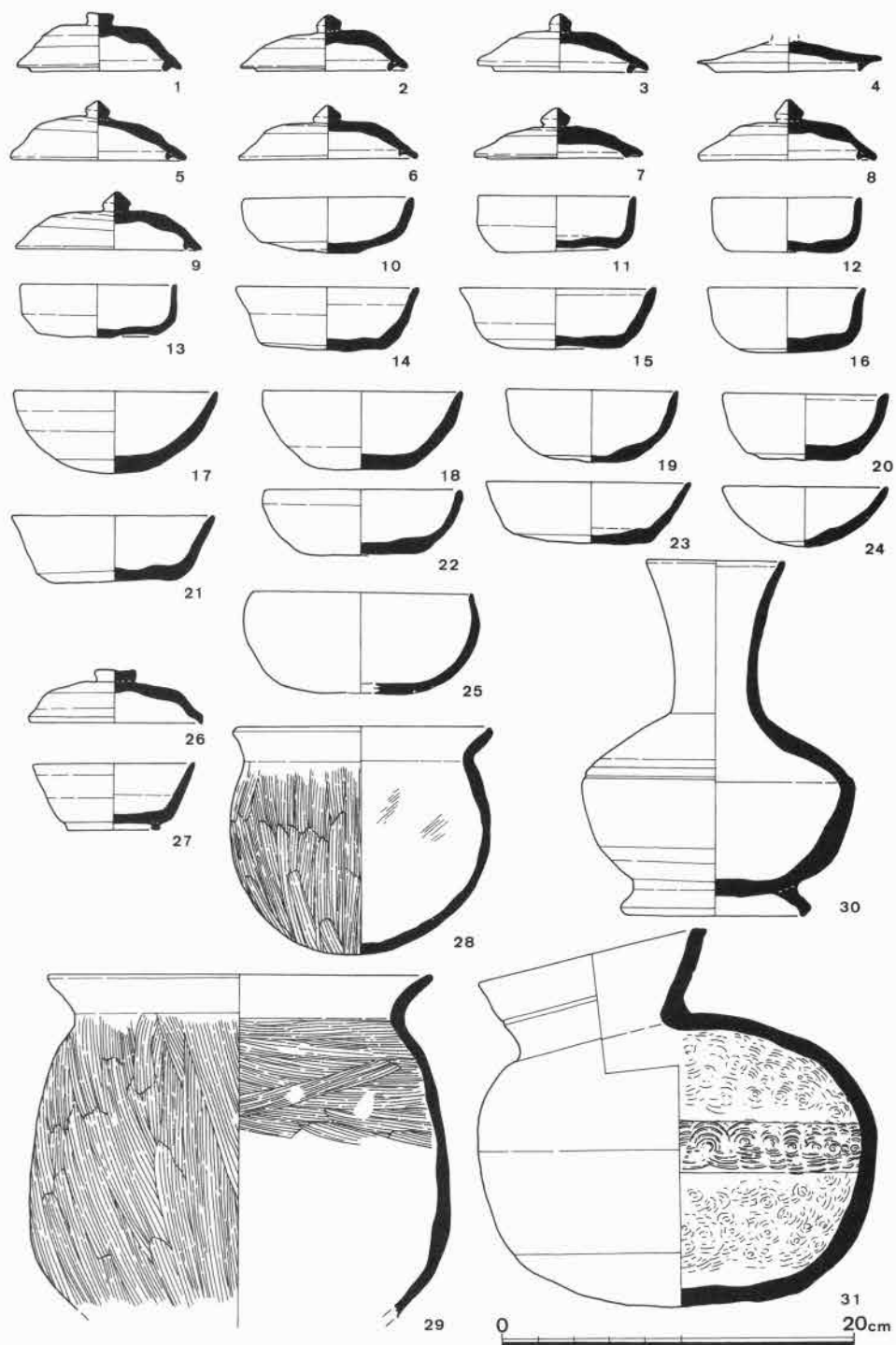
副葬品は、破片も含めて50点前後と少ない。遺物の配列は、中央と玄門寄りに二大別され、すべて正位で置かれている点から、追葬によるかたづけの形跡はない(第26図)。被葬者の位置は、中央東側の壁体沿いで耳環が検出されており、この付近に東頭位で主軸と直交して安置されたことが想定される。玄門よりの遺物群は、須恵器と土師器の碗・杯類の他に土師器の甕が置かれている点に注意される。これは、外面に煤が付着しており、古墳での儀礼に使用されたか、日常生活用の容器を転用したものだろう。

(5) 出土遺物(第27~29図)

須恵器(1~16・26・27・30~32)、土師器(17~25・28・29)、鉄鏃(33~39)、刀子(38~42)、耳環がある。須恵器は杯a蓋(1~9)、同身(10~16)、杯b蓋(26)、同身(27)、長頸壺(30)、平瓶(31)、大甕(32)があり、杯b(26・27)と大甕(32)以外は石室内に副葬されたものである。特に、26の内面には円形に



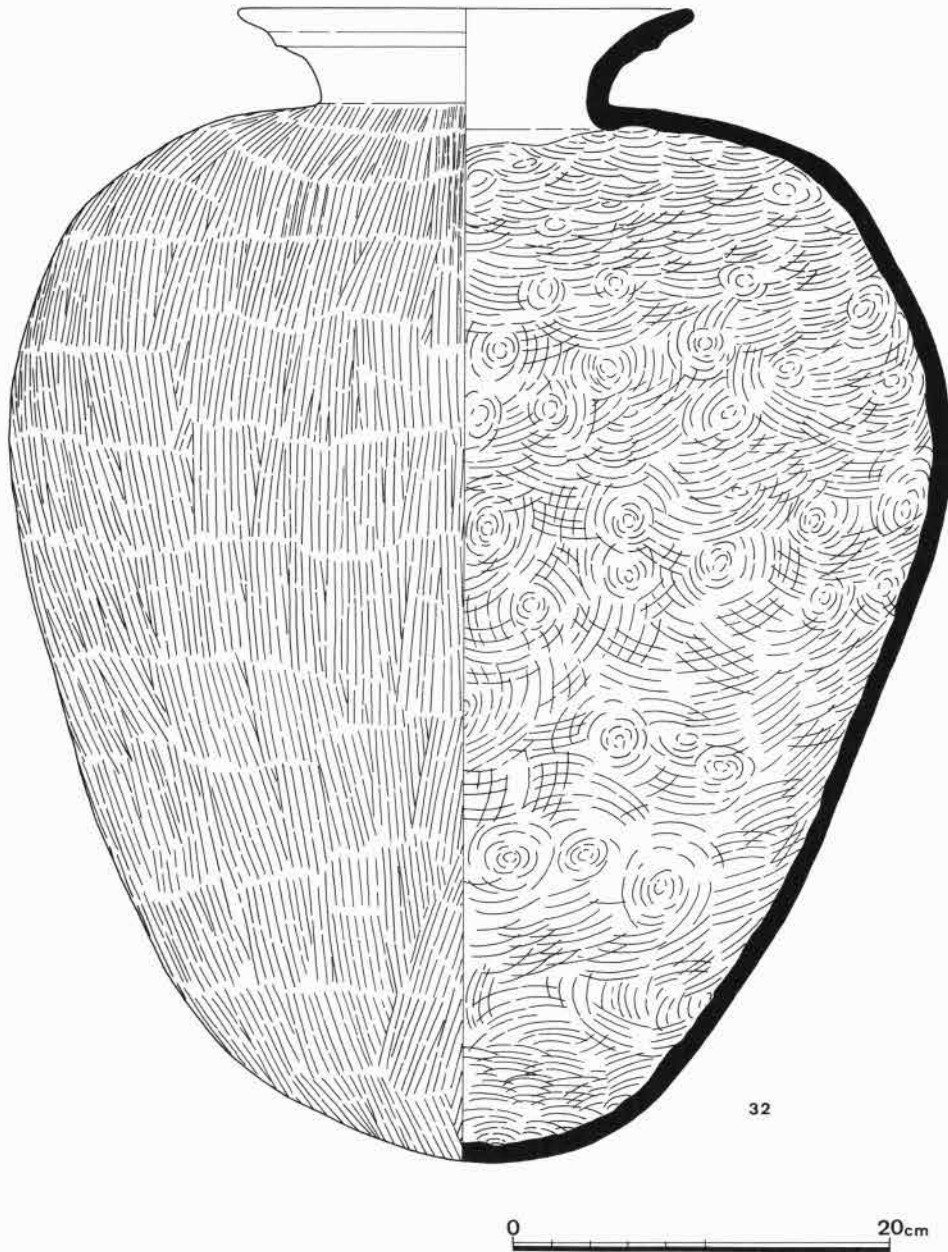
第26図 上野2号墳玄室内遺物出土状況図



第27図 上野2号墳出土遺物実測図(1) (1/4)



煤が付着し、燈明皿として使用されたものが古墳に投棄されたものであろうか。これ以外にはほぼ時期差がなく、7世紀前半におさまるものであろう。鉄鏝は、すべて鏝身部が破損しているが、棘関の比重が高い。刀子はすべて両関で、刀身に比べて茎が長い。この時期通有の形態である。耳環は、銅身金張のもので、1号墳とほぼ同じである。



第28図 上野2号墳出土遺物実測図(2) (1/4)

## (5)上野2号墳の

## 復原

墳丘の部分的な調査の結果、2号墳は築造時からこのような形状をなしていたのではなく、もともとあった古墳を改築(増築)したものであることが明らかとなった(第30図)。この改築の根拠を改めて列挙すると次の通りである。

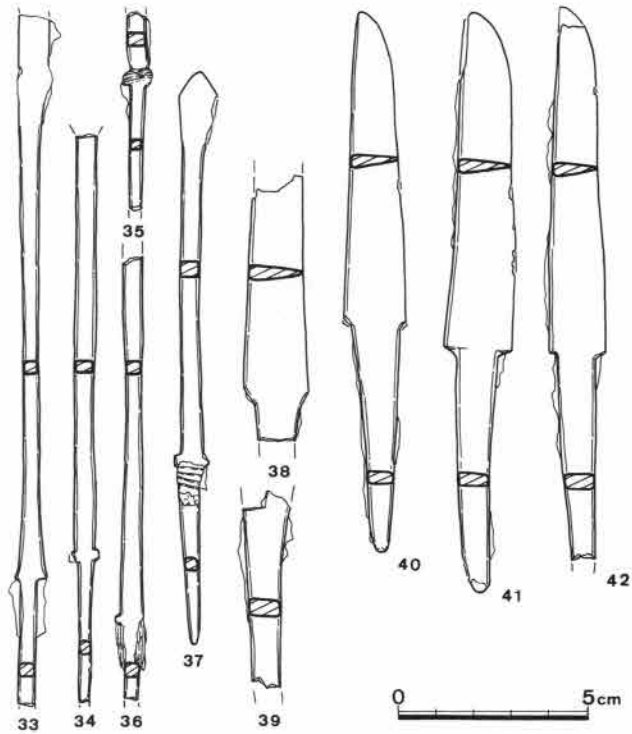
(1)墳丘の断ち割りの結果、上段列石が墳丘の盛り土を削り、下段列石は盛り土した上で設けられていること

(2)石室の壁体が閉塞石付近で石材の積み方が変わり、羨道が継ぎ足されていること

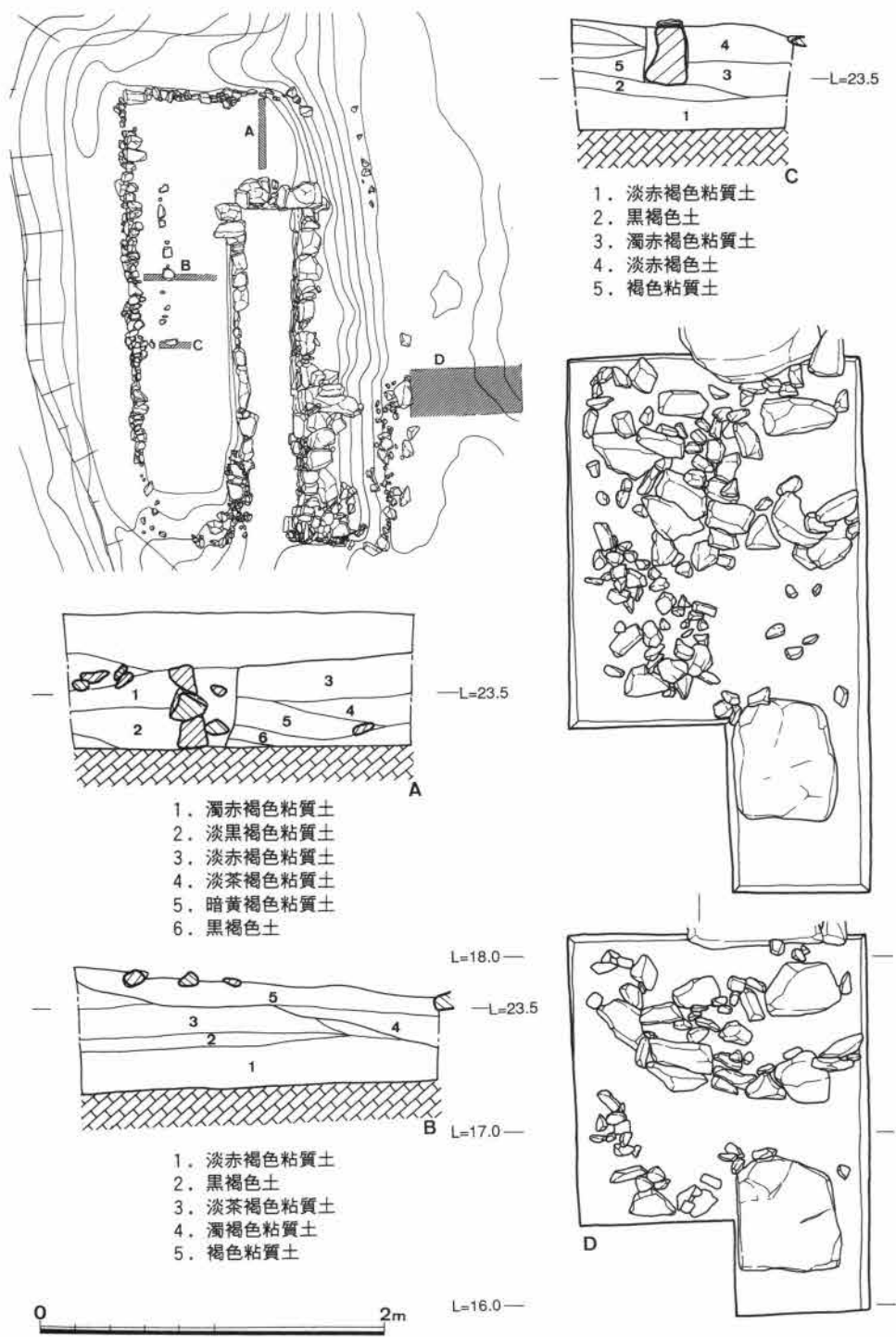
(3)2号墳の周溝が墳丘と並行ではなく、北西・南東部の幅が乱れていること

である。これは、この古墳が規格的に造られたのではなく、石室墳を改築したために生じたことと仮定すれば理解できる。前身となった古墳は、直径約10m、西側に幅2mほどの溝を持ち、全長約7mの石室を内部主体とする小規模なものと考えられる。古墳の改築は、この石室を中心として規則性をもって拡張されていったようである。

さらに、このことは、列石の観察結果からもうかがうことができる(第23図)。この石垣状列石には区画が認められ、東下段列石では4分割されており、区画部分には大きめの石材を置いている。各区画内の石材の積み方には区画ごとに差が認められ、規則性に欠ける。西側石垣状列石の区画された石材は、上段列石や当初の石室に共通点が認められる。すなわち、下段列石の北端は、旧墳丘の北端を指し、二番目の区画石は石室天井石の北端・上段列石の北辺を差し、三番目の区画石は石室の主軸の中心を指す。四番目の区画石は二段



第29図 上野2号墳出土遺物実測図(3) (1/2)

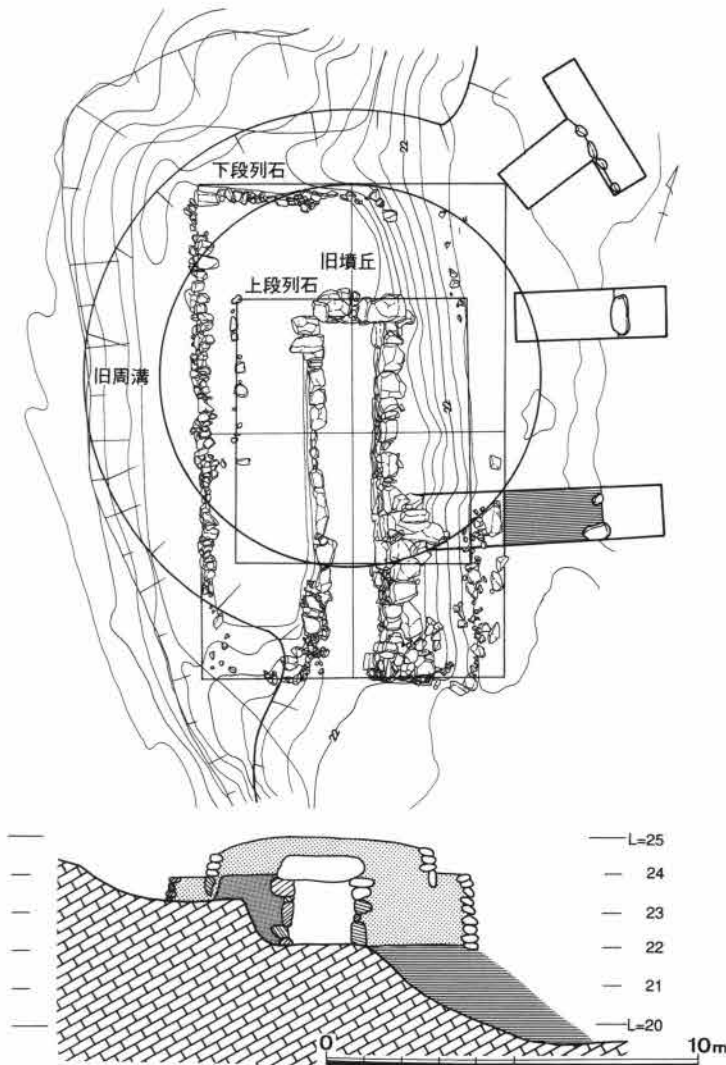


第30図 上野2号墳墳丘断ち割り断面図(1/40)

目列石の南辺及び旧石室の開口部を差し、列石の南端は改築後の南側石列・羨門部を指している。北辺下段列石は、完存するのが西側1/2であるが、3区画分けられていたと考えられ、残存する大きめの区画された石材は、石室側壁ラインに相当するものと思われる。

以上の検討の結果、この古墳の築造過程は以下のように復原される(第31図)。

1. 北側列石に設置する。
2. 旧墳丘の円弧部分の一部を削り、周溝を掘り直す。
3. 旧石室を継ぎ足し、盛り土によって石室前端部分を造る。
4. 下段列石部分を盛り土によって構成する。



第31図 上野2号墳墳丘復原想定図

なお、古墳の東側斜面に断ち割りを入れたところ、一部で礫石混じりの盛り土を確認した。これは墳丘北側までは回らない。その機能は、盛り土の流出を防止し、石室の土留めあるいは石室の前庭部分を高く見せるつくりであろう。

## 5. まとめ

今回の調査の結果、2号墳は2段築成で石垣状の列石を有することがわかった。この形態の古墳は、京都府北部では綾部市山尾古墳や福知山市下山1号墳など、確認例が蓄積している。特に、7世紀前半に集中し、南に石室が開口するという斉一性を有し、古墳の占地・築造に当たって、規格的な意図が働いたことが想定される。あるいは、畿内の終末期古墳や寺院建築からの影響を考える見解もある。例えば、東大阪市墓尾3号墳や相生市若狭野古墳では尺度論から墳丘規模が設定されたことが考察されている。ところが、上野2号墳では、円墳を改築したという特殊性のため、前述したような異なった築造原理が働いていた。この古墳の列石には区画石が設けられていることや、副葬品が比較的多いことから、異質性がうかがえる。

ところで、この形態の古墳では畿内の政権との関係が議論されることが多い。例えば、大谷1号墳、定古墳、定北古墳が分布する岡山県北房町域では、吉備大宰と関連する見解がある。これは白鳳寺院の存在とも併せて首長墓系譜を追うことから実証できる。上野2号墳の場合には、周辺に初期寺院がなく、副葬品からも環頭大刀などの畿内の政権との関連性をうかがわせるものはない。だが、この古墳が位置する「三宅」地名の存在から、その関係を想定することもできよう。

集石遺構は、上野1号墳の南方70mの丘陵稜線上に位置する。拳大の礫を中心に0.8m×0.6mほどの楕円形に1～2段ほど積み上げられたような状態で、集石が認められた。集石は、規則性がなく、一部腐植土の上にのるものもあり、石材下層には墓壙などは認められなかった。付近には山道や開墾された痕跡があり、それに伴い、出てきた石材を集めたものと考えられる。

(増田孝彦・河野一隆)

## (2) 滝谷遺跡・石ヶ原古墳群

### 1. 調査経過

滝谷遺跡は、上野1号墳の南側に隣接する平坦地上に位置する。滝谷遺跡については、平成5年度に試掘調査を、平成6年度に本調査を行った。

平成5年度は、幅1m・長さ46mの試掘トレンチを設定して調査を行った。試掘調査の結果、竪穴式住居跡と思われる落ち込みを確認するとともに、弥生土器・土師器や石器・銅鏃などが出土した。

平成6年度は、竪穴式住居跡が確認された地点を中心に平坦地の面的な調査を行った。また、滝谷遺跡と谷を隔てた南側の丘陵上に位置する古墳状隆起についても試掘調査を実施した。現地調査は平成6年10月7日に開始し、平成7年2月24日にすべての作業を終了した。この間、平成7年2月23日には関係者を対象とした説明会を実施した。なお、平成6年度に試掘調査を実施した古墳状隆起については、調査開始当初、名称が付けられていなかったために、丹後町教育委員会と協議の上、石ヶ原古墳群とすることにした。

最終調査面積は、滝谷遺跡で約500m<sup>2</sup>、石ヶ原古墳群で約250m<sup>2</sup>の合計750m<sup>2</sup>であった。

(筒井崇史)

### 2. 調査概要

#### (1) 滝谷遺跡

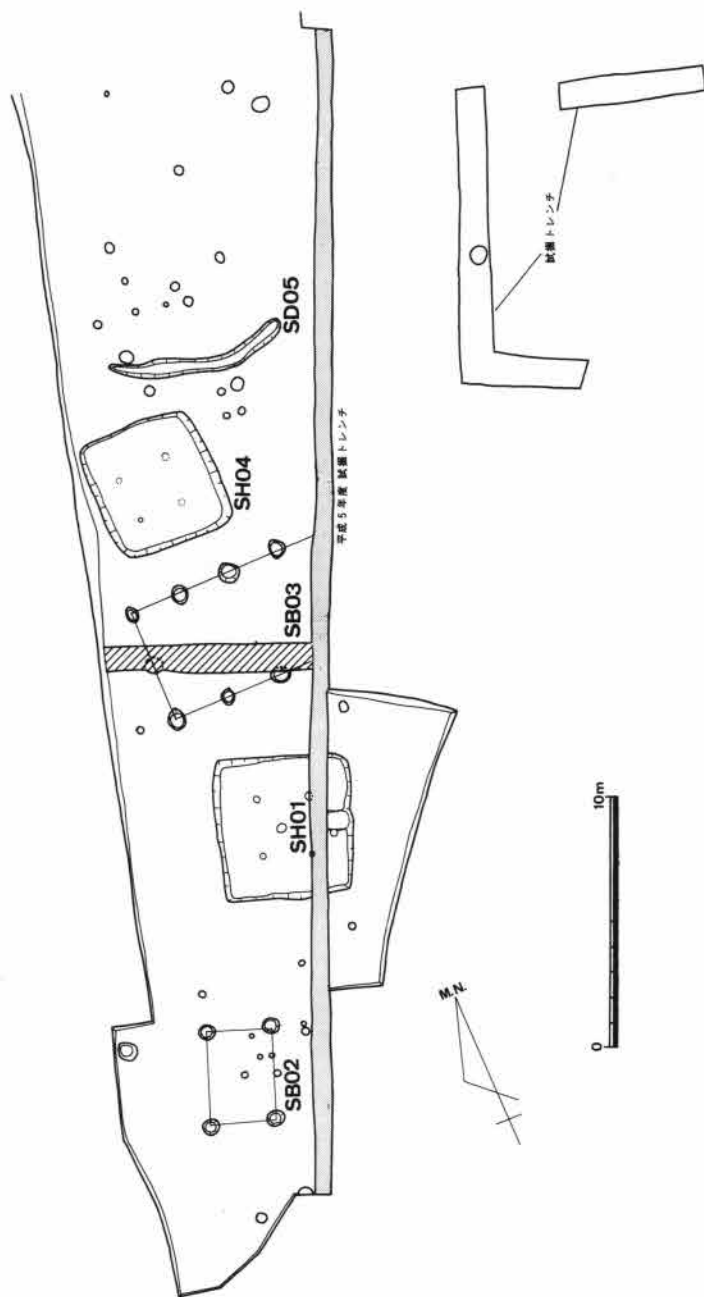
##### a. 平成5年度

上野古墳群の調査に並行して、隣接する平坦地上のほぼ中央に幅1m・長さ46mの試掘トレンチを設定した。試掘調査の結果、平坦地のやや南寄り、小さな谷状地形を確認したほかは、おおそ地表下15～20cmで地山面に到達する。谷状地形の上面を中心に厚さ30～40cmほどの包含層がみられたが、他の部分では厚さ5～10cm程度の包含層が確認できた。遺構としては、竪穴式住居跡と思われる落ち込みを1か所確認したにとどまる。

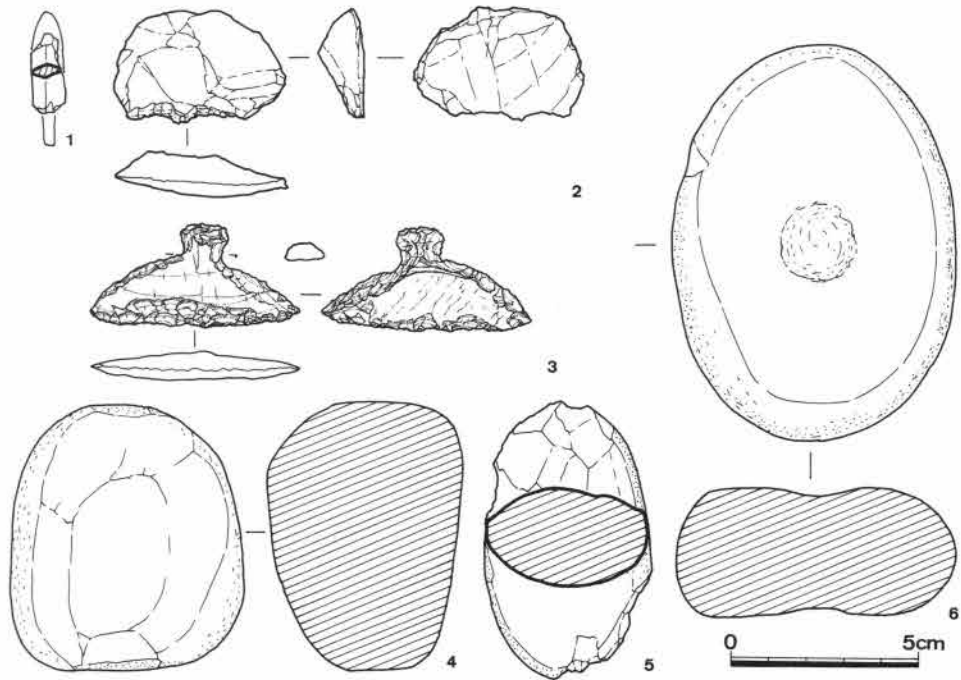
遺物については、土器・石器・銅鏃などがコンテナ・バット約3箱ほど出土した。このうち、土器は遺構に伴わない資料であり、平成6年度の調査とも重複するので割愛する。

1は、柳葉形銅鏃の破片と考えられる。茎部と先端部を欠失しているが、断面菱形の刃部が残る。全体に腐蝕が著しく、きわめて脆い。2は、スクレーパーである。厚みのある

横長剥片を素材とし、刃部は薄く鋭利に仕上げている。長さ4.5cm・幅3.0cm・厚さ1.3cmを測る。3は、サヌカイト製の石匙である。長さ5.5cm・幅2.7cm・厚さ0.7cmを測る。全体にていねいなつくりで、両面から調整が行われている。4は、敲石で円礫の長軸両端部が打撃でつぶれている。長さ7.0cm・幅6.1cm・厚さ5.2cmである。5も自然礫の両端面を



第32図 滝谷遺跡遺構配置図



第33図 滝谷遺跡出土遺物実測図(平成5年度)

打割した石器であるが、機能は不明である。長さ7.1cm・幅4.3cm・厚さ2.5cmである。石錘であろうか。6は凹石で、扁平な素材の中央部に打撃痕がある。長さ10.5cm・幅7.5cm・厚さ3.2cmを測り、凹部は径2.1cmである。

古墳以外で銅鏃が出土する例は少ないが、平成6年度の発掘調査で確認された滝谷遺跡の集落内で使用されたものと思われる。集落出土の銅鏃では弥栄町遠所遺跡で三角形鏃が検出された例があり、今後、報告例が増加するだろう。石器では、石匙が目されるが、共伴する土器が全くなく、縄文時代後期の可能性を想定するにとどめる。平成5年度の出土土器には、縄文土器が検出されず、縄文時代には集落は形成されなかったと考えられる。

(黒坪一樹・河野一隆)

#### b. 平成6年度

平成6年度の調査では、竪穴式住居跡2基、掘立柱建物跡2棟、溝跡などを検出した。

##### ①竪穴式住居跡(SH01・04)

SH01は、平成5年度の試掘調査で確認された住居跡である。平面形は、ほぼ正方形を呈し、一辺5.5mを測る。周壁溝は一部で確認できなかったものの、全周するものと考えられる。支柱穴は4個確認できた。各支柱穴間の距離は2.1~2.3mを測り、ほぼ等間隔で

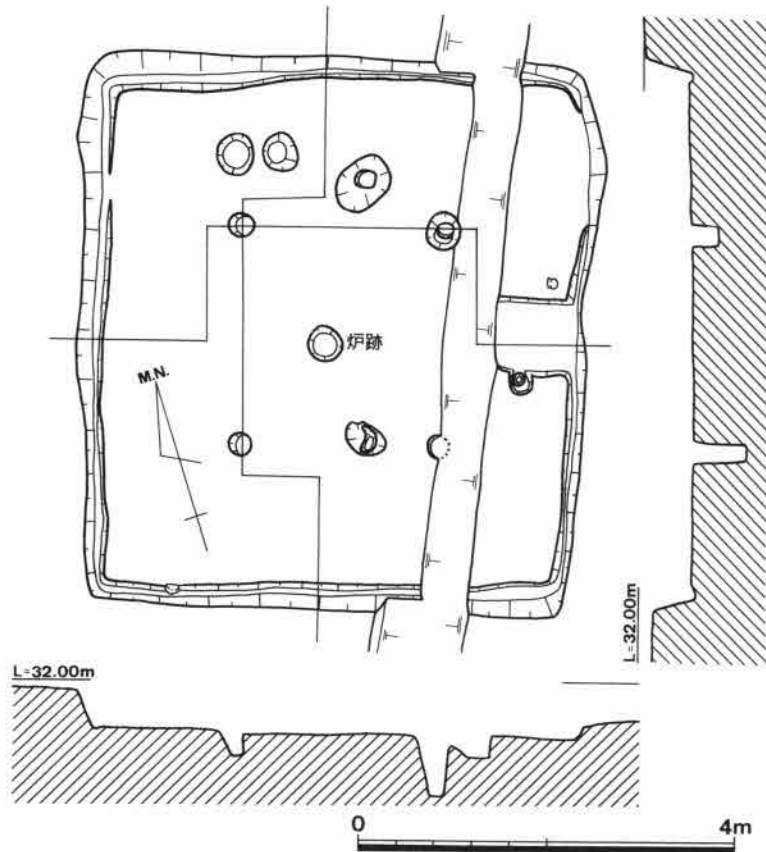


ある。住居跡床面の中央には炉跡と思われる直径20cm・深さ12cmの円形の小土坑を確認した。土坑内には、焼土が少量みられた。主軸はN-18°-Eを測る。

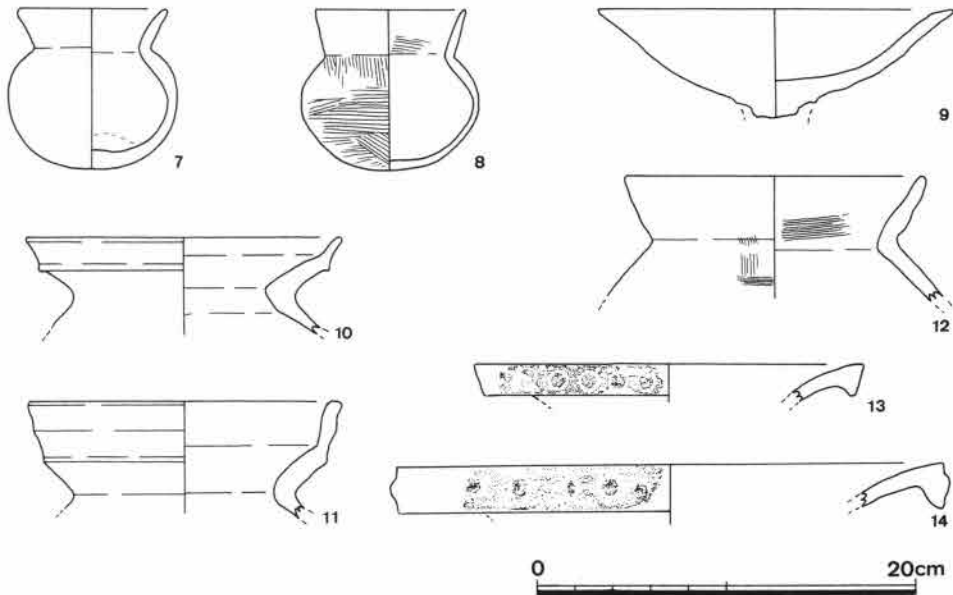
住居跡内からは、小型丸底土器(7・8)、甕(10・12)、高杯(9)などが出土している。7～9は、床面上から出土した。7は、口径7.6cm・器高8.5cm・体部最大径9.0cmを測る。8は、口径7.8cm・器高8.6cm・体部最大径9.4cmを測る。ともに、体部最大径が口径を上回る。内外面とも粗いハケあるいはナデで仕上げる。9は、高杯の杯部である。口径18.8cm・残存高5.8cmを測る。10・12は、SH01の埋土中から出土した。

SH04は、SH01の北方約10mに位置する住居跡である。第1層を除去した段階で自然の落ち込みと考えられたが、その後新たに方形プランの落ち込みを確認したため、改めて断ち割りを行い、竪穴式住居跡であることを確認した。SH04は、一辺4.5m～5.0mを測り、平面形が方形を呈する住居跡である。主柱穴は攪乱の及んでいた南東側の主柱穴を除く3か所で確認したが、周壁溝はみられなかった。主軸は南北である。

埋土中からは、弥生土器片も出土したが、床面上からSH01とほぼ同時期と思われる



第34図 竪穴式住居跡SH01平面図



第35図 滝谷遺跡出土遺物実測図(平成6年度分)

甕・壺などが出土した。ほぼ完形に復原できるような資料もあるが、年度末ということもあり、十分整理を行うことができなかった。機会を改めて報告することにした。なお、11・13は、SH04第1層から出土したものである。

### ②掘立柱建物跡(SB02・03)

SB02は、調査地の南端に位置する1間×1間の建物跡である。柱間寸法は南北3.7m・東西2.6mを測る。主軸はN-20°-Eを測る。

SB03は、SH01とSH04のほぼ中間に位置する2間×4間以上の建物跡である。柱間寸法は、梁間4.5m・桁行6.3m以上を測る。主軸は東西である。

SB02・03ともに柱穴内から出土した遺物は、いずれも細片のため時期を確定することはできない。ただし、SH04とSB03とは主軸が一致しており、両者に関連性のある可能性はある。

### ③その他

包含層出土遺物で注目できるのは、いわゆる生駒山西麓産の壺の口縁部の破片(14)である。なお、昨年度出土した石匙などに関連する遺構・遺物は確認されなかった。

### (2)石ヶ原古墳群

滝谷遺跡の南方およそ220mの地点に位置する。調査対象地内には、9地点の古墳状隆起が確認された(調査の便宜上、A～I地点とした)。これら古墳状隆起は2地点(A・B地点)がやや離れて位置するほかは、ほぼ群集する。

平成6年度は、試掘調査ということで、各古墳状隆起に幅1mの「L」字形のトレンチを四分法で設けて試掘を行った。9地点の古墳状隆起うち、B・H地点では、遺物や埋葬施設を確認できなかった。また、D地点では墳丘の大半が調査区外にあるため、遺物などは確認されなかったが、形状からみて古墳と思われる。残りの6地点(A・C～G・I地点)で埋葬施設と思われる土色の変化や須恵器・土師器などの遺物を確認することができた。出土した遺物には細片が多いが、おおよそ古墳時代後期の築造と思われる。

試掘調査の結果に基づいて、C地点では墳丘と主体部の全面調査を行った。調査の結果、墳頂で主体部1基と土坑1基を確認した。主体部からは須恵器壺が1点出土している。C地点については、他の古墳とともに次年度に合わせて報告することにしたい。

なお、調査地周辺にも同様の古墳状隆起が8基ほど存在することを確認しており、合計15基ほどの古墳群と思われる。

### 3. まとめ

滝谷遺跡で検出された竪穴式住居跡の年代について簡単にまとめておきたい。なお、石ヶ原古墳群については、次年度の調査成果も含めて改めて検討することにする。

S H01から出土した小型丸底土器は、体部最大径が口径を上回っており、神明山古墳前方部出土の<sup>(注6)</sup>それにくらべて、後出的な要素をもつと考えられる。したがって、滝谷遺跡に集落が営まれたのは、神明山古墳の築造時期よりもやや遅れるものとする。一方、竪穴式住居跡からは、須恵器の出土が見られないことから、丹後地方に須恵器が導入される以前と考えられ、集落の時期の下限もここに置くことができよう。

この時期の竪穴式住居跡は丹後地域でもあまり検出されていない。古い段階の須恵器を伴う集落遺跡としては、加悦町有熊遺跡<sup>(注7)</sup>や大宮町谷内遺跡<sup>(注8)</sup>などがあげられるが、古墳時代中期の集落遺跡に限らず、丹後地方の古墳時代の集落遺跡について不明な点が多い。今後の資料の増加に期待したい。

(筒井崇史)

注1 調査参加者は以下のとおりである(順不同・敬称略)

水谷三津男・山倉千代・大村博子・平井輝美・増田 修・西岡洋子・民谷秋子・水谷里栄・水谷昌子・清野孝之・吉岡孝泰・山本香織・新保和恵・西 智宏・岩田英樹・石川 貴・須藤光代・宮崎 歩・岡崎貴文・土田昌人・茂木麻子・水野聡哉・松村和美・伊能佐知子・金保真由美・稲田望子・角正芳浩・北谷見三・草野敦子・妹尾活明・辰巳祥清・谷後恒美・徳本 悟・山下敬子・新井喜代士・上羽 樹・大江千晴・岡崎千代子・岡崎美津江・片西 弘・田畑悟一・民谷慎一郎・民谷千代野・増田茂雄・松岡まつ枝

- 注2 増田孝彦・河野一隆「国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡平成6年度発掘調査概要 1. 黒部製鉄遺跡(石熊地区)平成5年度、5. 黒部製鉄遺跡(仲谷地区)」(『京都府遺跡調査概報』第65冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- 注3 平良泰久ほか「丹後大山墳墓群」(『京都府丹後町文化財調査報告』第1集 丹後町教育委員会) 1983
- 注4 増田孝彦・森 正「丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡昭和61・62年度発掘調査概要 (1)高山古墳群・高山遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第29冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 注5 『丹後國竹野郡誌(新訂版)』 京都府竹野郡役所 1915
- 注6 注3に同じ。
- 注7 家根祥多ほか「有熊遺跡第1・2次発掘調査概報」(『立命館大学文学部学芸員課程研究報告』第3冊 立命館大学文学部) 1991
- 注8 細川康晴「谷内遺跡第4次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第28冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988

付 載

## 滝谷遺跡の花粉化石

鈴木 茂(パレオ・ラボ)

はじめに 京都府丹後町に所在する滝谷遺跡において行われた発掘調査で、遺跡中央部の断割が行われ、土壌試料の採取が行われた。この土壌試料について花粉分析を行い、各層堆積期の調査地周辺の古植生について検討した。

**試料** 花粉分析用試料は、3層準より5試料が採取された(50頁の「試料採集位置図」参照)。1層(試料3)は暗褐色～黒褐色の土壌層で、根状のものが観察され、小さな空隙が散在している。古墳時代遺物包含層である。2層(試料1・5)も暗褐色～黒褐色の土壌層で、小さな空隙が散在している。試料1では炭片が認められ、試料5では根状のものが観察され、やや粘性が高い。この2層が遺構のベースになっている。4層(試料2・4)は黒褐色の土壌層で、やや粘性が高く、小さな空隙が散在している。この4層は黒ボク層と考えられる。

**分析方法** 試料(湿重10～15g)を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%フッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、重液分離(比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離)を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理(無水酢酸9：1濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎)を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフラニンにて染色を施した。

**分析結果** 検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉19、草本花粉11、形態分類で示したシダ植物胞子2の計32である。これら花粉・シダ植物胞子の一覧を「滝谷遺跡産出花粉化石一覧表」に示した。なお、花粉・シダ植物胞子の分布図については省略した(省略者；筒井)。表においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示している。

検鏡の結果、試料1・2については花粉化石の検出数は非常に少なかった。他の試料においては特定の花粉化石がかたよって検出された。すなわち、試料3では草本類のヨモギ

属が非常に多く得られ、イネ科も比較的検出されている。樹木ではスギ属やコナラ属アカガシ亜属などが観察される。試料5では樹木のアカガシ亜属が突出して多く検出された他、クルミ属やコナラ属コナラ亜属なども得られている。試料4においても同様の傾向がみられた他、シイノキ属―マテバシイ属やエノキ属―ムクノキ属などが検出されている。

**遺跡周辺の古植生** 分析を行った土壌試料には小さな空隙がみられるなど、土壌化作用をうけている形跡が認められる。この土壌化作用により多くの花粉化石は影響をうけ、分解作用に弱い分類群の多くは消失してしまっている可能性が高い。したがって、分析結果が当時の植生をそのまま示しているとは考えにくく、注意を要する。以下、遺跡周辺の古植生についてに示す。

4層堆積期(試料2・4)：4層は黒ボク層と考えられるものである。また、本層と同層準と思われる層より縄文時代の石匙が検出されている。この頃の遺跡周辺では、アカガシ亜属やシイノキ属―マテバシイ属などの照葉樹林が成立していたとみられる。また、コナラ亜属やエノキ属―ムクノキ属などの落葉広葉樹林も一部成立していたのであろう。

2層堆積期(試料1・5)：試料5においてはアカガシ亜属が非常に多く得られており、依然として照葉樹林が成立していたものと思われる。また、コナラ亜属を主体とした落葉広葉樹林もみられ、試料1においてはスギ属が検出されており、スギ林も成立していたと予想される。福井県三方町の花粉分析結果をみると、年代測定(約6,000前)が行われた層準からアカガシ亜属が増加し、コナラ亜属やエノキ属―ムクノキ属も増加している。また、スギ属は非常に高い出現率を示している。このように、2及び4層堆積期の当遺跡周辺でもスギ林や照葉樹林が成立しており、落葉広葉樹林も一部にみられたのであろう。

1層堆積期(試料3)：本層は古墳時代遺物包含層である。森林植生については得られた樹木花粉数が少なく不明であるが、産出傾向から遺跡周辺の森林構成要素としては2及び4層堆積期とあまり変わらないものと思われる。草本類ではヨモギ属・イネ科・ナデシコ科・キンボウゲ科・ヨモギ属以外のキク亜科などの雑草類が多く生育していたものと思われる。このように、試料採取地点付近においては遺構や雑草類が多く生育する開けた環境が広がり、そうした周辺にスギ林や照葉樹林などが成立していたものと思われる。

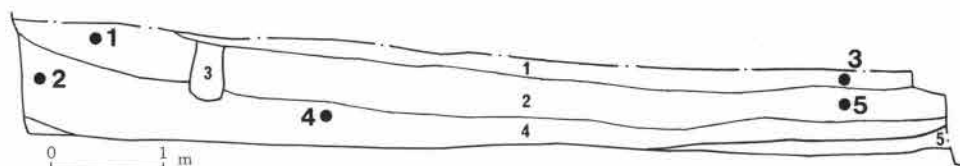
まとめ 遺跡周辺の古植生は、4層堆積期においてはスギ林や照葉樹林が成立しており、落葉広葉樹林も一部にみられたのであろう。2層堆積期においてもほぼ同様の植生であったと思われる。1層堆積期になると、遺跡周辺では遺構の検出状況から古代人の活動が活発となったと思われ、森林の一部は開かれ、雑草類が多くなったのであろう。この森林はスギ林や照葉樹林が主体で、2及び4層の頃と同様であったと推測される。

(付載中の文章・図は、筒井が編集及び一部変更した。なお参考文献は省略した。)

滝谷遺跡産出花粉化石一覧表

和名	学名	試			料	
		3	1	5	4	2
樹木						
ツガ属	Tsuga	1	-	-	-	-
マツ属複雑維管束亜属	Pinus subgen. Diploxylon	-	-	1	-	-
マツ属 (不明)	Pinus (Unknown)	-	1	-	-	-
コウヤマキ属	Sciadopitys	2	-	-	-	-
スギ属	Cryptomeria	4	7	1	3	1
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	T. - C.	-	-	-	1	-
クルミ属	Juglans	-	-	5	9	-
クマシデ属-アサダ属	Carpinus - Ostrya	-	-	1	1	1
カバノキ属	Betula	-	-	1	-	-
ハンノキ属	Alnus	-	-	1	-	-
コナラ属コナラ亜属	Quercus subgen. Lepidobalanus	2	-	11	13	1
コナラ属アカガシ亜属	Quercus subgen. Cyclobalanopsis	4	3	306	186	-
クリ属	Castanea	-	-	1	-	-
シイノキ属-マテバシイ属	Castanopsis - Pasania	-	1	1	9	-
ニレ属-ケヤキ属	Ulmus - Zelkova	-	1	-	2	1
エノキ属-ムクノキ属	Celtis - Aphananthe	-	-	2	12	-
サンショウ属	Zanthoxylum	-	-	1	1	-
カエデ属	Acer	-	-	-	1	-
イボタノキ属	Ligustrum	1	1	-	-	-
草本						
イネ科	Gramineae	36	1	5	4	-
カヤツリグサ科	Cyperaceae	1	-	-	-	-
クワ科	Moraceae	2	-	-	1	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節	Polygonum sect. Persicaria- Echinocaulon	1	-	-	-	-
ナデシコ科	Caryophyllaceae	4	-	-	-	-
キンボウゲ科	Ranunculaceae	7	-	1	-	-
アブラナ科	Crusiferae	1	1	-	-	1
マメ科	Leguminosae	-	-	-	2	-
ヨモギ属	Artemisia	149	-	2	3	2
他のキク亜科	other Tubuliflorae	6	1	-	1	-
タンポポ亜科	Liguliflorae	1	-	-	-	-
シダ植物						
単条型孢子	Monolete spore	48	59	2	14	18
三条型孢子	Trilete spore	46	36	-	11	-
樹木花粉						
樹木花粉	Arboreal pollen	14	14	332	238	4
草本花粉						
草本花粉	Nonarboreal pollen	208	3	8	11	3
シダ植物孢子	Spores	94	95	2	25	18
花粉・孢子総数	Total Pollen & Spores	316	112	342	274	25
不明花粉	Unknown pollen	28	9	7	28	0

T. - C. はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す



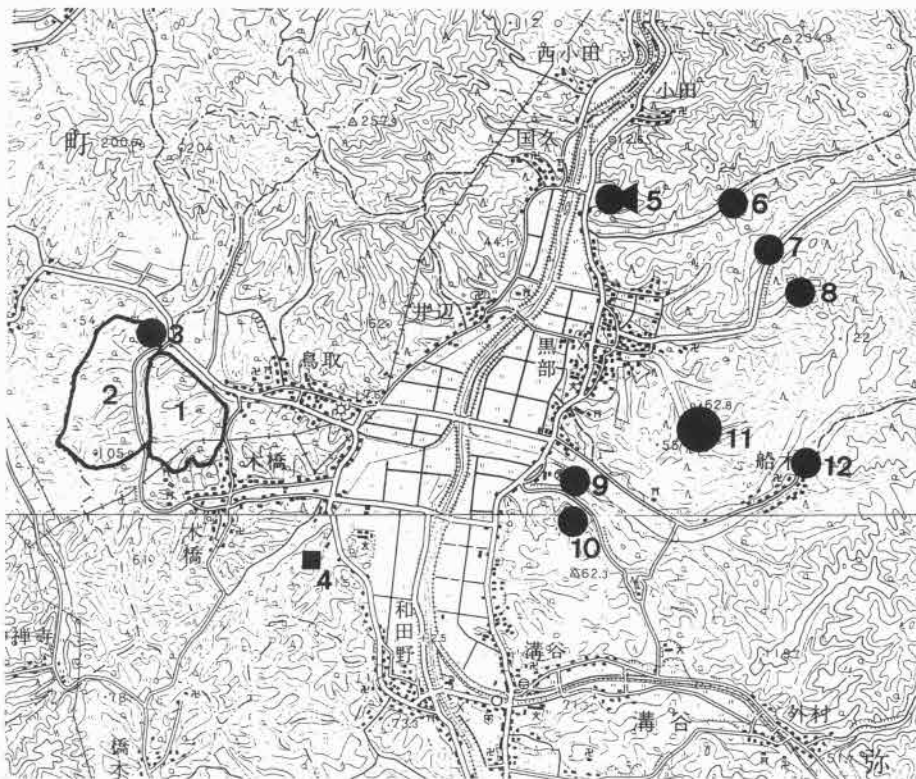
試料採集位置図

## 2. 丹後あじわいの郷関係遺跡平成6年度発掘調査概要

### はじめに

この調査は、京都府農林水産部園芸経済課が計画・推進している「丹後あじわいの郷」整備事業に伴い、社団法人京都府農業開発公社の依頼を受けて、実施した。

「丹後あじわいの郷」関係遺跡は、竹野郡弥栄町字鳥取・木橋に所在し、古代製鉄遺跡として脚光を浴びた遠所遺跡群の東隣りに位置する。平成4年度に京都府教育委員会と弥栄町教育委員会が分布調査を実施し、その成果をもとに当調査研究センターでは平成4～6年度にかけて試掘ならびに発掘調査を実施した。その結果、8世紀後半～9世紀にかけての製鉄関連遺構の存在を確認し、当時の製鉄遺跡であったことが明らかとなった。<sup>(注1)</sup>



第36図 調査地位置図及び周辺遺跡分布図(1/50,000)

- |            |           |          |           |            |
|------------|-----------|----------|-----------|------------|
| 1. ニゴレ遺跡   | 2. 遠所遺跡群  | 3. ニゴレ古墳 | 4. オテジ谷古墳 | 5. 黒部銚子山古墳 |
| 6. 福谷遺跡    | 7. 金谷遺跡   | 8. かせ谷遺跡 | 9. 奈良遺跡   | 10. 奈良岡遺跡  |
| 11. 黒部製鉄遺跡 | 12. 船木A遺跡 |          |           |            |



今年度の調査は、平成6年4月18日から平成7年2月24日まで行い、調査面積は、約5,700m<sup>2</sup>であった。現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第1係長伊野近富、同主任調査員増田孝彦、同調査員岡崎研一が担当し、概報執筆は岡崎研一が行った。また、調査期間中は、地元有志の方々や学生諸氏には、作業員及び調査補助員、整理員として作業に従事していただいた<sup>(注2)</sup>。調査を行うにあたっては、弥栄町教育委員会をはじめ、関係諸機関や地元の方々にも多大な御協力を賜った。ここに記して感謝の意を表したい。

なお、調査にかかる経費は、全額社団法人京都府農業開発公社が負担した。

## 位置と環境

京都府北部にあたる丹後半島では、半島部を縦断する形で、竹野川が北流している。今回調査を行ったニゴレ遺跡や鳥取峠1号墳が位置する弥栄町は、半島のほぼ中央にあたり、遺跡は町の北西部、竹野川の中流域の西岸約2kmの網野町と弥栄町の町界付近に所在する。

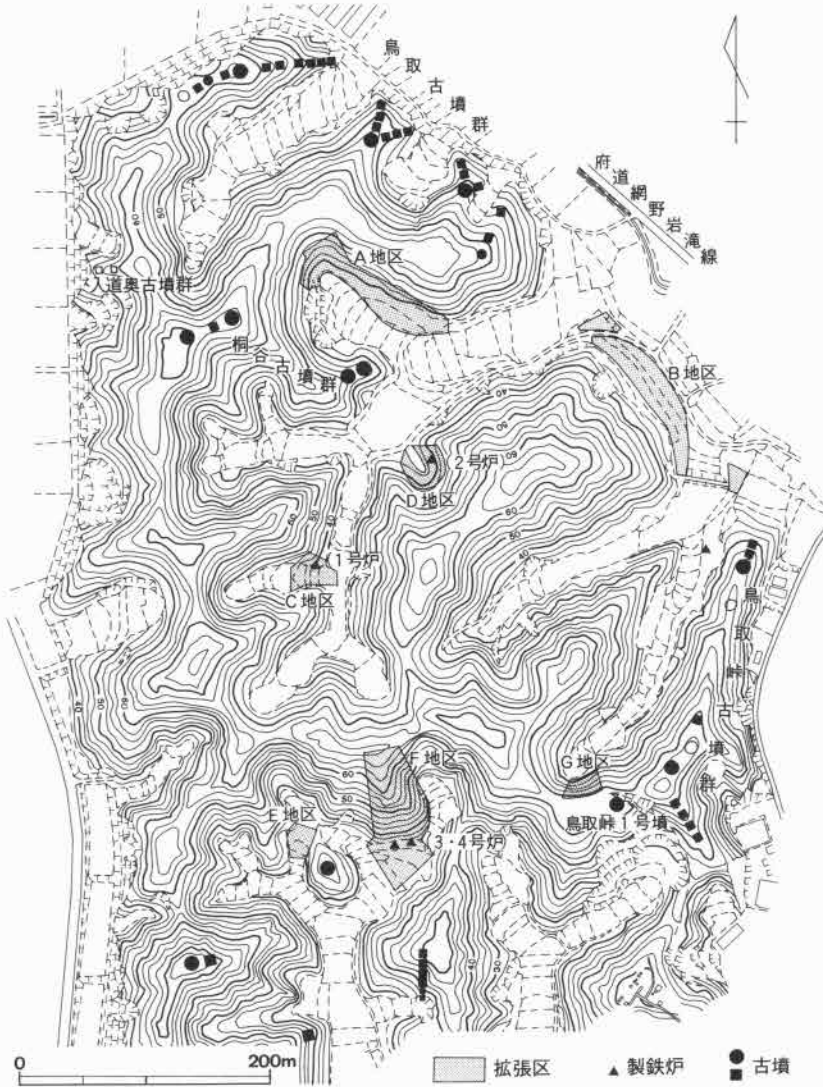
この付近の顕著な製鉄遺跡としては、6世紀後半と8世紀後半に操業した遠所遺跡群がある<sup>(注3)</sup>。6世紀後半の製鉄炉の発見と、8世紀後半には製鉄から鍛冶段階まで一貫して行われていたことは、この地域の歴史ならびに製鉄史に大きな波紋を起こした。この遺跡の調査がきっかけとなって、対岸である竹野川東岸でも、製鉄関連遺構が確認されてきた。それは、8世紀中頃～10世紀にかけて操業されたと考えられていた黒部製鉄遺跡であって、ここから平面形態が登り窯状を呈する炭窯と製鉄炉が発見されている<sup>(注4)</sup>。このように、町内の各所から製鉄に関連した遺構が徐々に確認されつつある中で、今回のニゴレ遺跡の調査となった。

昨年度までの調査成果としては、製鉄炉5基(そのうち2か所は今年度本調査、他の1か所は調査地外)と、炭窯や住居跡など多くの遺構を検出し、これらが8世紀後半以降の操業・築造と考えられるに至った。これは、隣接する遠所遺跡群の最盛期後に操業が開始されたことを物語っている。製鉄遺跡としては、遠所遺跡群もニゴレ遺跡も一つの遺跡として捉えることができ、時代ごとに工人が移動し、操業したことが推察される。なお、今年度の調査地である弥栄町字木橋には、小字ニゴレは存在しないが、上記のような遺跡内容から、木橋側においても同遺跡とみなして、ニゴレ遺跡と呼称した。

## (1) ニゴレ遺跡

### 1. はじめに

調査としては、鳥取側で3か所(B・H・I地区)と木橋側で3か所(E・F・G地区)の計6か所で実施した。今回は、上記調査区と昨年度に調査を行ったC・D地区を含めた8地区の内、顕著な遺構を検出した地区の概要ならびに成果を報告する。



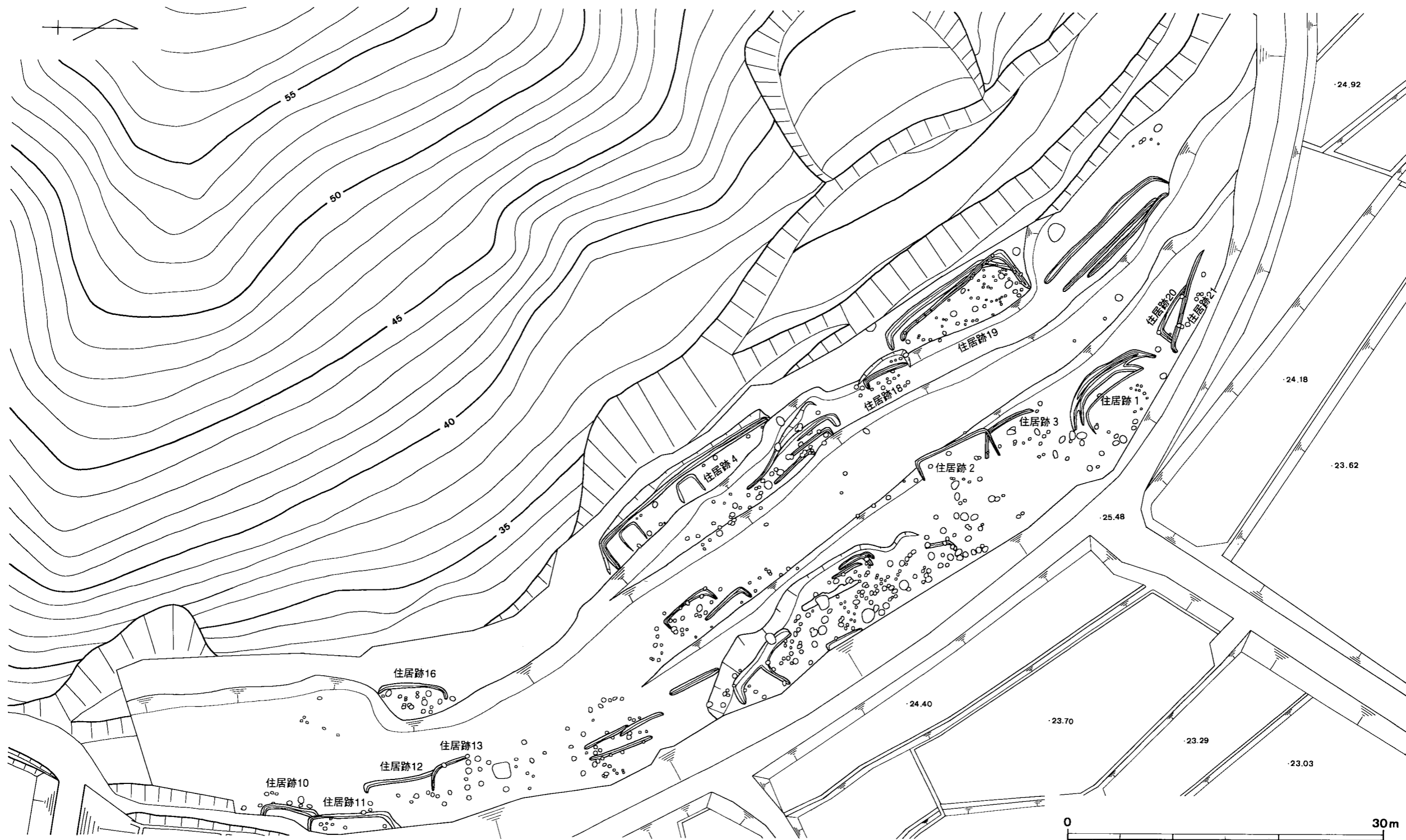
第37図 調査地配置図

## 2. B地区

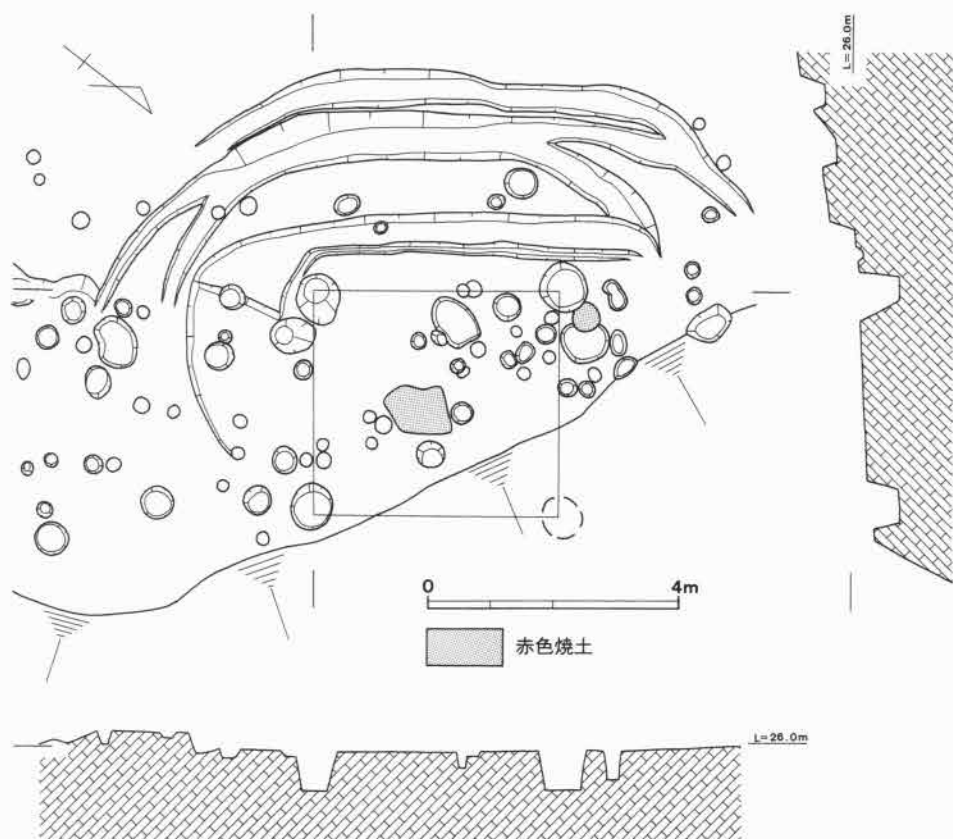
この地区は、「丹後あじわいの郷」予定地の北東部に位置する。この地は、北東方向に派生する低丘陵端部の微高地にあたり、階段状地形をなしている。昨年度の調査の結果、住居跡21基と多数の柱穴を検出した。また、この地形は、山手を「L」字状に掘った住居跡が横並びしていることや、後世の畑地利用によって、一部遺構を削平していることも確認している。以下、主な遺構の概要を説明する。

**住居跡1** B地区北側に5基ほどの住居跡が密集していたうちの1基である。山手側に幅50～80cm・深さ約20cmの溝をめぐらし、その内側を整地して営まれていたと思われる。B地区裾をめぐる農道を付ける際と、後世の畑地の耕作によって、かなりの削平を受けていた。溝の検出状況から、1～2回の修築が行われたと考えられるが、これらの溝で囲まれた内側からは径約80cm・深さ約60cmを測る柱穴を3か所で確認した。柱穴間の距離は、3.6m×3.9mを測り、残りの柱穴1か所については農道にかかるため、削平されてしまったものと考えられる。これらの柱穴のほぼ中央から、70cm×100cmの範囲で赤色に焼けているところを確認した。柱穴の掘形が非常に大きいことや中央に焼土が位置することから、鍛冶炉ではないかと考え、焼土周辺の土を採取し、湯玉や鍛造剥片の混入が認められないか土を水洗いした。その結果、湯玉や鍛造剥片は確認できず、また周辺から椀形滓の出土も見られないことから、この焼土が鍛冶炉であったと断定するには至らなかった。しかし、遠所遺跡群で検出した鍛冶炉本体は、生活面の一画に径約30cmの窪みをつくり椀状に粘土を貼り付けて操業されていたため、内側は非常に固く焼けしまっており、その周囲が赤色に焼けた状況で確認されている。今回確認した焼土は、固く焼けしまった粘土の周囲にできる赤色の焼土にあたるものではないかと思われ、住居跡の生活面下(湯玉ないし鍛造剥片のあった面の下層)まで削平を受けていた可能性もある。このように考えると、今回確認した焼土は、鍛冶炉として断定はできないものの、その可能性は非常に高いものと考えられる。谷奥で精製された鉄は谷の口部にまで運ばれ、住居の密集する一画で製錬や鍛錬過程が行われたと思われる。この住居跡は、このような作業が行われた工房跡の可能性があると考える。

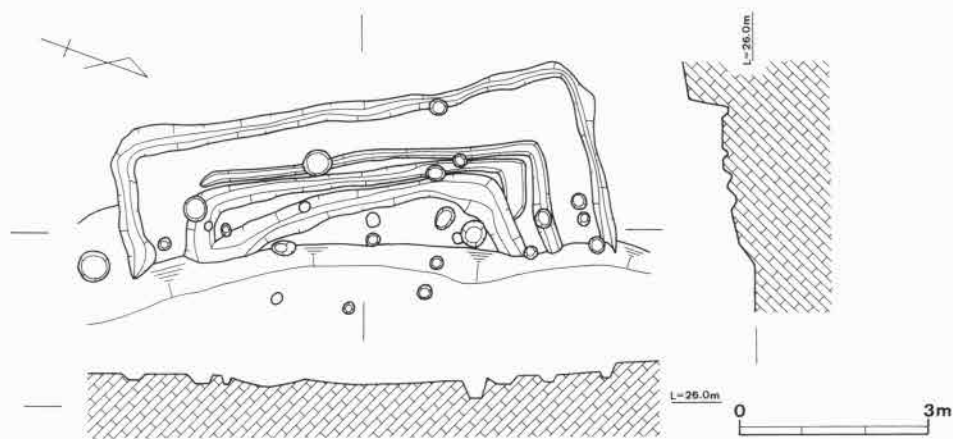
**住居跡2** この住居跡は、後世に畑地をつくる際に、その半分が削平を受けていた。検出状況から方形または長方形の住居跡と思われた。この住居跡に伴うと思われた遺構には、「コ」字あるいは「L」字状にめぐる溝3条がある。一辺7mを測る溝の内側に一辺5mを測る溝がめぐっていた。内側をめぐる溝は、一度修築された形跡があり、その内側に住居跡に伴う柱穴があると思われたが、後世の削平によって失われており、その全容を知るには至らなかった。この住居跡や住居跡1では、いずれも生活をしていただの外周にも溝



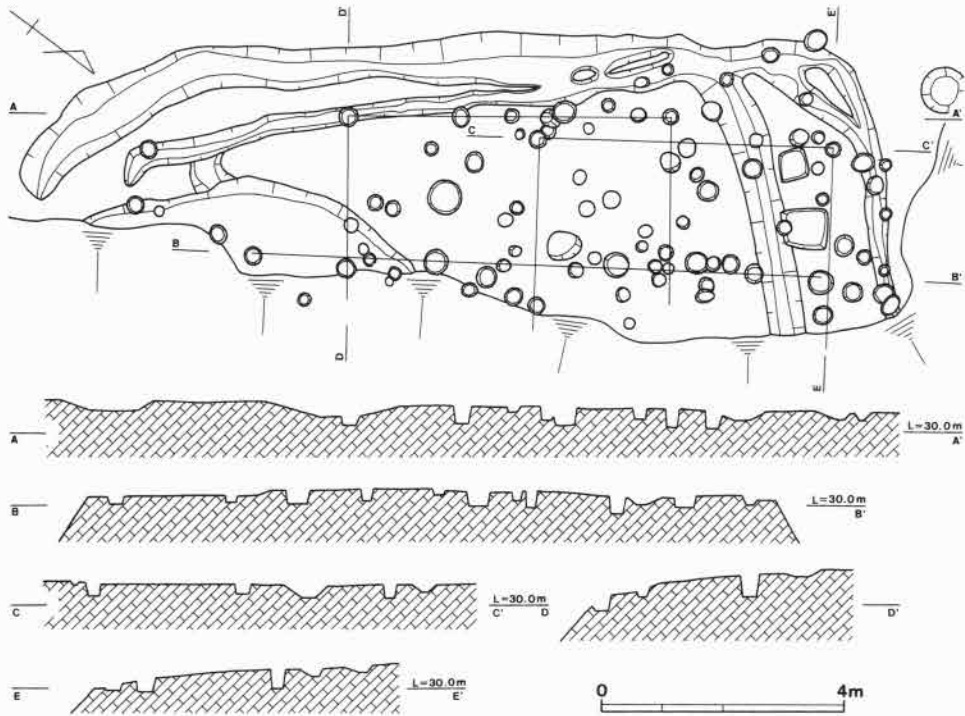
第38图 B地区遺構配置图



第39図 住居跡1実測図



第40図 住居跡2実測図



第41図 住居跡19実測図

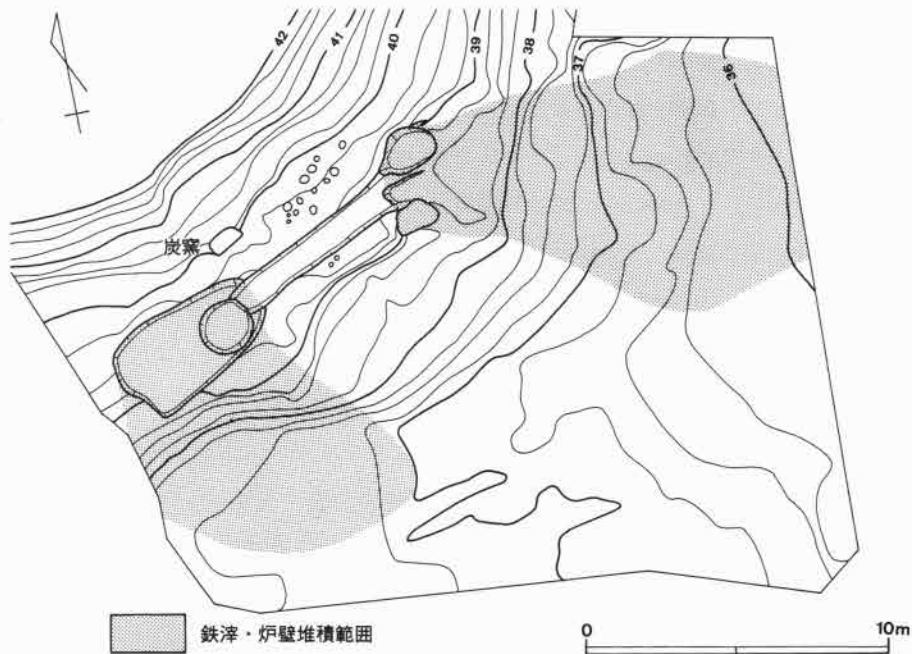
をめぐらせている。住居跡1では長楕円状に溝を設け、住居跡2では「コ」字状にめぐらしていた。検出状況から一周はせず、山手のみ施された排水溝と考えられる。このような住居跡は、この地区ではこの2基だけである。

住居跡19 B地区山手で検出した住居跡である。このあたりでは、柱穴が非常に多く確認されたのに対して、前面の下段には柱穴が見られなかった。このことは、住居跡1・2が位置するあたりまで、この平坦地が張り出していたことを示している。このように、後世の削平がかなり行われたところであるため、住居跡の全容については不明であるが、溝2条、1間×3間の建物跡、1間×2間の建物跡、柵列などを検出することができた。溝は、「コ」字状にめぐっていたと思われ、1・2度修築されており、いずれも一辺約11mを測る大規模なものであった。溝の内側に数回にわたって建物跡が構築されたものと思われる。ここは、唯一建物跡を確認することのできたところであり、前面には鍛冶工房跡と考えられる住居跡1があることから、ここはその材料置き場であったのかもしれない。

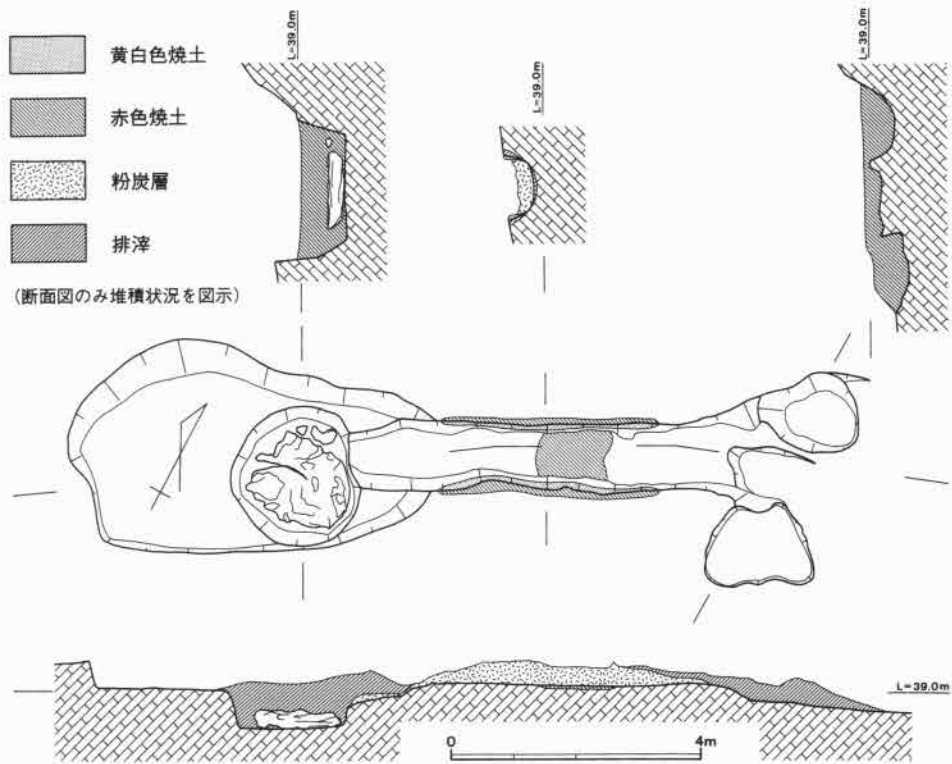
### 3. C地区

B地区西側を南西方向に「く」の字状に入り込む大きな谷筋がある。C地区は、この谷

筋の最奥付近に位置する。昨年度の調査の結果、製鉄炉1基を検出し、ニゴレ1号炉とした。この製鉄炉は、B地区からの谷筋と枝分かれする小さな谷との角地に築かれ、谷部から多量の鉄滓を検出した。丘陵裾部の舌状に張り出した平坦地のほぼ中央に東西方向の製鉄炉が築かれていたようである。炉の本体がすでになく、断面「U」字状の細長い基底部を残した状況で検出された。基底部の規模は、全長約4.5m・幅約1m・深さ約50cmを測る。基底部中央の壁には火を受けた痕跡があり、基底部内には細かい炭が詰まっていた。これらの状況及び隣接する遠所遺跡群などの調査例から、ニゴレ1号炉は等高線と平行に築かれた箱形炉であり、火の痕跡や粉状の炭を確認した基底部は、防水施設として炉本体を構築する前に設けられたと思われる。炉の西側では、5m×3.3mを測る長楕円形の土坑と1.9m×2.1mの土坑を重複した形で確認した。土坑内から多量の鉄滓が出土したことから、炉を操業する際に鉄滓を廃棄する排滓坑であることを確認した。また、2基の排滓坑の検出は、炉の操業回数を示すと思われる、少なくとも2回以上の操業が行われたと考えられる。炉の東側では、断面「U」字状の溝が炉端部から谷側に設けられており、鉄滓を谷部に捨てるための排滓溝であることがわかった。製鉄炉の左右から掻き出された鉄滓は、谷部に堆積していた。谷部の堆積状況を見ると、深いところで約1mの鉄滓が堆積していた。また、断面観察の結果、鉄滓が多量に入る層は、2層からなっており、排滓坑から見た操業回数を裏付けることができた。



第42図 ニゴレ1号炉地形図



第43図 ニゴレ1号炉実測図

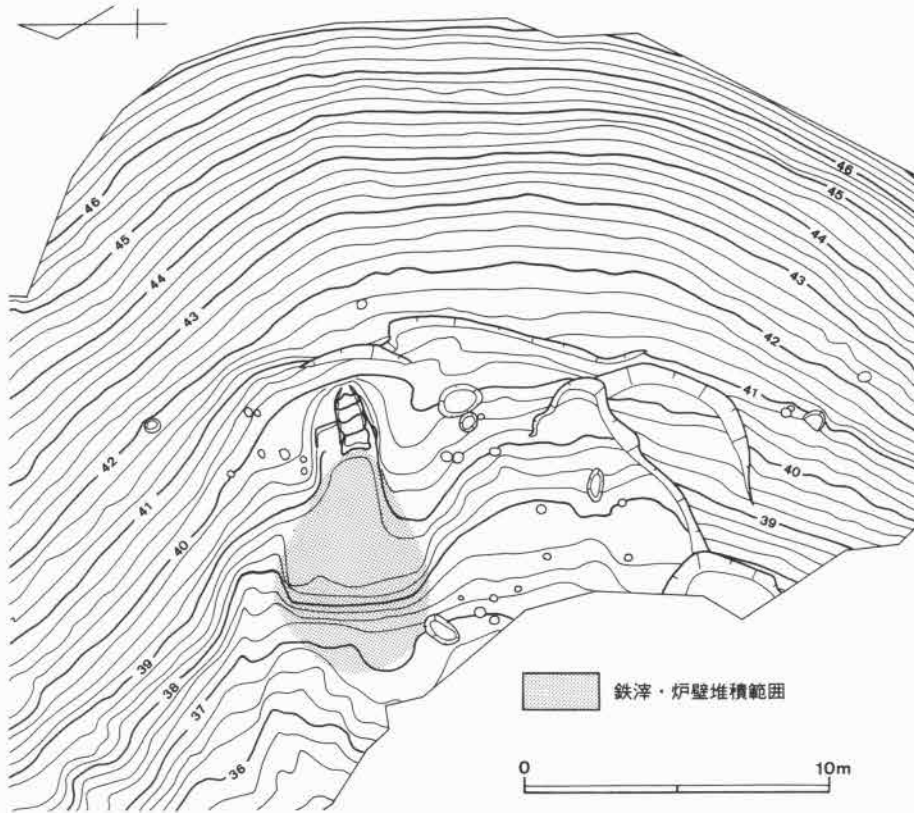
製鉄炉廃絶後に、炉から北西約2mの丘陵斜面に小型の炭窯が築かれる。この炭窯は、非常に残りが悪く、規模を確認できなかったが、炭窯に伴う土器が1号炉の基底部上面に転落していたのを確認した。このような状況及び転落した土器の形態から、炭窯は10世紀前半の操業であり、1号炉はそれ以前の操業とわかった。谷部の鉄滓の堆積層の下から出土する土器片を見る限り、1号炉の操業時期は8世紀にまでさかのぼるとは考えがたい。

#### 4. D地区

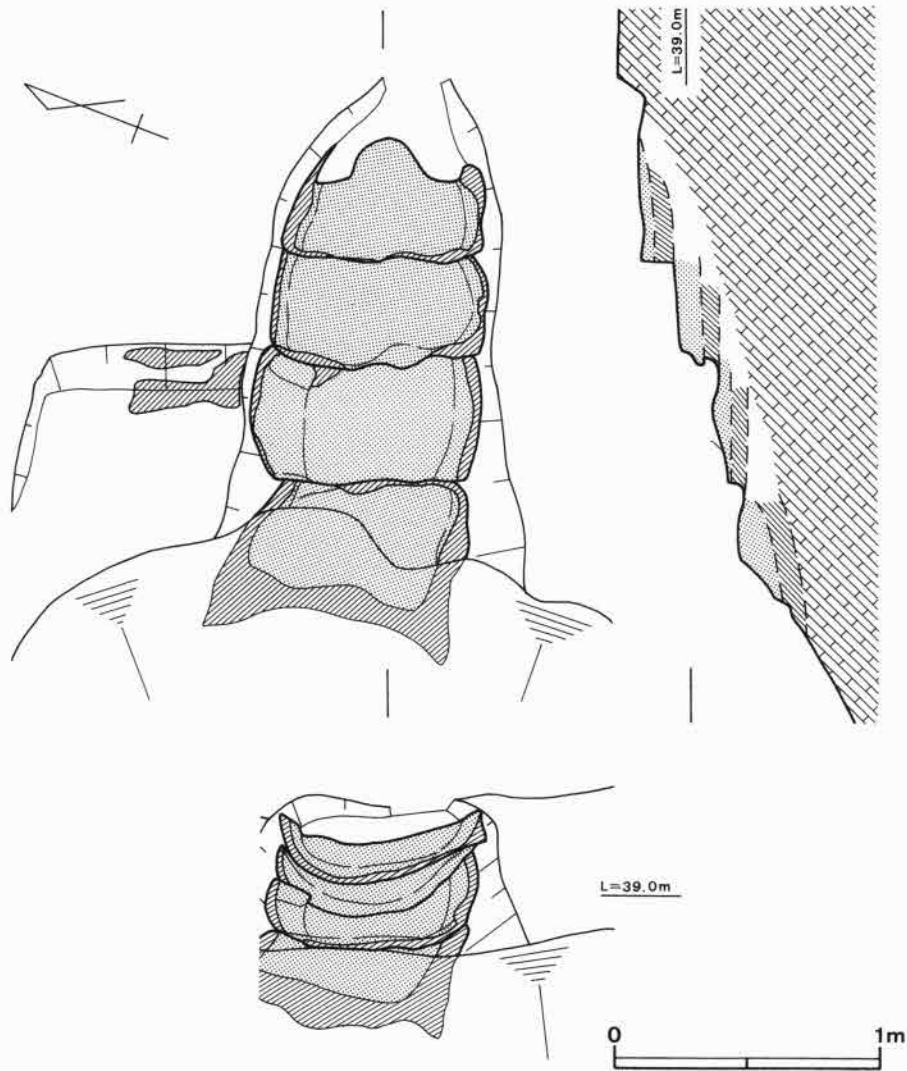
B地区西側から「く」字状に入り込む谷筋の屈曲部、B地区とC地区のほぼ中間で小さな谷地形をなすところに、D地区が位置する。この谷部に面した丘陵斜面中位では、製鉄炉1基を検出している。製鉄炉は、斜面の比較的ゆるやかな場所に築かれており、下方に鉄滓を掻き出し、谷部に堆積していた。このように製鉄炉の位置及び排滓状況は、1号炉とは大きく異なっていた。掘削作業の結果、小型の製鉄炉を検出することができた。この製鉄炉は、一辺または径が70~80cmを測る小型のもので、数回にわたって築き直していた。製鉄炉は、徐々に山手側にずらしながら築造されており、炉床が階段状になった状況を検



出した。明確な炉床は4面あり、この階段状の炉床から山手に約1mのところからも焼土を確認することができた。このような検出状況からみて、最低5回の炉の構築ならびに操業が行われたと考える。これら5回操業された製鉄炉をまとめて、ニゴレ2号炉とした。この製鉄炉を1号炉と比較すると、炉の規模だけでなく、炉本体を構築する前に設けられる基底部分が2号炉には存在しない。2号炉では、炉を構築する際に廃棄した炉床に半分かかるように次の製鉄炉が構築されており、言わば前回の製鉄炉の炉床が基底部の役割をするように構築されていた。このような製鉄炉は、6世紀後半と8世紀後半に操業していた遠所遺跡群では見られなかった形態で、丹後半島では黒部製鉄遺跡で見つかったにすぎない<sup>(注5)</sup>。これに加えて、9世紀に操業したと考えられる1号炉や、その付近で見つかった10世紀前半操業の炭窯などの存在を考えると、このような基底部をもたない小型の製鉄炉は、従来の溝状の基底部をもつ箱形炉が衰退した頃に出現した炉の形態と考えるのが自然であろう。さらに、ニゴレ遺跡内で10世紀前半まで炭作りを行っていた事実は、この炭が2号炉に使用されていた可能性もある。また、4面の炉床の西側地山で、二筋の焼土



第44図 ニゴレ2号炉地形図



第45図 ニゴレ2号炉実測図

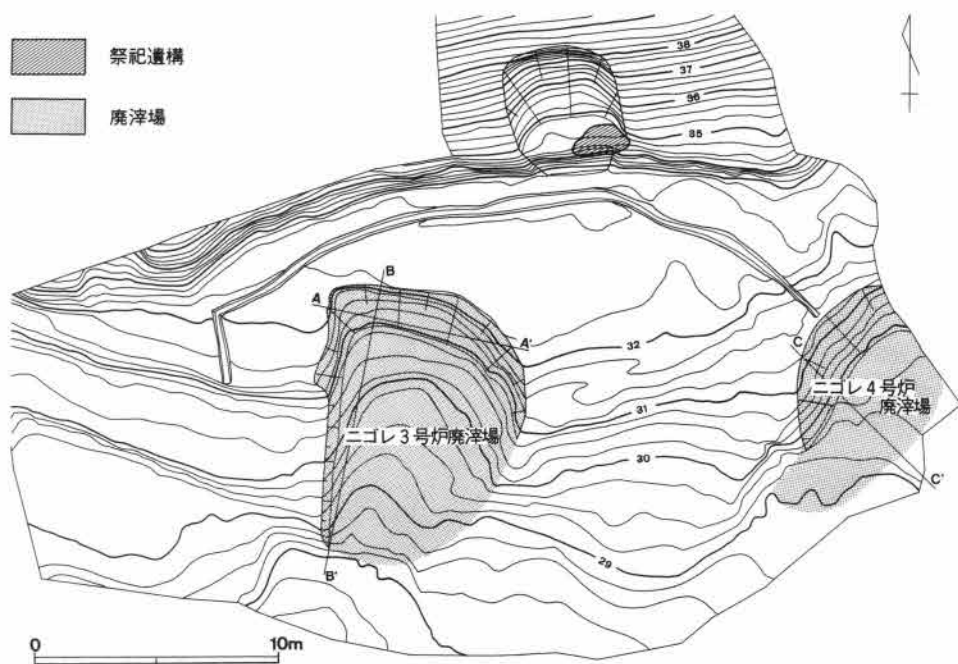
を確認した。これは、地山が焼けていないところに、炉とフィゴとをつなぐ送風管があり、その周囲が熱を受けたために焼土となったと思われる。このことから、フィゴは製鉄炉の西側に設けられていたと思われるが、フィゴそのものを確認することはできなかった。

## 5. F地区

昨年度の試掘調査の際に、丘陵裾部から鉄滓の堆積層を確認したことから、この地区を設定し調査を行った。調査の結果、製鉄炉本体は後世の削平で存在しなかったが、排滓場2か所と祭祀的な要素の濃い遺構1基を確認した。このことから、西側にある排滓場に伴

うと考えられる製鉄炉をニゴレ3号炉、東側のものを4号炉とした。

ニゴレ3号炉廃滓場 廃滓場の規模は、幅約7m・長さ約8m・深さ約2.8mを測る大規模なもので、丘陵裾部のわずかな平坦地から谷部にかけて掘り込まれていた。地形からみて、作業前に人為的に掘削されたものと考えられ、堆積状況から廃滓場の北東部に製鉄炉が築かれていたと想定された。廃滓場の堆積状況は、炭層と炉壁・炉底滓・鉄滓の層と流土の互層が認められ、この点からすれば、少なくとも2回以上の作業が行われたと考えられる。また、炉壁や炉底滓、鉄滓の出土量が多量であることから、溝状の下部構造を持つ箱形炉であると考えられるが、下部構造も存在しなかった。しかし、出土した炉底滓の形から、炉の平面形は長方形で、短辺の内法が約56cmであることが確認でき、さらに4か所に送風口をもつ炉壁や長さ約130cmを測る炉壁の出土によって、ニゴレ3号炉は箱形炉であったことを裏付けることができた。この廃滓場から出土した炉壁や炉底滓は、非常に残りがよく、当時の製鉄炉の構造を知る上で貴重な資料を得られたと<sup>(注6)</sup>考えている。中でも4か所に送風口をもつ炉壁には、送風口下約16cmのところにも直径8cm程度の穴を設けていた。送風口の穴は、壁の外側から内側に炉底に向けてあけられていたが、送風口下の穴は逆に炉壁の外側の方が下がるようにあけられていた。このことから、送風口下の穴は排滓穴であったと考えられる。廃滓場がかなり大規模であることや、廃滓量から考えると、この穴は補助用の排滓穴と考えられる。

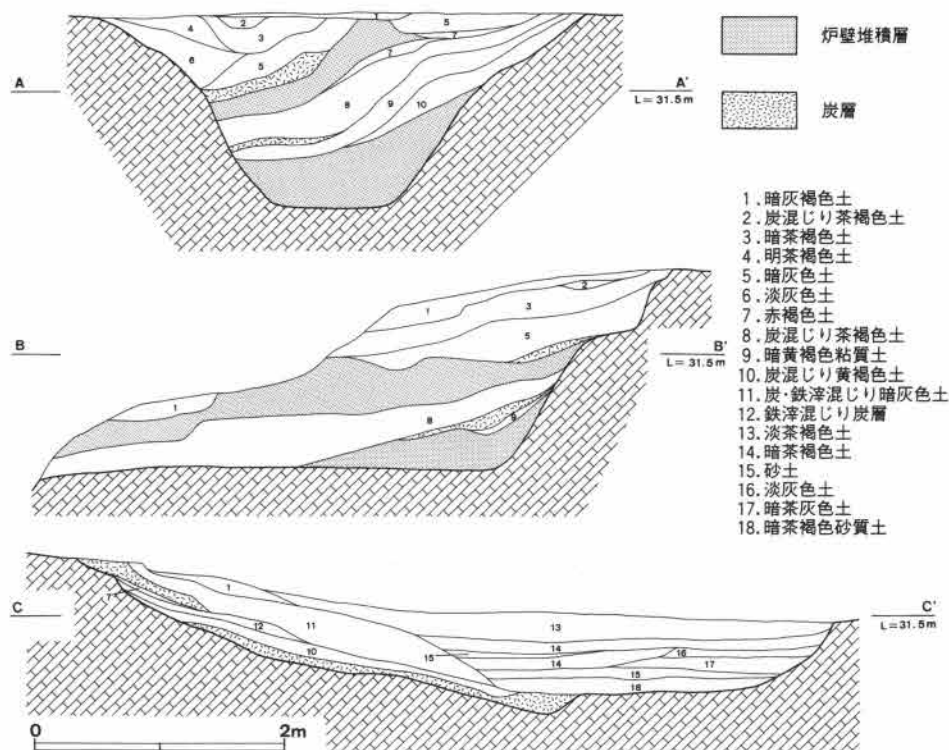


第46図 ニゴレ3・4号炉地形図

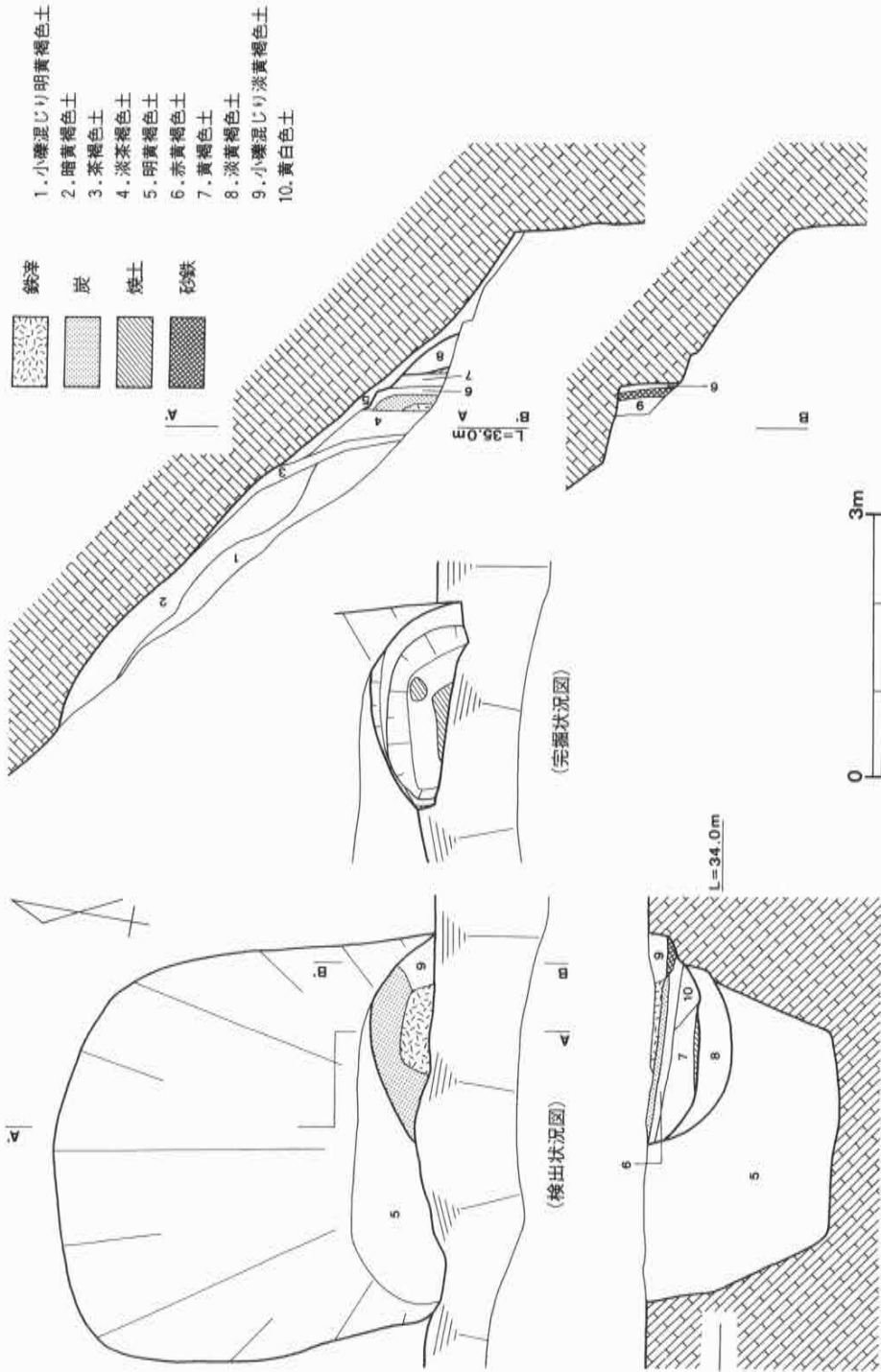
C地区で確認しているニゴレ1号炉も箱形炉であり、一方向に排滓溝を、他方には排滓穴を設けて排滓しながら操業していたと考えられる。さらに、3号炉に伴う廃滓場も1か所であることから、これも同形態の製鉄炉であったと想定される。また、遠所遺跡群では二方向に排滓溝を設ける炉も確認されている。このように、排滓形態が異なることによって、補助用の排滓穴が設けられたのか、今後の類例を待って考えたい。

**ニゴレ4号炉廃滓場** 3号炉の廃滓場から東方約9mの平地地から谷部の範囲で鉄滓の堆積を確認した。その規模は、幅約6m・深さ約1.5mを測る。3号炉の廃滓場と異なり、人為的に掘り込まれた形跡はなく、炉壁や鉄滓の出土量もかなり少なかった。この状況は、D地区のニゴレ2号炉と類似しており、推定4号炉は、小型の製鉄炉の可能性が高い。いずれにせよ、4号炉はすでに削平されて、確認されなかったので、炉の形態については現在のところ不明であるが、今後の炉壁や炉底滓の整理から裏付けられると期待している。

**出土遺物** ニゴレ3・4号炉の廃滓場からの流土や、後世の削平時の二次堆積土から須恵器・土師器・木製品などが出土した。時期のわかるものは数点の須恵器片があり、その形態から、8世紀後半と9世紀末から10世紀初頭の二時期に分けられた。出土状況から、3号炉は8世紀後半の操業と、4号炉は9世紀末から10世紀初頭の操業とそれぞれ考えら



第47図 ニゴレ3・4号炉廃滓場堆積断面図



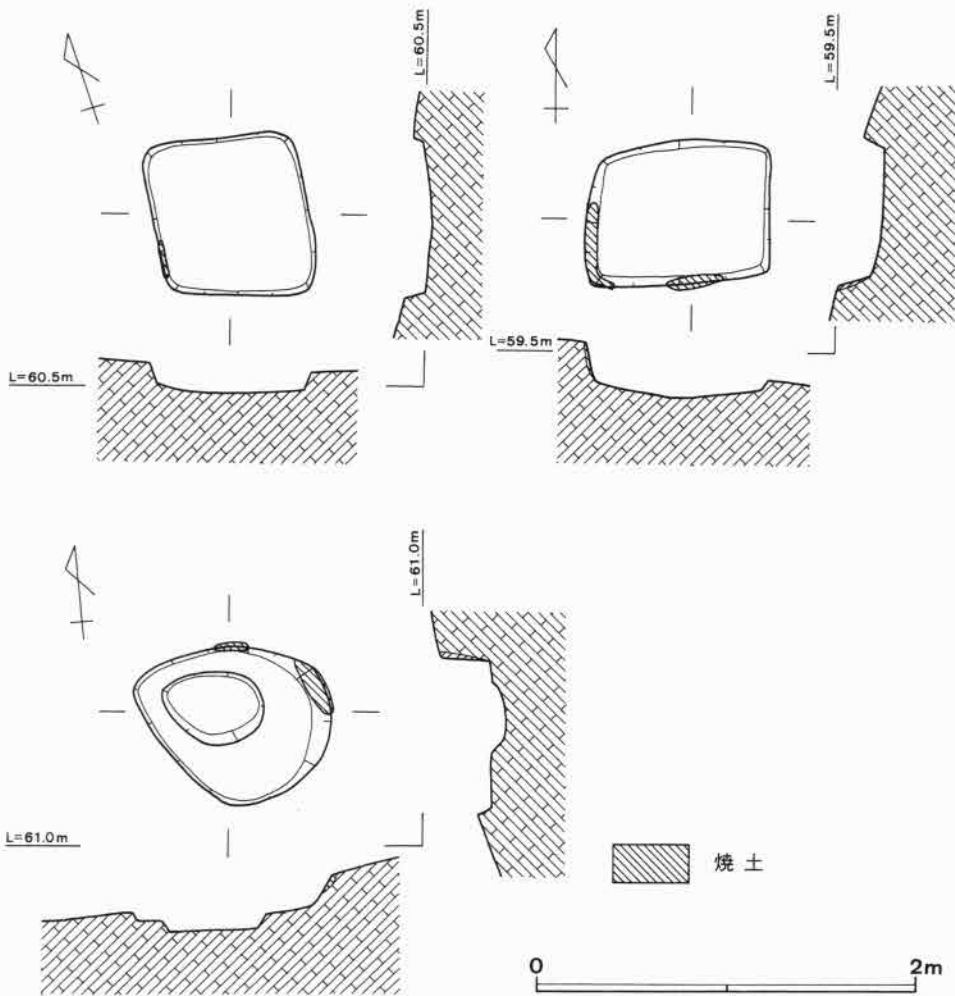
第48図 祭祀遺構実測図

れる。また、木製品は、4号製鉄炉に伴うものと考えられ、形態はしゃもじ状であるが、いずれも工具として使用されたもので、炉壁を構築するなどの際に使用されたと考えられる。

**祭祀遺構** ニゴレ3号炉推定地の山手側で検出した。どのような要因で掘られたか不明ではあるが、幅約4.2m・深さ約2.2mを測る土坑があり、祭祀遺構はこの大きな土坑が埋まった後に築かれていた。検出した時は、後世の削平ですでに半壊状態であった。遺構は、幅約2.4m・深さ約1mを測る土坑で、その底にはわずかな赤色の焼土が認められ、上面には炭が敷かれ、その上には鉄滓や鉄塊状遺物が堆積していた。また、土坑東端からは砂鉄の層を確認した。このような検出状況から、製鉄を行う際の材料置き場の一端とも思われたが、炭層の上から、製鉄を行う際の副産物である鉄滓や鉄塊状遺物が出土したことから、原料置き場にはならないと考えた。調査を進めるにしたがって、この遺構は2段土坑で、下段の底が赤色に焼けていることがわかった。また、土坑上段に炭と原料である砂鉄が分けて敷かれており、鉄滓や鉄塊状遺物は炭の上のみ蒔いた状態で出土した。炭層は、木炭を細かく砕いており、多量の砂鉄を混ぜていることが採取した土の水洗いによりわかった。また、遺構検出時には円形または楕円形と思われたが、土坑を完掘した結果、隅丸の方形または長方形の土坑であった可能性もある。いずれにせよ、このような形態の土坑や堆積状況から、下部構造をもつ製鉄炉を模したミニチュアの遺構と考えられた。土坑底以外では、焼土は認められなかった。それにもかかわらず、鉄滓や鉄塊状遺物の出土は、小型の製鉄炉と考えるよりも、製鉄に必要なとされるものやその副産物を置いたところであり、炉を操業するにあたっての祭祀的な行事が行われた場と考えた。祭祀土器は出土していないが、このような検出状況から、祭祀遺構としてとりあげた。

## 6. G地区

この地区は、「丹後あじわいの郷」造成予定地の南東部にあって、鳥取と木橋の字界付近の丘陵頂部から北側斜面にかけてのところに位置する。昨年度の試掘調査時に、3か所で炭の散布が認められたことから、今回の調査に至っている。調査の結果、小型の炭窯3基を検出することができた。2基は、一辺0.7～1mの方形の炭窯で、1基は不整形な炭窯であった。炭を取り出す時や後世の流失によって、窯の上部構造は不明であるが、地面をわずかに掘り込み、薪を立てて粘土で覆って蒸し焼きしたものと思われる。このような小型の炭窯は、遠所遺跡群では最も多く確認されており、製鉄をするにあたって築かれたものと考えられている。この遺跡の中で丘陵裾部(A地区)や標高約60mを測る高所(G地区)に小型炭窯が存在することは、調査地外となった緑地帯にも数多くの炭窯が存在することを示している。製鉄を行うに際しては、多量の炭が必要とされることから、あるいは



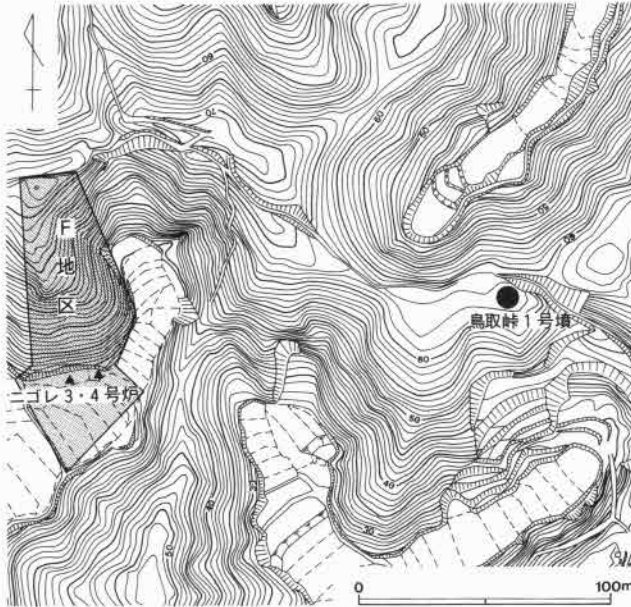
第49図 小型炭窯実測図

平面形が登り窯形態を示す炭窯も存在する可能性がある。

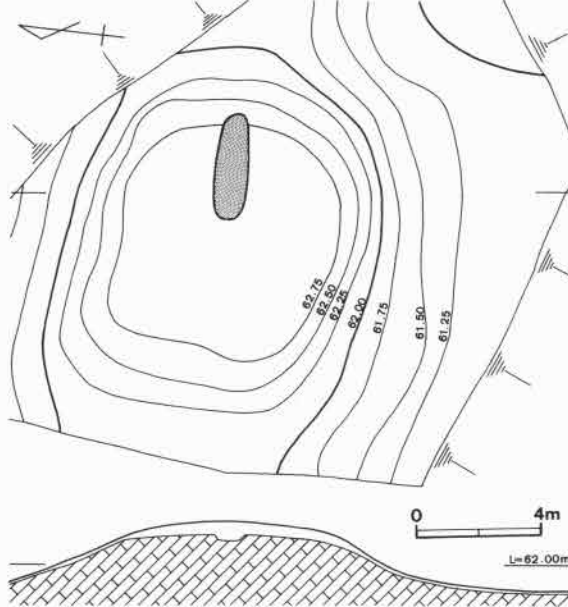
## 7. まとめ

今回と以前の調査成果と合わせると「丹後あじわいの郷」造成予定地内から、2基の製鉄炉と廃滓場3か所(内廃滓場1か所は調査地外)を確認することができ、5か所で製鉄が行われていたことが明らかとなった。いずれも製鉄炉本体の残りは悪いが、1・3号炉の廃滓場は非常に残りがよく、8世紀後半の製鉄炉の構造を知る上で炉壁や炉底滓など、貴重な資料が得られた。これらの資料は、来年度に整理する予定である。また、2号炉の発見は、製鉄炉の形態の変遷を知る上で重要な遺構と考えられ、遠所遺跡群で確認されている製鉄炉を含めて、丹後地域の古代製鉄史上欠くことのできない製鉄炉と思われる。

(2) 鳥取峠1号墳



第50図 鳥取峠1号墳位置図



第51図 鳥取峠1号墳墳丘測量図

1. 位置と調査に至る経過

鳥取峠1号墳は、「丹後あじわいの郷」造成地の南東部に位置し、鳥取と木橋の字界付近の丘陵尾根筋上に所在する。ここは、標高が約62mと高所にあたり、鳥取や木橋の集落を見渡すことができる。この古墳は、『京都府遺跡地図』には記載されていない古墳で、「丹後あじわいの郷」整備事業に先立って、京都府教育委員会と弥栄町教育委員会が実施した分布調査によって命名された古墳群である。この成果をもとにして、昨年度試掘調査を行ったところ、1基が古墳と認められ、今回の調査に至った。

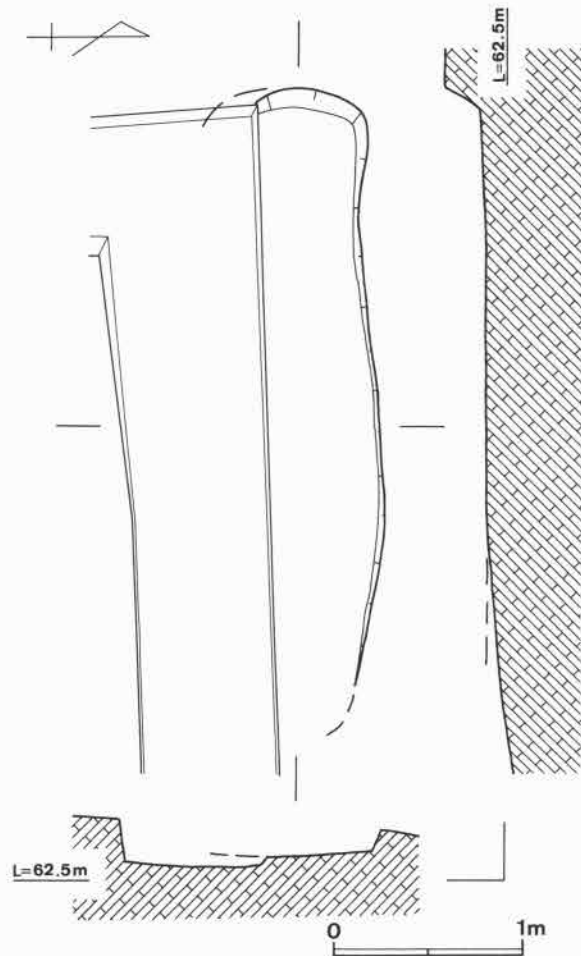
なお、この古墳群に対しては、造成範囲内のみ試掘調査を行っていて、その総数は未確認であるが、今後の調査によって



古墳と認められた時点で号名を付すことになっている。この付近には、鳥取と木橋の集落を結ぶ道を挟んだ丘陵尾根筋上に、方墳3基、円墳2基の総数5基からなる谷奥古墳群が、周知の遺跡として存在する。道は、丘陵を切って通じており、鳥取峠古墳群はこの道沿いに展開することから、あるいは谷奥古墳群と一連の古墳である可能性がある。

## 2. 調査の概要

昨年度の試掘調査時に掘削した断面をもとにして、墳丘の表土剥ぎを行った。その結果、径約10mの円墳であることがわかり、後世に墓を築く際に簡単な造成を行っており、また墓に通じる山道によって、墳丘全体と裾部の一部が削られていることが判明した。このように、かなり残りの悪い古墳ではあったが、墳丘ほぼ中央よりのところで東西方向の長辺約3m・深さ15cmを測る土坑を検出することができた。幅については、60cm以上ではあるが、確定することはできなかった。調査の結果、出土遺物はなく、古墳の時期については不明である。



第52図 鳥取峠1号墳主体部実測図

が判明した。このように、かなり残りの悪い古墳ではあったが、墳丘ほぼ中央よりのところで東西方向の長辺約3m・深さ15cmを測る土坑を検出することができた。幅については、60cm以上ではあるが、確定することはできなかった。調査の結果、出土遺物はなく、古墳の時期については不明である。

(岡崎研一)

注1 岡崎研一「丹後あじわいの郷関係遺跡平成4年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概要』第53冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993

岡崎研一「丹後あじわいの郷関係遺跡平成5年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概要』第59冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994

- 注2 安達幾子・安達哲也・安達睦枝・石田寿子・石嶋文恵・稲岡徳次・今西茂満・岩佐正一・上田忠志・植野齊志・大江田洋子・大下成子・小國喜市郎・沖とみ子・尾崎二三代・河戸久夫・熊谷千代子・嵯峨根清一・城下則行・高原与作・谷口勝江・坪倉愛子・菱川 実・平林秀夫・藤原あみ子・藤原多津子・藤原敏子・藤原ヒサエ・堀江登喜雄・村上五月・森 秀雄・森野美智代・山副武志・山副まつ江・由良里枝・吉岡真喜子・吉岡正子・吉村 保・伊藤嘉明・永谷隆夫・有田美恵子・上田奈智子・大島紀子・小田栄子・河崎祐子・谷辻絹代・藤井矢壽子・溝井麗子・山下敬子・吉岡千恵美
- 注3 増田孝彦「丹後の古代鉄生産」（『京都府埋蔵文化財論集』第2集（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1991
- 増田孝彦「遠所遺跡群の発掘調査」（『京都府埋蔵文化財情報』第39号（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1991
- 岡崎研一「遠所遺跡群」（『京都府埋蔵文化財情報』第44号（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1992
- 土橋 誠「遠所遺跡出土木簡」（『京都府埋蔵文化財情報』第47号（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1993
- 注4 増田孝彦ほか『黒部製鉄遺跡現地説明会資料』（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター  
1994
- 注5 注4と同じ。
- 注6 岡崎研一ほか『ニゴレ遺跡現地説明会資料』（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター  
1994

### 3. 金谷古墳群(1号墓)発掘調査概要

#### 1. はじめに

今回の調査は、京都府土木建築部道路整備課が実施している「一般国道312号線改良事業」に伴い、同課の依頼を受け実施した。

金谷古墳群は、『京都府遺跡地図』によると5基の円・方墳から構成される古墳群として周知されてきた。しかし、今回の道路改良工事による立木伐採の結果、新たに1基の方墳が確認され、京都府教育委員会との協議の結果、当センターが調査を実施することとなった。調査は、平成6年4月25日から地形測量を実施したのち、人力による表土掘削を開始した。表土掘削・精査が進行するに従い、この遺跡が弥生時代後期の台状墓であること、墳頂部及び周辺に複数の埋葬施設が存在することが明らかとなった。そこで、峰山町教育委員会・京都府教育委員会との調整の結果、遺跡名称を「金谷1号墓」とすることとした。遺構掘削・実測・写真撮影を順次進め、平成6年8月25日にはラジコンヘリコプターによる空中写真撮影・図化作業を行い、同年8月26日には現地説明会を実施し約130名の参加を得ることができた。同年9月2日には現地からすべての器材を撤収し現地調査を終了した。なお、調査面積は約350㎡である。調査は、調査第2課調査第1係長伊野近富と同調査員石崎善久が担当し、発掘調査にかかる費用は全額京都府が負担した。現地調査ならびに本概要作成に当たっては、関係諸機関ならびに調査参加者に協力・指導を賜った。<sup>(注1)</sup>なお、本概要報告は、石崎善久・京都教育大学学生高橋あかねが分担執筆し、石崎が調整した。

#### 2. 位置と環境

金谷古墳群は、京都府中郡峰山町字鱒留小字金谷に所在する。古墳群の立地する丘陵は、西から東に向け流れる鱒留川に対して平行にのびる尾根上に分布している。金谷古墳群では、現状で6基の古墳が確認されている。そのうち、5基は主尾根稜線上に分布しており、金谷1号墓のみが稜線から離れた丘陵腹部から派生する小規模な枝尾根に立地している。現在、丘陵裾には国道312号線が通り、眼下にはほ場整備の終了した水田が広がる。また、谷の中央部を流れる鱒留川は、かつては北側の丘陵裾部を蛇行していたらしく、水田・国道にその痕跡を認めることができる。ここでは、鱒留川を一支流とする竹野川流域の主要な弥生時代の遺跡について概観する。

竹野川は、丹後半島中央にある高尾山・鼓ヶ岳に水源を発し、大宮町五十河・三重地区を南流し、三重～谷内間の峡谷で大きく曲折して流れを北に変える。多くの小河川と合流しながら大宮町・峰山町・弥栄町・丹後町を北流し、日本海に注いでいる。全長31kmに及ぶ半島最大の河川であり、その流域には数多くの遺跡が確認されている。

河口域には丹後町竹野遺跡<sup>(注2)</sup>、同町大山墳墓群<sup>(注3)</sup>などがある。竹野遺跡は、竹野川河口部の砂丘地に立地する。土器と石器などが検出されており、前期の集落跡と推定されている。大山墳墓群は、竹野川河口を少しさかのぼった西岸の丘陵上にあり、中期後葉から後期にかけての墳墓群である。副葬品として鉄器・玉類などが検出された。

下流域では弥栄町坂野丘遺跡<sup>(注4)</sup>、同町奈具岡遺跡<sup>(注5)</sup>などがある。坂野丘遺跡は、竹野川を望む丘陵上に営まれた墳墓で、中期後葉と後期後葉の埋葬施設が検出されている。副葬品には鉄剣・ガラス玉類・碧玉製管玉がある。奈具岡遺跡は、丘陵先端部に位置し、後期の方



第53図 調査地位置図及び周辺主要弥生時代遺跡分布図(1/50,000)

- |          |           |          |
|----------|-----------|----------|
| 1. 金谷1号墓 | 2. カジヤ墳墓群 | 3. 七尾墳墓群 |
| A. 中岡遺跡  | B. 途中ヶ丘遺跡 | C. 菅沖波遺跡 |
| D. 扇谷遺跡  | E. 古殿遺跡   |          |

形貼石墓2基が検出された。また、奈具岡遺跡周辺では、中期を中心とする集落跡・石製玉類生産工房群や墳墓群が多数確認された。

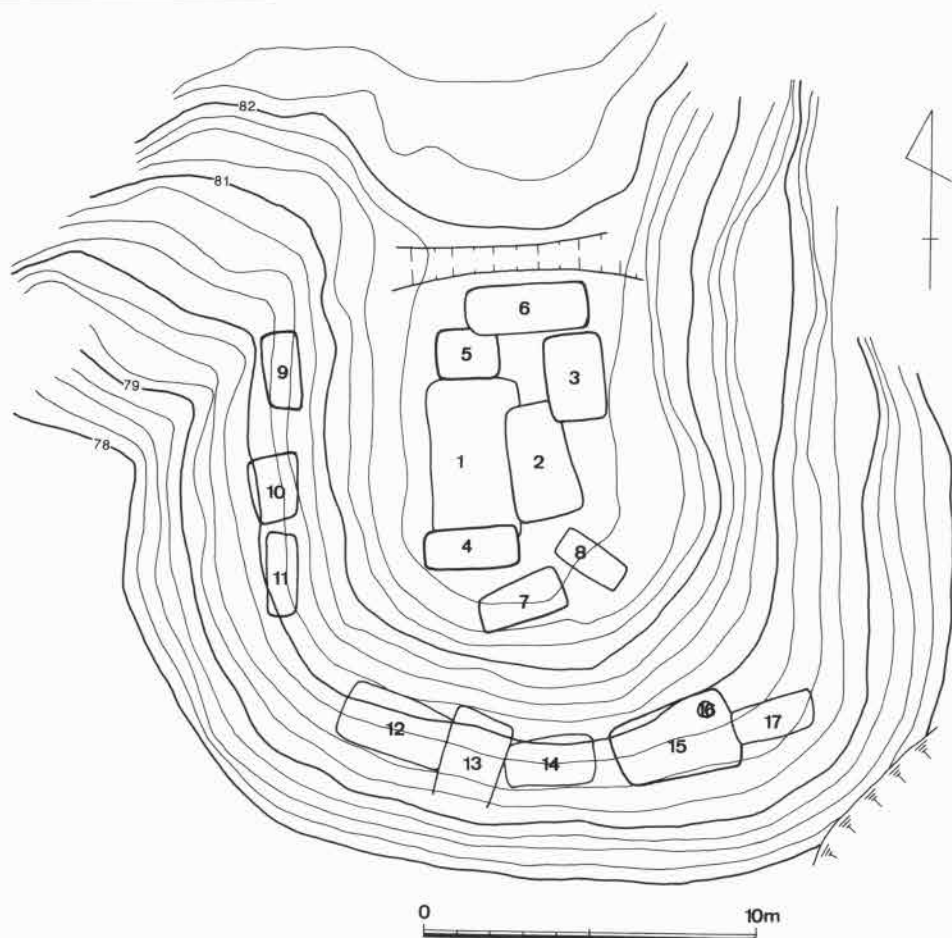
中流域では、さらに多くの弥生集落が確認されている。峰山町菅沖波遺跡は、竹野川の支流、鱒留川左岸の微高地にある前期の自然堤防上の集落と考えられる。菅沖波の対岸の微高地には途中ヶ丘遺跡<sup>(注6)</sup>がある。南北約340m・東西約260mの広範囲に及ぶ遺跡で、調査の結果、盛衰はあるが弥生時代全期にわたる環濠集落であることが判明した。出土遺物には石器・鉄器・木製品・石製品・ガラス製品などがある。扇谷遺跡<sup>(注7)</sup>は、途中ヶ丘遺跡の北北東約2.3km、竹野川左岸の比高30~40mの丘陵上にある。丘陵斜面には2重の環濠がめぐり、明確な住居跡は検出されていないが、石器・石製品・鉄製品・土製品・ガラス塊などが出土している。扇谷遺跡の南、谷を隔てた同一丘陵上にある七尾遺跡<sup>(注8)</sup>では、2基の方形台状墓が検出されている。伴出した土器によって前期末~中期初頭の墳墓であるとされ、扇谷遺跡の墓域と考えられている。扇谷遺跡の西、小西川右岸の丘陵頂部にカジヤ遺跡<sup>(注9)</sup>があり、中期中葉の方形台状墓3基、後期の方形周溝墓2基が検出されている。古殿遺跡<sup>(注10)</sup>は、小西川左岸の丘陵上にあり、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての拠点集落の可能性もある。また、金谷古墳群の対岸には弥生土器の出土が伝えられる中岡遺跡がある。現段階で、金谷1号墓の造墓集団の居住地である可能性が考えられる。

さらに上流の大宮町では、弥生時代の墳墓が多数調査された。帯城墳墓群<sup>(注11)</sup>・三坂神社墳墓群<sup>(注12)</sup>・左坂墳墓群<sup>(注13)</sup>などが例示できる。帯城墳墓群は、後期後半を中心に造られ、鉄剣が副葬されていた。三坂神社墳墓群では後期の台状墓6基が調査され、多数のガラス玉類・鉄器などが出土した。中でも、3号墓第10主体部ではガラス玉以外に水晶製玉・素環頭鉄刀・杖状漆塗木製品などが副葬され、鏡を持たない点を除けば北部九州の王墓に匹敵する内容をもつ。左坂墳墓群は後期を中心とする。明確な区画を持たず、木棺墓の集合体と考えられる墳墓群である。多数のガラス玉類・鉄製品などが出土し、素環頭鉄刀も確認された。

(高橋あかね)

### 3. 調査の概要

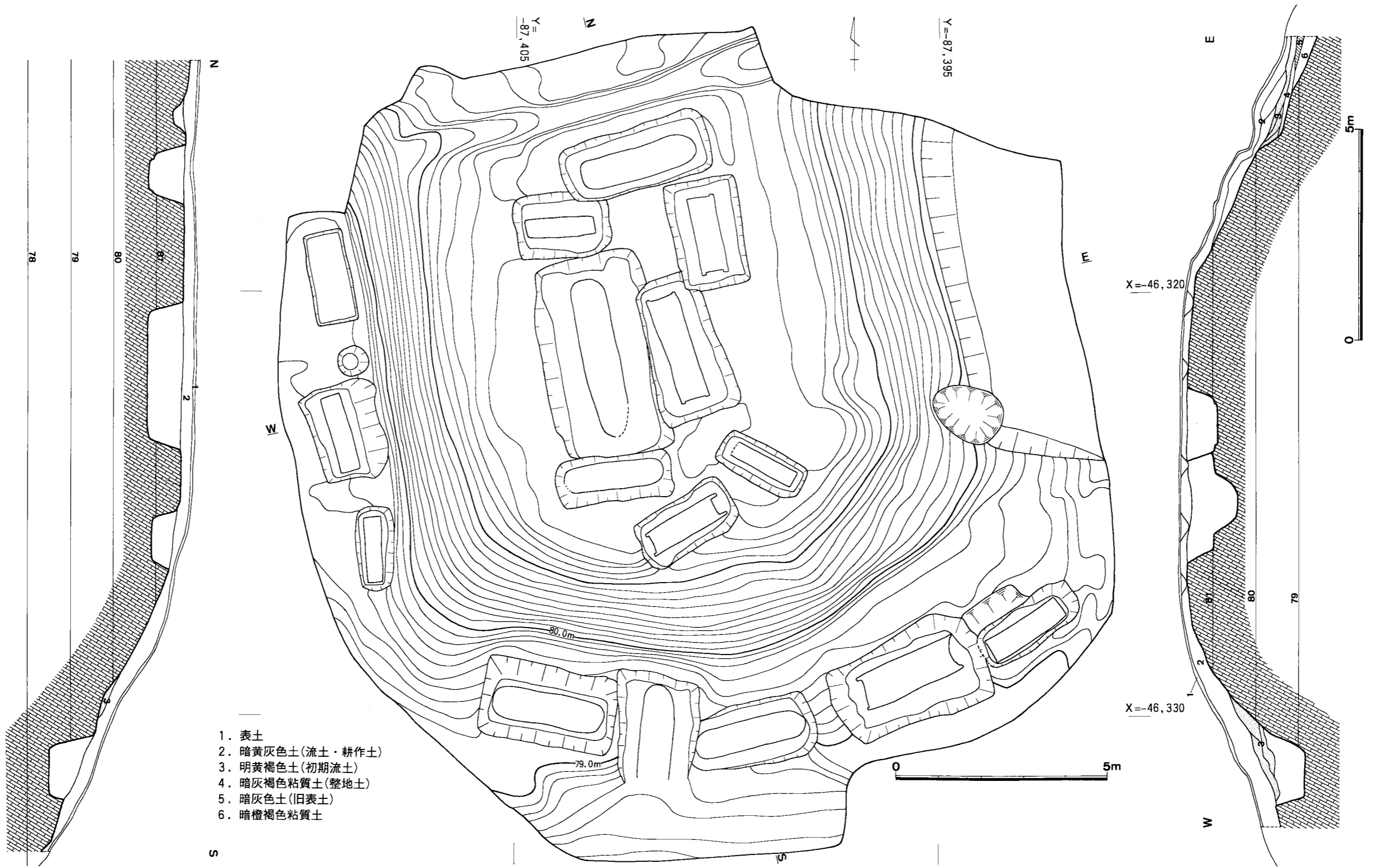
I 墳丘の構造(第54・55図) 調査前の地形測量図ならびに地表観察の結果から、周辺部分に基底となるテラスを設け、墳丘を造り出しているものと推測された。土層断面観察の結果、墳頂部では表土・耕作土・地山もしくは主体部埋土の順で層序が確認された。また、墳頂部には複数の畝状の溝が耕作土に伴って南北方向に走っていることから、墳頂部はかなり削平されていると考える。なお、墳頂部での地山の状態は、花崗岩風化土・花崗岩岩盤・暗赤褐色粘質土の3種が脈状に確認された。



第54図 調査前地形測量図及び遺構配置図

墳丘基底部分の造成は、基本的に3方の地山を整形し平坦なテラスを造り出し、墳丘裾を造る。このテラス部分で周辺埋葬施設を検出した。また、墳丘北側は幅9.9m・深さ0.3mの直線的な溝で自然地形と区画されている。溝底部は、ほぼ水平に整えられている。

西側部分での土層観察結果から、周辺埋葬施設埋葬終了後に堆積した初期流土(第3層)とそれ以降に堆積した流土(第2層)に明確に分離できる。なお、墳丘西側初期流土中からは多数の弥生土器(20~23)が検出された。東側部分のテラスは、他のテラス平坦面より一段深く掘り下げている。なお、北側部分は、調査範囲を大きくはずれるため、未調査である。このテラスは地山を一段掘り下げた後、そのときに生じた廃土を低位側の表土上に盛り(第4層)、平坦面を拡張している。このテラスからは、埋葬施設は確認されなかったが、平坦面上の堆積土中から完形個体である壺(24)や高杯の大破片が出土していることから、祭祀などに関連する遺構と思われる。以上の点から、金谷1号墓は東西15m、墳頂部までの高さ2m、墳頂部平坦面で東西9m・南北10mを測る方形墳丘墓と考える。



- 1. 表土
- 2. 暗黄灰色土(流土・耕作土)
- 3. 明黄褐色土(初期流土)
- 4. 暗灰褐色粘質土(整地土)
- 5. 暗灰色土(旧表土)
- 6. 暗橙褐色粘質土

第55図 調査後地形測量図及び墳丘断面図

付表1 金谷1号墓検出主体部一覧表

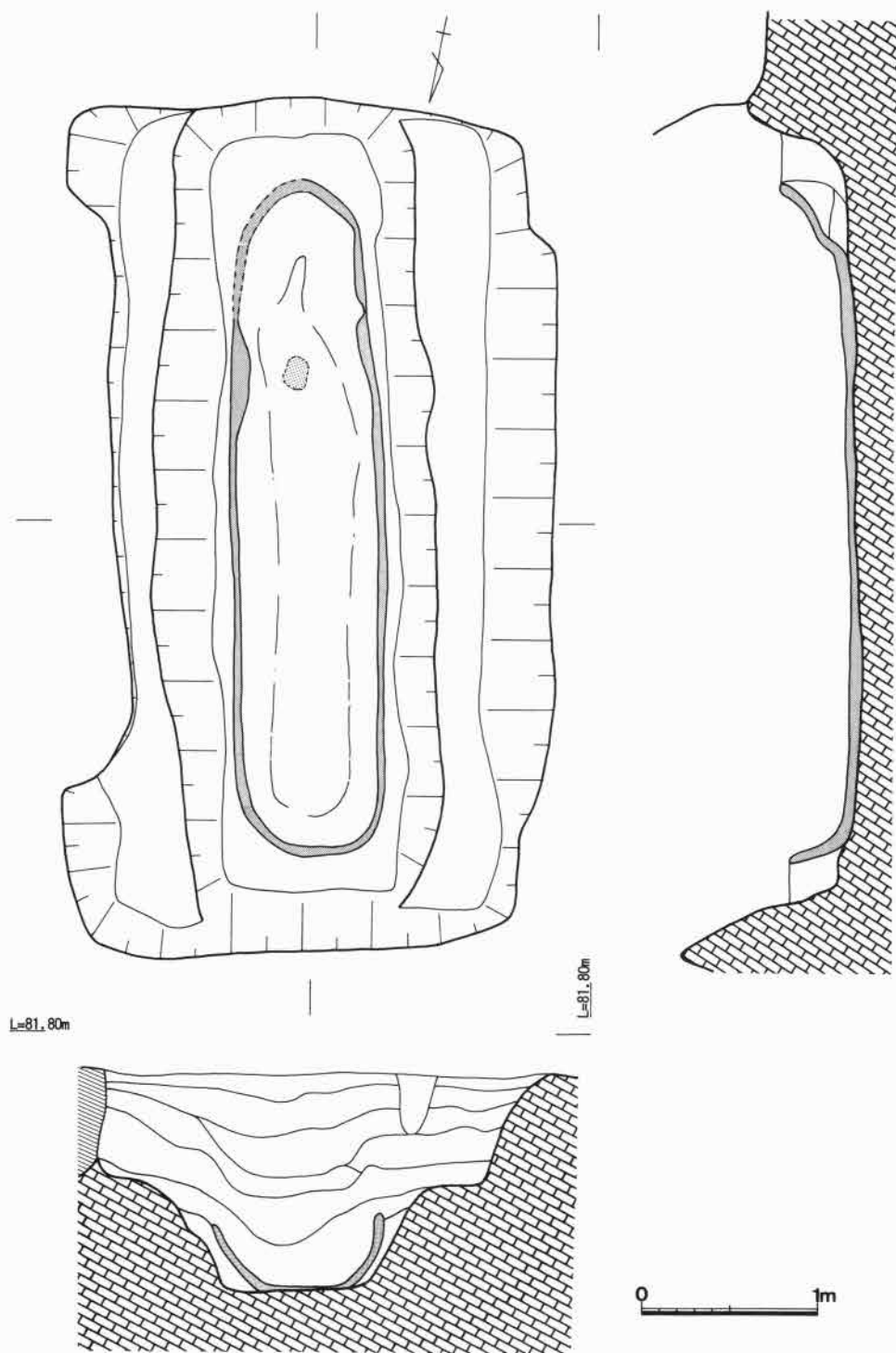
主体部	墓壇形態	墓壇規模	棺形態	棺規模(外法)	出土遺物
第1主体部	二段墓壇	5×2.7以上	舟形木棺	3.9×0.9	高杯・赤色顔料
第2主体部	二段墓壇	3.5×1.9	箱形木棺	2.5×0.7	甕・赤色顔料・玉類
第3主体部	二段墓壇	2.7×1.7	箱形木棺	1.8×0.6	玉類(ガラス勾玉・ガラス小玉・ 緑色凝灰岩製管玉)・環状鉄製 品・赤色顔料
第4主体部	素掘り墓壇	2.8×1.1	舟形木棺	2.4×0.6	なし
第5主体部	二段墓壇	2.2×1.5	箱形木棺	1.7×0.5	鉄剣・赤色顔料
第6主体部	二段墓壇	3.6×1.55	舟形木棺	2.8×0.7	鉄剣・鉈
第7主体部	二段墓壇	2.5×1.2	箱形木棺	1.7×0.6	赤色顔料
第8主体部	素掘り墓壇	2.2×1.9	箱形木棺	1.6×0.4	なし
第9主体部	素掘り墓壇	2.4×1.0	箱形木棺?	—	なし
第10主体部	素掘り墓壇	2.1×1.5	箱形木棺	1.9×0.5	鉄鏃・不明鉄製品・刀子・壺
第11主体部	素掘り墓壇	1.9×0.9	箱形木棺	1.6×0.4	玉類(翡翠勾玉・滑石製勾玉・ガ ラス小玉・碧玉製管玉)
第12主体部	素掘り墓壇	3.3×1.9	舟形木棺	2.7×0.7	甕(破碎供献)・高杯・鉈
第13主体部	二段墓壇	2.8以上×1.9	舟形木棺	2.6×0.8	高杯
第14主体部	二段墓壇	2.7以上×1.5	舟形木棺	2.7×0.7	鉄剣・鉈
第15主体部	二段墓壇	3.8×2.4	箱形木棺	2.2×0.8	高杯・器台・鉈・鉄剣・赤色顔料
第16主体部	円形素掘り	径0.5	土器棺	—	高杯(蓋)+壺(身)
第17主体部	二段墓壇	2.65×1.0	箱形木棺	2.0×0.6	甕(破碎供献)・赤色顔料

Ⅱ 埋葬施設 埋葬施設としては、墳頂部平坦面で8基の木棺墓を、西側テラス部分で3基の木棺墓を、南側テラス部分で5基の木棺墓と1基の土器棺墓をそれぞれ検出した。すべての主体部に対し、第1主体部～第17主体部まで通し番号を付けて説明する。

①墳頂部の埋葬施設 墳頂部では8基の木棺墓を検出した。各主体部の配置、ならびに切り合い関係を見ると、平坦面中央やや西寄りに第1主体部が位置する。第1主体部の東には、第1主体部を切る形で第2主体部が構築されている。第2主体部の北東には、第3主体部が位置する。この主体部は第2主体部を切る。この3基の主体部はいずれも南北方向に主軸を持つ。第1主体部の北には第5主体部がある。この主体部は、第1主体部の北端を切る。第5主体部を切る形で、第5主体部北側に第6主体部が配置されている。第4主体部は、第1主体部の南に第1主体部を切る形で存在する。第4～第6主体部は、いずれも主軸を東西方向にとる。第7・第8主体部は、墳頂部の南端付近に位置する。他の主体部とは切り合い関係を持たず、主軸方向についても規格性は認められない。

第1主体部(第56図) 墳頂部中央西側に位置し、主軸を南北にとる。墓壇は、平面隅丸長方形を呈し、地山から2段に掘り込む形態をとる。規模は、検出面で上段が長軸5.0m以上・短軸2.7m以上・深さ0.6mを測る。2段目は、1段目墓壇底部中央に掘り込まれ、小口部分には段は認められない。規模は短軸1.6m・深さ0.6mを測る。





第56図 第1主体部実測図

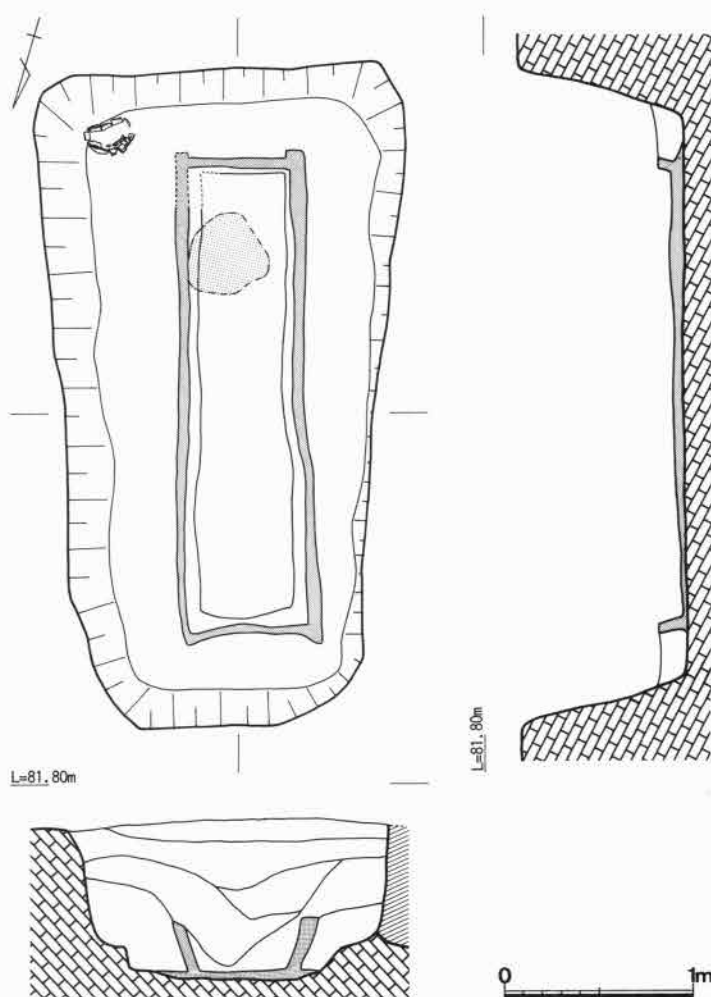
墓壙2段目を約40cm掘り下げた段階で木棺痕跡を確認した。木棺痕跡は、棺材が淡黄褐色細砂に置き換わった状況で極めて明瞭に識別することができた。木棺の形態は、底部横断面が「U」字状を呈し、小口部分縦断面も垂直には立ち上らず、カーブを描いて立ち上がる。また、南側小口の平面形は鋭角的に造られており、あたかも、舟の舳先を意識したかのような構造をとっている。木棺の規模は、長さ3.9m・幅0.8mを測る。

遺物は、墓壙掘削中に第2層上面より高杯もしくは器台の脚片(1)が出土している。棺内から遺物は出土していないが、棺内南端から水銀朱と思われる赤色顔料が検出された。

第2主体部(第57図) 第1主体部の東側に第1主体部を切って構築された木棺直葬墓である。主軸は南北方向にとる。墓壙は、地山面より掘削され、2段に掘り込まれる。掘り残された段は幅約10cmと狭い。墓壙平面形は、隅丸長方形を呈するが、南側の方が幅が広い。

規模は、検出面で上段が長軸3.5m・短軸1.9m・深さ0.7mを測る。2段目は1段目墓壙底部中央に掘り込まれ、小口部分には段は認められない。規模は短軸1.1m・深さ0.2mを測る。

木棺痕跡は、2段目墓壙検出とほぼ同時に検出された。第1主体部同様、木棺痕跡は棺材が淡黄褐色細砂に置き換わった状況で極めて明瞭に識別することができた。木棺の構造は、長側板が木口

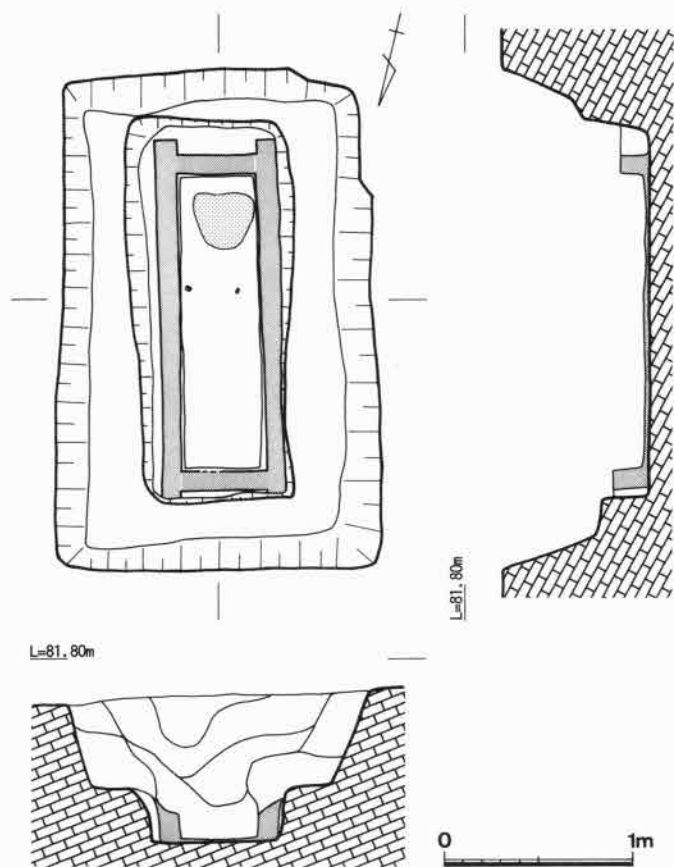


第57図 第2主体部実測図

板を挟み込むいわゆる「H」字形木棺である。また、断ち割りの結果、底板の上に長側板・木口板が乗る形状のものであることが明らかとなった。木棺の規模は、底部内法で長さ2.4m・幅0.5mを測る。また、木棺の幅はほぼ一定である。

遺物は、墓壙掘削中に墓壙南東側埋土中から甕1点(3)が正位で出土した。墓壙埋め戻し時に供献されたものとする。また、表土掘削時に出土した高杯(2)は、出土位置からみて第2主体部墓壙上に供献された土器と判断される。棺内南部分から水銀朱と考えられる赤色顔料とともに玉類が検出された。その内訳は、ガラス製勾玉2点、緑色凝灰岩製管玉6点以上である。以上の様相から、第2主体部の被葬者は頭位を南に置くものとする。

**第3主体部(第58図)** 第2主体部の北東側に第2主体部を切って構築された木棺直葬墓である。主軸は南北方向にとる。墓壙は、地山面から掘削され、2段に掘り込まれる。墓壙平面形は隅丸長方形を呈するが、南側の方が幅が広い。規模は、検出面で上段が長軸2.7m・短軸1.7m・深さ0.5mを測る。2段目は、1段目墓壙底部中央に掘り込まれ、小口部分にも段を有する。規模は長軸2.0m・短軸0.8m・深さ0.3mを測る。



第58図 第3主体部実測図

木棺痕跡は、2段目墓壙を約15cm掘り下げた段階で検出された。木棺痕跡は、棺材が黄褐色砂質土に置き換わった状況で明瞭に識別することができた。棺材の痕跡は、他の組合式木棺に比べ厚い。木棺の構造は、長側板が木口板を挟み込むいわゆる「H」字形木棺である。また、断ち割りの結果、底板の上に長側板・木口板が乗る形状のものであることが明らかとなった。木棺の規模は、底部内法で長さ1.5m・幅0.4mを

測る。また、木棺の幅はほぼ一定である。

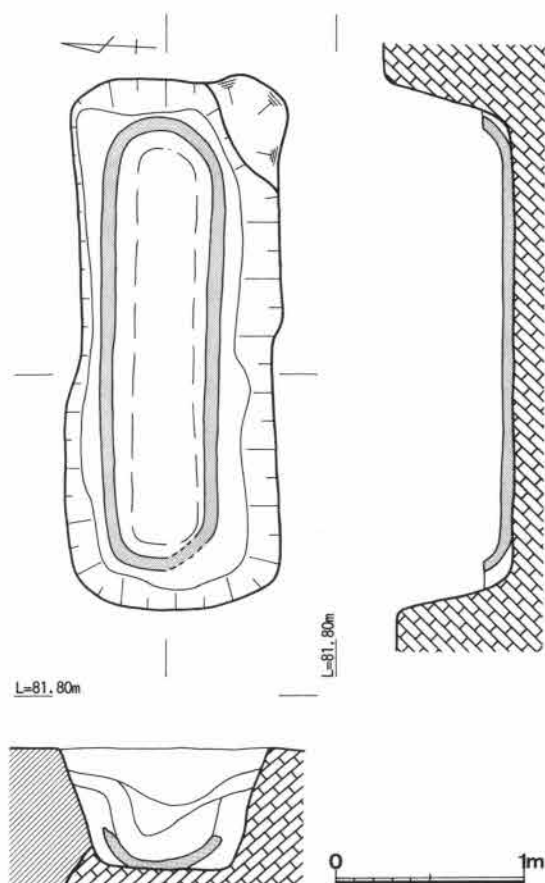
遺物は、棺内南部分から水銀朱と考えられる赤色顔料とともに玉類が検出された。その内訳は、ガラス製勾玉3点、ガラス製小玉300点以上・碧玉製管玉1点・緑色凝灰岩製管玉20点以上であり、出土状況から被葬者の頸部に装着されていたと考えることができる。以上の様相から、第3主体部の被葬者は頭位を南に置くと考える。また、被葬者の両脇腹近辺から環状鉄製品(34・35)が検出された。出土状況及び内外面に布の痕跡が残っていることから、被葬者の服飾に関係する遺物と判断される。

**第4主体部(第59図)** 第1主体部の南側に位置し、第1主体部を切る。主軸は東西にとる。墓壙は、平面隅丸長方形を呈し、地山から掘り込まれる素掘りの形態をとる。規模は、検出面で上段が長軸2.8m・短軸1.1m・深さ0.7mを測る。

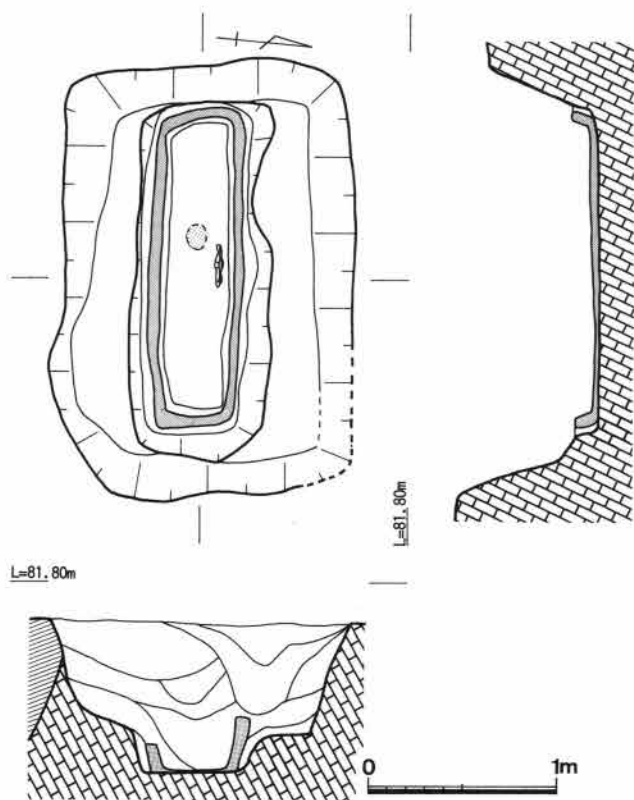
墓壙を約45cm掘り下げた段階で木棺痕跡を確認した。木棺痕跡は、棺材が淡黄褐色細砂に置き換わった状態で極めて明瞭に識別することができた。木棺の形態は、底部横断面が「U」字状を呈し、小口部分縦断面も垂直には立ち上がらず、カーブを描いて立ち上がる。また、東側小口の平面形は鋭角的に造られており、あたかも舟の舳先を意識したかのような構造をとる。木棺の規模は、長さ2.3m・幅0.5mを測る。第4主体部に伴う遺物は検出されなかった。

**第5主体部(第60図)** 第1主体部の北側に第1主体部を切って構築された木棺直葬墓である。主軸は東西方向にとる。墓壙は、地山面から掘削され、2段に掘り込まれる。墓壙平面形は隅丸長方形を呈する。規模は、検出面で上段が長軸2.2m・短軸1.5m・深さ0.6mを測る。2段目は、1段目墓壙底部中央に掘り込まれ、小口部分には段を有さない。規模は短軸0.6m・深さ0.2mを測る。

木棺痕跡は、2段目墓壙を約8cm



第59図 第4主体部実測図



第60図 第5主体部実測図

主体部の被葬者は西側に頭位を置くと考える。

**第6主体部(第61図)** 第5主体部の北側に位置し、第5主体部を切る。主軸は東西にとる。墓壙は、平面隅丸長方形を呈し、地山から2段に掘り込まれる。規模は、検出面で上段が長軸3.6m・短軸1.5m・深さ0.6mを測る。2段目は、1段目墓壙底部中央に掘り込まれ、小口部分には段を有さない。規模は、短軸1.0m・深さ0.2mを測る。

二段目墓壙検出面で木棺痕跡を確認した。木棺痕跡は、棺材が淡黄褐色細砂に置き換わった状況で極めて明瞭に識別することができた。木棺の形態は、底部横断面が「U」字状を呈し、小口部分縦断面も垂直には立ち上がらず、カーブを描いて立ち上がる。また、東側小口の平面形は鋭角的に造られており、あたかも、舟の舳先を意識したかのような構造をとっている。木棺の規模は、長さ2.5m・幅0.6mを測る。

第6主体部からは、墓壙掘削中に墓壙中央第2層上から壺と思われる破片が出土した。また、棺内からは東側小口南側で切っ先を東に向けた状態で鈍1点が、また棺中央南側からは切っ先を西に向けた状況で鉄剣1点が出土した。以上のような状況から、第6主体部の被葬者は東側に頭位を置くと考える。

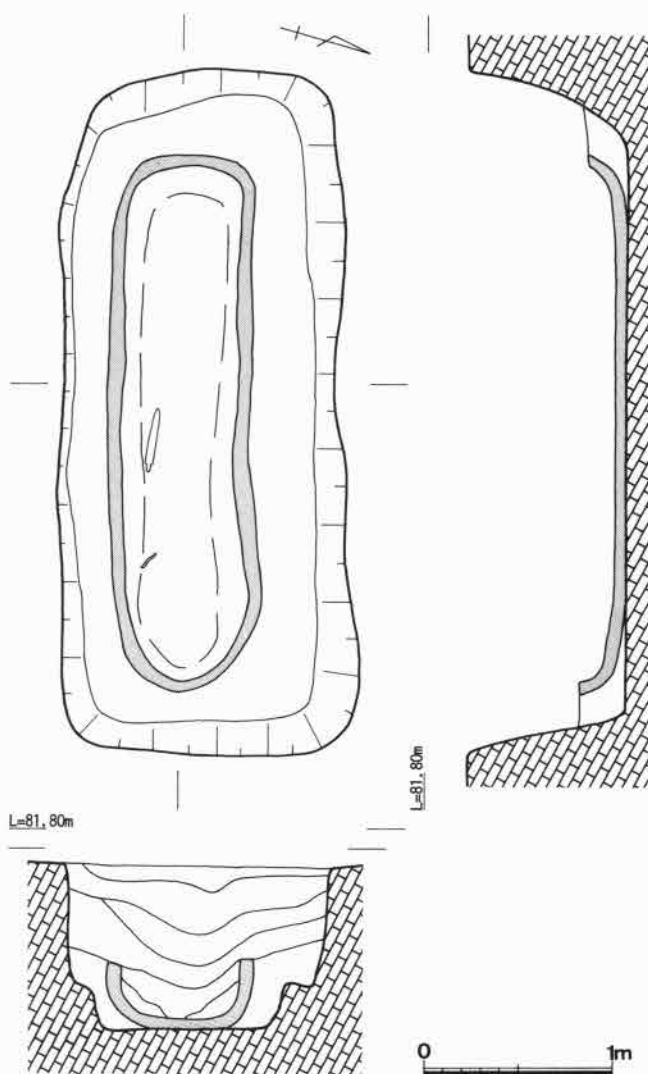
掘り下げた段階で検出された。木棺痕跡は、棺材が黄褐色砂質土に置き換わった状況で明瞭に識別することができた。木棺の形式は、組合式箱形木棺と考えられるが、棺材の組み合わせ方などについては明確に確認することはできなかった。木棺の規模は、底部内法で長さ1.52m・0.34mを測る。また、木棺の幅はほぼ一定である。

遺物は、木棺中央西側で水銀朱と思われる赤色顔料が検出された。また、木棺中央北側では切っ先を東に向けた鉄剣1点が棺底に密着して検出された。以上の点から、第5

## 第7主体部(第62図)

第4主体部の南側に構築された木棺直葬墓である。主軸は、東西方向にとる。墓壙は、地山面から掘削され、南側長側辺にのみ段を有する構造をとる。墓壙平面形は隅丸長方形を呈する。規模は、検出面で上段が長軸2.5m・短軸1.2m・深さ0.5mを測る。2段目の規模は、短軸0.9m・深さ0.12mを測る。

木棺痕跡は、2段目墓壙を検出した段階で確認された。木棺の形式は組合式箱形木棺と考えられ、木棺の構造は長側板が木口板を挟み込みいわゆる「H」字形木棺である。また、断ち割りの結果、底板の上に長側板・木口板が乗る形状である

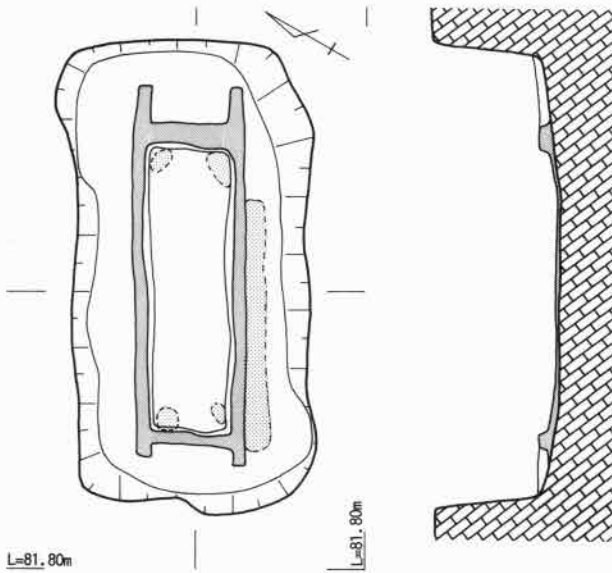


第61図 第6主体部実測図

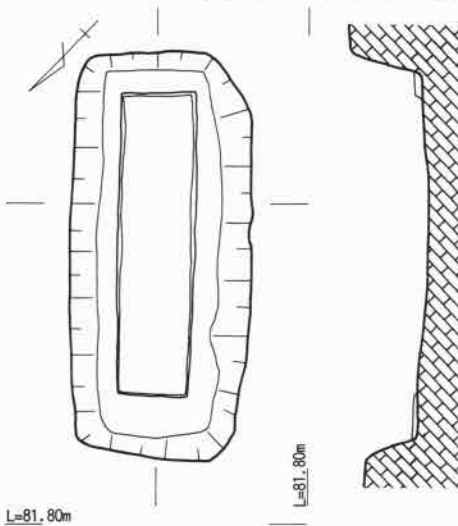
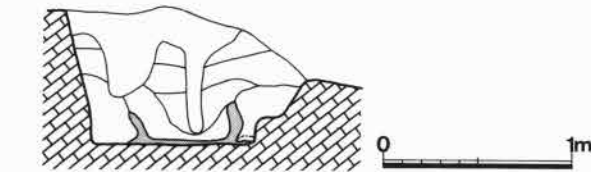
ことが明らかとなった。木棺の規模は、長さ1.9m・幅0.5mを測る。また、木棺の幅はほぼ一定である。

棺内両小口部分で水銀朱と思われる赤色顔料が検出された。この水銀朱は、棺外南側底板上からも検出されており、木棺を墓壙内で組み合わせた後に塗布されたと考えられる。

第8主体部(第63図) 第7主体部の東側に構築された木棺直葬墓である。主軸は、東西方向にとり、他の主体部が比較的東西軸・南北軸に近いのに対し、やや北に主軸を振る。墓壙は、平面隅丸長方形を呈し、地山から掘り込まれる素掘りの形態をとる。規模は、検出面で上段が長軸2.2m・短軸1.0m・深さ0.4mを測る。



第62図 第7主体部実測図



第63図 第8主体部実測図



木棺痕跡は、2段目墓壙を約30cm掘り下げた段階で検出された。木棺の形式は、組合式箱形木棺と考えられるが、棺材痕跡は明瞭ではなく、構造などは不明である。木棺痕跡の規模は、底部内法で長さ1.6m・幅0.4mを測る。また、木棺の幅はほぼ一定である。

第8主体部から遺物は検出されなかった。

②西側テラスの埋葬施設

西側テラスでは3基の木棺直葬墓を検出した。いずれも、主軸を南北方向、すなわちテラスに平行して掘削されている。各主体部に切り合い関係は認められない。北から順に第9～第11主体部とする。なお、第9主体部と第10主体部の間で円形の土坑(土坑1)を検出している。

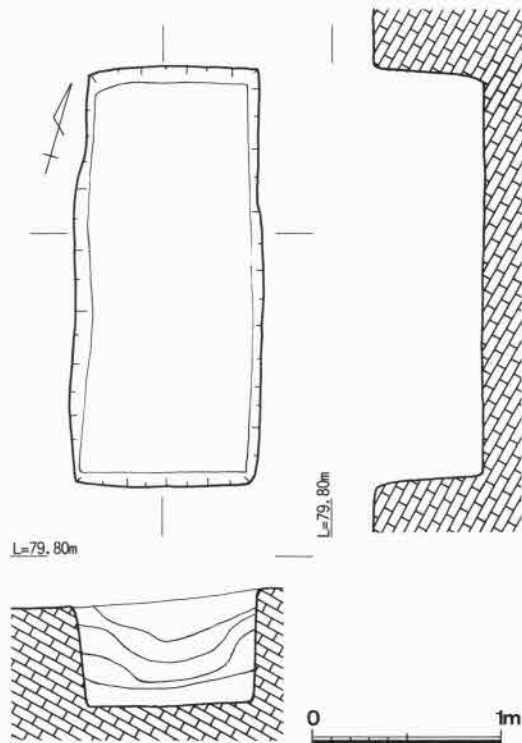
第9主体部(第64図) 西側テラスでもっとも北に構築された木棺直葬墓である。主軸は南北方向にとる。墓壙は、平面隅丸長方形を呈し、地山から掘り込まれる素掘りの形態をとる。規模は、検出面で上段が長軸2.4m・短軸1.0m・深さ0.6mを測る。

木棺痕跡は、平面的には確

認できなかったが、土層断面の観察結果から組合式箱形木棺と考える。遺物は出土しなかった。

**第10主体部(第65図)** 第9主体部の南側に位置する木棺直葬墓である。主軸は南北方向にとる。墓壙は地山面より掘削され、素掘りの形態をとる。墓壙平面形は、隅丸長方形を呈する。規模は検出面で長軸2.1m・短軸1.5m・深さ0.8mを測る。

木棺痕跡は、墓壙を約60cm掘り下げた段階で検出された。棺材の痕跡は平面的には明瞭に識別することができなかったが、断ち割りの結果、棺材と考えられる土層を分離することができた。木棺の形式は、組合式箱形木棺と考えられるが、小口部分



第64図 第9主体部実測図

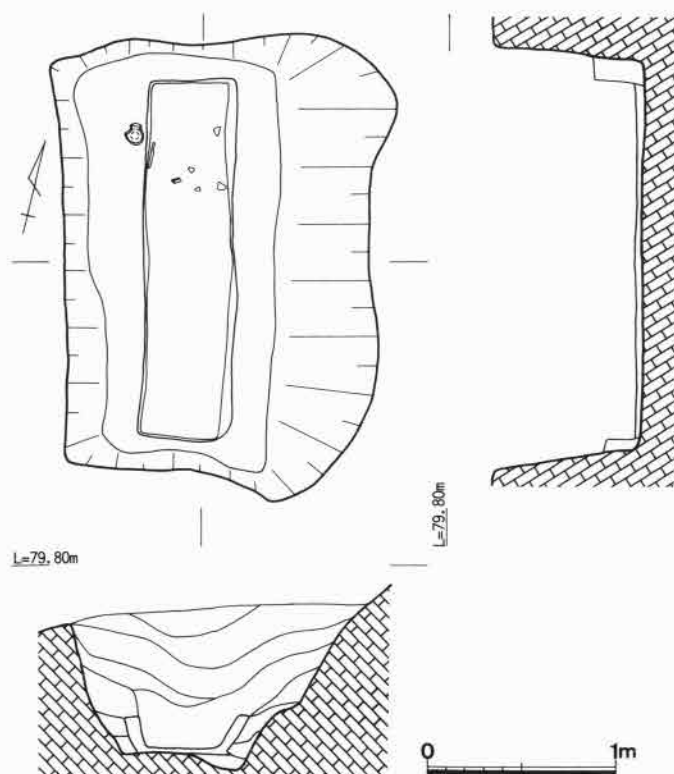
の組み合わせ方については明瞭ではない。また、長側板については底板の上にいる形式であることが明らかとなった。木棺の規模は、底部内法で長さ1.9m・幅0.4mを測る。また、木棺の幅はほぼ一定である。

遺物は、墓壙検出面中央東側で鉄製品12点(37~48)が並べられたような状態で出土した。棺内からは、棺北側西長側板付近で切っ先を南に向けた状態で鉄剣1点が出土し、中央付近では棺底に密着した状態で土器片が4点出土した。この4点については劣化が著しく、古墳時代の土師器転用枕の劣化と酷似した様相を示しているため、被葬者に接した状況であったと推測される。また、棺外墓壙埋土内からは、甕(18)が出土した。この甕は、その出土状況から、木棺を墓壙内に組み周辺に土を充填していく過程の中で置かれたと判断される。なお、この甕は、棺内出土の土器片と接合関係にある。以上のような遺物の出土状況からみて、被葬者は北側に頭位を置くと考えられる。

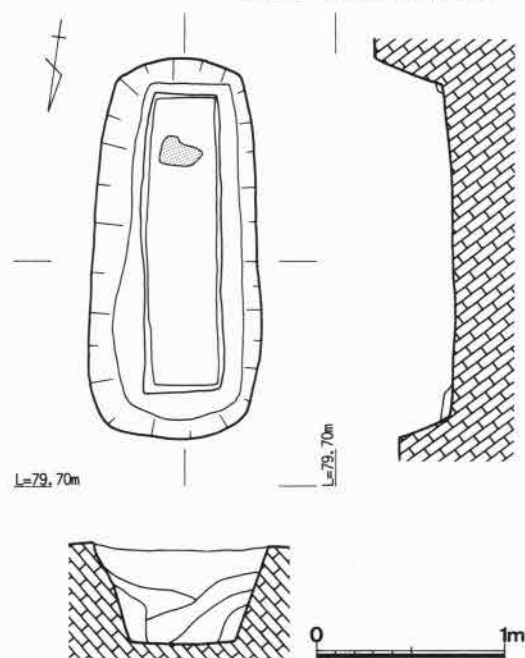
**第11主体部(第66図)** 第10主体部の南側に位置する木棺直葬墓である。主軸は南北方向にとる。墓壙は、地山面より掘削され、素掘りの形態をとる。墓壙平面形は、隅丸長方形を呈する。規模は、検出面で上段が長軸1.9m・短軸0.9m・深さ0.5mを測る。

木棺痕跡は、墓壙を約45cm掘り下げた段階で検出された。木棺の形式は、組合式箱形木





第65図 第10主体部実測図



第66図 第11主体部実測図

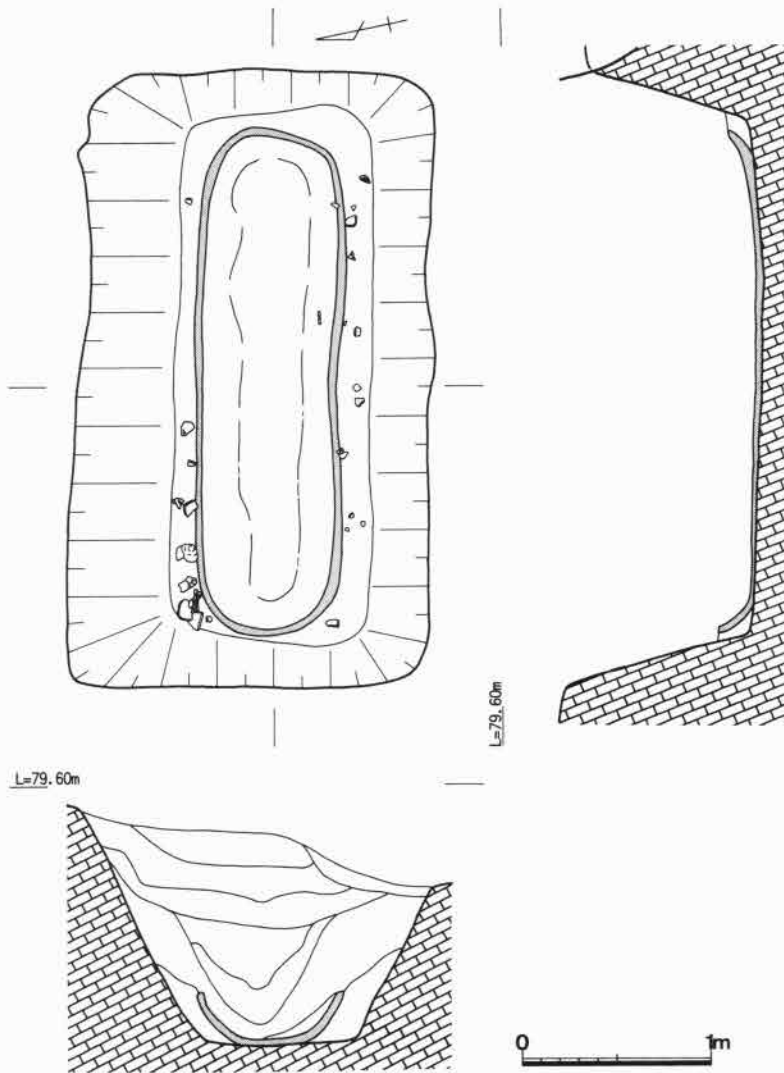
棺と考えられるが、棺材の痕跡は明瞭に識別できなかった。木棺の規模は、底部内法で長さ1.5m・幅0.4mを測る。また、木棺の幅はほぼ一定である。

遺物は、墓塚検出面中央東側で甕(19)が出土した。また、棺内南側では玉類が検出された。その内訳は、翡翠製勾玉1点・滑石製勾玉6点・ガラス製小玉40点以上・碧玉製管玉2点であり、出土状況から被葬者の頸部に装着されていたと考えられる。また、この玉類とともに歯牙が1点検出された。以上の様相から、第11主体部の被葬者は頭位を南に置くと考えられる。

土坑1 第9主体部と第10主体部の間で検出された土坑である。直径0.9m・深さ0.6mを測り、平面不整形円形を呈する。埋土は単層で、その性格は不明である。

③南側テラスの埋葬施設 南側テラスでは5基の木棺直葬墓と1基の土器棺墓を検出した。西から順に第12～15・17主体部とし、土器棺墓を第16主体部とする。第13主体部がテラスに直交する南北方向に主軸をもつ以外は、いずれもテラスに対し平行する東西方向に主軸をとる。切り合い関係をみると、第13主体部が第12・14主体部を切り、第15主体部は第16・17主体部に切られる。

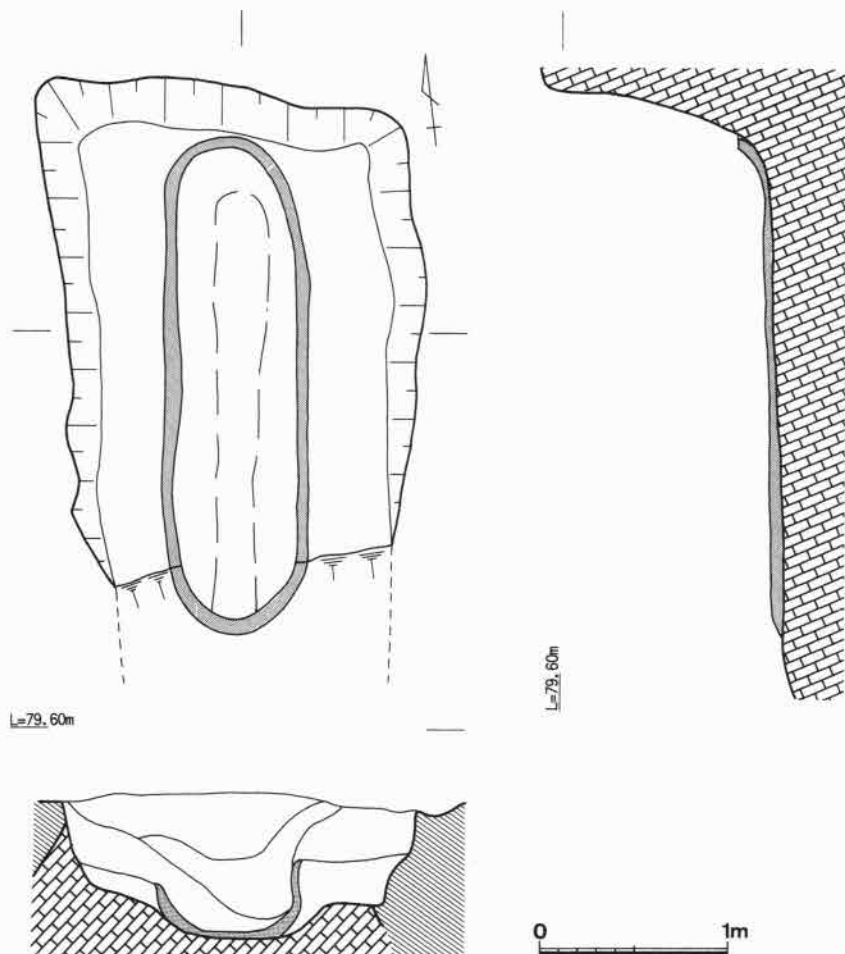
第12主体部(第67図) 南側テラスで最も西側に位置し、主軸を東西にとる木棺直葬墓である。第13主体部に切られる。墓壙は、平面隅丸長方形を呈し、地山から掘り込まれる素掘りの形態をとる。規模は、検出面で上段が長軸3.3m・短軸1.9m・深さ1.0mを測る。



第67図 第12主体部実測図

墓壙を約80cm掘り下げた段階で木棺痕跡を確認した。木棺痕跡は、棺材が淡黄褐色細砂に置き換わった状況で極めて明瞭に識別することができた。木棺の形態は、底部横断面が「U」字状を呈し、小口部分縦断面も垂直には立ち上がらず、カーブを描いて立ち上がる。平面形は両小口とも鈍角であり、第1・6主体部とは若干様相を異にする。木棺の規模は、長さ2.6m・幅0.7mを測る。

遺物は、墓壙内から甕(5)が細片化して出土した。これらの土器片は、木棺内に流入した土層からは1点も検出されず、いずれも、木棺材と墓壙の隙間に充填された土層中から検出された。以上のような状況から、この土器片は木棺を墓壙内に据えた後、木棺周辺に土を充填すると同時にまかれたものと思われる。また、木棺内流入土から土器片が1点も出土していないことは、この行為が木棺の蓋を閉める前に行われたことを示していると考えられる。その他、棺内東小口南側からは鉈1点が出土している。



第68図 第13主体部実測図

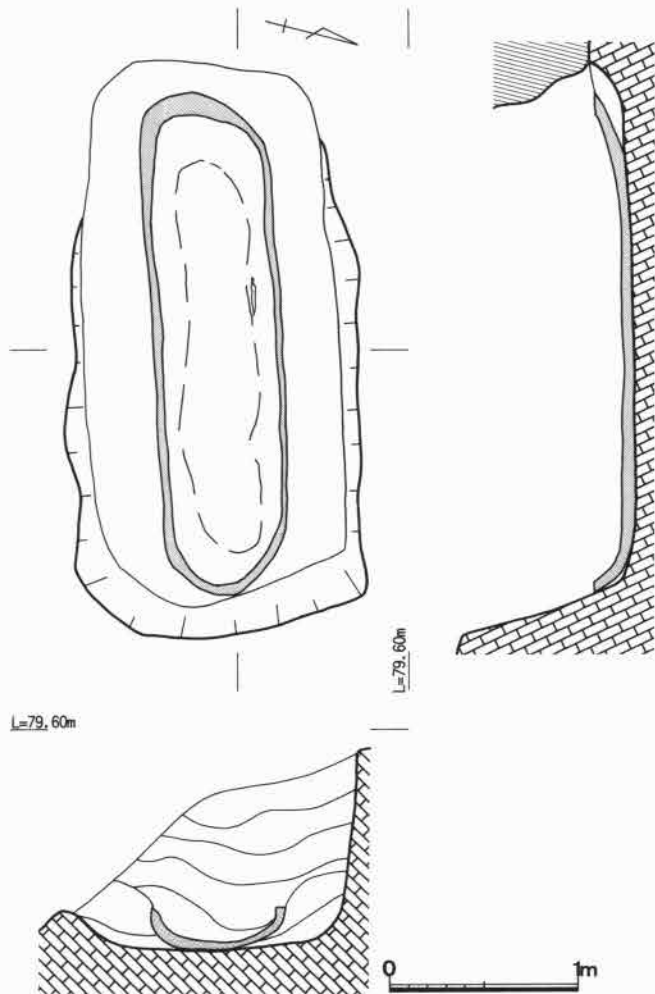
第13主体部(第68図) 第12主体部の東に位置し、主軸を南北にとる木棺直葬墓である。第12・14主体部を切る。なお、墓壙南辺は流出しており、詳細は不明である。残存している部分から、墓壙平面形は隅丸長方形を呈するものと考えられる。断面形は、地山から2段に掘り込む形態をとる。残存する規模は、上段が長軸2.8m以上・短軸1.9m・深さ1.2mを測る。2段目は1段目墓壙底部中央に掘り込まれ、小口部分には段は認められない。規模は、短軸0.9m・深さ0.2mを測る。

墓壙2段目を検出した段階で木棺痕跡を確認した。木棺痕跡は、棺材が淡黄褐色細砂に置き換わった状況で極めて明瞭に識別することができた。木棺の形態は、底部横断面が「U」字状を呈し、小口部分縦断面も垂直には立ち上がらず、カーブを描いて立ち上がる舟形木棺である。木棺の規模は、残存長2.6m・幅0.8mを測る。

遺物は、墓壙検出面で器台脚と思われる小片が出土したが、棺内に遺物は認められなかった。

第14主体部(第69図) 第13主体部の東に位置し、主軸を東西にとる木棺直葬墓である。第13主体部に切られる。墓壙平面形は、隅丸長方形を呈し、素掘りの形態をとる。残存する規模は、検出面で長軸2.7m以上・短軸1.5m・深さ0.9mを測る。

墓壙を約70cm掘り下げた段階で木棺痕跡を確認した。木棺痕跡は、棺材が淡黄褐色細砂に置き換わった状況で極めて明瞭に識別することができた。木棺の形態は、底部横断面が「U」字状を呈

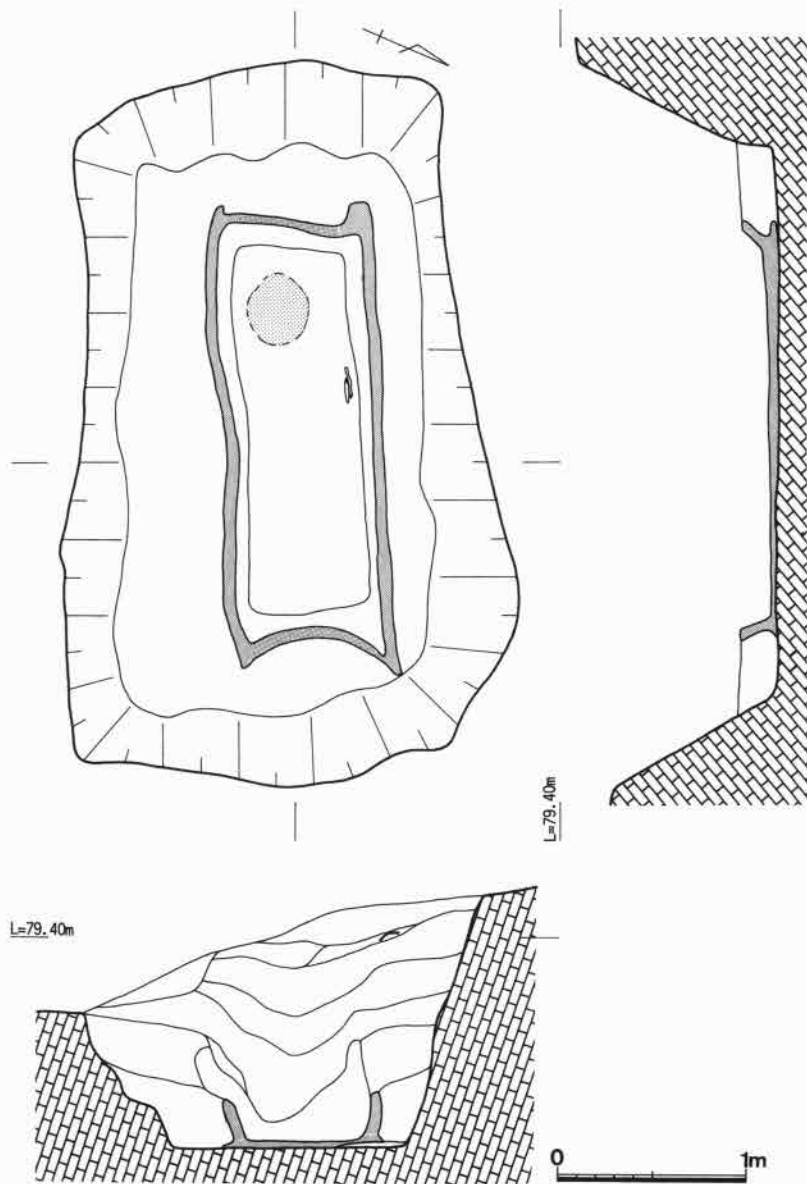


第69図 第14主体部実測図

し、小口部分縦断面も垂直には立ち上がらず、カーブを描いて立ち上がる舟形木棺である。木棺の規模は、長さ2.7m・幅0.7mを測る。

遺物は、木棺中央部北側から切っ先を西に向けた鉄剣1点(28)と、鉄剣に錆着した鈍1点(29)が検出された。遺物の出土状況から、被葬者は頭位を東に置くと推定される。

第15主体部(第70図) 第14主体部の東側に位置し、主軸を東西方向にとる木棺直葬墓である。第16・17主体部に切られる。墓壙は、地山面より掘削され、2段に掘り込む形態を



第70図 第15主体部実測図

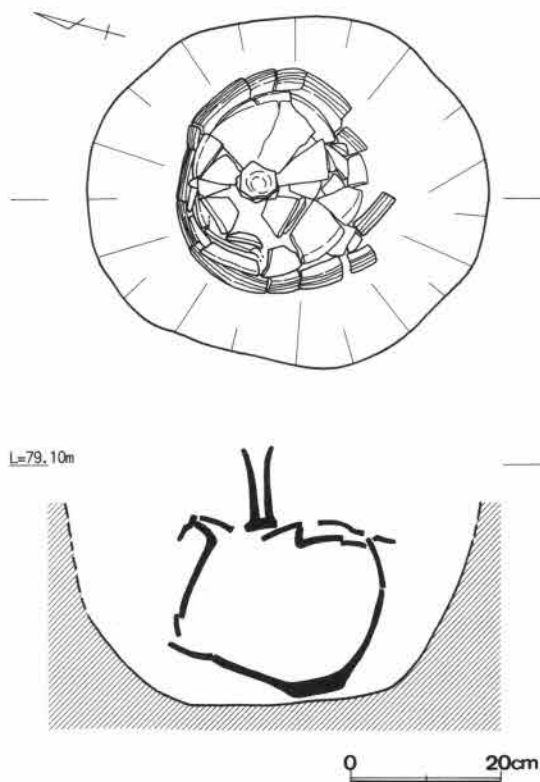
とる。墓壙平面形は、隅丸長方形を呈するが、東側の方が幅が広い。規模は、検出面で上段が長軸3.8m・短軸2.4m・深さ0.7mを測る。2段目は、1段目墓壙底部北側に掘り込まれ、南側長辺のみに段をもつ構造をとる。掘り残された段は、幅約15cmを測る。規模は、短軸1.4m・深さ0.2mを測る。

木棺痕跡は、2段目墓壙とはほぼ同時に検出された。第1主体部同様、木棺痕跡は棺材が淡黄褐色細砂に置き換わった状況で極めて明瞭に識別することができた。木棺の構造は、長側板が木口板を挟み込むいわゆる「H」字形木棺である。また、断ち割りの結果、底板の上に長側板・木口板が乗る形状のものであることが明らかとなった。東側小口は、土圧のためか、内側へ張り出したような状態で検出された。木棺の規模は、内法底部で長さ1.9m・幅0.6mを測る。木棺の幅はほぼ一定である。

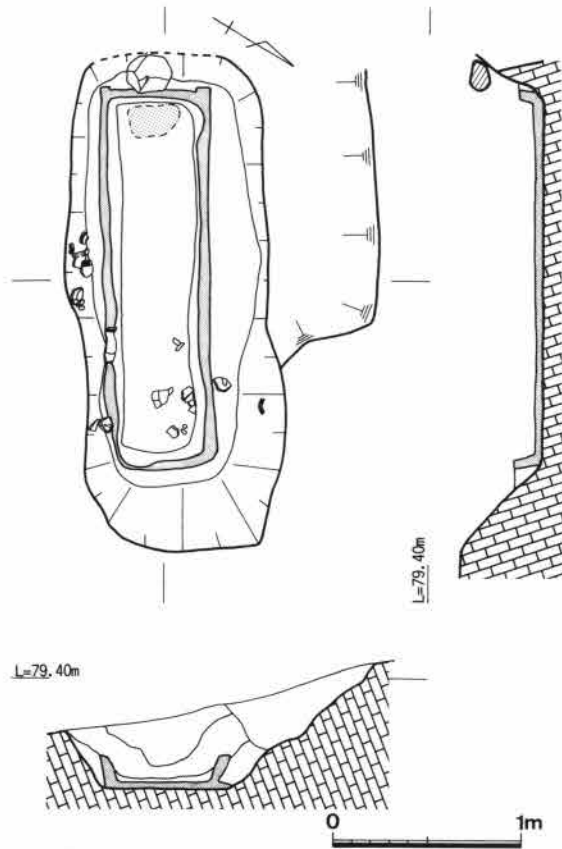
遺物は、墓壙検出面で墓壙中央北側で器台・高杯(7~13)が検出された。脚部は、正位置を保っており、墓壙上に供献された一群の土器と考えられる。その他、墓壙検出面では墓壙西側小口部分から鉄鏃(31)が検出された。棺内からは、棺西側小口部分で水銀朱と思われる赤色顔料が検出された。また棺中央北側では長側板に沿った形で、切っ先を東に向けた鉄剣1点(30)と鈍1点(33)が出土した。以上の状況から、第15主体部の被葬者は西側に頭位を置くかと推測される。

**第16主体部(第71図)** 第15主体部墓壙北東を切って造られた土器棺墓である。墓壙は、直径50cmの円形で棺本体には壺を正位置で用い、蓋には脚部を打ち欠いた高杯を逆位で用いていた。副葬品は出土しなかった。

**第17主体部(第72図)** 第15主体部の東側に位置し、主軸を東西方向にとる木棺直葬墓である。第15主体部を切る。墓壙は、北西側に攪乱を受けているが、地山面から掘削され、素掘りの形態をとる。墓壙平面形は隅丸長方形を呈する。規模は、検出



第71図 第16主体部実測図



第72図 第17主体部実測図

面で長軸2.65m・短軸1.0m・深さ0.7mを測る。

木棺痕跡は、墓壙を約55cm掘り下げた段階で検出された。第15主体部同様、木棺痕跡は棺材が淡黄褐色細砂に置き換わった状態で、極めて明瞭に識別することができた。木棺の構造は、長側板が木口板を挟み込むいわゆる「H」字形木棺である。また、断ち割りの結果、底板の上に長側板・木口板が乗る形状のものであることが明らかとなった。木棺の規模は、内法底部で長さ1.9m・幅0.4mを測る。木棺の幅は、ほぼ一定である。

遺物は、木棺材と墓壙の隙間に充填された土層中・木棺内流入土中から土器片が出土した。

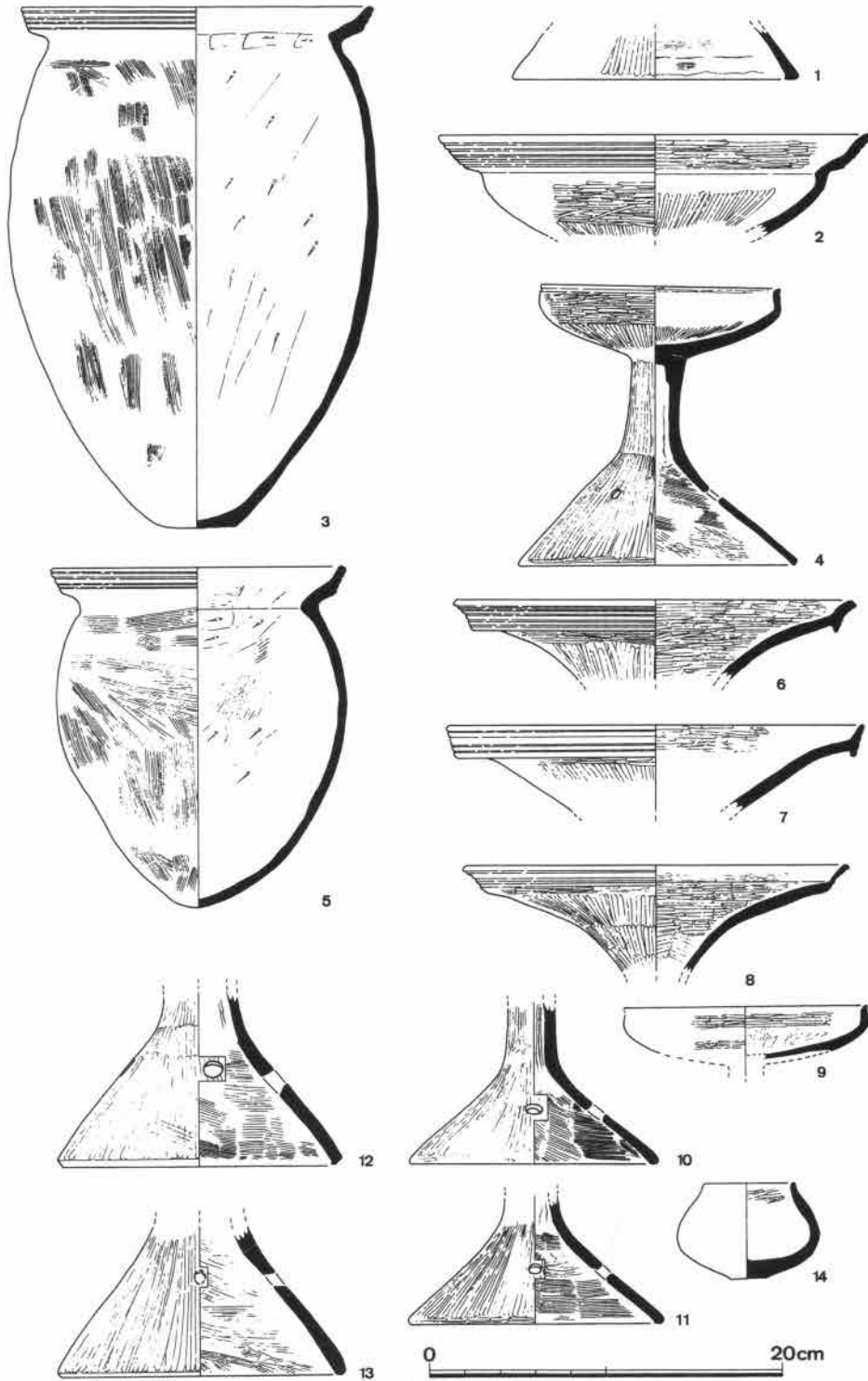
これらは、接合関係から1個体分の甕(15)であることが明らかとなった。出土状況から見て、墓壙内に木棺を組み立て、蓋を閉じた後に墓壙を埋め戻す過程の中でまかれたものと判断される。また、棺内西側小口部分から水銀朱と思われる赤色顔料が検出された。

### Ⅲ 出土遺物 金谷1号墓出土遺物には土器・鉄器・玉類がある。

**a 土器(第73～75図)** 金谷1号墓出土土器には、甕・壺・高杯・鉢・器台・蓋がある。各主体部から出土した土器は、点数的にもセット関係においても充実しているとはいいがたいため、ここでは全出土土器を対象に器種ごとに分類する。また、詳細については観察表(付表2)を付した。

**甕** 甕は5個体出土した。法量から2形態に分類し、大形のを甕A、小形のを甕Bとする。また、甕Aは形態的に3型式に、甕Bは形態的に2型式に細分できる。

**甕A 1**；第2主体部出土の甕(3)が相当する。平底・長胴気味の体部に、擬凹線を施す屈曲した口縁部を有する。調整技法は、外面が縦方向のハケを主体とし、内面が右上がり



第73図 出土土器実測図(1)



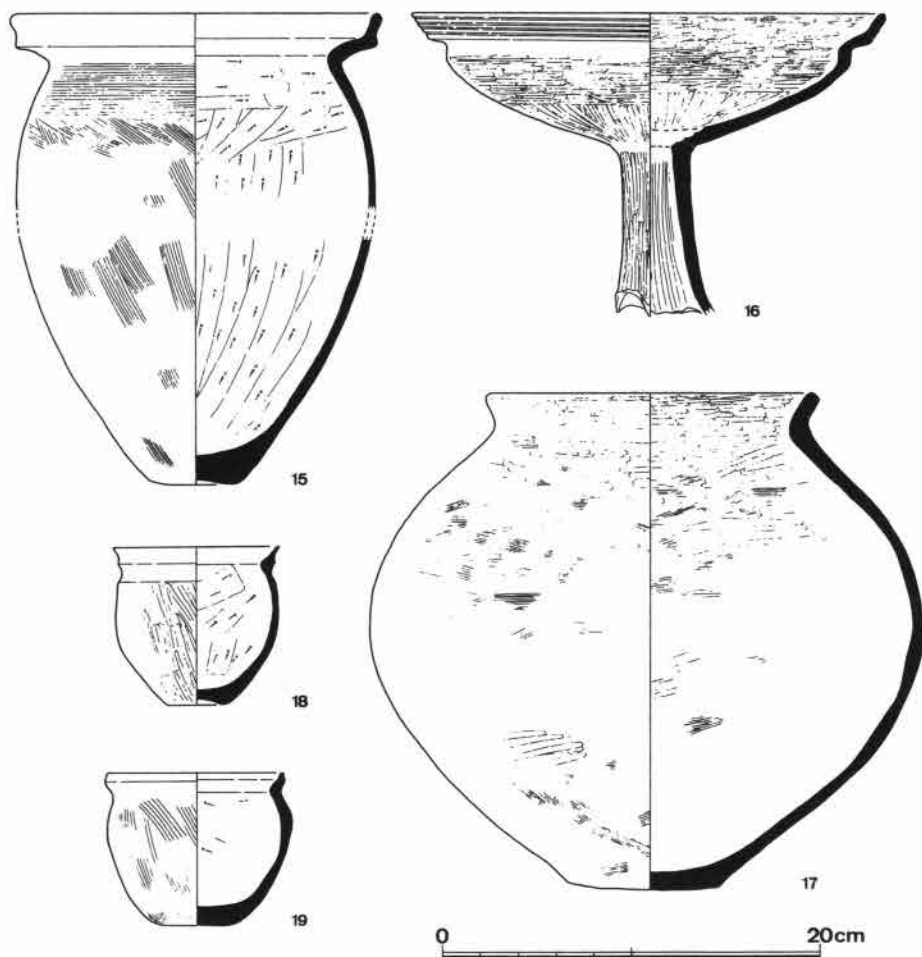
のケズリを主体とする。

甕A 2；第17主体部出土の甕(15)が相当する。全体的なプロポーションは甕A 1と同様であるが、口縁部はナデにより仕上げられ擬凹線は認められない。また、調整技法は、外面では体部上半に連続性の高い横ハケ、内面も上半は横方向のケズリが施される。

甕A 3；第12主体部出土の甕(5)が相当する。倒卵形の体部に、擬凹線を施す複合口縁をもつ。外面では体部上半に横ハケ、内面も上半は横方向のケズリが施される。

甕B 1；第10主体部出土の甕(18)が相当する。口縁下端部は稜をなし、底部はやや上げ底気味。体部外面は縦方向のヘラミガキ、内面には右上がりのヘラケズリが観察される。

甕B 2；第11主体部の甕(19)が相当する。口縁部は内面に湾曲し、体部は最大径が器高を上回る扁平なプロポーションを呈する。外面には縦方向のハケ、内面にはケズリが観察される。



第74図 出土土器実測図(2)

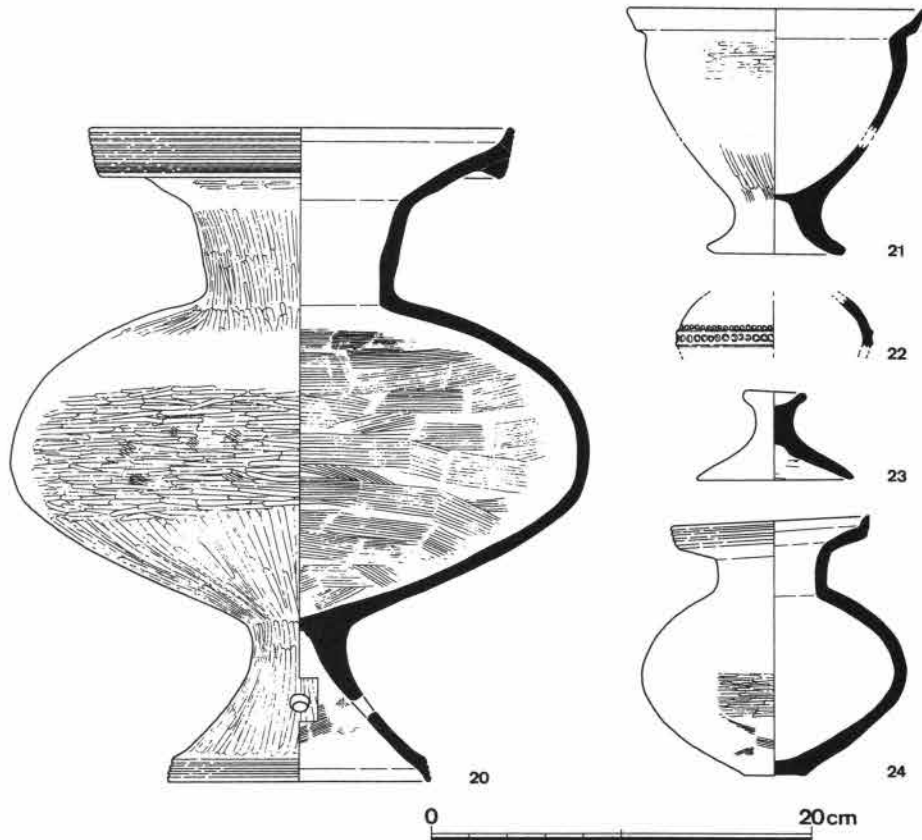
高杯 高杯はその形態から2型式に分類できる。

高杯A；大形で有段口縁を呈する杯部をもつ高杯である。第2主体部(2)と第16主体部出土(16)の2個体を図示した。第17主体部周辺及び東側テラスからも出土しているが、図示していない。

高杯B；第12主体部(4)、第15主体部の墓壙上面(9~11)から出土しているほか、図示していないが、墳丘西側斜面初期流土内からも出土している。いずれも、中空の脚柱部を有し、脚は直線的である。鉢部は浅く、端部をわずかに外上方へつまみ上げている。調整技法的には、脚内面に横方向のハケが施され、他はミガキが主体となる。また、脚端部外面を最終的に横方向のミガキにより仕上げる技法的な共通性をもつ。

鉢；墳頂部出土の1点(14)がある。どの主体部に伴うものかは不明である。全体的に磨耗が著しい。内面は横方向のヘラミガキが部分的に確認される。

台付鉢；墳丘西側流土中出土のもの(21)がある。脚部と体部は接合関係を持たないが、胎土・色調などから同一個体と判断し、図上で復原した。複合口縁を有し、口縁部はナデ



第75図 出土土器実測図(3)

付表2 出土土器観察表

NO	出土地点	器形	法量(cm)	調整		備考
				外面	内面	
1	第1主体部墓壙上	器台脚?	底径15.8	ミガキ(縦)	ハケ(横)	内面接合痕
2	第2主体部墓壙上	高杯	口径24.0	ミガキ(縦→横)	ミガキ(縦+横)	擬凹線5条
3	第2主体部墓壙内	甕	口径19.6・器高29.5・ 体部最大径21.0	ハケ(縦)	ケズリ(縦→横)	擬凹線4条・ 完形個体
4	第12主体部墓壙上	高杯	口径13.4・底径15.5・ 器高16.0	鉢部;ミガキ(縦→横)・ 脚部ミガキ(縦)	鉢部;ミガキ(縦+横)・ 脚部(ハケ)	口縁端部に1 条の沈線・ 完形個体
5	第12主体部墓壙内	甕	口径16.2・器高19.4・ 体部最大径16.5	ハケ(縦→横)	ケズリ(縦→横)	擬凹線4条・ 破碎供献
6	第12主体部北西	器台	口径22.4	ミガキ(縦→横)	ミガキ(横)	擬凹線5条
7	第15主体部墓壙上	器台	口径23.4	ミガキ(縦→横)	ミガキ(横)	擬凹線4条
8	第15主体部墓壙上	器台	口径21.4	ミガキ(縦→横)	ミガキ(横)	擬凹線3条
9	第15主体部墓壙上	高杯	口径13.6	ミガキ(横)	ミガキ(横+縦)	端部劣化
10	第15主体部墓壙上	脚	底径13.8	ミガキ(縦)	ハケ(横)・脚柱 部;絞り痕	高杯の脚部?
11	第15主体部墓壙上	脚	底径14.2	ミガキ(縦)+端 部ミガキ(横)	ハケ(横)	高杯の脚部?
12	第15主体部墓壙上	脚	底径15.5	ミガキ(縦)	ハケ(横)	器台の脚部?
13	第15主体部墓壙上	脚	底径15.8	ミガキ(縦)	ハケ(横)	器台の脚部?
14	第2主体部東側	無頸壺	口径5.0・体部最大径 8.0	磨耗	ミガキ(横)	磨耗著しい
15	第17主体部墓壙内	甕	口径19.0・器高25.0・ 体部最大径19.0	ハケ(縦→横)	ケズリ(縦→横)	口縁部はナデ による調整、 破碎供献
16	第16主体部転用蓋	高杯	口径24.8	杯部;ミガキ(縦→横)、 脚柱部;ミガキ(縦)	杯部;ミガキ(縦→横)、 脚柱部;絞り痕	脚部は打ち欠 かかれている。 擬凹線4条
17	第16主体部転用棺	短頸壺	口径17.0・器高26.2・ 体部最大径28.2	ハケ→ミガキ(横)	ハケ→ミガキ(横)	完形個体
18	第10主体部墓壙内	甕	口径8.6・器高8.4・ 体部最大径8.6	ミガキ(縦)	ケズリ	木棺固定土内 と棺内出土破 片接合、完形 個体
19	第11主体部墓壙上	甕	口径9.2・器高8.2・ 体部最大径9.8	ハケ(縦)	ケズリ	完形個体

20	墳丘西側斜面 初期流土	脚付壺	口径22.0・器高34.6・ 底径13.6・体部最大径 30.4	頸部；ミガキ (縦)、体部ミガ キ(縦→横)、脚 部ミガキ(縦)	体部；ハケ(横)	図上復原、口 縁擬凹線8 条、脚部擬凹 線3条
21	墳丘西側斜面 初期流土	台付鉢	口径15.4・器高13.0・ 底径6.6	ミガキ(縦+横)	磨耗著しい(部 分的にケズリの 痕跡)	
22	墳丘西側斜面 初期流土	壺		磨耗	磨耗	細片
23	墳丘西側斜面 初期流土	蓋	口径8.0・器高4.8	磨耗	磨耗	完形個体
24	東側テラス上	壺	口径10.4・器高13.5・ 体部最大径13.9	ミガキ(横)		口縁の一部を 欠く。擬凹線 4条

により仕上げられる。また、頸部直下に体部最大径をもつ。体部外面下半は縦方向のヘラミガキ、体部外面上半には横方向のヘラミガキが観察される。

器台；器台は総数で4点出土している。受け部の形態から2型式に分類する。

器台A；第12主体部周辺から出土したもの(6)と、第15主体部墓壙上から出土したもの(7)がある。いずれも、口縁部は粘土板を継ぎ足すことで上下に拡張し、擬凹線を施している。調整はヘラミガキによる。

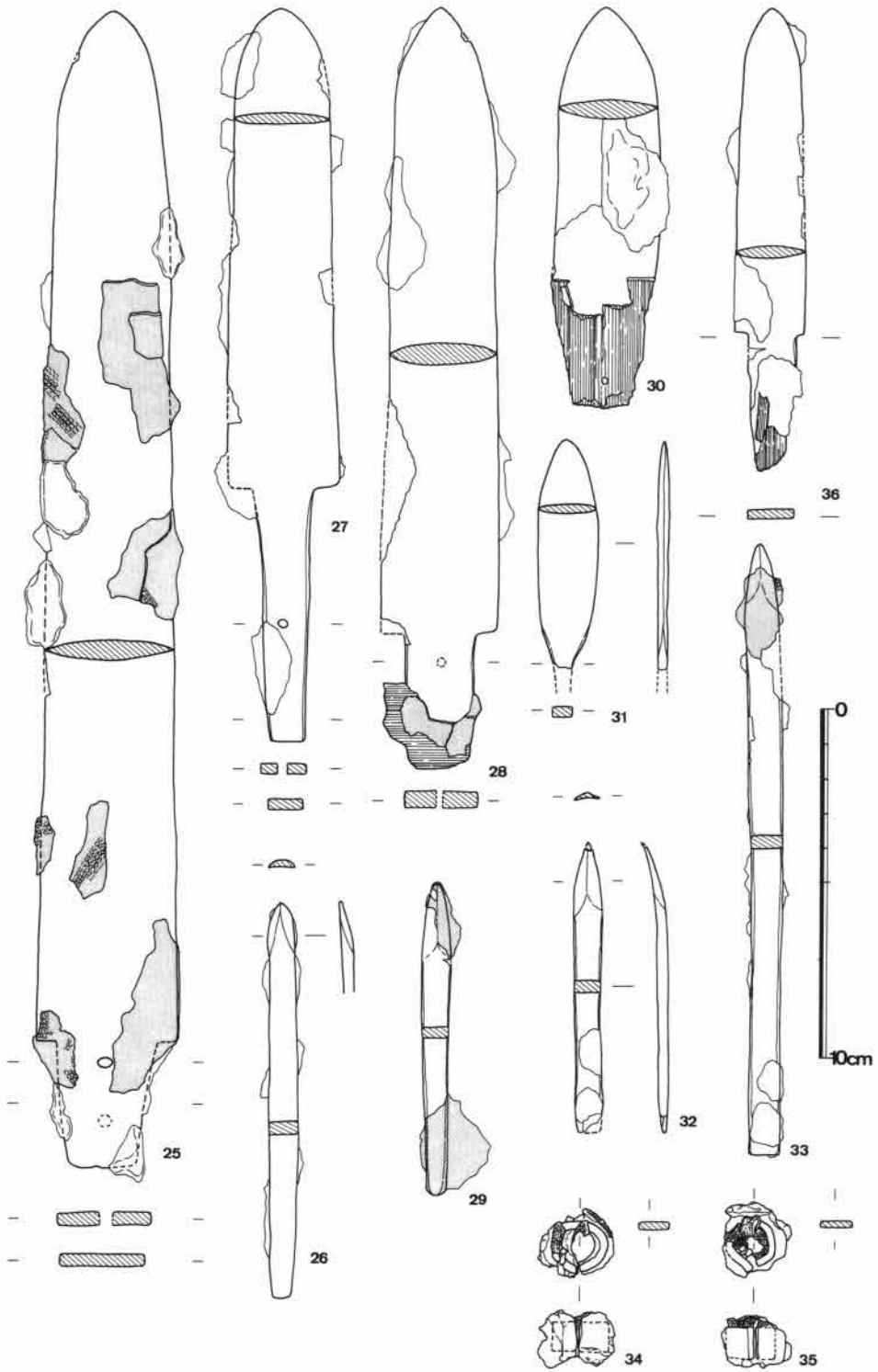
器台B；第15主体部墓壙上面から出土したもの(8)と、第13・14主体部周辺から出土したものがあ。前者のみ図示した。器台Aと異なり、口縁部は下方には拡張されず、上方に屈曲する。口縁部外面には擬凹線が施される。調整はヘラミガキによる。

壺 壺の形態は多様であり、同一型式として捉えられるものはない。装飾性の高いものとして、墳丘西側流土から出土した脚台をもつ壺(20)や、突帯と竹管文を施す壺(22)がある。また、第16主体部で土器棺として使用された壺(17)は直立する短い口縁部をもち、ヘラミガキにより調整される。墳丘東側テラス部分から出土した壺(24)は、直立する頸部に擬凹線を施す口縁部をもつ。

蓋 蓋は1点のみ、西側斜面から出土した(23)。どの器種とセットをなすかは不明である。調整については磨耗が著しく不明である。

b 鉄器(第76・77図) 鉄製品が出土した主体部は、第3・5・6・10・12・14・15主体部の計7か所である。

第3主体部からは、環状鉄製品(34・35)が出土した。厚さ2mm・幅9mmの鉄板を円形に曲げて造られている。内外面に布が付着しているが、特に内面に顕著に観察される。類例として兵庫県豊岡市鎌田・若宮墳墓群出土例<sup>(注14)</sup>をあげることができる。本製品については、用途・機能などについて明確にされていないが、被葬者の両脇腹付近から出土しているこ



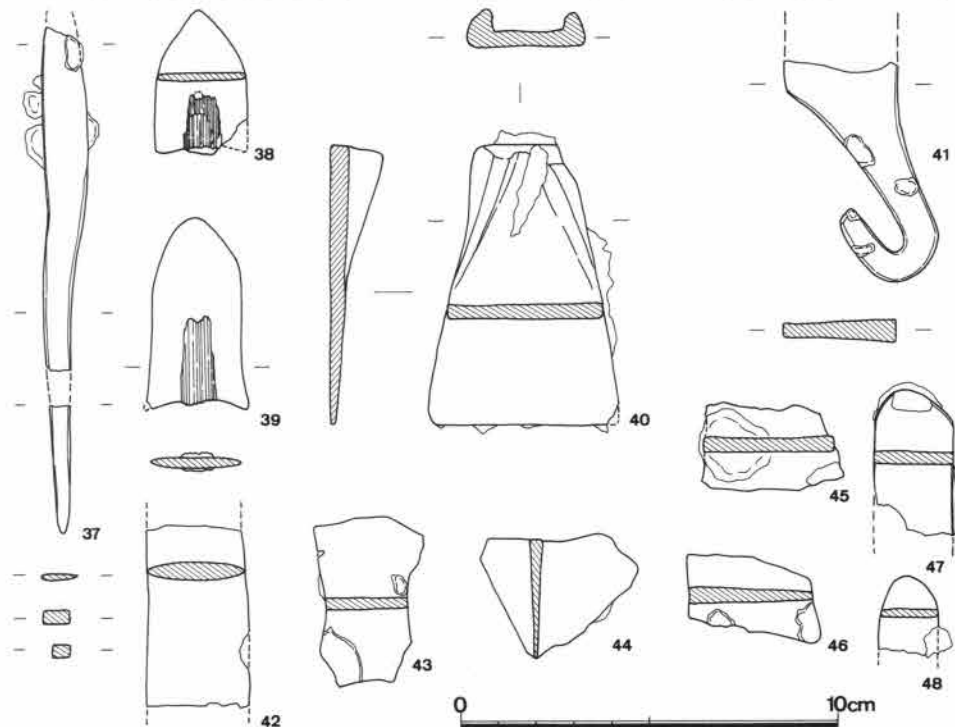
第76図 出土鉄器実測図(1)

と、内面に布が付着していることなどからみて、帯などに装着された服飾用の金具であった可能性を指摘しておきたい。

第5主体部出土鉄製品には剣(27)がある。全長21.2cm・刃部幅2.7cm・茎部長7.4cmを測る。刃部断面は、レンズ状を呈する。現状で茎部に1孔の目釘穴が確認される。なお、刀装具の装着痕は認められない。

第6主体部出土鉄製品には、剣(25)・鉞(26)がある。剣(25)は、全長33.4cm・刃部幅3.9cm・茎部長3.7cmを測る。刃部断面はレンズ状を呈する。現状で茎部に1孔の目釘穴が確認され、その下方にも円形のくぼみがあるため、2孔の目釘穴をもつ可能性がある。木製刀装具の痕跡は認められないが、全体に布が付着している。鉞(26)は全長11.4cmを測る。

第10主体部出土鉄製品には、棺内出土の鉄剣(36)と墓壙上出土の鉄製品(37~48)がある。鉄剣(36)は、全長13.2cm・刃部幅2.0cm・茎部長3.7cmを測る小形品である。刃部断面はレンズ状を呈し、茎部には木質が遺存する。刀子(37)は、欠損が著しく詳細は不明である。鉄鏃(38・39)は、平根の鏃である。両者とも鏃を挟み込んだ矢柄の木質が遺存する。なお、38には中央に円孔が確認される。鉄斧状鉄製品(40)は、長方形の鉄板の2隅を折り曲げて作られる。装着部が貧弱なこと、刃が作り出されていないことから実用品の鉄斧とは考えがたい。素環頭大刀状鉄製品(41)は、刃部を失った状態で出土した。細く作り出された柄



第77図 出土鉄器実測図(2)

部を鉤手状に折り曲げている。素環頭大刀の環頭部を模したものかと思われる。鉄剣(42)は、刃部の破片である。破碎された鉄剣の一部と判断される。不明鉄製品(43~48)は、いずれも板状の鉄製品を破碎したものと考えられ、本来の形状を復原することはできない。

第12主体部出土鉄製品には、棺内出土の鉈(32)がある。残存長8.1cmを測る。先端を若干欠損する。木質などの付着は認められない。

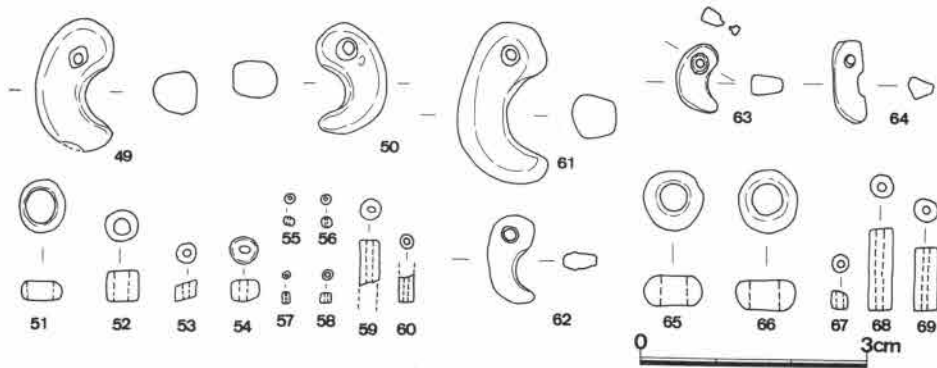
第14主体部出土鉄製品には、剣(28)・鉈(29)がある。鉈(29)は、剣に錆着した状態である。剣(28)は、全長21.8cm・刃部幅3.0cm・茎部長3.5cmを測る。刃部断面はレンズ状を呈する。現状で茎部に1孔の目釘穴が確認される。茎部には、茎に直交する形で木目の走る木質が遺存し、さらに木質の上には布痕が確認される。布は剣に錆着している鉈も覆っているため、最終的に剣と鉈を同時に布に包んだものと判断される。木質については柄と思われるが、通常木目が茎に並行するのに対し、直交している点が特徴的である。鉈(29)は全長9.0cmを測る。

第15主体部出土鉄製品には、棺内出土の剣(30)・鉈(33)、墓壙上出土の鏃(31)がある。鉈は、剣に錆着した状態である。剣(30)は、全長11.5cm・刃部幅3.0cm・茎部長3.5cmを測る小形品である。刃部断面はレンズ状を呈する。現状で茎部に1孔の目釘穴が確認される。茎部には木質が良好に遺存する。鉈(33)は、全長17.6cmを測り、刃部には布痕が観察される。鏃(31)は、残存長6.6cmを測る柳葉形の刃部をもつ鉄鏃である。

(石崎善久)

c 玉類(第78図) 玉類は、第2・3・11主体部から出土している。すべてを図示することはできなかった。なお、ガラス玉の観察は実体顕微鏡を利用して行った。

第2主体部出土玉類には、ガラス勾玉2点のほか緑色凝灰岩製管玉6点以上がある。ガラス勾玉(61・62)は風化が著しく、色調は白色を呈している。円孔部は、片面穿孔状に両端の径が異なっている。緑色凝灰岩製管玉は劣化が著しく図示できなかった。



第78図 出土玉類実測図

第3主体部出土玉類には、ガラス勾玉3点、ガラス小玉、ガラス粟玉、緑色凝灰岩製管玉、碧玉製管玉がある。ガラス小玉は、その形態から4種類に分類できる。51は、扁平で大きな円孔をもつものであり、1点のみ出土している。色調は、風化のためか灰白色を呈する。52は、管玉を切断したような形状を示し、5点以上出土している。破碎したものを観察する限り、円孔部に対し、気泡が平行に走っているため引き延ばし技法によると判断される。色調は、風化のため灰白色を呈する。53・54は、法量的にはほぼ一定の一群である。色調はやや濃いスカイブルーである。ガラス粟玉は、極めて小形の直径1mm前後を測る小玉である。形態的にはほぼ球形に近いものと管玉状のもの2タイプがある。気泡は、円孔部に対し平行に走る。色調は濃いコバルトブルーである。

第11主体部出土の玉類には、滑石製勾玉・翡翠製勾玉1点・ガラス小玉・碧玉製管玉がある。滑石製勾玉(63)は、半月状の扁平な小形の勾玉である。穿孔は両面からなされ、穿孔部断面の観察結果から、穿孔具の先端部は球形をなしていたものと考えられる。翡翠製勾玉(64)は、やや角張った形態を示し、断面は不整形な三角形を呈する。穿孔は片面穿孔である。ガラス小玉には2種類が認められる。大きく扁平なもの(65・66)と小形のもの(67)である。前者は径8mm前後を測り、色調は風化のためか灰白色を呈する。後者は径2mm前後を測る小形品であり、気泡が円孔部に対し平行に走ることから、引き延ばし技法によると考える。色調は鈍いコバルトブルーであり、2点出土した。碧玉製管玉(68・69)は2点あり、長さが若干異なる。両面穿孔である。

(高橋あかね・石崎善久)

#### 4. ま と め

上記のように、金谷1号墓は複数の埋葬施設をもつ墳丘墓であることが明らかとなった。また、木棺には舟形木棺・箱形木棺・土器棺が採用され、副葬品には鉄器・玉類などが認められた。以下、簡単に、この墳墓の調査結果から派生する問題点などを整理する。

**金谷1号墓の年代観** この墳墓の年代を決定する遺物として、埋葬施設・墳丘などから出土した土器について検討したい。出土した器種については、甕・高杯・器台・壺などがある。これらの内、甕・高杯・器台は、施文に主として擬凹線を用いていることや、形態的特徴から、丹後半島部における弥生第V様式の範疇で捉えることができる。

今回の調査では、単一の主体部における一括資料に乏しく、厳密なセット関係などについては不明である。比較的多くの土器が出土した第15主体部の土器には、2種類の器台、高杯が認められる。このうち、口縁部の垂下しない器台(8)は、加悦町白米山北古墳<sup>(注13)</sup>に類例が認められる。白米山北古墳では河内産と考えられる加飾壺が出土しており、その年代



観は庄内式期の範疇で捉えることができる。また、白米山北古墳出土の台付鉢における施文の主体は、擬凹線である点が注目される。口縁部を上下に拡張する器台(7)は、白米山北古墳では出土していないが、同種の器台は丹後地域では墳墓・集落からも普遍的に出土しており、弥生第V様式通有の形式であると考えられる。

墳丘西側斜面初期流土中出土の土器中には装飾性の高い壺が含まれる。中でも、竹管文を多用し突帯を有する壺(22)は、弥栄町大田4号墳土坑1(#16)や古殿遺跡に類例を求めることができる。そのほか、図示はできなかったが、高杯Bなども出土しており、大田4号墳土坑1と類似した内容といえる。高杯Bは、野田川町西谷墳墓群(#17)でも出土しており、いずれも第V様式新段階として捉えられている。この流土中出土の土器については、遺構との相関関係を明確にできなかったが、出土位置からみて第1主体部の墓壇埋め戻し後に使用、投棄された一群である可能性が高い。

以上の諸点から、現段階では金谷1号墓出土土器は、弥生第V様式末頃から庄内式並行段階の年代観を考えておきたい。

**木棺形式について** 金谷1号墓では組合式箱形木棺(「H」字形木棺を含む)と刳り抜き式舟形木棺の2者が採用されていることが明らかとなった。弥生時代後期の木棺で舟形木棺を採用していると報告されたものは知見による限り確認できない。ただし、弥生時代後期の可能性がある奈良県大福遺跡出土の刳り抜き式の木棺や、大阪府瓜生堂23号墓など、刳り抜き式の木棺は、少数例ながら存在するようである。その他、大阪府東奈良遺跡では舟材を再加工した木棺が検出されているが、舟形木棺として定型化したものではない。金谷1号墓の場合、一定の割合で舟形木棺が採用されている点からみて、木棺の形式として定着しており、偶然、舟材などが転用されたとは考えにくい。また、舟形木棺にも、一方の小口平面が鋭角的に造られているものと、両小口ともゆるやかなカーブを描くものの2種類がある。後者のタイプのような舟形木棺は、丹後半島の古墳にも採用されている。いくつか例示するならば、画文帯環状乳神獸鏡が出土した峰山町大田南2号墳(#18)や初期群集墳の中核的存在である大宮町左坂B2号墳など、前期古墳を中心に類例が増加しつつある。ただし、金谷1号墓で検出された舟形木棺が古墳時代に直接つながるものであるかどうかは今後の検討課題である。

箱形木棺は、棺材が明瞭に確認されたものでは、いずれも底板の上に棺材がのり、長側板が木口板を挟み込む構造であった。木棺の規模や構造は、大宮町左坂墳墓群・三坂神社墳墓群と大きく変わるものではなく、伝統的な弥生時代の木棺と同形態と考える。

**副葬品について** 金谷1号墓では、副葬品として鉄製品・玉類の2種が認められた。また、このほかに水銀朱と考えられる赤色顔料が納められていたものもある。丹後半島にお

いては、鉄剣の副葬が確認された弥生時代後期から庄内併行期の墳墓として大宮町帯城墳墓群、弥栄町坂野丘遺跡、同町大田4号墳下層土坑1、加悦町白米山北古墳、同町内和田古墳群<sup>(注19)</sup>などがあり、弥生時代後期後半以降、鉄剣の副葬が増加すると思われる。一方、玉類の副葬は丹後半島では大宮町三坂神社墳墓群、左坂墳墓群、弥栄町坂野丘遺跡、丹後町大山墳墓群を例示することができ、弥生時代後期でも前半のものが多く注意される。これらの内、同一遺跡内もしくは同一主体部で鉄剣と玉類の共伴が確認された例は坂野丘遺跡第2主体部のみである。こうした状況から、鉄剣を副葬する弥生墳墓と玉類を副葬する弥生墳墓は、ある程度時期的な差をもって捉えることが可能かと思われる。金谷1号墓の場合、同一墳墓で出土した鉄剣以外の鉄器の総量としても多く、しかも玉類をもつ主体部も存在する点は、他の弥生から庄内併行期の墳墓には認められないことが注意される。

また、副葬品ではないが、鉄製品の特異な出土状況として、第10・15主体部墓壙上で鉄製品が検出された点をあげることができる。これらの鉄製品は、副葬品と考えるよりは、墓壙上面で行われた祭祀などに使用されたものとする。類例として、大田4号墳下層土坑1では破碎した鉄剣を墓壙上に供献していた。また、白米山北古墳では、主体部とは離れた祭祀場で鉄鍬が出土している。その他、内和田5号墳では墓壙上に2点の銅鍬が供献されており、弥生時代後期末から庄内期にかけての墳墓で認められる現象と考えられる。

**結語** 以上、いくつかの点について簡単ではあるが、まとめを行った。その結果、金谷1号墓は次のような特色を有する墳墓であると考えることができる。

①墳丘は、独立した墳丘を持つ方形台状墓である。なお、墳丘東側に祭祀を実施する場としてテラスが造成されている。類似した施設を持つ墳丘墓として加悦町白米山北古墳をあげることができる。

②埋葬施設は、舟形木棺・箱形木棺を直葬する形態のものが主体を占める。

③築造は、第1主体部が築造契機になったと考えられ、弥生時代後期末から庄内併行期にかけて造墓活動を継続している。

④副葬品の質・量とも当該期墳墓としては豊富である。

近年、弥生時代後期末から庄内期にかけての墳墓の調査数が多くなってきたとはいえ、当該期の墳墓の調査例はまだ少ないといえる。同時期の墳墓の調査の増加に期待するとともに、他地域との比較検討を行っていく必要があると考える。

(石崎善久)

注1 調査参加者は下記のとおりである。

中前幸子・中村智孝・保坂 亨・高橋あかね・鈴木弥生・奥井 愛・中村英之・佐藤 謙・細山田章子・渡辺 努・小坂至道・菱川優子・酒井 隆・柴田涼子・近藤奈津子・笠原利恵子・

安田夏子・石田春彦・白杵ひかる・上野真理子・馬場隆一・中村澄江・中村吉次・安田安二・四方めぐみ

なお、現地調査ならびに本概要作成に関して、関係諸機関をはじめ、以下の方々からご協力・ご教示を賜った。記して謝意を表する。

峰山町教育委員会・都出比呂志・石野博信・辰巳和弘・佐藤晃一・加藤晴彦・今田昇一・肥後弘幸・森 正・鍋田 勇・細川康晴(順不同・敬称略)

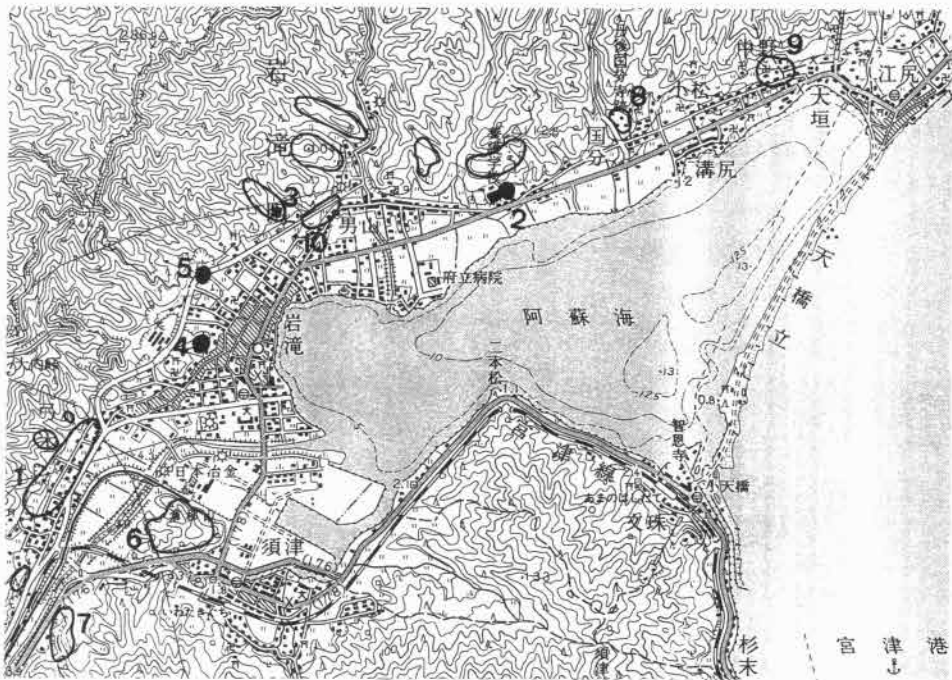
- 注2 平良泰久ほか「竹野遺跡」(『京都府丹後町文化財調査報告』第2集 丹後町教育委員会) 1983
- 注3 平良泰久ほか「丹後大山墳墓群」(『京都府丹後町文化財調査報告』第1集 丹後町教育委員会) 1983
- 注4 釋 龍雄ほか「坂野(坂野丘遺跡・坂野4号墳発掘調査報告書)」(『京都府弥栄町文化財調査報告』第2集 弥栄町教育委員会) 1979
- 注5 奥村清一郎ほか「奈具岡遺跡第3次発掘調査報告書」(『京都府弥栄町文化財調査報告』第4集 弥栄町教育委員会) 1986
- 注6 坪倉利正ほか「途中ヶ丘遺跡発掘調査報告書」(『京都府峰山町文化財調査報告』第3集 峰山町教育委員会) 1977
- 注7 坪倉利正ほか「扇谷遺跡発掘調査報告書」(『京都府峰山町文化財調査報告』第2集 峰山町教育委員会) 1975
- 注8 田中光浩ほか「七尾遺跡発掘調査報告書」(『京都府峰山町文化財調査報告』第8集 峰山町教育委員会) 1982
- 注9 田中光浩ほか「カジャ遺跡発掘調査報告書」(『京都府峰山町文化財調査報告』第5集 峰山町教育委員会) 1978
- 注10 戸原和人・鍋田 勇ほか「古殿遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第9冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 注11 岡田晃治ほか「帯城墳墓群発掘調査概要1」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1985)』 京都府教育委員会) 1985
- 注12 大宮町教育委員会「三坂神社墳墓群現地説明会資料」
- 注13 大宮町教育委員会「左坂墳墓群現地説明会資料」
- 注14 瀬戸谷皓「豊岡市鎌田・若宮古墳群」(『豊岡市文化財調査報告書集 1989年度』 豊岡市教育委員会) 1990
- 注15 河野一隆「国道176号関係遺跡発掘調査概要 (3)白米山北古墳」(『京都府遺跡調査概報』第57冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994
- 注16 増田孝彦ほか「丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡平成元年度発掘調査概要(1)太田・下後古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第39冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990
- 注17 『京都府弥生土器集成』 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989
- 注18 肥後弘幸「大田南2号墳」(『京都府弥栄町文化財調査報告』第7集 弥栄町教育委員会) 1991
- 注19 森 正「176号関係遺跡発掘調査概要 (1)内和田古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第49冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992

## 4. 定山遺跡第4次発掘調査概要

### 1. はじめに

定山遺跡は、京都府与謝郡岩滝町字弓木に所在する(第79・80図)。これまで、弓木地区のは場整備事業に伴って第1・2次調査が、府営住宅石田団地の建設工事に伴って第3次調査がそれぞれ実施された<sup>(注1)</sup>。そして、縄文時代から平安時代の遺構・遺物が出土し、複合遺跡としての性格が明らかとなった。今回の調査も府営住宅石田団地の建設に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。調査は、当調査研究センター調査第2課調査第2係長奥村清一郎、同調査員黒坪一樹が担当した。調査面積は約400m<sup>2</sup>で、調査期間は平成6年6月22日～7月23日である。調査に係る経費は全額京都府道路公社が負担した。

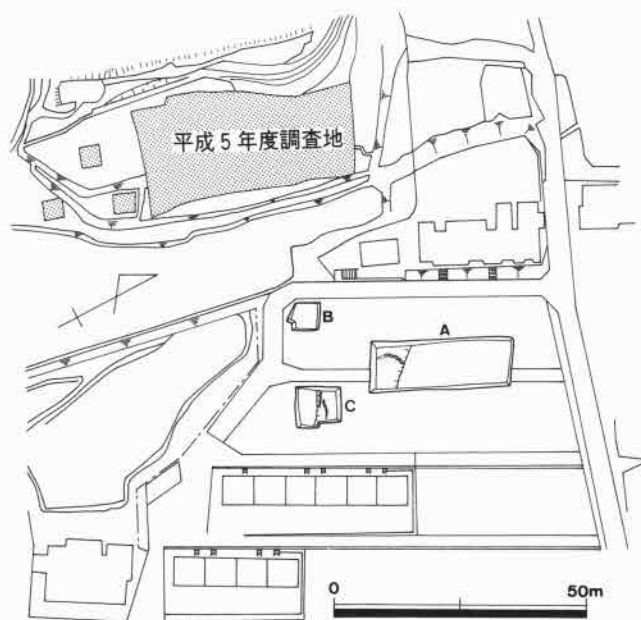
なお、岩滝町教育委員会には、調査を実施する上でさまざまなことに多大の便宜を図っていただいた。特に、同教育委員会の白数真也氏、石田地区区長白数伍郎氏、京都府教育



第79図 調査地及び周辺主要遺跡分布図(1/50,000)

- |           |           |           |         |           |
|-----------|-----------|-----------|---------|-----------|
| 1. 定山遺跡   | 2. 法皇寺古墳  | 3. 千原2号墳  | 4. 日内古墳 | 5. 岩滝丸山古墳 |
| 6. 倉梯山古墳群 | 7. 霧ヶ鼻古墳群 | 8. 丹後国分寺跡 | 9. 中野遺跡 | 10. 千原遺跡  |

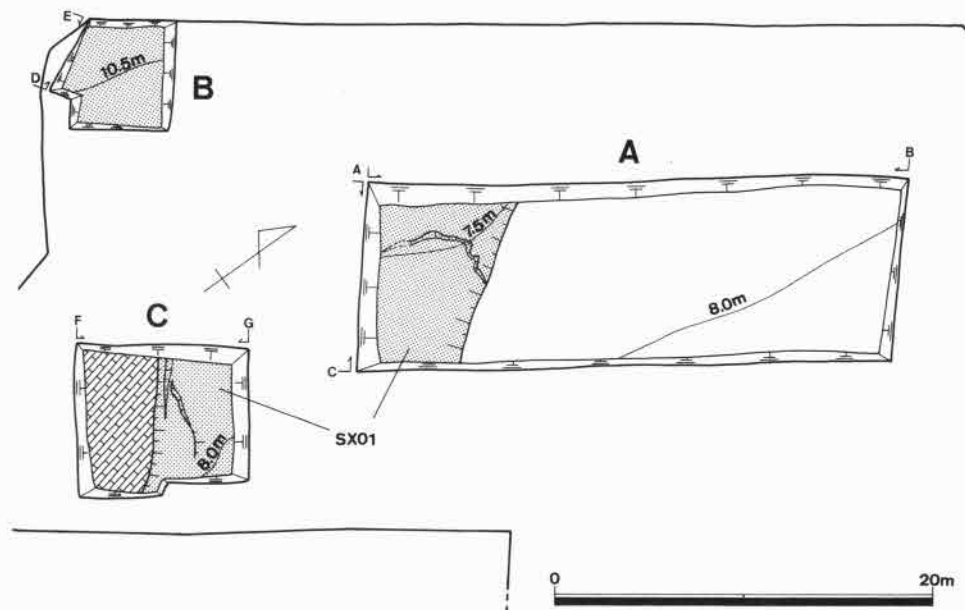
庁指導部文化財保護課技師の肥後弘幸氏、丹後郷土資料館の長谷川達氏からは、専門的な見地から有意な教示を受けた。さらに、地元<sup>(注2)</sup>の作業員、整理員の方々には記録的な猛暑にもかかわらず熱心に作業をこなしていただいた。以上の方々に心から御礼申しあげたい。



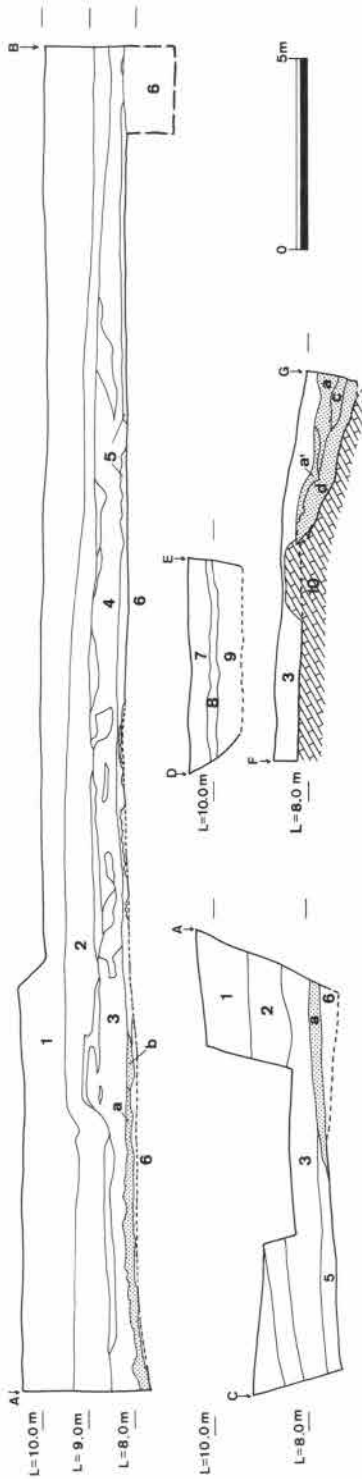
第80図 トレンチ配置図

## 2. 調査経過及び層位

調査は、古い建物撤去後の6月22日から開始した。基本的に建物の建つ範囲である3か所に調査区を設定し、重機で攪乱層・耕作土層を除去し、その後人力による精査に入った。調査区は、共同住宅建設部をA区(280 $\text{m}^2$ )、浄化槽部をB区(20 $\text{m}^2$ )、集会場部をC区(100 $\text{m}^2$ )とした(第81図、



第81図 検出遺構平面図



第82図 土層断面図

- 1. 盛り土
- 2. 暗灰色砂質土
- 3. 暗褐色細砂
- 4. 暗青灰色細砂
- 5. 暗灰褐色粘質土
- 6. 暗灰色細砂
- 7. 暗褐色粘質土
- 8. 暗灰褐色粘土
- 9. 暗茶褐色粘質土
- 10. 暗黄褐色砂質土(地山)
- a~d. 茶褐色系粘質土(SX01埋土)

図版第71-(1))。掘削の結果、洪水堆積物で古墳時代の包含層である第2～4層下は、A区南半部に深さ約2.5mのところ、茶褐色粘質土(第82図a)の広がりがみられ、ここから多くの土器や木器が出土した。茶褐色粘質土(同図a)は沼地状の窪みに集積したものと考え、そこをSX01とした。A区の北半部は、洪水堆積物である暗灰色細砂(同図6)の厚い堆積がみられ、河床を形成していた。この暗灰色細砂層は、ラミナ状に暗褐色粘質土を薄く挟みながら2m以上堆積していた。SX01は、ある時期の河床面に形成されたものといえる。B区では厚い暗茶褐色粘質土(同図9)の堆積があり、弥生土器・土師器・須恵器などが出土したが、顕著な遺構はなかった。C区では、南半部に暗黄褐色砂質土(同図10)の地山面がみられ、北半部は急激に河床面に向かって落ち込み、そこに茶褐色粘質土(同図a～d)を主とする堆積がみられた。そこもA区SX01の続きと考え、SX01と呼称した。各調査区の写真撮影・実測・遺物の取り上げなどを行い、7月23日にすべての作業を終了した。

### 3. 遺構

遺構は、A・C区に広がる沼地状の落ち込み(SX01)である(第83図、図版第71・72)。河床の窪みに暗褐色粘



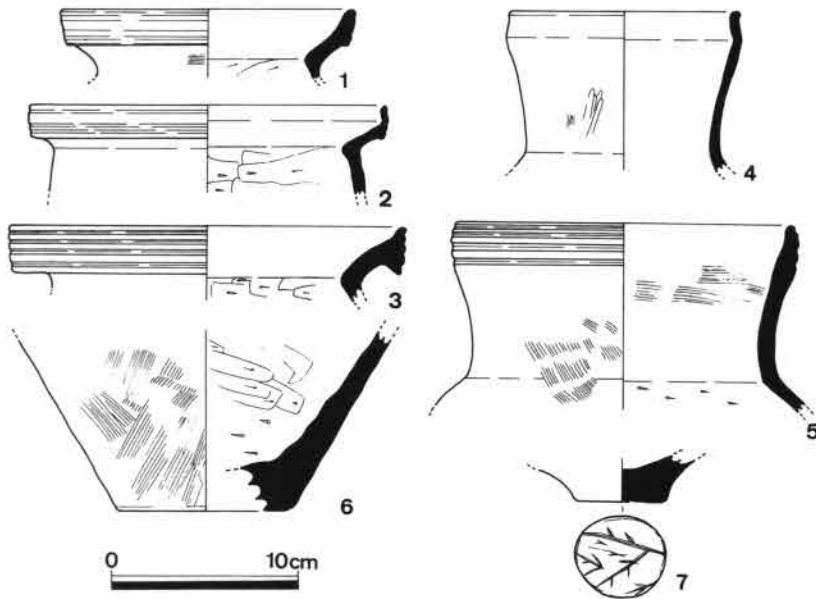
第83図 SX01平面図

質土が溜まり、深さ約1～0.2mの厚さで堆積する。広さは東西15m分・南北17m分を測る。河川の氾濫あるいは土砂崩れにより流された遺物がまとまって出土した。弥生時代中期～古墳時代の幅広い時代のものであるが、古墳時代後期が中心である。土師器・弥生土器の磨滅は顕著で、河川の流れはかなり激しかったようである。

## 6. 出土遺物

### A. 弥生土器(第84図、図版第73-(2))

甕や壺などで、底部・口縁部片からみておよそ十数個体である。ほとんどA・C区SX01からのものであるが、2と3のみB区第9層から出土。1～3は、甕である。1と2は擬凹線、3は明瞭な4条の凹線を口縁部に施す。4・5は、壺である。4は、有段口縁の細頸壺である。外面に細かいミガキ調整がみられ、赤く焼かれる。5は、4条の凹線文がめぐる細頸壺である。外面に左上がりのハケ調整。6・7は、壺または甕の底部断片。7には木の葉痕がみられる。1・2・4・6は畿内第5様式、3・5・7?は畿内第4様式である。

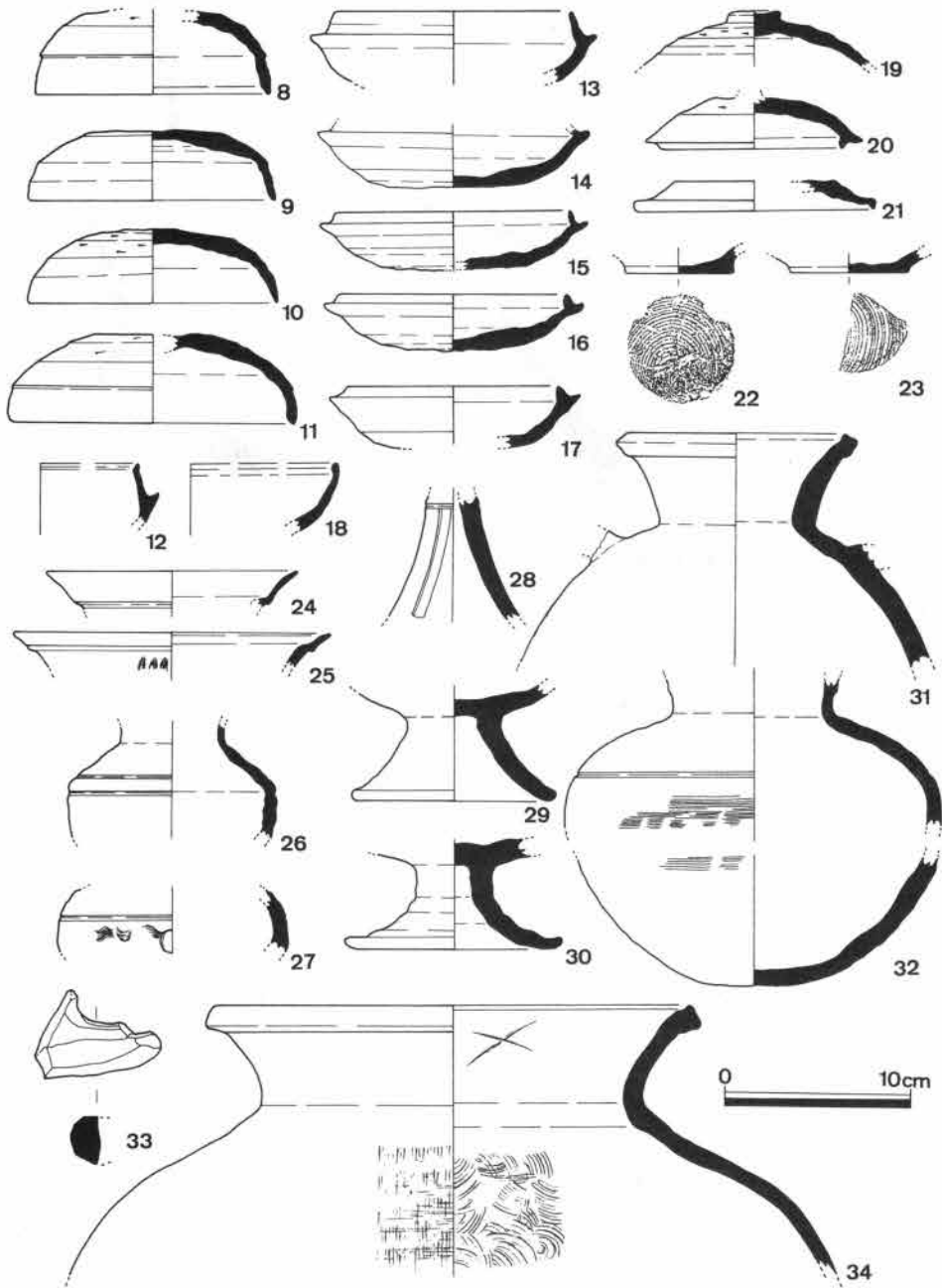


第84図 弥生土器実測図

## B. 須恵器(第85図、図版第74)

量的にはコンテナ4箱分である。B区第8層中の12とC区第3層中の21以外は、すべてA・C区のSX01中から出土した。8～11・12～18は、杯蓋・杯身である。8は、口縁端部に段をもち、頂部はていねいにヘラ削りされる。9は、口縁端部に段はないが角度がつく。頂部の調整は粗いナデである。10は、頂部にヘラ切り後ナデ調整。11は、口縁部にゆるやかな段をもち、頂部はていねいにヘラ削りされる。8と11はTK209(陶邑編年に併行、以下同じ)、9・10はTK217にほぼ比定される。杯身である12は、かえり部がやや他のものより長く、端部に段をもつ。13～17は、かえり部も短く、頂部(底部)はヘラ切り後に粗いナデ調整を施すものが多い。12はTK10、13はTK209、14～17はTK217である。なお、TK10のタイプはごく少量である。18は、ナデ調整で端部を玉状に丸くおさめるもの。これ1点のみで時期は不明。19～21は、蓋である。19は、中央部が凹むつまみを有し、頂部はていねいにヘラ削り、中間部は強いナデ調整である。20のつまみ部は欠損している。頂部にていねいなヘラ削り、内・外面のナデ調整はていねいである。21は笠形の蓋で、内・外面ともナデ調整による。19・20はTK217、21は奈良時代である。22・23は、平安時代の回転糸切り痕をもつ杯か壺の底部である。24～27は、甕の断片である。28は長脚、29・30は短脚の高杯である。31は把手付き壺、32はやや肩の張った体部をもつ蓋短頸壺である。33は、粗い面取りをした把手の断片である。34は中型の甕である。31・32・34は、TK209～TK217の時期にほぼ比定される。

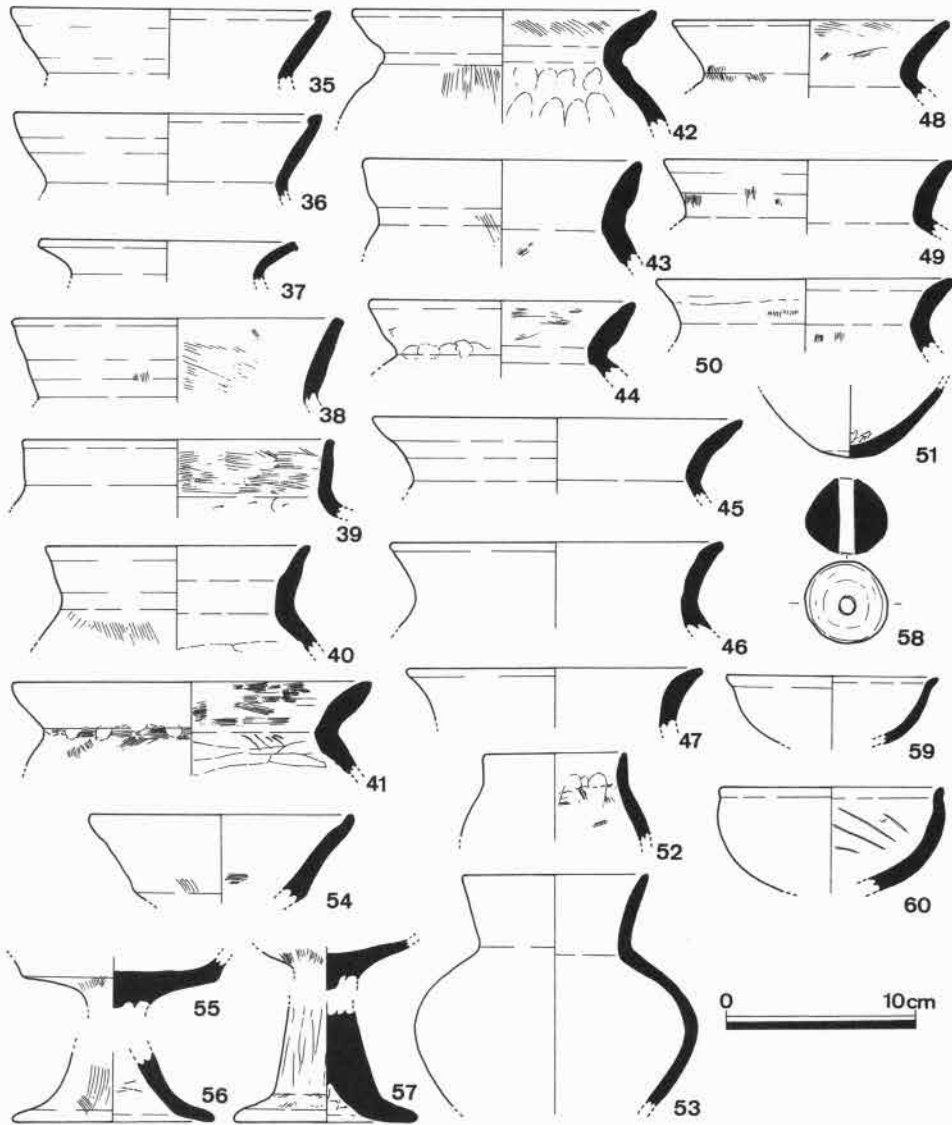




第85図 須恵器実測図

C. 土師器(第86図、図版第74)

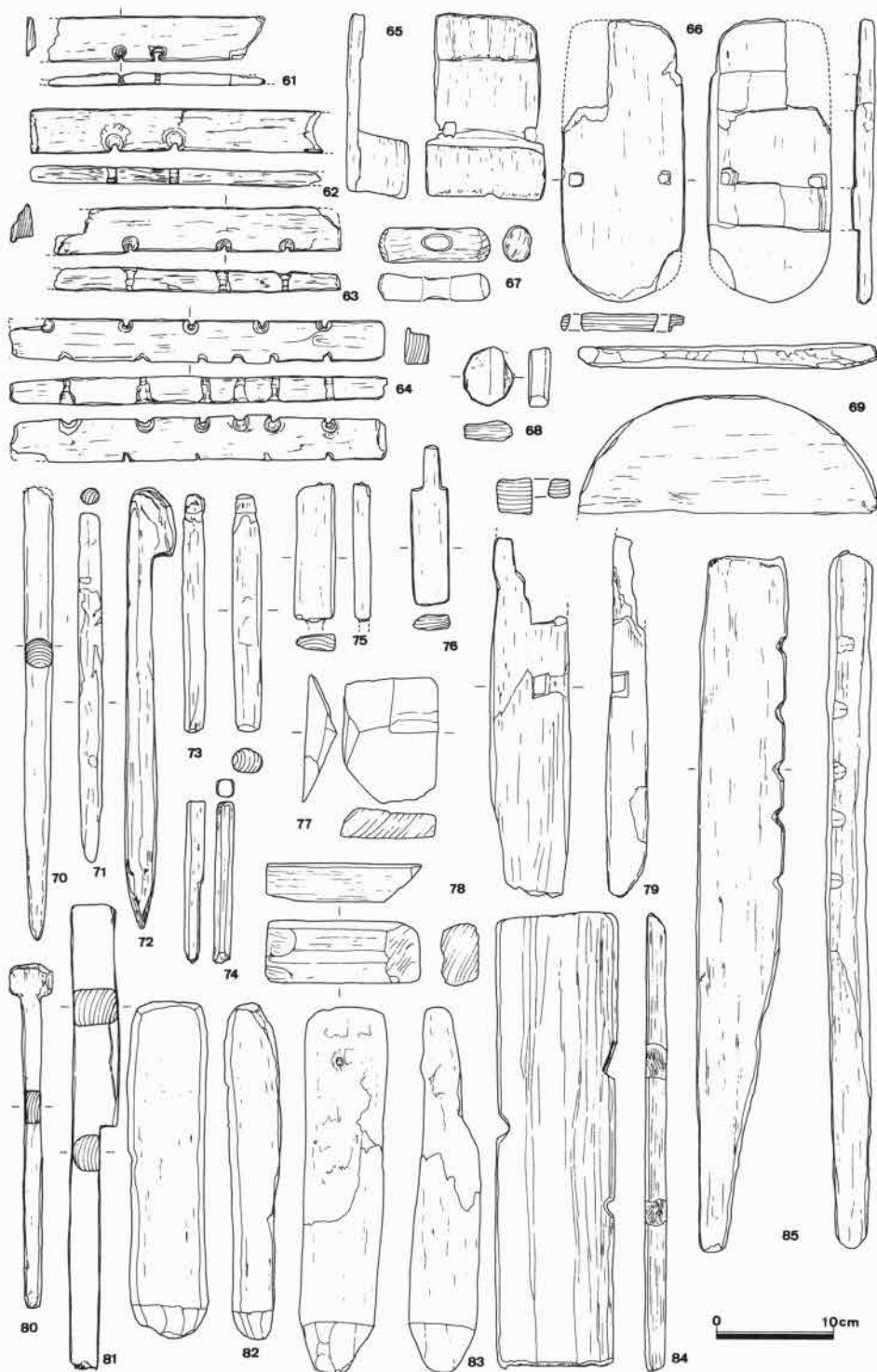
量的に最も多い。コンテナ約10箱分である。すべてS X01からのものを図化した。器種は甕・高杯が圧倒的に多い。35～50は甕である。35と36は、端部に折り返しをもつ布留式



第86図 土師器実測図

期の甕である。37は、端部に面をもち、やや外にふくらみをもつ。38・39・48は、急な立ち上がりをもち、端部にわずかに水平または外傾する面をもつ。37～39の胎土は砂混じりで粗い。40は、中間からつぎ足したように細く立ち上がったもの。41～44は、端部が肥厚し、体部との境にナデ及び指頭圧による粗い調整が施されたもの。45～47・49・50は、内面の強い横ナデにより外反する。51は、甕の底部で、わずかに面が残る。

52は、小型の短頸壺。53は、細頸壺で赤く焼かれる。54～57は、高杯の杯部・脚部の断

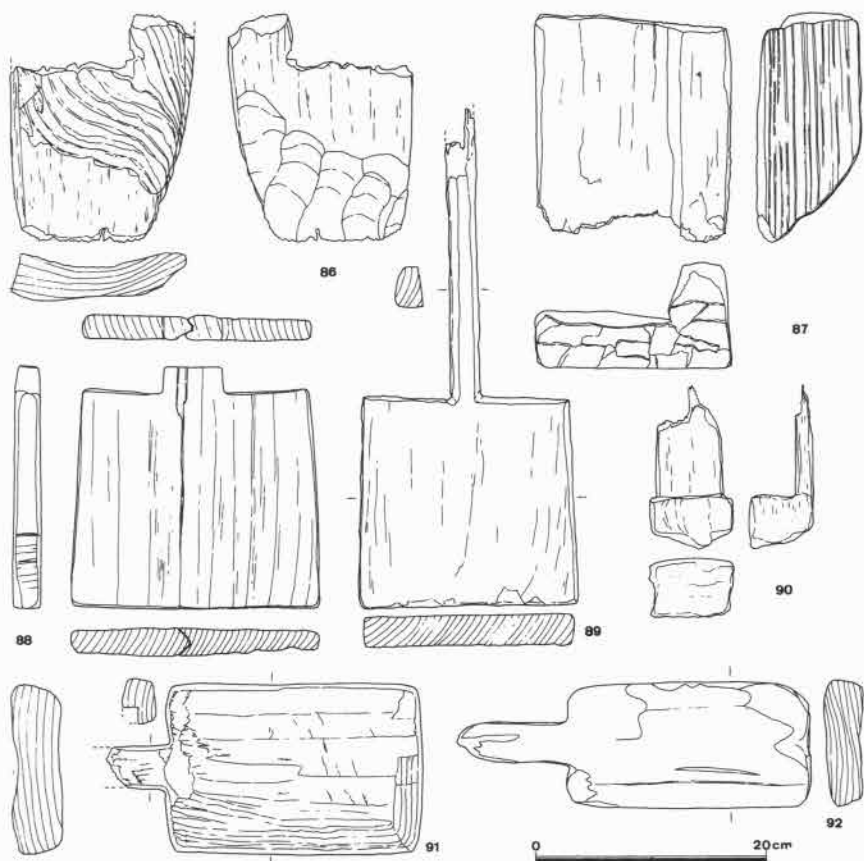


第87図 木器実測図(1)

片である。58は、穿孔がある球形の土錘。59・60は、杯である。59は、端部が外反する。60の内面には左上がりの暗文が施され、赤褐色の仕上がりをもつ。多くの土師器は弥生土器と同様、流れによる磨滅が著しく、時期も不明なものが多い。甕の41～47・49、杯60などからみると、およそ古墳時代後期の資料群であろう。

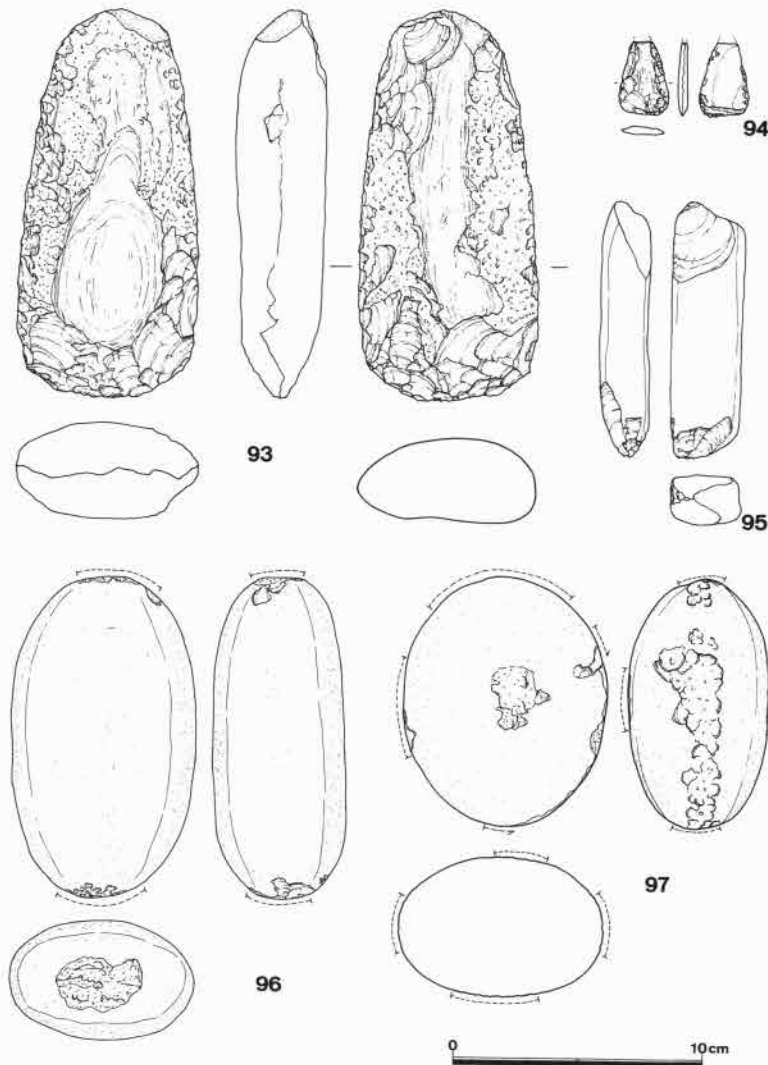
#### D. 木器(第87・88図、図版第75・76)

何らかの加工痕をもつものが45点あり、内36点を図化した。67をのぞき、A・C区SX01から出土。量的に安定しているSX01出土の土器群からみて、古墳時代後期のものであろう。61～64・85は、火鑽白である。64のみ相対する2面が使われている。65・66は、柾目材をつかった連歯の下駄である。65で見ると、やや「ハ」の字に歯がひらく。67は木槌の槌部または把手である。これのみA区北端の第5層中から出土。68は、周囲が周囲が頭



第88図 木器実測図(2)

著に面取られた栓と思われる。69は、桶の底板で他に1点ある。70・71は、火鑽杵と思われる。73は、有頭棒である。74は、面取りをもつ棒状木製品。72・75～81・84・87・88・90も何らかの部材と思われる。72は、頭部片側に抉りをもち、先端を尖らせたもの。77は、大きく面取られた切断材。78は、一端を斜めに切った部材である。79は、四角い柄穴がつけられた部材。82・83は、竪杵で先端部が面取りされる。84は、側縁に刻み目をもつ板材。86は、刳物木製品で表面は滑らかに皿状となり、裏面は粗いノミ痕が数面見られる。87は、左側縁と上半部を欠損するが、厚い杓状木製品であろうか。下半裏面に粗いノミによる面取りがある。88・89・91・92は、柄をもつ叩き板あるいは布巻のようなものである。



第89図 石器実測図



第90図 S X01実測風景

### E. 自然遺物

図化していないが、A区S X01から桃の果核が十数点出土している。

### F. 石器(第89図、図版第76)

6点ある。すべてS X01から出土した。時期は弥生時代中期であろう。93は、磨製石斧の未製品である。体部に整形のための敲打痕、刃部に表裏からの剝離調整痕が認められる。緑がかった変成岩製。94は、稚拙な仕上がりの石鏃である。薄い剥片の縁辺部に粗い加工痕がある。安山岩製。95は植石で、石器製作具である。両先端部に強い打撃による剝離面が形成されている。頁岩製。96・97は敲石で、植物食利用具である。96は両先端部に、97は表裏中央部と側縁部に敲打痕がある。ともに花崗岩製。もう1点は96と同タイプの敲石である。

### 7. ま と め

今回の調査では弥生時代・古墳時代・奈良時代の遺物を包含する沼地状の落ち込み(S X01)を検出した。調査地は、全体に暗青灰色細砂の河床面が広がっており、野田川に注ぎ込む支流または本流の氾濫原にあたっている。したがって、集落の住居跡や墓などは確認されなかった。一昨年の第3次調査では、古墳時代後期(T K217)の竪穴式住居跡・土

坑・鍛冶炉などが検出され、今回の調査地はそのすぐ南側である。レベル的にかなり下の丘陵裾部であるが、遺物群に共通する要素が認められた。須恵器杯の多くはTK217に該当し、土師器甕には口縁部に強い横ナデを施したものや、横方向に外反するものが多い。これらは上位にあった集落からの流れ込みであろう。調査地西側に狭小な谷があり、かなりの流れがあったことは、調査地内の土器の磨滅状況や砂層の厚い堆積により明らかである。さらに西北側の丘陵上や裾部で、いかなる遺跡が存在しているのか、今後の調査は重要である。明確な人工の遺構はないが、沼地状の落ち込み(SX01)中の多量の遺物から、弥生時代～奈良時代の集落の広がりが予測され、かつ野田川の洪水の痕跡をとらえたことに今回の調査成果があるといえる。

(黒坪一樹)

注1 堤圭三郎・大槻真純「定山遺跡発掘調査報告書」(『岩滝町文化財調査報告』第3集 岩滝町教育委員会) 1979

堤圭三郎・大槻真純「定山遺跡発掘調査報告書」(『岩滝町文化財調査報告』第4集 岩滝町教育委員会) 1980

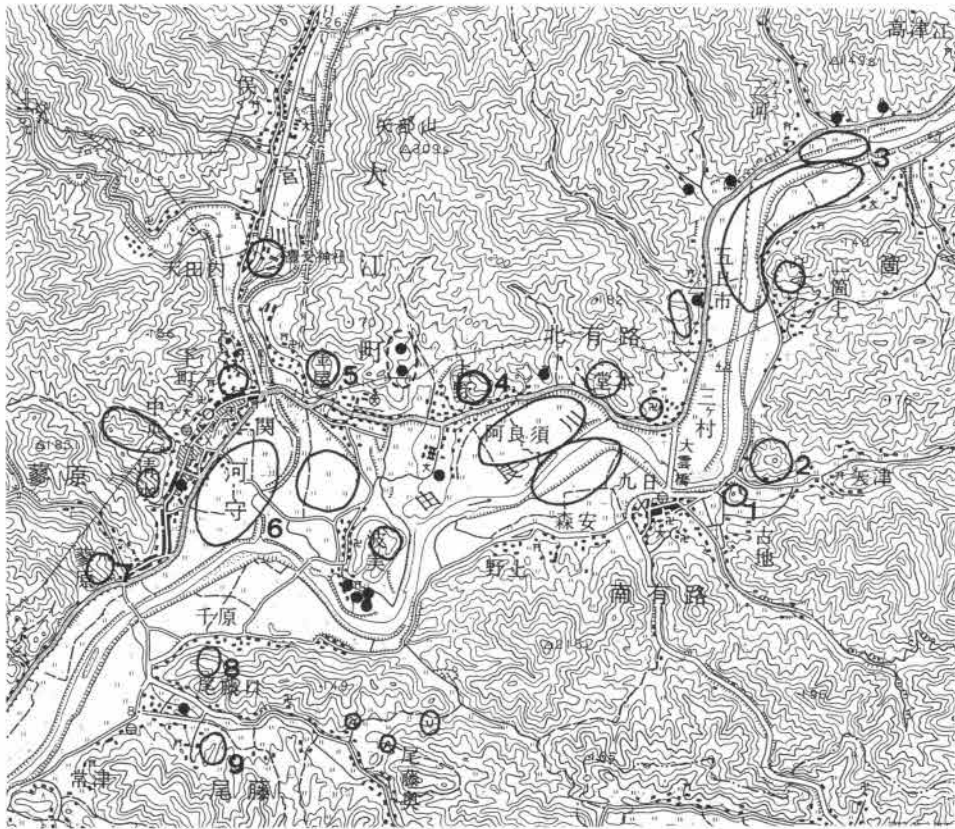
石崎善久・保坂 亨「定山遺跡第3次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第54冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993

注2 安達嗣恵・大下怜子・小倉真実・黒松幸子・菖蒲谷栄子・瀬戸恒雄・田中弘和・田中美恵子・谷口 実・長田京子・中村ひろみ・広野節子・藤原美津子・真下春美・宮川洋子・椋平小夜子・村田久仁子・山添洋子・吉岡 譲(以上敬称略)

## 5. 引地城跡発掘調査概要

### 1. はじめに

今回の調査は、京都府土木建築部の依頼を受け、府道福知山舞鶴線の拡幅・改良工事に伴って実施した。引地城跡は、京都府加佐郡大江町矢津に所在し、中世の連郭式山城として『大江町誌』にも記されている。これによると、南有路城の出丸で帯郭の設営ありとなっている。調査は、当調査研究センター調査第2課調査第2係長奥村清一郎、同調査員黒坪一樹が担当した。調査期間は、平成6年10月7日から同年11月22日までである。調査面積は約1,000㎡である。現地作業については大江町教育委員会をはじめ、地元作業員・整



第91図 調査地周辺遺跡分布図(1/50,000)

- |         |          |            |          |         |         |
|---------|----------|------------|----------|---------|---------|
| 1. 引地城跡 | 2. 南有路城跡 | 3. 三河宮の下遺跡 | 4. 阿良須城跡 | 5. 金屋城跡 | 6. 河守遺跡 |
| 7. 藜原城跡 | 8. 千原城跡  | 9. 尾藤城跡    |          |         |         |



理員の方々の御協力を<sup>(得た)</sup>。記して感謝の意を表したい。なお、調査に係る経費は全額京都府土木建築部が負担した。

## 2. 周辺の山城

大江町は、その北側に千丈ヶ嶽、鳩ヶ峰、赤石ヶ岳などの大江山連山があり、この山岳地帯を割って南西から北東に向かって由良川が流れている。この由良川によって形成された沖積平野を鳥瞰するように、また由良川の沿岸に突出して多くの中世山城が分布している(第91図)。中でも、最大級の河守城には数段の郭や帯郭が築かれ、標高は浄仙寺裏山の高い本城で約100mを測る。周辺には阿良須・金屋・蓼原・千原・尾藤・常津などの山城跡がある(同図)。特に、阿良須城は河守の沖積平野への見晴らしが良好で、河守城や引地



第92図 調査地地形図

城方面をも確実に視界に収めるものである。この地域で互いに連携的な機能を果たしていた山城は多かったであろう。

### 3. 調査の経過

今回の調査は、引地城全体の3分の1程度を対象とした試掘調査である。調査地の北東～北側は、道路から急峻に立ち上がる崖となり、南西～西側は民家が建てられている。さらに南の尾根筋には重機の入り込む道が充分つけられていないため、掘削はすべて人力で行った(第92図、図版第77)。最頂部の郭は、大きく二段に造り出されており、この部分については全面を掘削した。土層の堆積状況は、表土・暗黄褐色土(第2層)・地山の赤褐色粘質土(第3層)である。上段は表土下に第2層の暗黄褐色土が比較的厚く堆積していたが、下段はほぼ表土直下で地山になる。この第2層中から若干の遺物が出土した。遺構は下段に柱穴痕が、上段に2基の土坑(S K01・02)などが検出された(第93図)。

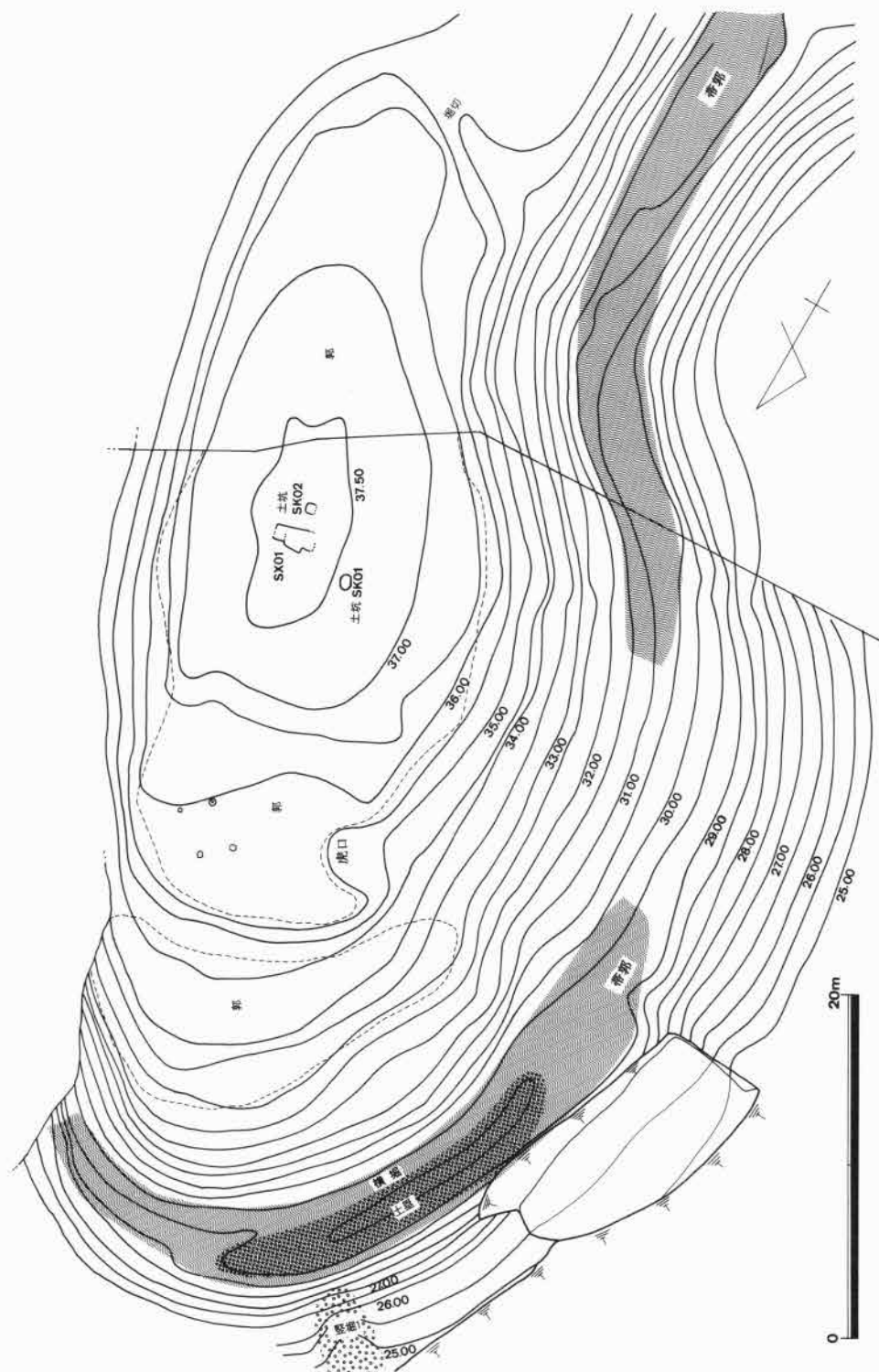
引地城の郭部平坦面から斜面地にかけても、帯郭・土塁・虎口などの遺構が存在しているため、幅1mで縦方向にトレンチを入れた。虎口部については、細かく縦横に畦を残した。郭・帯郭・土塁・横堀などの施設を含めた調査地全体の平板測量を行い、作業を終了した。

### 4. 遺構(第93図、図版第78～81)

郭・帯郭・土塁・横堀・竪堀などの施設の存在を確認した。頂部の平坦な郭で柱穴痕・土坑2基を確認・検出した。

郭は、頂部に二段に削り出されている。前面は隅丸方形であるが、全体形は不定形を呈している。また、その下位の北側斜面にも小規模な郭がある。虎口は、郭の北西にとりつく入口と見られるところで、大きくえぐりこまれている。帯郭は、北～西側斜面にかけて長く築かれ、調査地外にもまわり込んでいる。横堀・土塁は、北西斜面に横方向に築かれたものである。土塁は、この横堀を掘り上げた土を利用して築かれている。しっかりした造りとは言えない。竪堀は、明確なものではないが、横堀・土塁のさらに下に縦方向の大きな溝状のものがある。規模・形態は不明である。

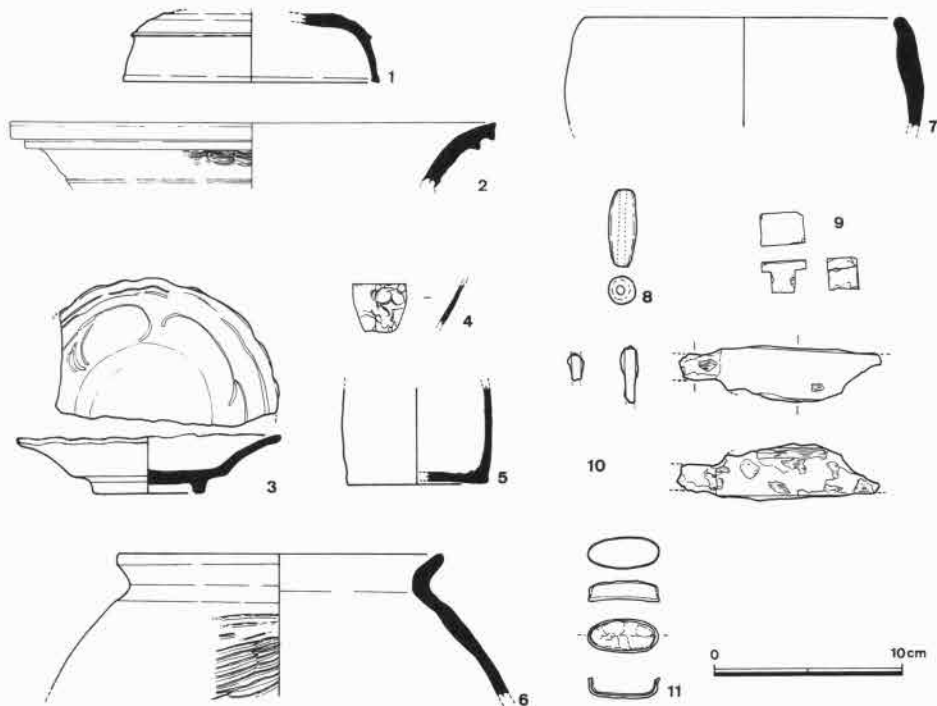
土坑(S K01)は、1m×0.6mの大きさで、形は楕円形を呈する。深さは約20cmを測る。埋土は黒褐色土である。底から染付断片1点が出土した。土坑(S K02)は、0.8m×0.5mの大きさで、形は隅丸四角形である。柱穴痕は、4基検出している。いずれも残りは浅く、10cm内外の小さなものである。四方に配されるが、確実に城に伴うものか、櫓などの建物になるかどうか不明である。



第93図 調査地平板測量図

## 5. 遺物(第94図、図版第82)

古墳時代・室町時代・江戸時代のものがある。4を除きすべて第2層(包含層)から出土している。1は、須恵器杯蓋である。口縁部径13.4cmを測る。口縁部は、明瞭でシャープな稜を持ち、口縁端部は丸い凹みがつけられている。調整は、稜から天井部まででいねいにケズリ調整している。陶邑編年ではおよそTK208併行期に相当しよう。2と6は、須恵器甕の断片である。2は、口縁部径(復原)25.6cmを測る。大きく外反し、口縁端部は下に断面三角形の凸帯をめぐらしている。さらにすぐ下に2段目の凸帯がめぐり、その下に櫛描き波状文を施している。本例もTK208併行期に相当か。6は、口縁部径(復原)17.2cmを測る。内面はナデ調整、体部外面は水平及び右上がりのタタキ目調整が施される。口縁部と体部の境に強いナデ調整が入る。中世の所産である。3～5は、貿易陶磁である。3は、青磁綾花皿である。口縁部径(復原)14cm・器高3cm・高台部(底)径6cm・高台の高さ0.6cmである。光沢を持つ暗いオリーブ色の釉がかけられている。ただし、高台内側中央部(底)は釉が施されない。周縁の綾花文様に沿って花文様の沈線が施されている。15世紀のものである。4は、土坑(SK01)から出土した染付碗の断片である。おそらく輸入品であろう。同様の断片がもう1点あり、第2層中から出土している。ともに15～16世紀にかけての所産である。5は、白い釉のかかった瓶の断片である。底部径7.4cmを



第94図 出土遺物実測図

測る。内面と底部外面には施釉がなく明褐色に焼かれて、良質な胎土が用いられている。整形もていねいで薄く仕上げられている。16世紀のものか。7は、土師器の鉢である。口径部(復原)径16.8cmを測る。内外面ともナデ調整である。8は、管状土錘で、時期は不明。9は、もとの形状は不明であるが、須恵質の焼き物である。下端は折れているようである。硯か浅鉢の短い脚であろうか。10は、刀の断片である。柄から身の部分である。表裏に木質部が残っている。11は、柄頭か鞘尻の金具である。内側に漆状の被膜が残存している。10・11はともに中世のものである。他に図示していないが、江戸時代の棧瓦の断片が十数点ある。

## 6. ま と め

今回の調査では、最頂部の郭北半と、これにとりつく腰部・帯部・土塁などの施設を確認した。郭部は、上下二段になっており、上段で土坑2基、下段で柱穴痕4基を検出した。土坑(S K01)の底から染付1点(第94図4)が出土した。下段の柱穴痕は、建物に伴うものかどうか判断し得ない。見晴らしのいいポイントなので槽状のものがあった可能性もある(第93・95図)。帯郭・土塁・竪堀などの部分については、細長いトレンチを入れただけなので、これらの規模や機能についての詳細は不明である。全面的な調査になれば、これらの施設の正確な形状・規模は明らかとなろう。出土遺物は少量ながら、古墳時代・室町時代・江戸時代のものが出土した。直接的に城の築造～終焉の年代を知られるものではないが、15世紀末～16世紀にかけて機能していた可能性は陶磁器などの遺物から指摘されよう。大江町における既知の中世山城の発掘調査例として、貴重な成果を提供したといえる。

(黒坪一樹)

注1 荒木きよ子・飯田悦子・岩崎輝巳・上山政恵・上山 昇・河田善明・倉橋 寛・四方千佳子・



谷口成美・土佐健一・奈良井源吾・奈良井恭子・野田三喜夫・広岡節子・広岡はつ枝・福井裕子・藤井矢壽子・真下イヨ子・真下春美・真下義雄・松本 保

第95図 郭部調査風景

## 6. 丹波亀山城跡第4次発掘調査概要

### 1. はじめに

今回の調査地は、京都府亀岡市北古世町1丁目に所在し、亀山城跡三ノ丸の一角に相当する。京都府立亀岡高等学校東校舎の敷地内である。亀岡は、明治2(1869)年まで亀山と称したが、伊勢亀山との混同を避けるため、それ以後改称された。

近世城郭としての亀山城は天正年間の明智光秀築城に始まり、17世紀初頭の天下普請を経て、五層の天守閣と多間櫓で囲まれた本丸、内堀・外堀・惣堀の三重の堀などをもつ丹波でも有数の大城郭となる。江戸時代には数家の藩主が入封したが、いずれも譜代大名である。京都に近い要地として重要視されていたことがわかる。18世紀中頃以降、形原松平氏が藩主となり、明治時代をむかえる。明治時代の廃城時には、ほとんどの建物が取り壊され、石垣の石材も鉄道建設用材として転用された。その後、内堀以内の中心部分のほとんどは大本教の聖地となり、その他は学校用地及び市街地となった。

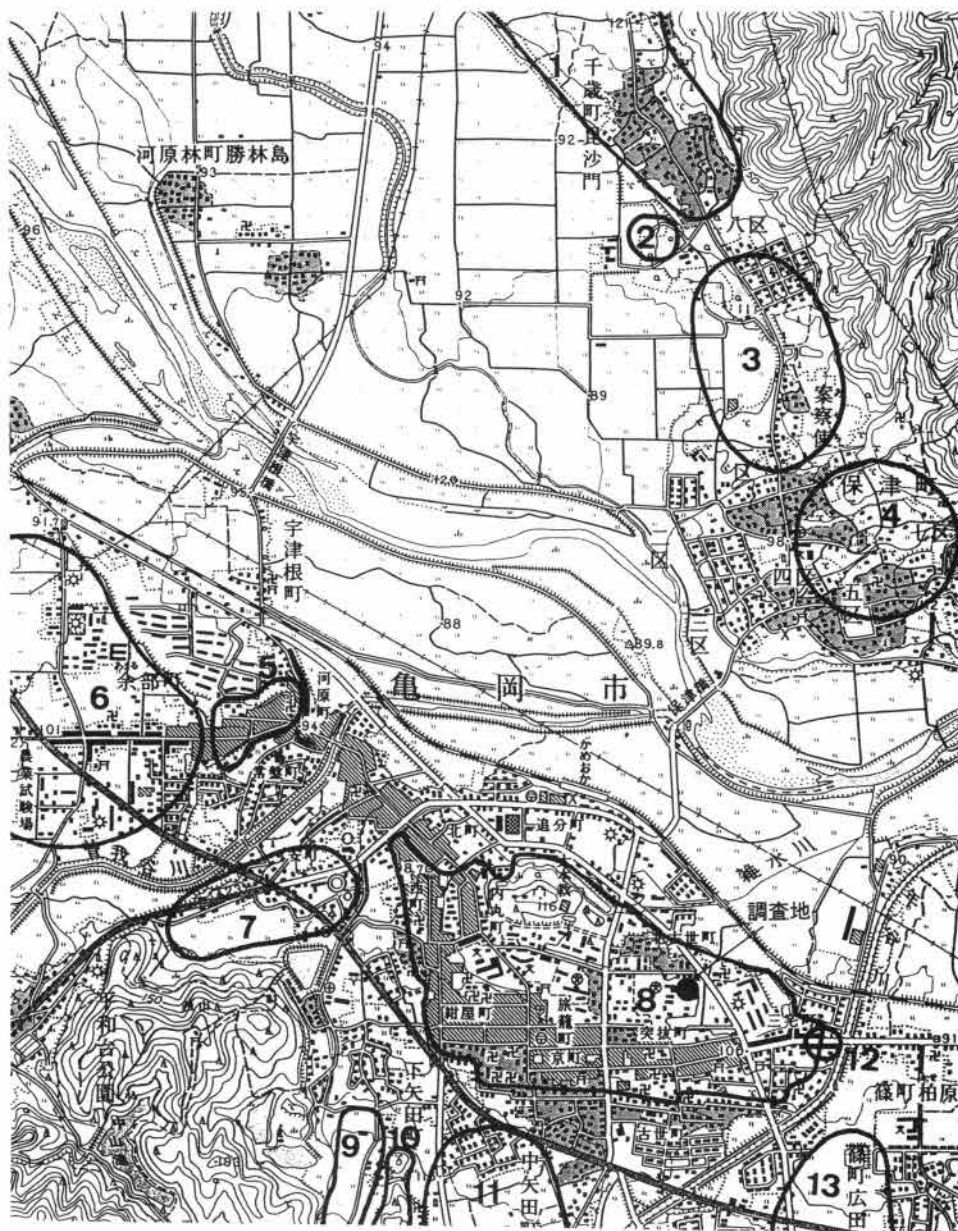
亀山城跡の調査は、当調査研究センター及び亀岡市教育委員会により、過去3回実施されている。第1次調査は、藩主の居館である御館跡の一角で実施し、外堀の一部を検出した<sup>(注1)</sup>。第2次調査は、今回の調査地の北側に隣接する地点で実施し、江戸時代の遺構のほか古墳～奈良時代の遺構を検出した<sup>(注2)</sup>。

今回の調査は、京都府立亀岡高校の体育館建設に伴うもので、京都府教育庁管理部管理課の依頼を受けて実施した。調査経費は同課が全額負担した。調査担当は、当調査研究センター調査第2課調査第2係長奥村清一郎、同主任調査員引原茂治、同調査員尾崎昌之・大岩洋一である。調査にあたり、京都府教育委員会・京都府立亀岡高校・亀岡市教育委員会・口丹波史談会などの協力を得た。特に、口丹波史談会会長永光 尚氏からは格別のご協力・ご教示をいただいた。現地調査では、地元の有志の方々に協力していただいた<sup>(注3)</sup>。謝意を表したい。なお、この概要報告は、上記引原と尾崎が執筆した。

### 2. 位置と環境

亀岡市は、京都府のほぼ中央に位置し、山地に囲まれた盆地である。この盆地は、構造上、断層角盆地とよばれている<sup>(注4)</sup>。断層角盆地とは、盆地のどちらか一方の側が断層を境として隆起するか沈降するかしてできた盆地といわれている。亀岡でいえば、若丹山地が高

さ約600～800mまで隆起して、亀岡盆地がつくられたという。盆地床は、断層崖下にみられる小扇状地と大堰川の氾濫原からなる。この盆地の南部に大堰川がつくる段丘が発達する。市街地は、この段丘上に広がった。調査地である亀山城跡は、大堰川に向かって張り



第96図 調査地及び周辺遺跡分布図(1/25,000)

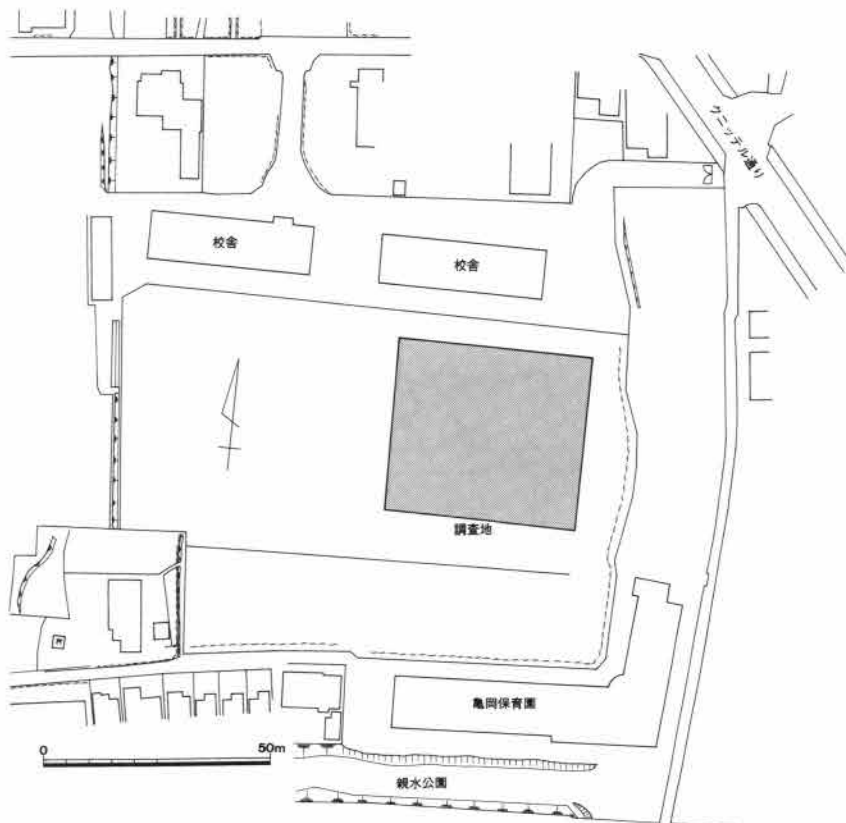
- |          |          |           |          |          |
|----------|----------|-----------|----------|----------|
| 1. 蔵垣内遺跡 | 2. 桜久保遺跡 | 3. 案察使遺跡  | 4. 保津遺跡  | 5. 余部城跡  |
| 6. 余部遺跡  | 7. 安加塚遺跡 | 8. 亀山城跡   | 9. 医王谷遺跡 | 10. 矢田城跡 |
| 11. 矢田遺跡 | 12. 古世城跡 | 13. 浄法寺遺跡 |          |          |

出す段丘の先端部に位置する。

この盆地内には、縄文時代以降の遺跡が多数存在している。奈良時代には丹波国分寺・国分尼寺が創建される。古代には、盆地北側に丹波国府があったと考えられており、丹波の中心地とみられている。中世には、亀岡市と八木町の境に丹波守護内藤氏の八木城が築かれる。近世には、亀山城が築かれ、以後重要視されてきたのは上記のとおりである。以上のように、この盆地は、古くから丹波の要地として注目されてきた地域である。

### 3. 調査経過

調査は、平成6年9月21日から開始した。調査地は、亀岡高校東校舎のラグビーグラウンド東半部である。調査面積は、約1,700㎡である。近世遺構面直上までの土を重機で除去し、その後、人力で精査・遺構掘削を行った。亀山城内の武家屋敷に関係すると思われる遺構を多数検出した。また、第2次調査で古墳～奈良時代の遺構を確認しているので、



第97図 調査地位置図



順次地山の段丘礫層まで掘削したが、明確な遺構はなかった。

平成7年2月28日までにすべての作業を終え、関係者説明会を行い、調査を完了した。  
また、同日に亀岡高校の生徒対象の説明会も実施した。

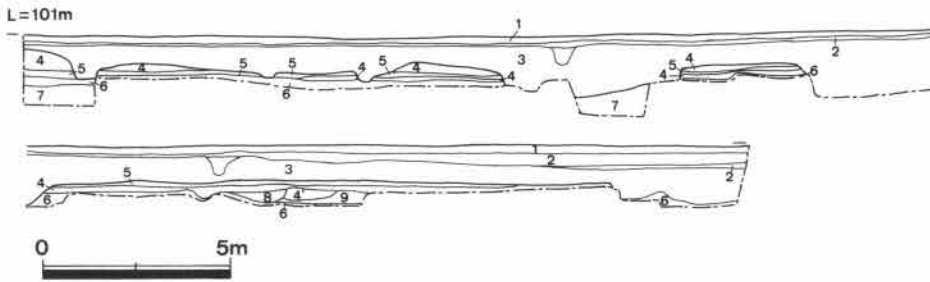
#### 4. 検出遺構

調査地の基本層序は、次のようになる。地表下1m前後までは学校関係の層である。上から、グラウンドの真砂土層、固く締まったバラスの整地層、盛り土及び農業科の頃の耕土層である。その下が暗茶褐色土層で、近世の層である。層中には古墳時代～近世の遺物を含み、数層に分かれる部分もある。さらに、下層が灰色土・黒色土及び段丘礫層で、無遺物の地山層になる。なお、学校改築時に廃材を埋めたとみられる攪乱坑が点在する。

今回の調査では、溝・土坑・ピットなどの、江戸時代後期頃の遺構を多数検出した。後



第98図 調査地平面図



第99図 調査地北壁断面図

- |            |           |                |            |          |
|------------|-----------|----------------|------------|----------|
| 1. 表土      | 2. 整地層    | 3. 盛り土(茶褐色泥礫土) | 4. 暗茶褐色粘質土 | 4'. 4より暗 |
| 5. 灰色粘質土   | 6. 黒褐色粘質土 | 7. 段丘礫         | 8. 淡橙褐色砂質土 |          |
| 9. 茶灰褐色粘質土 |           |                |            |          |

世の攪乱・削平のため、検出状況は断片的なものとなった。主な遺構は、以下のとおりである。

S K 01 調査地南端西寄りで見出した。一辺約2mの方形土坑とみられるが、南側はトレンチ外になるため全容は不明である。底部から陶磁器・平瓦片が出土した。

S K 02 調査地南側中央部で見出した。平面形は楕円形で、長軸約1.1mを測る。長軸はほぼ東西方向である。

S K 65 調査地中央部で見出した。平面形は歪な楕円形で、長軸約1.2mを測る。埋土は茶褐色土の単層である。少量の陶磁器片が出土した。

S K 80 調査地南東隅で見出した。上面に20cm前後の角礫がまとまって置かれていた。平面形は長楕円形で、長軸約1.28m・短軸約90cm・深さ約36cmを測る。埋土は茶褐色粘質土の単層である。

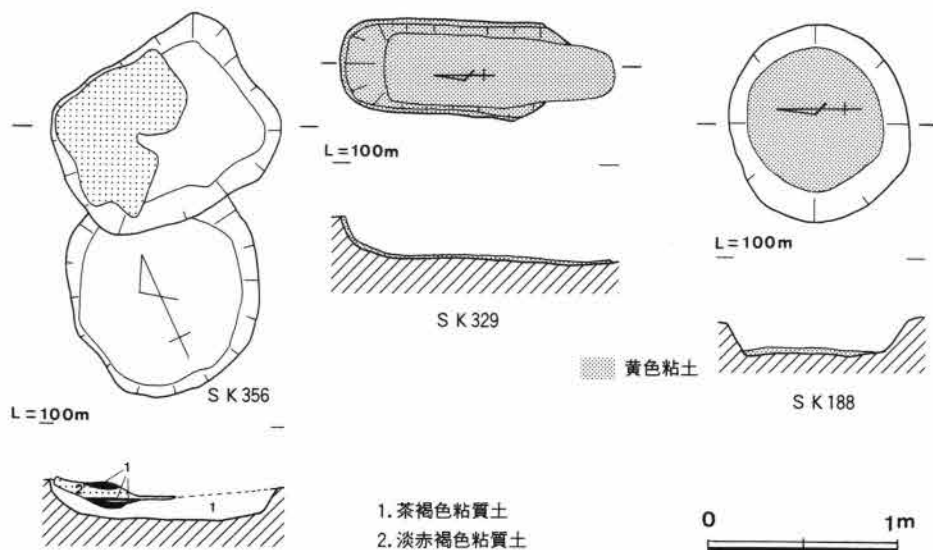
S K 184 調査地北西部で見出した。平面形は長方形で、長辺約1.2m・短辺約96cm・深さ約16cmを測る。土坑南縁に20cm前後の自然礫を6個並べている。内側に面を揃える。陶磁器・平瓦片が出土している。

S K 186 調査地西側中央部で見出した。平面形は長楕円形で、長軸約2.8m・短軸約1.2m・深さ約35cmを測る。底部に白黄色粘土を薄く貼る。多数の陶磁器片が出土した。

S K 188 調査地西側で見出した。平面形は円形で、直径約1m・深さ約16cmを測る。底部に白黄色粘土を薄く貼っている。多数の平瓦片や陶磁器片が出土した。

S K 203 調査地北東辺で見出した。平面形は楕円形で、長軸約1.14m・深さ約32cmを測る。軒丸瓦片や軒平瓦片・陶磁器片が出土した。

S K 209 調査地北東辺で見出した。一辺約4mの方形土坑と思われるが、北側は調査地外となるため全容は不明である。深さは約35cmを測る。多数の陶磁器片が出土した。



第100図 土坑実測図

S K 211 調査地北辺中央部で検出した。平面形は歪な長方形で、長辺約1.1m・短辺約92cm・深さ約18cmを測る。土坑の西側で淡赤褐色の粘土塊を検出した。断面観察から数回淡赤褐色粘土を貼っているのが確認される。用途は不明である。

S K 212 S K 211の東側で検出した。平面形は歪な円形で、直径約2.44m・深さ約45cmを測る。軒丸瓦片や陶磁器片が多数出土した。

S K 329 調査地北東辺で検出した。平面形は長楕円形で、長軸約1.45m・短軸約50cm・深さ約20cmを測る。内側に厚さ2cmの黄色粘土を貼る。用途は不明。

S K 357 調査地東辺中央部で検出した。平面形は方形で、一辺約1.5m・深さ約73cmを測る。断面は袋状を呈する。

S D 03 調査地南側で検出した。クランク状に東西方向にのびる。検出長約38mを測る。

S D 04 調査地南側中央部で検出した。幅約20cm・長さ約6mを測る。

S D 66 調査地中央南側で検出した。検出長約26m・深さ約20cmを測る東西方向の溝である。東端部で南側に屈曲する。

S D 143 調査地中央部で検出した。検出長約22m・最大幅約1.3m・深さ約10~20cmを測る。ほぼ東西方向にのびる。

S D 176 S D 66の南側に並行する。幅40~60cmを測る。

S D 208 調査地南側中央部で検出した。南北方向にのびる。検出長約14m・最大幅約4.6mを測る。多数の陶磁器片が出土した。

S D 403 S A 402に並行するように続く。溝の肩部に細い木杭が0.8~1.8m間隔と不規

則に打たれている。おそらく、この木杭と横板で護岸されていたと考えられる。屋敷地の外側という位置から、道路側溝の役割を有していたと考えられる。

S A 401 調査地北端で検出した。約1.2m間隔で柱跡と考えられるピットが東西に並ぶ。検出長は約12mである。柵も

しくは塀跡と考えられる。

S A 402 調査地南東側で検出した。ピットが南北方向に約12m続く。その延長線上に白黄色粘土が帯状に続くことから、土塀の芯とも考えられる。

石列遺構 調査地北東隅で検出した。長さ約40cm前後の自然礫を南北方向に並べる。検出長は約2mである。この上にも石が数段積まれていたものとみられ、低い石垣状になっていたものと想定できる。北側に向かって調査地外にのびる。

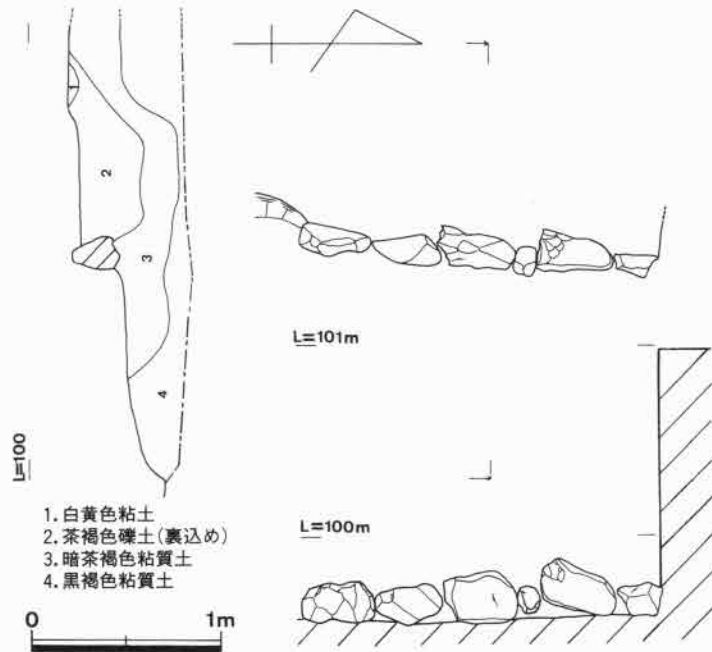
白黄色粘土帯 調査地の東側で南北方向にのびる状態で検出した。自然に堆積した粘土帯とは考えにくく、土塀などの痕跡を示すものと考えられる。

## 5. 出土遺物

今回の調査では、多数の遺物が出土した。陶磁器や瓦が大部分を占める。そのほか、石製品や金属製品も出土している。時期的には、江戸時代後期以降のものが多い。

### (1)瓦(第102図)

出土破片数は、3,750点にのぼる。ほとんどが精査中の出土であり、遺構に伴うものはその24%である。瓦の内訳は、軒丸瓦22点、軒平瓦19点、丸瓦150点、平瓦1,343点、掛け瓦1点、分類不能2,215点となる。色調は黒灰色系がほとんどで、なかには焼成の悪い黄



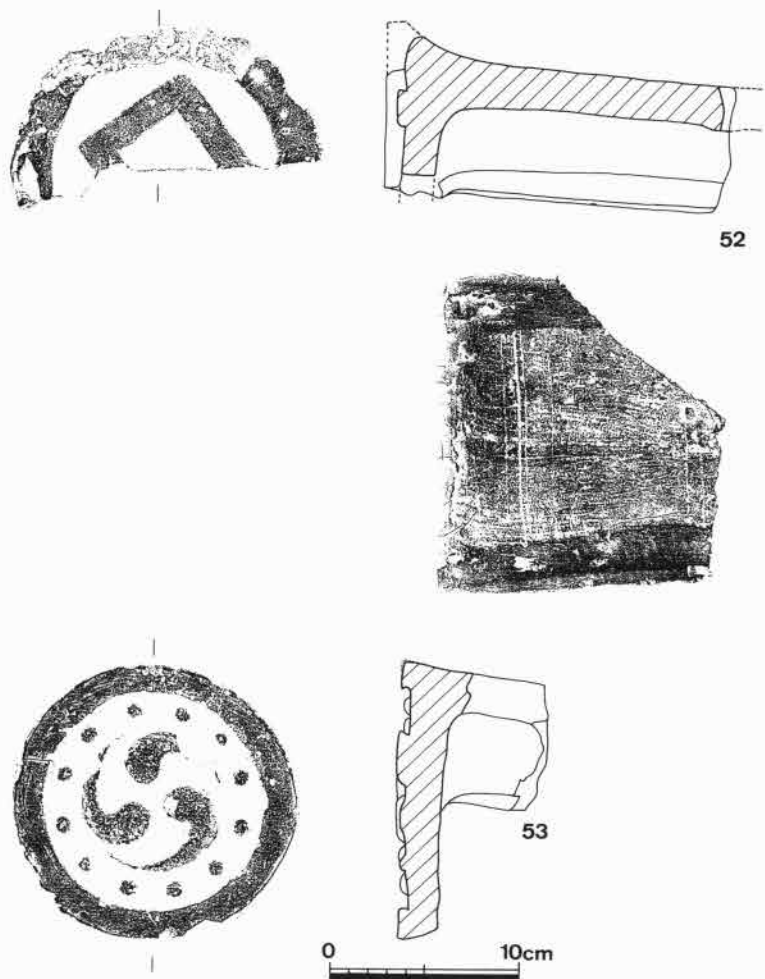
第101図 石列遺構実測図

土色系のものも数点確認できる。

**軒丸瓦** 巴瓦はすべてが左巴である。珠文の数は、不明なところもあるが、12個以上のものがほとんどである。53は、S K 212出土のものである。瓦当面は正円形ではなく少し歪みがある。縦14.7cm・横11.7cm・外縁区高5mm・外縁区幅1.7~1.85cm・瓦当厚1.9cm・あご深さ2.1cmを測る。珠文の数は12個。珠文の大きさは1.2cmである。珠文の割り付けは整然と行われている。外縁区より巴文のほうが若干高い。巴文は明瞭で、頭部も断面は半円形ではなく台形に近い。丸瓦部の厚さは2.1cmを測る。

**軒平瓦** すべてが唐草文系の瓦当文様である。瓦当厚は2cm前後である。宝珠状のものを中心飾りとし、脇飾りを唐草文とする。

**丸瓦** 内面にみられるコビキ痕はすべてがBタイプである。また、棒状のもので叩いて



第102図 瓦実測図

いる痕跡も確認できる。

掛け瓦 52は、S K 356出土のものである。瓦当文様は釘抜紋である。瓦当面の直径は15.7cm・外縁区幅2.3~2.6cm・外縁区高1cm・内区径10.3cm・瓦当厚1.75cmを測る。釘抜紋の下半部が欠損しているが、一辺6.9cmの方形とみられる。

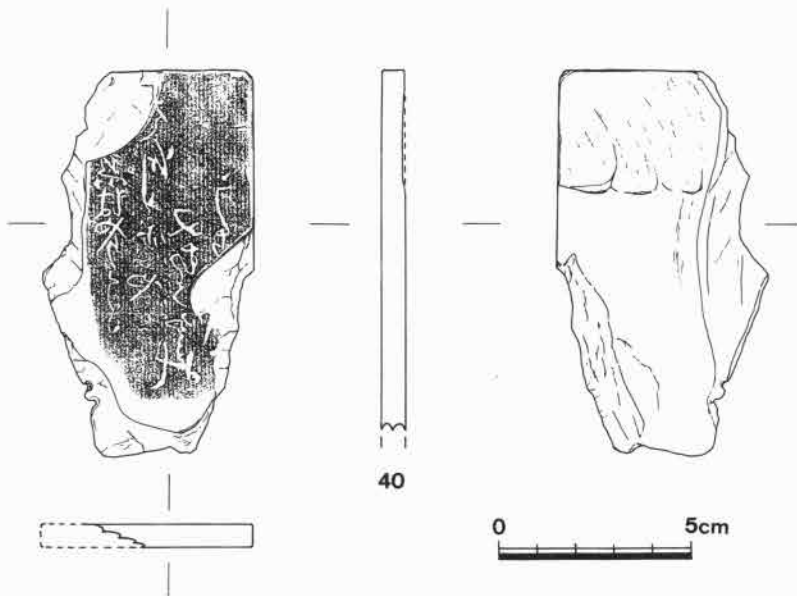
(2)石製品(第103図)

硯が出土している。<sup>(注6)</sup>40は、S D 03の中央部から出土したものである。色調は緑青色で、粘板岩製とみられる。残存長10.2cm・残存最大幅5.6cm・厚さ6mm・重さ25gを測る。裏面に縦位で文字が明瞭に線刻されている。「恋はやりうた はつ雪や 又むら雲の うち○○○」と判読できる。「はつ雪や・・・」からは俳句と考えられる。なお、文字は左字である。硯製作時に刻まれたものか、後に所有者が刻んだものかについては不明である。また、粘板岩もしくは頁岩製とみられる硯54が、調査地南西側から出土している。長さ12.3cm・幅5cm・厚さ1.05cm・重さ130gを測る。

(3)陶磁器(図版第93~96)

S K 209出土陶磁器 陶器碗1は、高台際以外に灰釉が施釉される。胎土はやや粗く、丹波焼系のものとみられる。また、亀岡で江戸時代後期以降に操業していたといわれる医王谷窯の製品の可能性も考えられる。

染付磁器碗2・3・10は、端反り碗である。2は、器胎が薄手で、花鳥文が描かれ、同様のものが数個体認められる。なお、2には焼継ぎの痕跡がある。10の施文は線描きである。



第103図 石製品実測図

染付磁器椀4・5・6・7は、丸椀である。4には額文などが、5には宝尽くし文が、6には桐文が、7にはごくら状の果文が描かれる。なお、5・6・7には焼継ぎの痕跡がある。

陶器椀8・9は、高台が小さく、胎土は精良である。京焼系のものとみられる。陶器椀11は、胎土が精良であり、京焼系のものとみられる。外面下半に褐釉が施される。花文が上絵付される。同様のものが数個体認められる。

染付磁器蓋12・13は、端反りになっており、端反り椀に伴うものである。染付磁器蓋14も、椀蓋である。宝尽くし文が描かれており、椀5もしくはそれと同様の椀に伴うものとみられる。陶器蓋15は、土瓶などの蓋であろう。

陶器鉢16は、底部が萁筥底状になる。口縁端部は無釉であり、蓋が伴うものであろう。陶器鉢17・18は、高台際以外に褐釉を施す。17は口縁端部に白釉が施される。染付磁器鉢19は、口縁部がくびれた形態のもので、器胎は厚手である。焼継ぎの痕跡が見られる。

白磁皿20は、見込みに丸形の変形「寿」字文が印刻されている。青磁皿21は、型物の稜花形小皿で、京焼もしくは三田青磁とみられる。焼継ぎの痕跡がある。染付磁器皿22は、口縁端部が輪花になり、内面には山水文が描かれる。口縁端部に鉄釉を施す。

陶器把手付鍋23は、いわゆる行平で、外面には飛カンナで爪形文を施す。蓋には、筒描きで松文が描かれる。胎土などからみて、医王谷焼の可能性がある。染付磁器急須24は、把手の裏に「道八」銘<sup>(注7)</sup>がある。京焼系とみられる。

陶器徳利25は、丹波焼で、体部に「八右衛門」「小林」の文字が筒描きで書かれる。陶器徳利26は、鉄釉及び銅緑釉で山水文が描かれる。信楽焼系のものか。陶器徳利27は、鉄釉で鳥文が描かれ、口縁部に細い半環状の把手が付く。京焼系のものか。

染付磁器小椀28～30は、盃もしくは煎茶用の茶椀と考えられる。29は、剣先形蓮弁文が描かれており、佐賀県嬉野町吉田2号窯跡出土遺物のなかに類似したものがある<sup>(注8)</sup>。幕末から明治初期にかけてのものとしてされる。30は、やや高目の高台をもち、高台内に「道八」銘がある。京焼系のものか。

陶器鉢31は、備前焼で、内外面ともに火ダスキがはいる。外面底部に「卍」の刻印がある。陶器挿鉢32は、丹波焼とみられる。挿り目は細かい。

その他の遺構出土陶磁器 33～35は、S K 212出土である。陶器椀33は、細かい貫入がはいる、高台は無釉である。染付磁器筒形椀34は、通常のものよりもかなり厚手である。18世紀後半頃のものか。陶器椀35は、茶道具と考えられる。高台付近は鉄サビ化粧される。高台は、切り高台になっている。

陶器華瓶36は、S K 207出土である。鉄釉が施され、小さい縦耳が付く。丹波焼と考え

られる。染付磁器仏飯器37は、S K82出土である。陶器香炉38は、S D208出土である。外面に鉄釉が施される。瀬戸美濃焼とみられる。染付磁器鉢39は、S D145出土である。見込み及び外面には変形「寿」字文が描かれる。

**包含層出土陶磁器** 陶器碗41は、細かい貫入がはいり、碗33に類似する。高台外面には施釉しないが内面には施釉する。染付磁器鉢42は、口縁部が外側に張り出す。花文が描かれる。18世紀初頭頃の肥前磁器とみられる。染付磁器筒形碗43は、若松文が描かれる。18世紀後半頃の肥前磁器とみられる。染付磁器筒形碗44は、やや大振りのもので、山水文が描かれる。17世紀中葉頃の肥前磁器とみられる。青磁華瓶45は、盤口形で、18世紀頃の肥前青磁とみられる。頸部と肩部の境に2個の耳が付くものであるが、これは1個が欠失している。染錦磁器皿46は、染付及び上絵付けの赤で放射状に細かく絵付けされる。赤色の絵付け部分には金彩の痕跡が残る。高台内には「成化年製」銘がある。17世紀末から18世紀初頭頃の肥前磁器とみられる。染付磁器皿47は、六花形の皿である。半磁胎で、印版の花文が施される。18世紀頃の肥前磁器とみられる。

白磁皿48は、中国製で、いわゆる菊皿である。16世紀後半頃のもののか。青花磁器鉢49は、中国製で、器胎は薄い。17世紀前葉頃のもののか。青磁鉢50は、中国製で、13世紀頃のものとみられる。陶器皿51は、瀬戸美濃系の灰釉皿である。16世紀後半頃のもののか。

## 6. 小 結

寛政5(1793)年の「山陰丹府桑田亀山図」(以後、「亀山図」と略す。)によると、今回の調査地は、亀山城三ノ丸武家屋敷地の一部にあたる。禄高150~200石の奉行クラスの中級藩士の屋敷地である。<sup>(注9)</sup>現状では、調査地周辺は学校用地として整地されており、亀山城期の屋敷割りをうかがう手掛りは残っていない。それで、地籍図を参考にして「亀山図」の屋敷割りを復原すると、調査地内には、室・真野・戸田の三氏の屋敷地が含まれているものと考えられる。「亀山図」には、その年代からみて、寛延元(1748)年の形原松平氏入部以後の状況が描かれている。上記三氏は形原松平家中であり、廃藩まで存続している。<sup>(注10)</sup>今回検出した遺構・遺物のほとんどは江戸時代後期以後のものであり、上記三氏に関するものと考えられる。

検出遺構のうち、S A401とS D143は、約16m間隔でほぼ並行している。これは、地籍図から復原した真野氏の屋敷地の間口幅とほぼ一致する。位置的にみても、この両遺構の間が真野氏屋敷地跡と考えられる。奥行は不明であるが、地籍図によると50m前後と推定できる。

今回検出した遺構のうち、石列遺構は室氏屋敷地東側の塀などの基礎と考えられる。ま



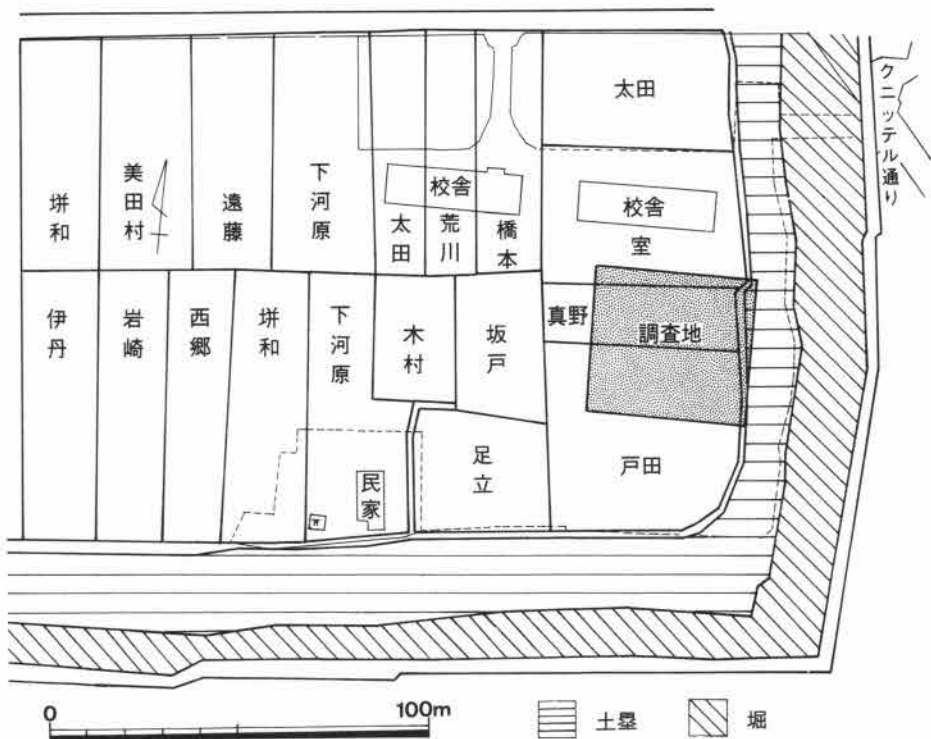
た、S A402は、戸田氏屋敷地東側の塀もしくは土塀の芯柱列と考えられる。

このような検出遺構や「亀山図」から屋敷地の東側の状況を復原すると、塀の外側に犬走りと水路があり、その東側に南北方向の道路・土塁・外堀があったものとみられる。また、石列遺構とS A402は一直線につながらず、くいちがっている。これは、道路を故意にくいちがわせて見通しがきかないようにする、城下特有の構造になっていたことを想定させる。この状況は、地籍図からも読みとれる。

今回の調査地は、廃城以後の開墾や学校建物などによる削平・攪乱部分が多く、遺構の検出も断片的なものになった。礎石とみられる石も検出したが、建物を復原できるまでには至らなかった。

S K209は、室氏屋敷地に伴うものとみられる。ここからは19世紀を中心とする陶磁器が多数出土している。調査地周辺の武家屋敷地は廃藩後に売却されて<sup>(註1)</sup>、遺物の示す時期からみて、それに伴う転出時に投棄されたものと考えられる。

陶磁器のなかには19世紀前半頃の端反り椀が含まれるが、18世紀末から19世紀前半にかけて盛行する「広東椀」形の椀はない。また、磁器のなかには焼継ぎされているものが多



第104図 三ノ丸復原図(案)

い。かなり細かく割れたものも継いで使用していたものとみられる。亀山藩の中級藩士の生活の一端を示す。焼継ぎは、一種の鉛ガラスの粉末を割れ口につけて低温度で焼いて接合するもので、18世紀末頃以降流行したという。

陶器のなかに医王谷焼と考えられるものが含まれているのが注目される。医王谷焼は、形原松平氏入部時に藩窯として始まり、廃藩によって一時廃窯となるが、明治10年頃に地元有志によって再興されて2年間程度操業したと言われている。窯跡の調査では、19世紀を大きく遡るものではないことを確認しているが、それが江戸時代であるのか明治時代であるのかについては不明であった。<sup>(注12)</sup>今回出土したものが確実に医王谷焼であれば、その操業が江戸時代に遡ることになるが、現時点では速断を避けたい。

S K356出土の掛け瓦の瓦当は釘抜紋である。亀岡市天満神社には、寛永11(1634)年から正保4(1647)年まで亀山藩主であった菅沼氏の、第2代定昭の幼時の肖像画がある。その着衣に「丸に釘抜」紋が描かれている。今回の調査では、菅沼氏の時期に遡る確実な遺構はなく、またこの掛け瓦も菅沼氏に係わるものか否かは不明である。今回、主に参考にした「亀山図」より以前の絵図でも、調査地付近の屋敷割りにはほとんど変化がない。17世紀初頭の天下普請以来、城内の地割りについては大きな変化はなかったものとみられる。菅沼氏の時期でも、今回の調査地周辺の状況はほぼ同様であったものと考えられる。

(引原茂治・尾崎昌之)

注1 土橋 誠ほか「丹波亀山城跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第7冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983

注2 森下 衛「丹波亀山城跡第2次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第27冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988

注3 調査参加者

有近敬子・石田初美・石橋愛子・上西ミサヲ・大島紀子・大槻益子・大西幸江・岡本美和子・黒田美代子・関口睦美・友井川十三代・原田浩年・林 秀子・人見幸代・広瀬辰次・広瀬伝治・広瀬友次・広瀬竜三・藤井矢壽子・堀 源一・松下道子・松本末野・松本芳雄・村嶋みよ子・森川敦子・山田きん子・湯浅彰朗

注4 『亀岡市史』第1巻 亀岡市史編纂委員会 1994

注5 当調査研究センター森島康雄調査員のご教示による。

注6 この硯については、向日市文化資料館玉城玲子氏と当調査研究センター土橋 誠主任調査員からご教示があった。

注7 「道八」銘については、医王谷焼とされている伝世品に類例があることを、亀岡市文化資料館中澤 勝氏からご教示いただいた。医王谷窯の調査結果では、染付磁器の小品を焼成していた可能性が考えられる。今回出土した「道八」銘染付急須は、胎土が肥前磁器とは異なるように

見受けられ、あるいは医王谷焼とも考えられる。また、仁阿弥道八系の京焼とも考えられる。

注8 大橋康二「嬉野町吉田2号窯跡」(『肥前地区古窯跡調査報告書』第6集 佐賀県立九州陶磁文化館) 1989

注9 口丹波史談会会長永光 尚氏のご教示による。

注10 注9に同じ。

注11 注9に同じ。

注12 引原茂治「発掘資料からみた医王谷焼」(『丹波一中・近世の考古学-』第14回 企画展展示図録 亀岡市文化資料館) 1992

## 7. 長岡京跡右京第474次発掘調査概要

(7ANKNZ-7地区)

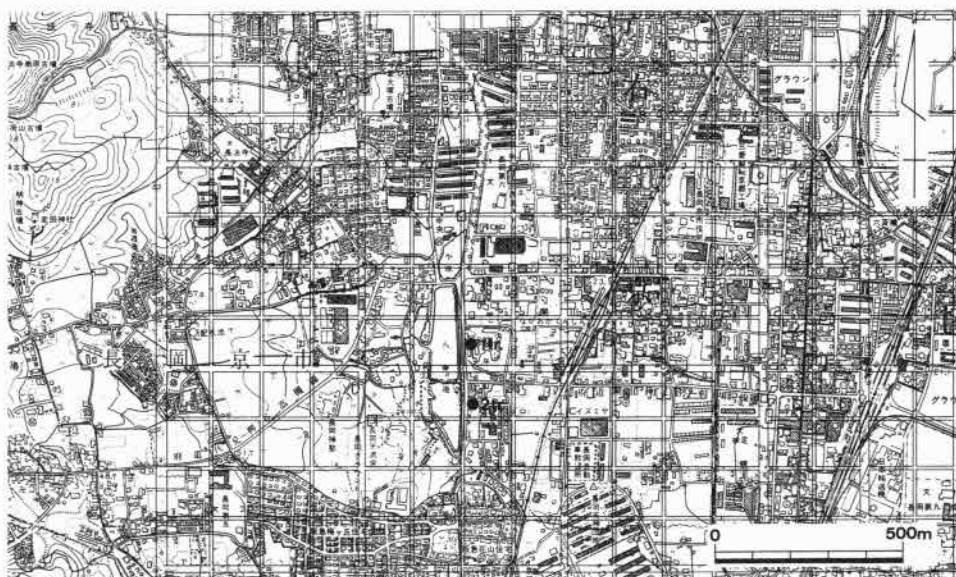
### 1. はじめに

この調査は、都市計画道路石見下海印寺線の街路改良工事に伴うもので、京都府乙訓土木事務所の依頼を受けて、発掘調査を実施した。調査対象地は、京都府長岡京市天神1丁目13-7、15-8に所在しており、長岡京期には、五条大路(新条坊復原案では六条条間小路)を挟んで、南北に120mあまり離れた2か所の地点に相当する。ともに西三坊坊間小路が西側に隣接する位置にあり、北側を1トレンチ、南側を2トレンチとした。

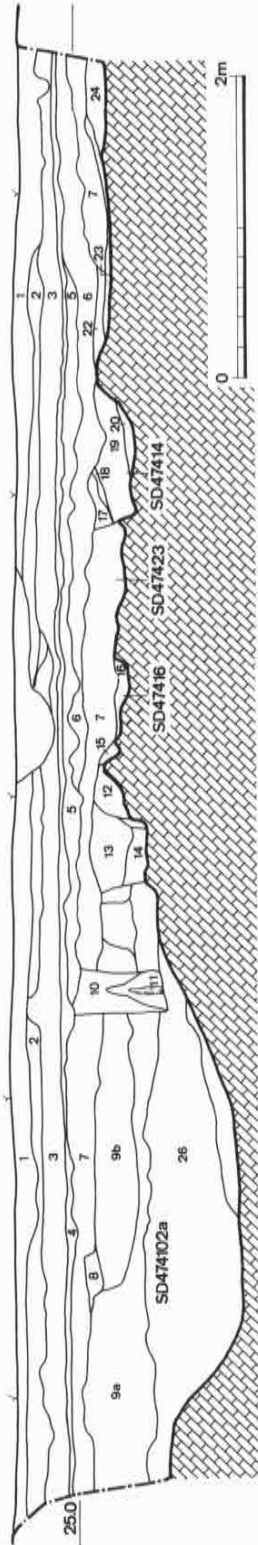
調査期間は平成6年7月6日から9月5日で、調査面積は約240㎡である。なお、現地調査は、調査第2課調査第2係長奥村清一郎、同調査員野島 永が担当した。

今回の調査にあたって、京都府教育委員会、長岡京市教育委員会、(財)向日市埋蔵文化財センターなど、関係諸機関及び、学生諸氏の協力を得た。記して感謝したい。また、本概要は野島 永が執筆した。

なお、調査に係る経費は、京都府乙訓土木事務所が全額負担した。

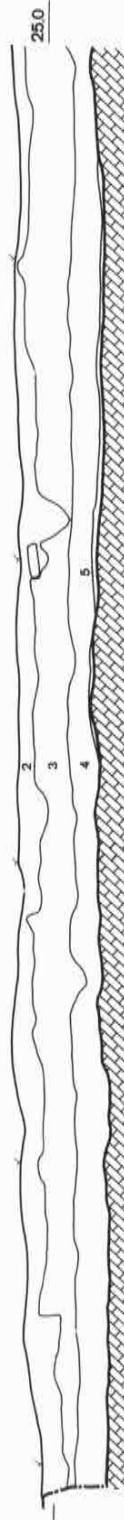


第105図 調査地位置図(1/20,000)



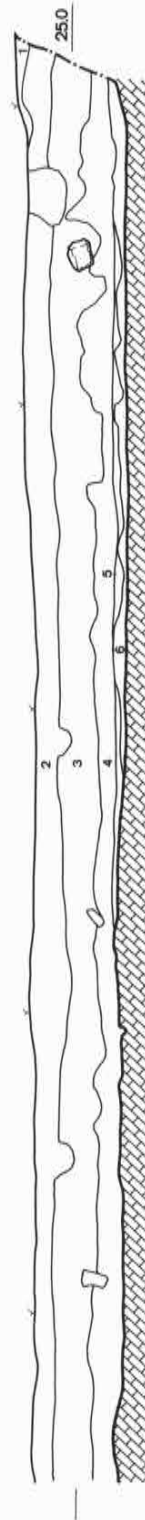
第106図 1トレンチ東壁セクション図

- |              |              |              |                     |             |
|--------------|--------------|--------------|---------------------|-------------|
| 1. 表土(碎石層)   | 2. 明橙褐色砂礫土層  | 3. 灰色粘土層     | 4. 暗橙褐色固結土層(酸化鉄分沈澱) | 5. 褐色砂質土層   |
| 6. 暗褐色砂質土層   | 7. 暗灰褐色砂質土層  | 8. 暗黄灰色砂質土層  | 9a. 褐色粘質土層          | 9b. 濁褐色粘質土層 |
| 10. 灰褐色粘質土層  | 11. 暗青灰色粘土層  | 12. 暗灰褐色砂質土層 | 13. 暗橙褐色砂質土層        | 14. 暗褐色粘質土層 |
| 15. 暗褐色砂質土層  | 16. 暗灰褐色粘質土層 | 17. 暗灰褐色砂質土層 | 18. 黄色砂土混暗褐色土層      | 19. 灰褐色砂質土層 |
| 20. 暗灰褐色粘質土層 | 21. 明黄褐色砂礫土層 | 22. 淡褐色砂質土層  | 23. 淡褐色粘質土層         | 24. 灰褐色砂質土層 |
| 25. 黑褐色粘土層   | 26. 黑褐色粘土層   |              |                     |             |



第107図 2トレンチ東壁セクション図

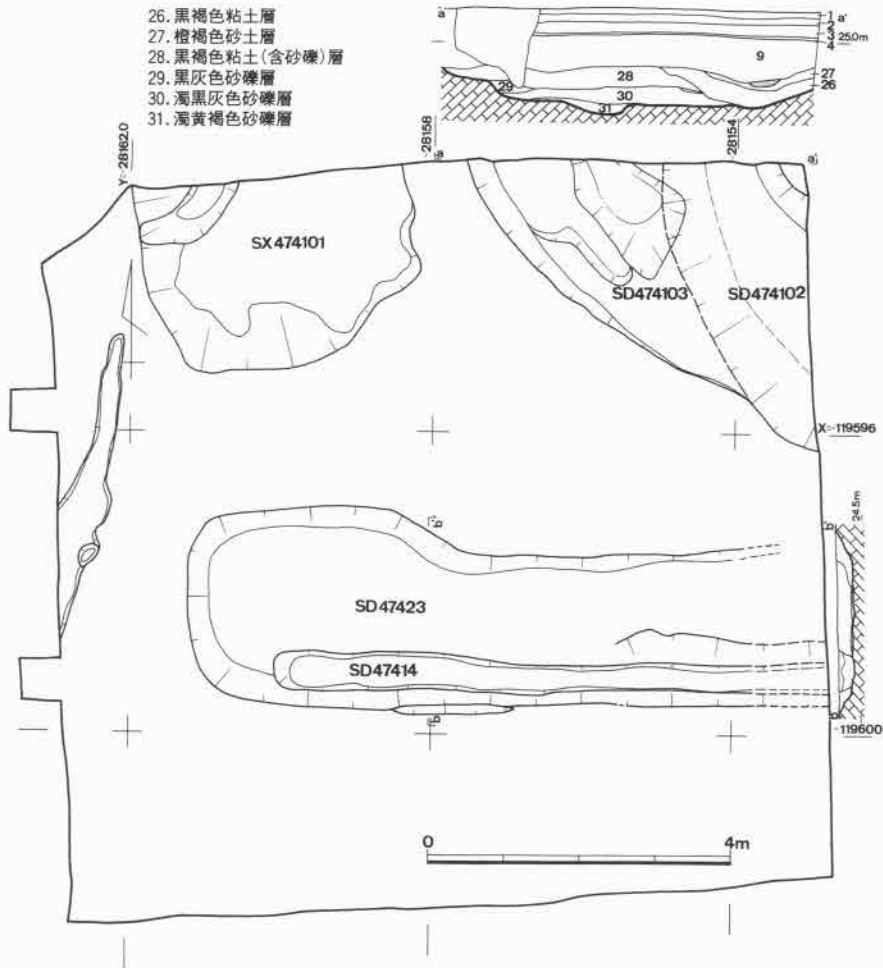
- |        |             |                |             |            |                    |
|--------|-------------|----------------|-------------|------------|--------------------|
| 1. 整地礫 | 2. 淡橙褐色砂礫土層 | 3. 焼土・砂礫・ガイシ廃材 | 4. 灰色粘土(床土) | 5. 橙褐色砂質土層 | 6. 灰色砂礫土(SD4742:2) |
|--------|-------------|----------------|-------------|------------|--------------------|



## 2. 調査概要

1 トレンチは平成5年度、右京第440次調査における2 トレンチと3 トレンチの間に位置する<sup>(注3)</sup>。長岡京の条坊復原案によれば、1 トレンチは右京五条三坊五町、2 トレンチは右京六条三坊八町で、新条坊案によれば、それぞれ右京六条三坊七町、六町内に推定される(第105図)。

1 トレンチの東側では、古墳時代の集落跡、長岡京期の建物跡や柵列、官営鑄造工房と推定された竪型の鑄造炉が検出され<sup>(注4)</sup>、近接する開田城ノ内遺跡では中世以降の集落跡がみつかった。また、2 トレンチの東南では、六条条間北小路(六条条間南小路)側溝に推定できる溝跡(S D34401(X=-119,824.6)・S D34402(X=-119,833.75))が検出されている。また、その下層からは縄文時代の泉殿川の流路堆積(十三遺跡)が確認された<sup>(注6)</sup>。



第108図 第1トレンチ下層遺構図

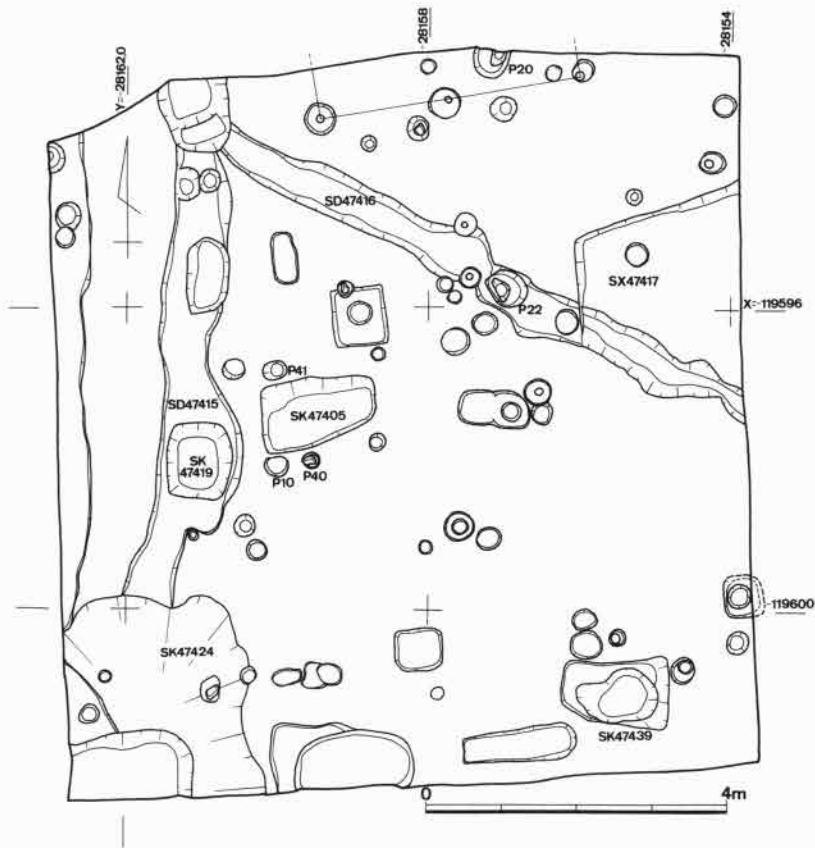
このため、調査当初、1トレンチでは長岡京期の鑄造工房関連の遺構・遺物や中世の屋敷地などの遺構の検出が予想され、2トレンチではそれ以前の縄文時代の下層遺構の存在も予想された。

(1) 1トレンチ

1トレンチでは盛り土層、旧耕作土層の下に褐色の粘質土層が厚く堆積しており、その直下に暗褐色土や暗灰褐色土、褐色粘質土層(第106図6～9層)など、遺物を包含する土層が堆積していたため、旧耕作土(第106図2～4層)を重機によって除去した後、人力によって掘り下げた。以下、下層から検出遺構について述べる。

溝SD474103は、幅3mあまりで、弧状に曲がる一部を検出した。底面は凹凸が著しく、SD474102によって切られている。濁黒灰色砂礫層(30層)から出土した須恵器(第115図2)から6世紀後葉以降に埋没したと考えられる(第108図)。

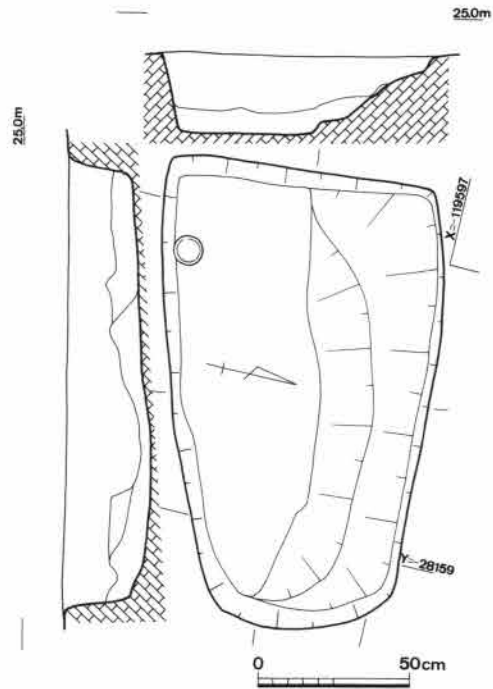
溝SD474103を切るように溝SD474102が掘削される。溝SD474102は、黒褐色粘土層



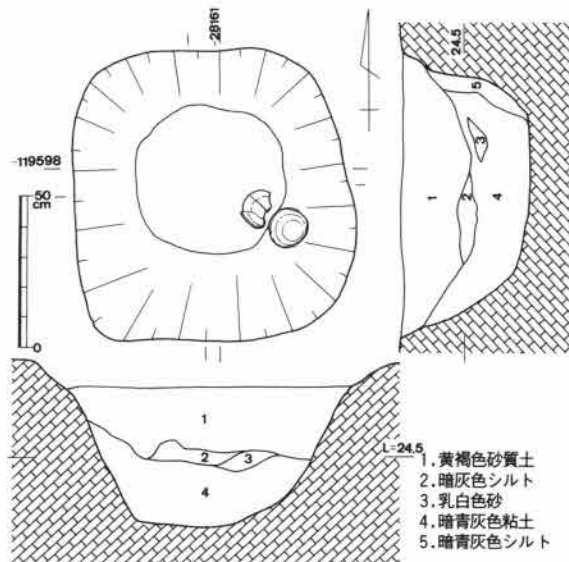
第109図 第1トレンチ上層遺構図(1/100)

(26層)が堆積しており、その上面橙褐色砂土層(27層)には、長岡京期の炉壁と考えられる受熱した土塊が検出された(第108図土層図網部)。黒褐色粘土層(26層)からは土師器甕(第115図25)、片口鉢(26)、大形鉢(27)が破碎した状態で出土した。

また、出土遺物はわずかであったが、長岡京期の遺物が出土する東西方向の溝S D47423がある。幅は5.0m内外で、溝の中心は国土地院座標 $Y = -28,156.0$ では、 $X = -119,598.6$ になる。褐色砂質土が堆積しており、杯B蓋(第115図4・6)、杯B(9)、壺E(16)などが出土した。また、この溝が埋没した後に、再び東西方向に溝S D47414が掘削される。この東西溝が長岡京期のものであるならば、五条三坊五町(六条三坊七町)、西一行北三門付近の宅地内東西区画溝として掘削されたとするのが妥当であろう。しかし、右京第411次調査<sup>(注7)</sup>で検出された西三坊坊間小路東側溝の可能性のある溝S D41108(中心座標 $Y = -28,163.0$ )にあたる地点を一部、拡張して掘削したが、長岡京期の側溝など、遺構は検出されなかった。



第110図 S K47405土坑実測図



第111図 S K47419土坑実測図

長岡京期以降(第109図)では、平安時代の溝(S D47415)<sup>(注8)</sup>、及び中世土坑(S K47419)や土坑墓(S K47405)、柱穴などが検出された。

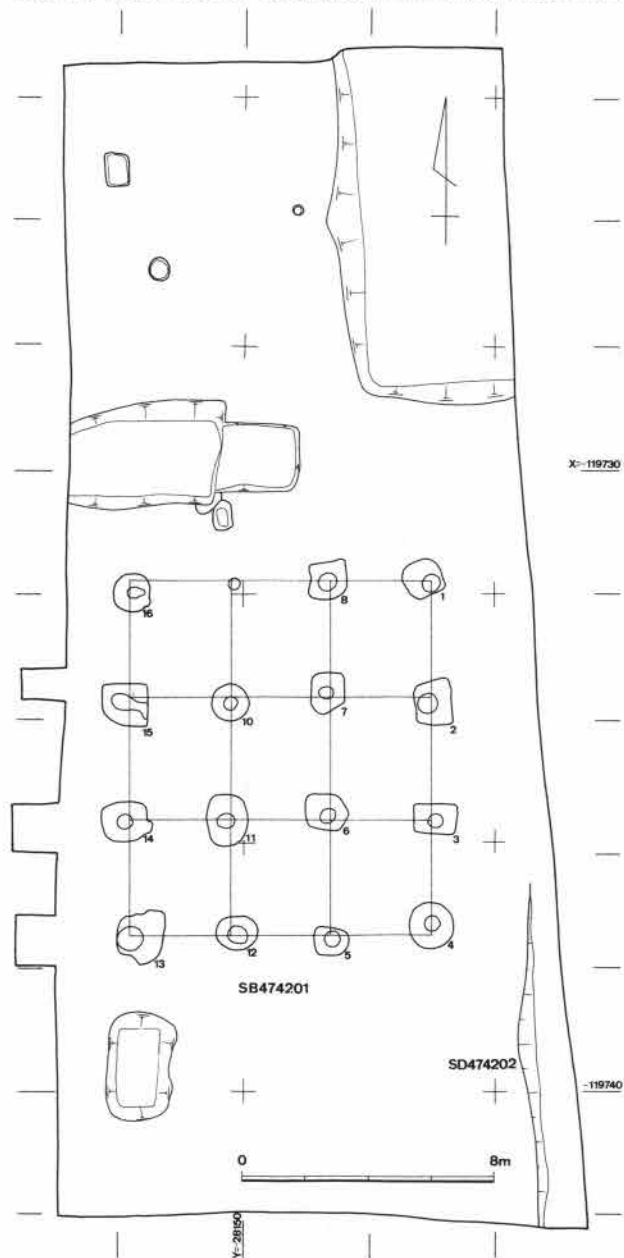


中世墓 S K47405(第110図)は、長辺150cm・短辺90cm及び60cmの長方形を呈する。検出面からの深さは30cm前後で、土師器皿(第115図19)を南西隅に副葬していた。右京第440次調査で認められたような棺材と考えられる木板などは出土しなかった。

中世土坑 S K47419(第111図)は、一辺90cmあまりの隅丸方形で、深さは検出面から40cmを測る。内部には完形の瓦器椀(第115図22)と土師器皿(17)が口縁部を上に向けて埋置され

ていた。

このほか、土師器皿が出土するピット(P40(第115図18)・P10(20)・P22(21))や、小規模な礎石を持つ柱穴群などを検出した。その多くは13世紀後半から14世紀前後の時期の遺物が含まれていたが、柱穴群は現段階で建物跡に復原できるものは認められなかった。

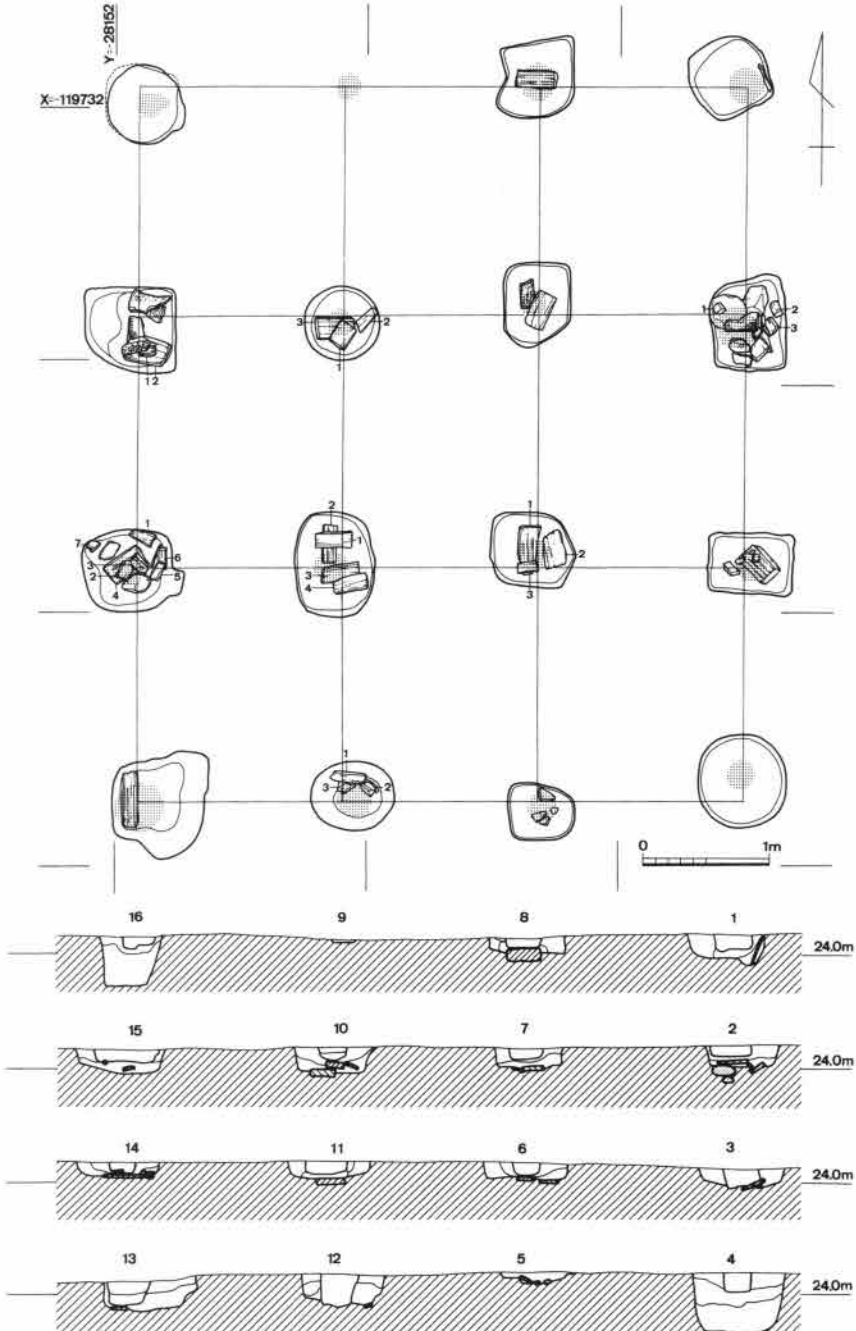


第112図 第2トレンチ遺構図(1/240)

## (2) 2トレンチ

2トレンチでは、近・現代の住居による攪乱が著しく、表土下50cmほど整地礫層、家屋廃材、ガラス、焼土などが堆積しており、遺構検出面直上まで近・現代の廃棄物がみられた(第107図)。また、便槽による攪乱が2か所でみられた。2トレンチ中央南側で、掘立柱建物跡 S B474201を検出した(第112図)。桁行3間・梁間3間の総柱の建物跡で、桁行184cm前後・梁

間160cmになる。柱の直径は30cm前後のものが多いが、柱穴13など直径40cmに近いものもある。柱穴掘形内には、根石や礎板及び木片(第117・118図)が埋置される(第113図参照)。



第113図 S B 474201

柱穴2は、根固めのための根石、木片(第117図2-1・2-2・2-3)、平瓦片(第116図2)の遺存する例で、中心にある平瓦に柱が乗ったようである。柱穴14は、根石、木片(第117図14-1・14-2・14-3)、礎板(第118図14-4)が出土した。柱穴15は、平城宮式軒平瓦(第116図1)と礎板(第118図15-2)が組み合わされる例で、礎板の上に軒平瓦を故意に二つに割って、凸面を上にして埋置されていた。柱穴7は、平瓦(第116図3)と礎板(第117図7)が組み合わされる。柱穴5は、平瓦細片のみ柱穴掘形底面に遺存していた。その他の柱穴は、礎板あるいは木片のみ出土した。特に、柱穴8では礎板の上に柱を置き、柱の根元周囲を白色粘土で巻いて固定する状況が観察された(第113図)。

### (3) 出土遺物(第114~118図)

古墳時代以前の遺物はほとんどなく、わずかに器台脚部(第114図1)と杯身(第115図2)が図示しうる。

器台脚部は、円周の四分の一程度が残存している。喇叭状に広がり、計7段の突帯をめぐらす。突帯の間隔はほぼ同じく、同一の板小口を使って波状文と列点文(幼虫文)を交互に施している。各段の施文後に、透し孔を施す。復原では、長辺2.5cmほどの横長長方形の透かしを四方向に施すと思われる。器表面、破面ともに淡青灰色で、堅緻な焼成である。胎土も緻密で、混和される造岩鉱物粒子はみられない。S X47417埋土から出土した。

奈良時代後期から長岡京期の遺物としては、おもに、S D47423、S D47414埋土から出土した須恵器杯A、杯B蓋、杯B、土師器椀A、壺Eなどがある。

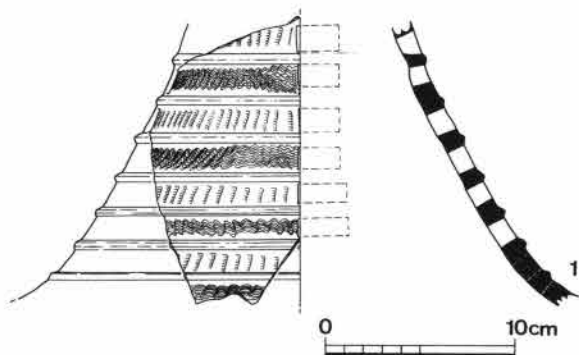
#### 須恵器(第115図2~14)

杯A(7) 口径13.1cm・器高3.15cm。底部にへら削り後、わずかな指頭圧痕が残る。S X47417出土。

杯B蓋(3~6) いずれも破片のみである。3は口径19.4cm、焼け歪みを生じている。

S X47417出土。4は口径17.6cm、頂部がやや笠高になる。S D47423出土。5は口径13cm内外、S D47423出土。6は口径14.0cmで、笠高になる。S D47423出土。

杯B(8~12) 8は、高台径14.0cmを測る。底部の屈曲点は鋭く、かなり内側に高台

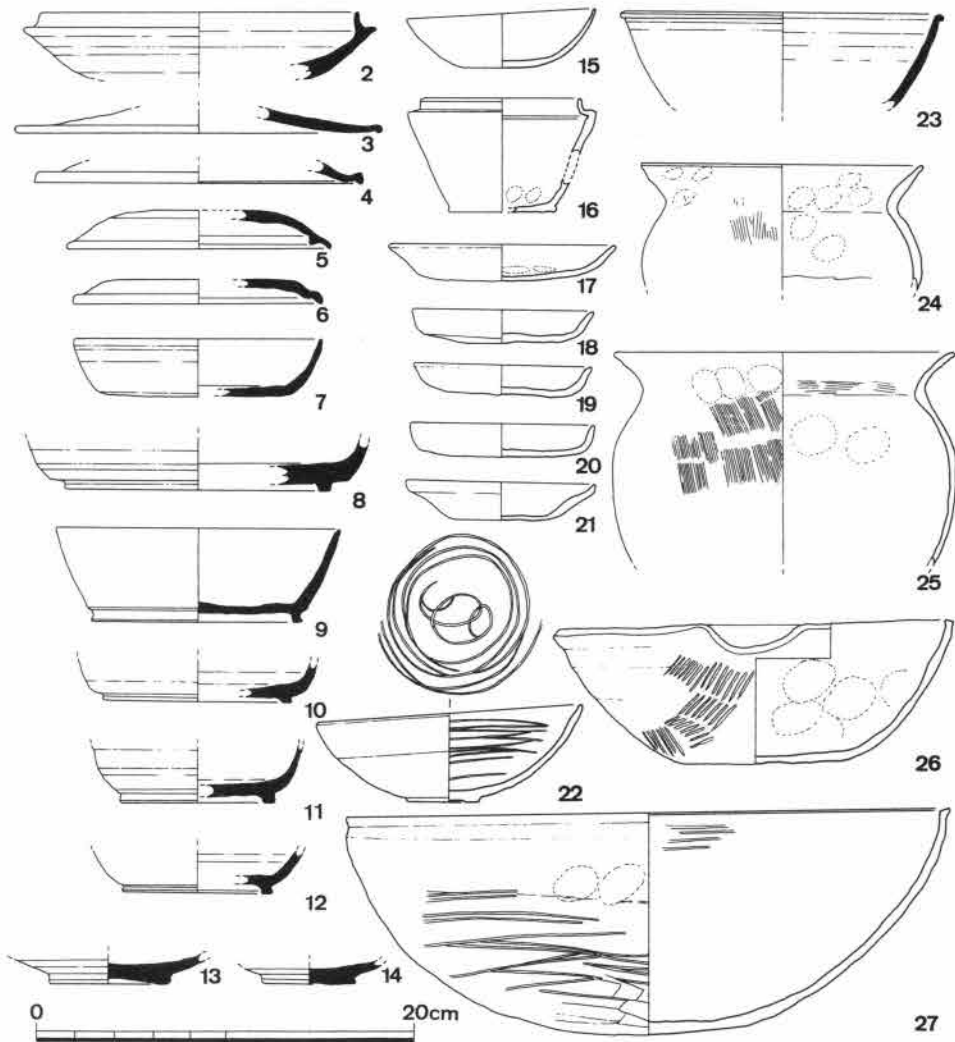


第114図 須恵器器台

が貼り付く。S D47423出土。9のみ全体が復原できた。口径15.5cm・器高5.0cm。口縁部はわずかに内湾しつつ、直線的に立ち上がる。S D47423出土。10は高台径10.0cm、底部屈曲点からかなり内側に高台を貼り付ける。口縁は、外側にあまり開かず立ち上がるようである。第3層出土。11は高台径8.2cm、同様に屈曲点から内側に高台が貼り付くが、屈曲部はゆるやかである。P47420出土。12は高台径7.8cm、1トレンチ南西隅遺物包含層から出土。

土師器(第115図15・16・24~27)

杯A(15) 口径10.0cm。磨耗が著しく、器表面の調整が不明瞭であるが、横位のヘラ削



第115図 出土土器実測図

り後、ヘラ磨きを行っているようである。S D47414出土。

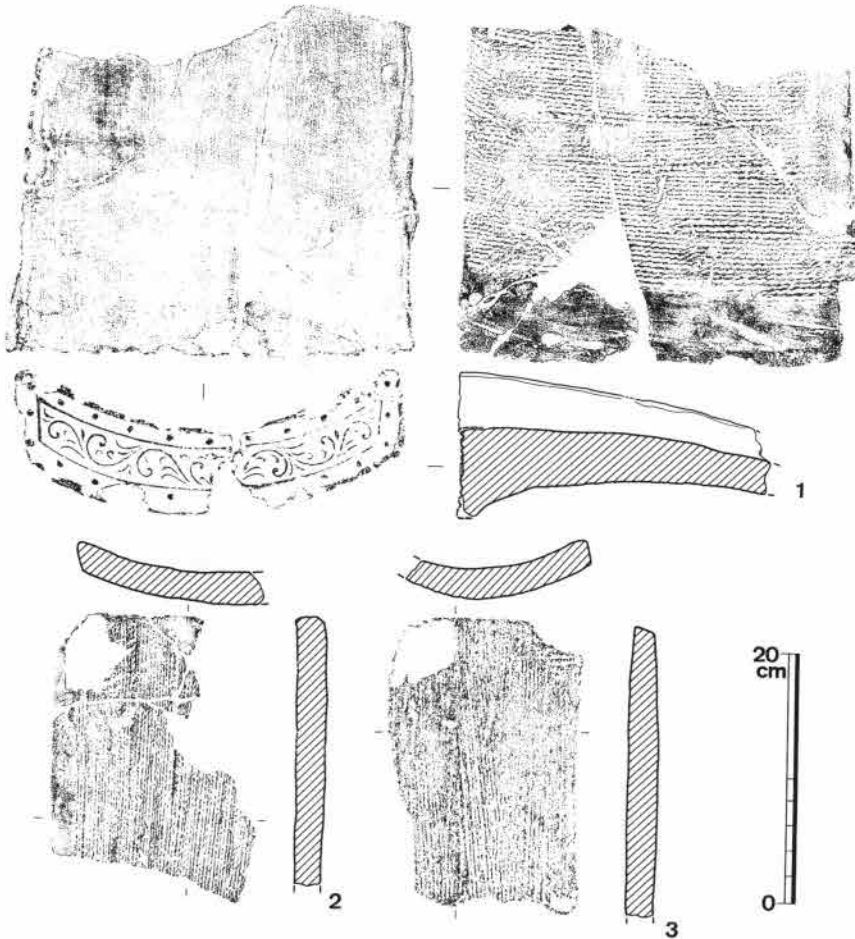
壺 E (16) 口径8.6cm、胴部の一部が欠損しているため、器高は不明であるが、図上で復原すれば、およそ6.1cmになろうか。肩部の屈曲が著しく、胴部は直線的に広がる。高台は、痕跡的に斜め下方向に突出する。S D47423出土。

また、1トレンチS D474102上面から破砕した状態で一括して出土したものに、次の土師器甕、片口鉢、大形鉢がある。

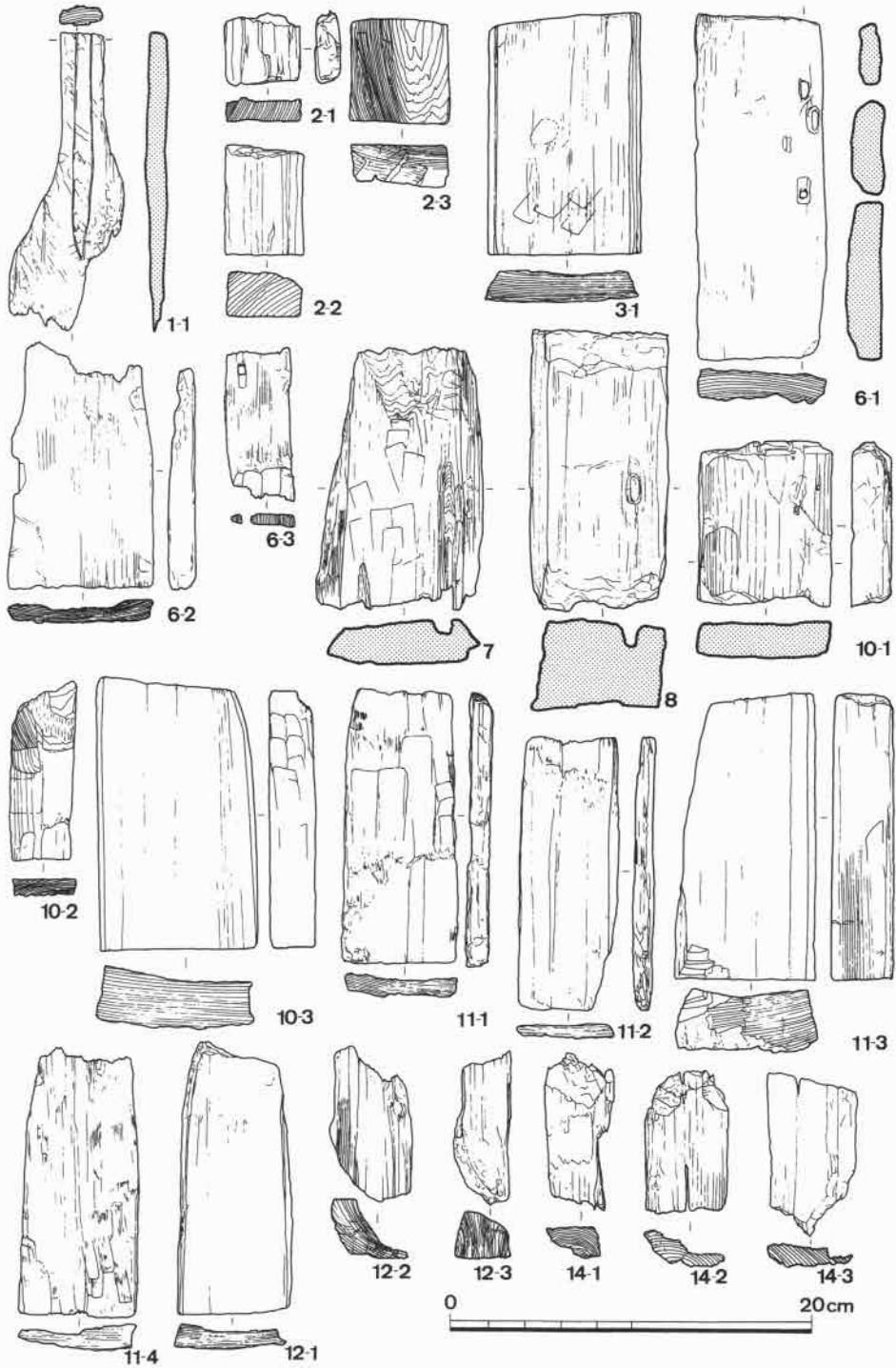
甕(25) 口径19.0cm。器表面には、幅8mmで7条ほどのハケ単位が認められる。淡白黄褐色を呈し、焼成も不良である。胎土には磨耗した1mm程度の褐色鉱物粒子が見られる。

片口鉢(26) 長径21.6cm・短径20.2cm・器高7.7cm。口縁は正円にはならない。器表面には、幅2.5cm程度のタタキ痕単位が見られる。内面は指頭圧痕が著しい。淡褐色。

大形鉢(27) 口径32.0cm・器高12.15cm。片口鉢26同様、口縁は正円にはならない。口



第116図 軒平瓦・平瓦実測図



第117図 碓板実測図(1)

縁部直下の強い横ナデによって、口縁端部は内外にやや突出し、端部上面には5mm程度の端面をもつ。口縁部を一部失っており、片口がつく可能性がある。器表面下半には粘土紐巻き上げ痕や指頭圧痕が残る。幅1.5cm単位のヘラ削りが行われ、部分的に鋭いヘラ磨きが施される。底部はわずかに平底につくり、黒斑が見られる。類例としては、長岡京跡左京三条二坊S D 51出土鉢<sup>(註9)</sup>がある。

瓦(第116図)

均整唐草文軒平瓦(平城宮式6732A)(第116図1) 上弦幅304mm、弦深47mm、瓦当厚72mm、内区厚34mm、上外区厚17mm、下外区厚22mm、脇区幅21mmを測る。凸面は、横方向のヘラ削りを施し、曲線顎を形成する。横位の縄タタキを施す。焼成は良好で、表面黒灰色、断面灰白色を呈する。S B 474201柱穴15出土。

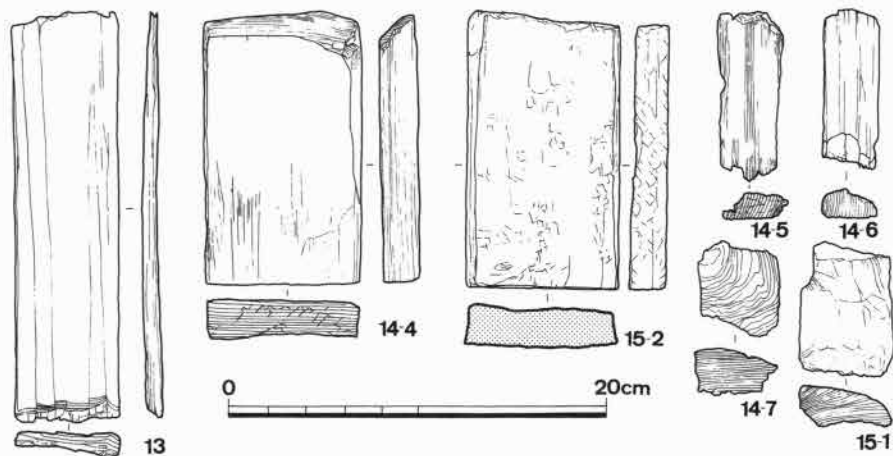
2・3は平瓦片で、凸面に縦位の縄タタキを施す。2はS B 474201柱穴2、3は同柱穴7出土。

礎盤などの木材(第117・118図)

建築部材などの再利用品である。礎盤となるものには、板材と厚い直方体の木材がある。いずれも転用材を分割して使用しているが、お互いに接合する礎板材はない。柱穴埋土安定のための木片は、部材をさらに分割したものを利用しており、不定形である。表面に錘痕を残すものがあり、柱穴6-1・10-3・11-1・11-3・12-1・15-2は板材下辺が平滑で、鋸で切断したものと思われる。

中世以降の遺物(第115図17~22)

土師器皿(17~21) 口径11.8cmのやや大形の皿(17)と口径9.6cm内外の中形皿(18~20)がある。口縁部から底部に強い屈曲がみられる。17はS K 47419、18はP 47440、19はS K



第118図 礎板実測図(2)

47405、20はP47410、21はP47422から、それぞれ出土した。

楠葉系瓦器椀(第115図22) 口径13.9cm・器高5.2cm内外を測る。口縁は正円ではなく、やや歪で、器表面に指オサエ痕を残し、底部に退化した断面三角形の高台を貼り付ける。S K47419出土。

### 3. ま と め

今回の調査では、長岡京期の条坊側溝(西三坊坊間小路東側溝)の検出はできなかったが、1トレンチでは、長岡京期と考えられる宅地内の東西溝を検出し、鑄造炉の炉壁片の存在を確認した。右京第109次調査の箱型炉<sup>(注10)</sup>や右京第447次調査の竪型炉などからも、右京五条三坊四町から五町(六条三坊二町から七町)にわたる大規模な金属器生産専門の「工場の施設」<sup>(注11)</sup>が存在していたと思われる。

2トレンチでは、長岡京期と考えられる総柱の建物跡が見つかり、倉庫として使用されたものと考えられる。柱穴内から出土した平城京式の軒平瓦は6732A型式のもので、長岡宮では第2次内裏内郭築地回廊や外郭北方官衙にあるが、右京域での再利用による出土例は珍しいものである。

また、この後、1トレンチでは中世における広い範囲での整地作業がみとめられ(第106図1トレンチ東壁セクション第5・6層)、開田城ノ内遺跡における右京第440次調査成果<sup>(注12)</sup>を追認することとなった。

(野島 永)

注1 山中 章「古代条坊制論」『考古学研究』第38巻第4号 1992

注2 主な調査参加者(敬称略、順不同)

前田暁宏、豊岡みどり、達田美枝

注3 石尾政信「長岡京跡右京第440次発掘調査概要(7ANKNZ-4地区)」(『京都府遺跡調査概報』第58冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994

注4 小田桐淳「長岡京跡右京第447次(7ANKNZ-6地区)調査概要」(『長岡京市文化財調査報告書』第32冊 長岡京市教育委員会) 1994

注5 中島皆夫「長岡京跡右京第443次(7ANKSC-5地区)調査概要」(『長岡京市文化財調査報告書』第32冊 長岡京市教育委員会) 1994

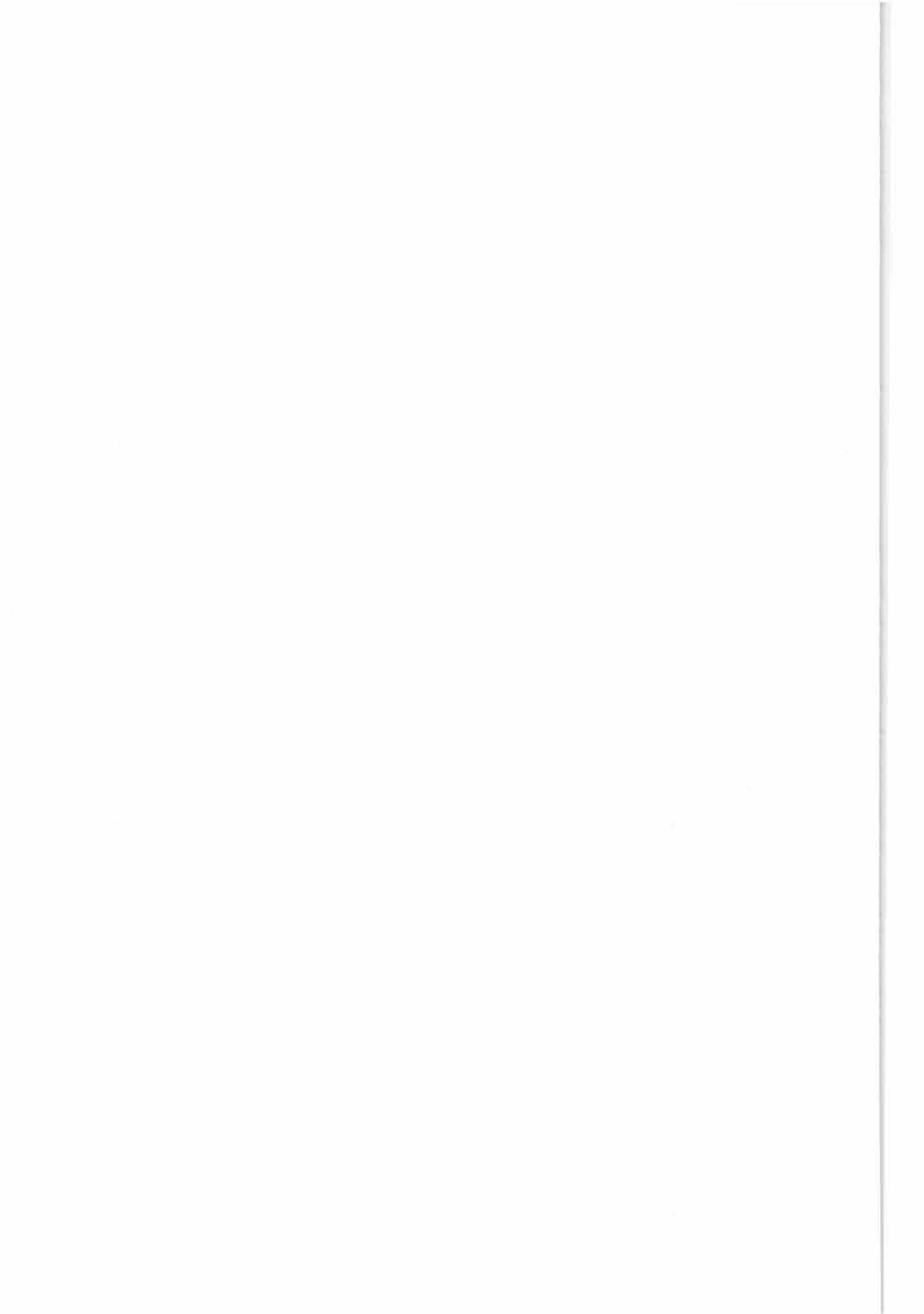
注6 小田桐淳「右京第344次(7ANKJC地区)調査概報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成元年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1991

注7 石尾政信「長岡京跡右京第411次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第53冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993



- 注8 S D47415自体からは出土遺物はほとんど見られず、わずかに土師器細片のみであったが、隣接して行われた右京第440次調査において、同一の溝と考えられるS D44021が平安時代中期の遺物を包含していたことによる(注3文献参照)。
- 注9 百瀬正恒・徳丸始朗・高橋美久二「長岡京跡左京三条二坊第2次発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1976)』 京都府教育委員会) 1976  
(財)向日市埋蔵文化財センターの山中 章氏、國下多美樹氏に実見頂き、教示を得た。記して感謝したい。
- 注10 小田桐淳「右京第109次(7ANKNZ地区)調査概報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和57年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1983
- 注11 山中 章「長岡京の金属(器)生産」(『考古論集—潮見 浩先生退官記念論文集』 潮見 浩先生退官記念事業会) 1993
- 注12 注3文献参照。

版 圖



図版第1 上野古墳群



(1) 上野1・2号墳全景(北東から)



(2) 上野1号墳全景(北東から)



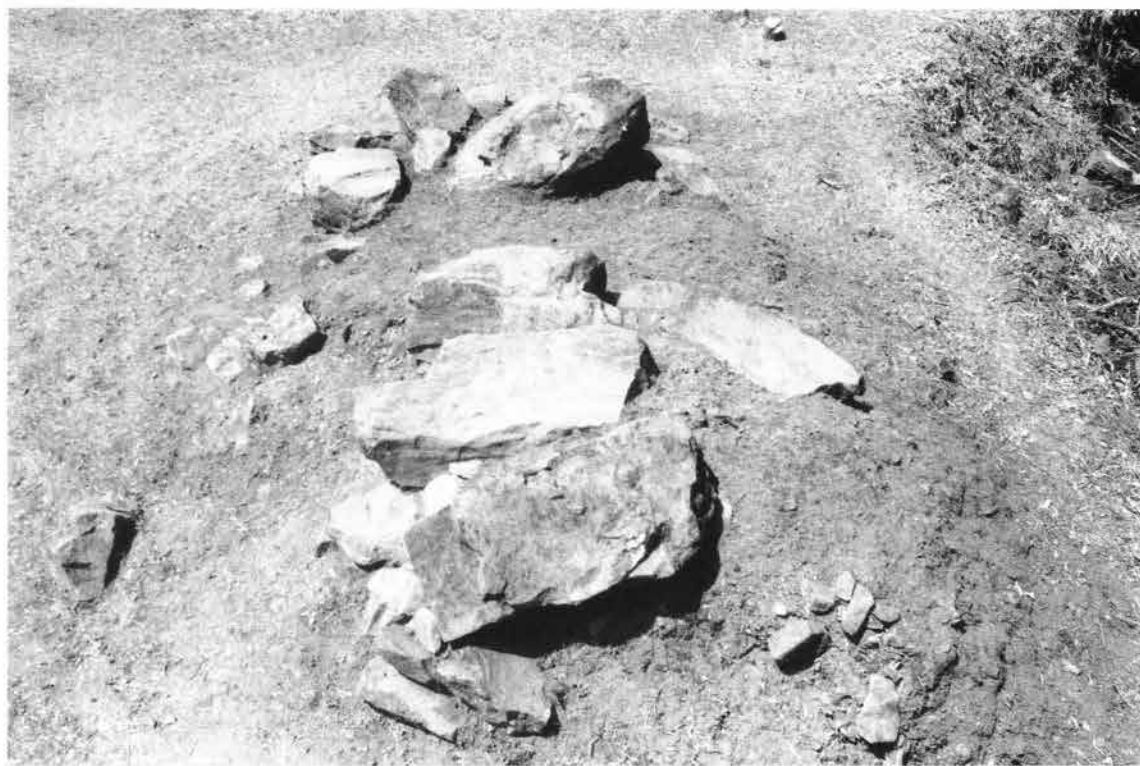
(1) 上野1号墳発掘風景（北東から）



(2) 上野2号墳発掘風景（南から）



(1) 上野1号墳発掘前状況（南東から）



(2) 上野1号墳発掘前状況（北東から）

図版第4 上野古墳群



(1) 上野1号墳検出状況（北東から）



(2) 上野1号墳羨道部大甕出土状況（北西から）

図版第5 上野古墳群



(1) 上野1号墳羨道部遺物出土状況（北東から）



(2) 上野1号墳閉塞石検出状況（南西から）





(1) 上野1号墳玄室内遺物出土状況（北東から）



(2) 上野1号墳玄室内遺物出土状況（中央部）



(1) 上野1号墳玄室内遺物出土状況(南西から)



(2) 上野1号墳玄室内遺物出土状況(奥壁左隅)



(1) 上野1号墳玄室内遺物出土状況（奥壁左隅）



(2) 上野1号墳玄室内遺物出土状況（奥壁右隅）



(1) 上野1号墳初葬時閉塞石検出状況1 (北東から)



(2) 上野1号墳初葬時閉塞石検出状況2 (左側が玄室)



(1) 上野1号墳閉塞石除去状況（北東から）



(2) 上野1号墳玄室内遺物出土状況（北東から）



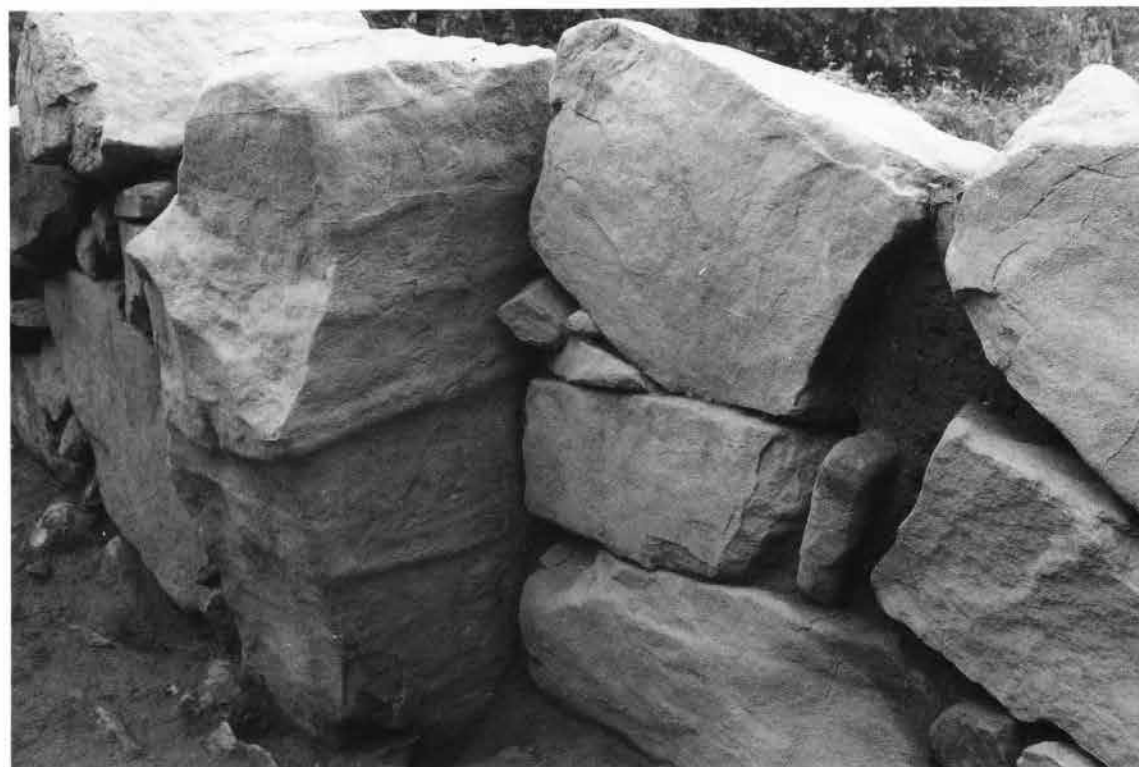
(1) 上野1号墳玄室内石材配列状況（北東から）



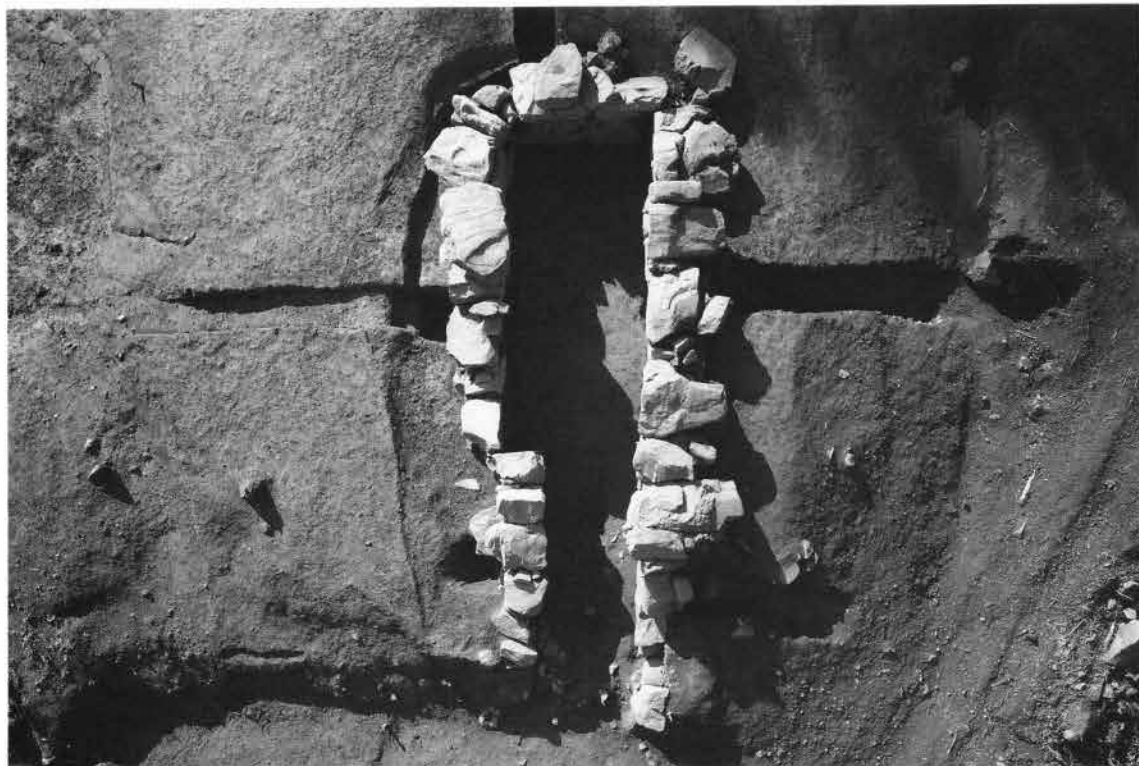
(2) 上野1号墳完掘状況（北東から）



(1) 上野1号墳奥壁状況(北東から)



(2) 上野1号墳袖部状況(西から)



(1) 上野1号墳完掘状況1 (真上から)



(2) 上野1号墳完掘状況2 (北東から)





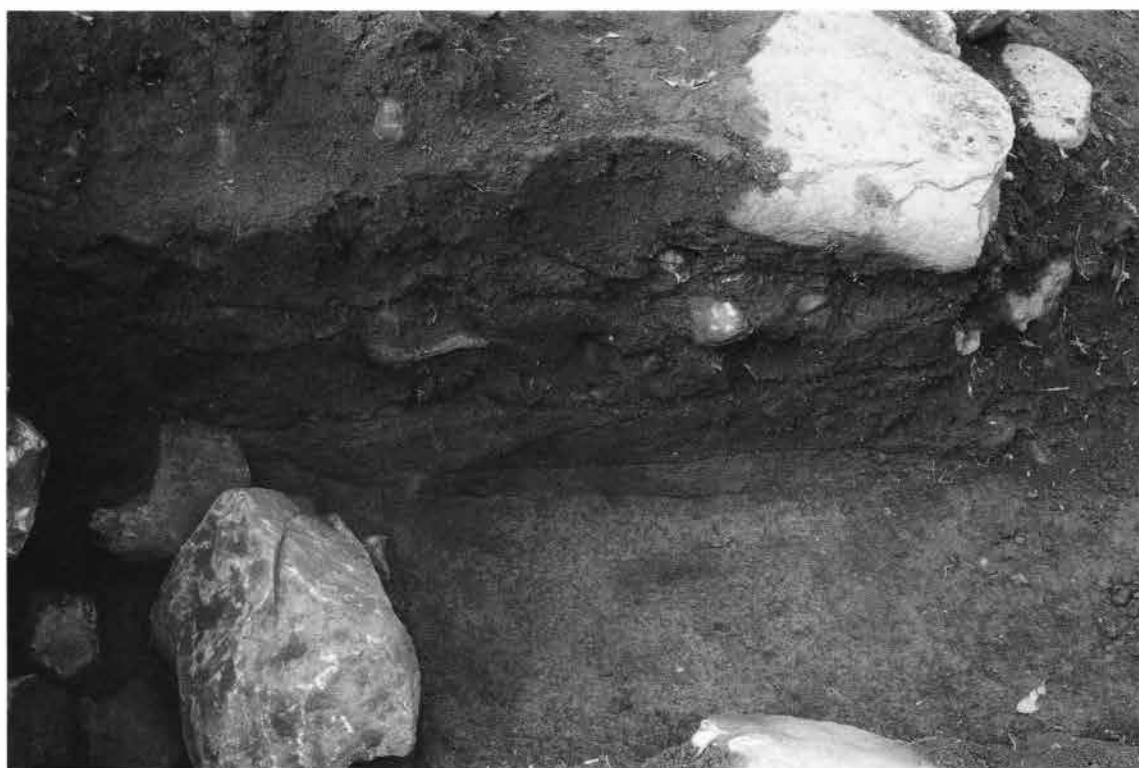
(1) 上野1号墳奥壁背面盛り土状況（北東から）



(2) 上野1号墳石室左側壁背面盛り土状況（北東から）



(1) 上野1号墳羨道右側面裏込め状況(北西から)



(2) 上野1号墳羨道右側面盛り土状況(北東から)



(1) 上野1・2号墳全景(南から)



(2) 上野2号墳全景



(1) 上野2号墳発掘前状況（北から）



(2) 上野2号墳発掘前状況（北から）



(1) 上野2号墳検出状況(南から)



(2) 上野2号墳完掘状況(南から)



(1) 上野2号墳遺物出土状況(南から)



(2) 上野2号墳遺物出土状況(北から)



(1) 上野2号墳羨門部全景（南から）



(2) 上野2号墳羨門部検出の甕



(1) 上野2号墳石室側壁石積み変化部分 (西から)

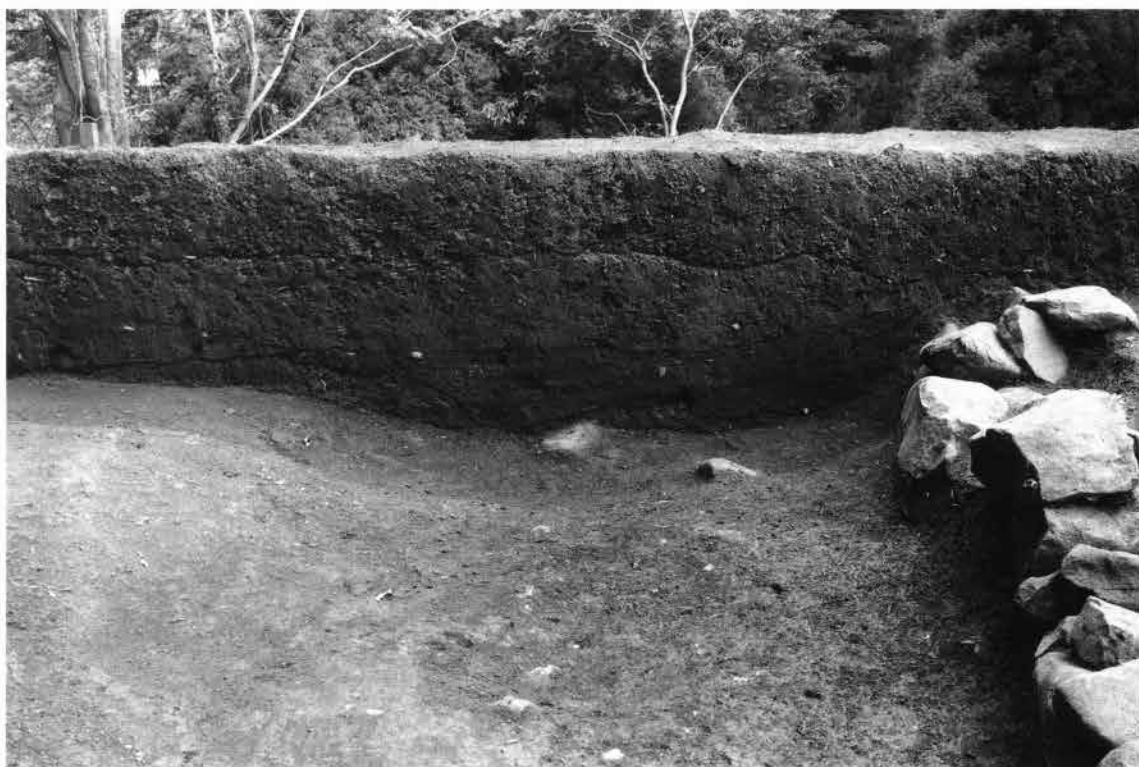


(2) 上野2号墳閉塞石検出状況 (西から)





(1) 上野2号墳石垣状列石全景(北西から)



(2) 上野2号墳周溝内堆積状況(西から)



(1) 上野2号墳全景（南西から）



(2) 上野2号墳上段列石検出状況（南から）



(1) 上野2号墳墳丘断ち割り状況（上段列石部分）



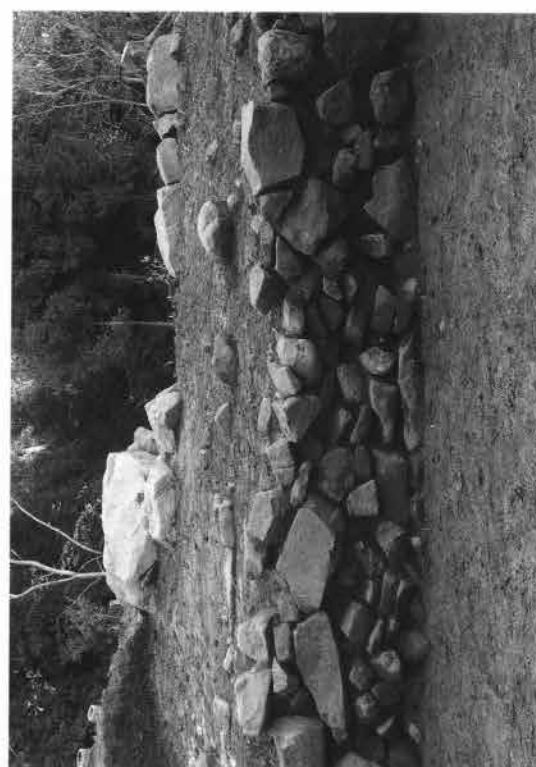
(2) 上野2号墳基底部断ち割り状況（東から）



(1) 北辺列石状況 (北から)



(3) 西辺列石の区画石 (2番目)



(2) 西辺列石状況



(4) 西辺列石の区画石 (3番目)





23



28



24



36



20



29



27



31



21



32



25



33



34



37



26



30



41



38



46



43



39



49



51



44



56



42



64



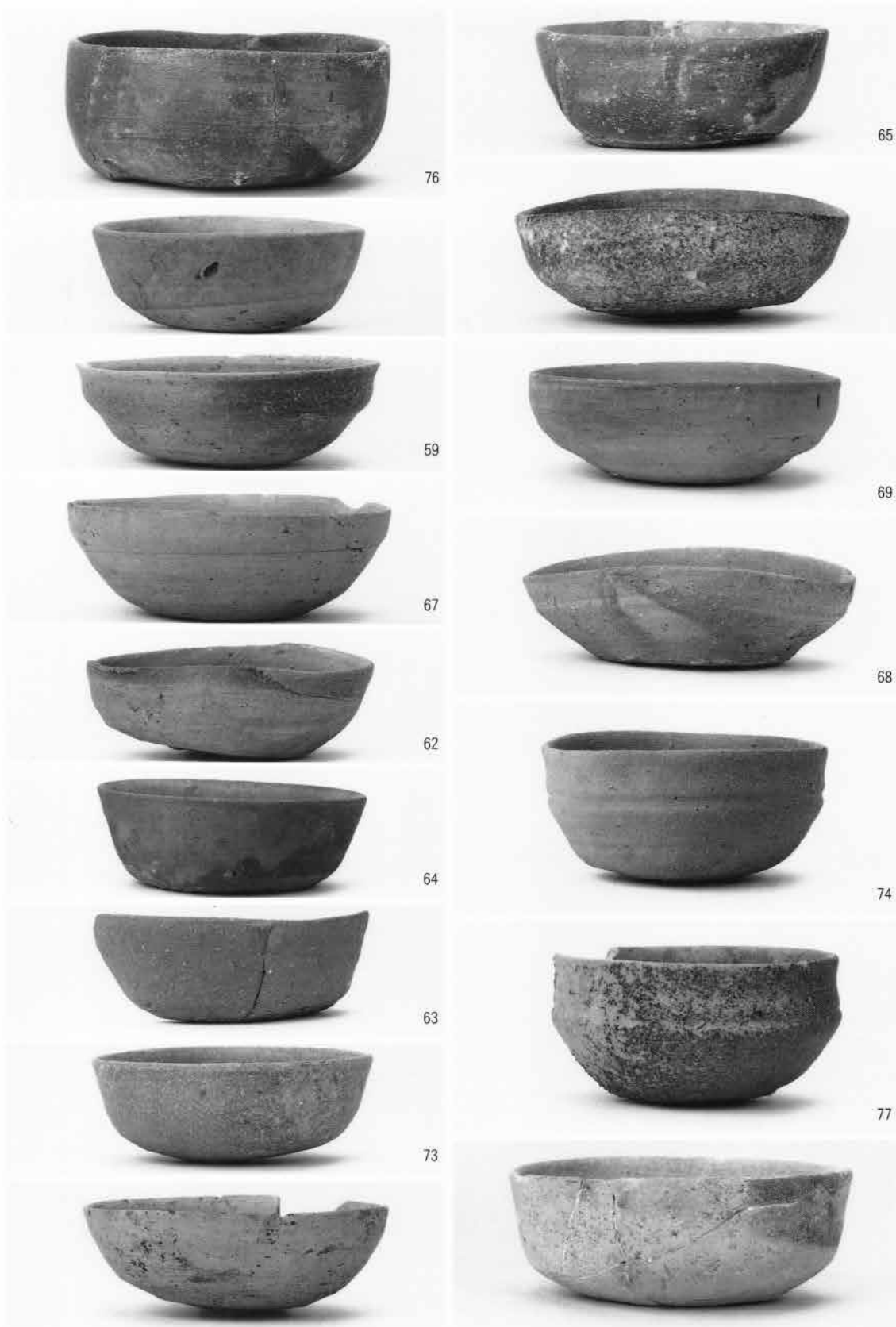
40



72



70



上野1号墳出土土器(4)





102



101



104



108



105



103



106



81



82



80



95





86



83



90



85



88



87



99



110



98



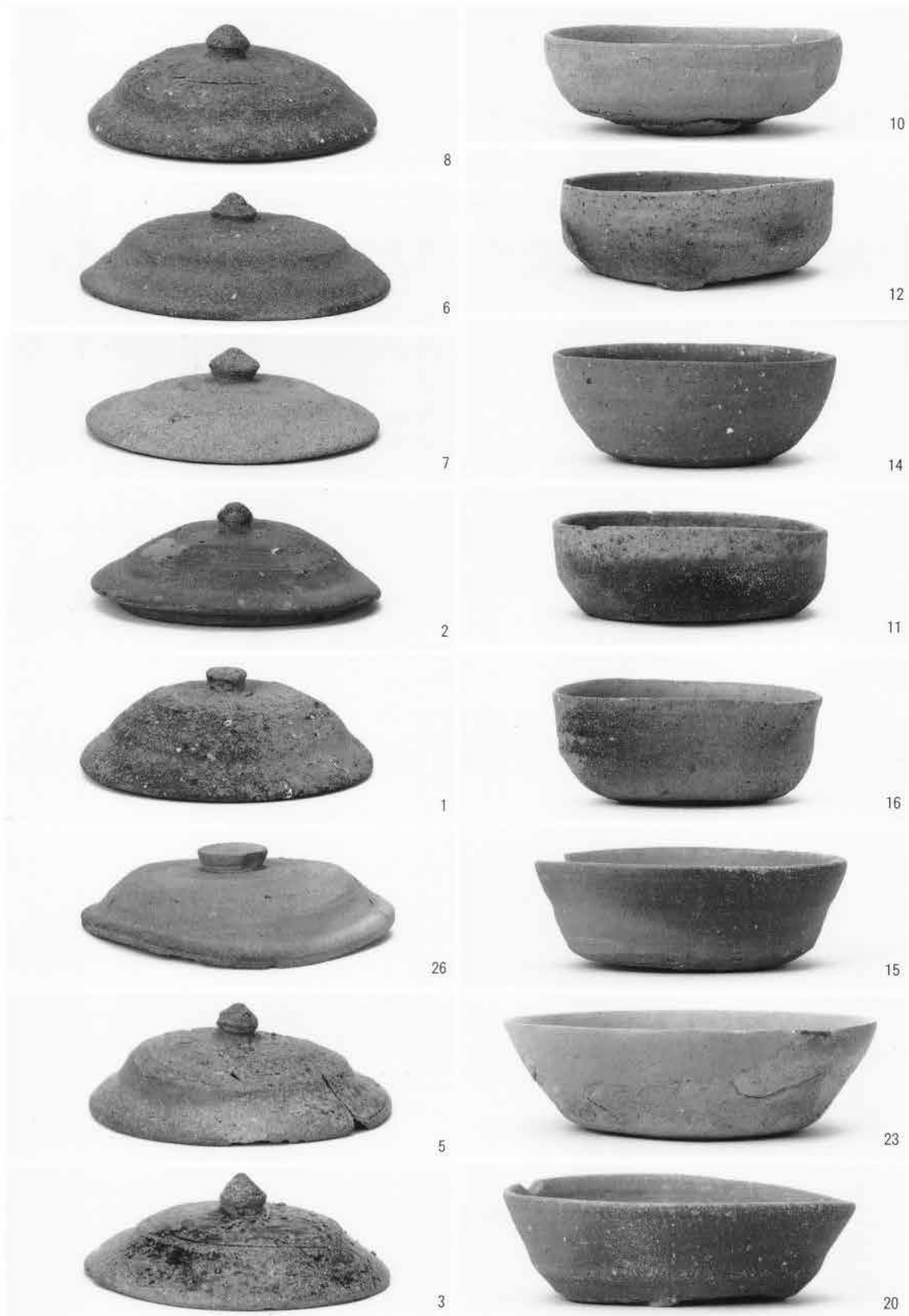
92



89



93



上野2号墳出土土器



31



30



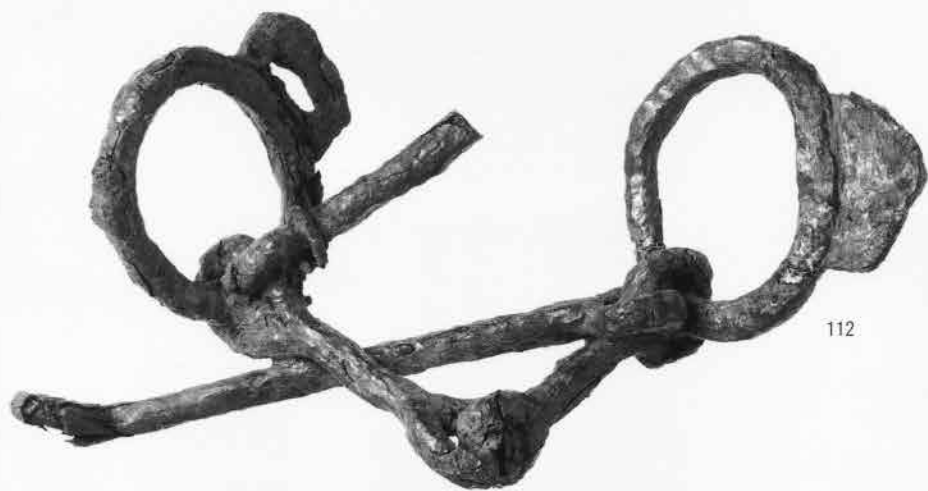
29



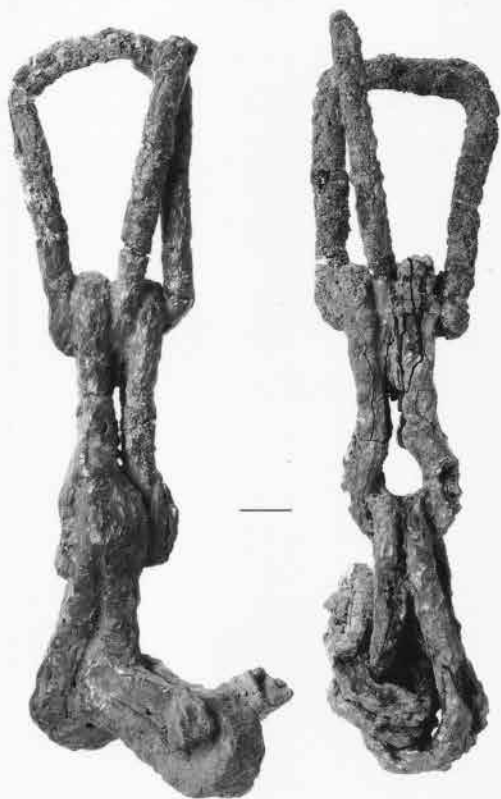
111



32



112

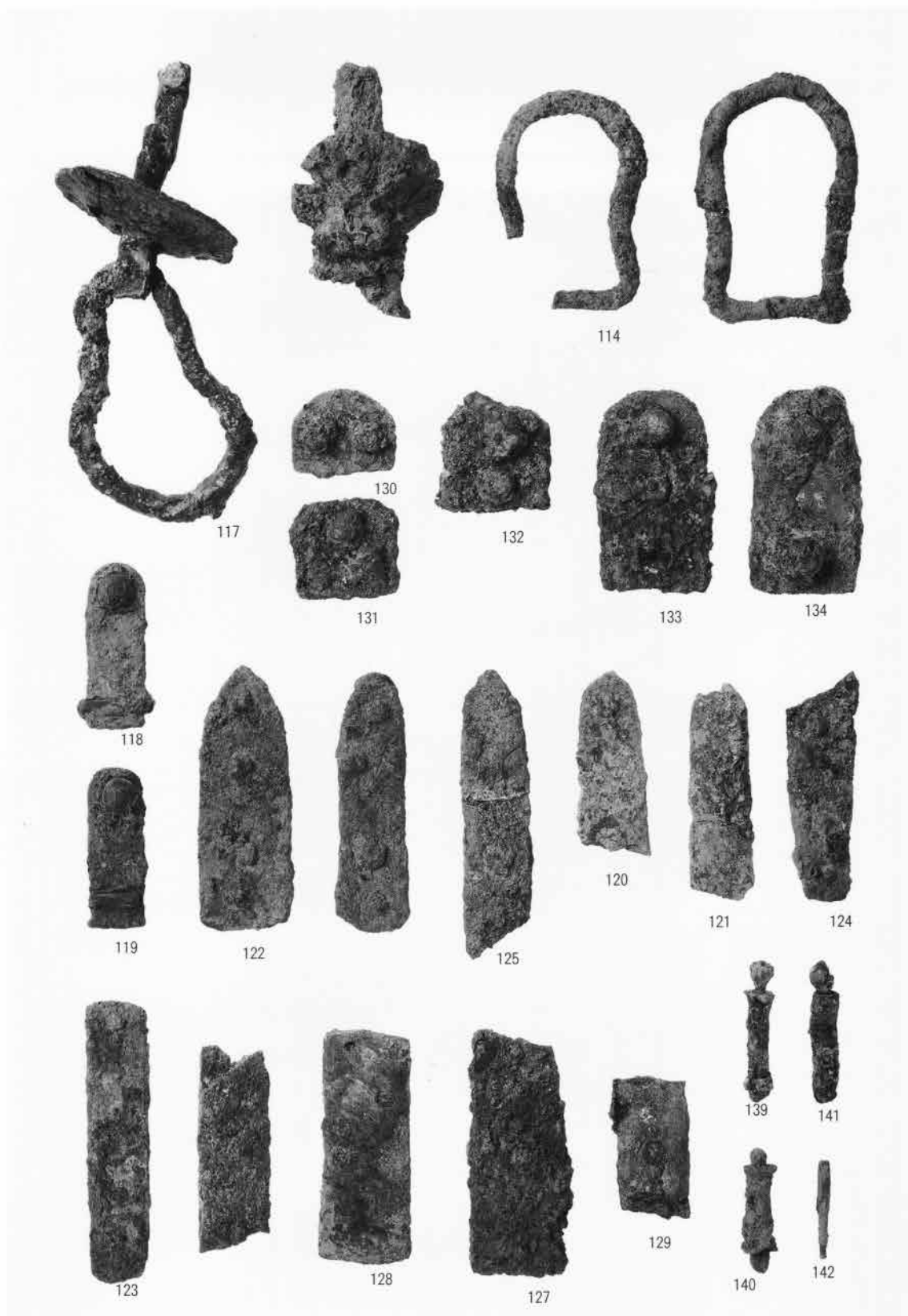


113



116

上野1号墳出土鉄製品（馬具）

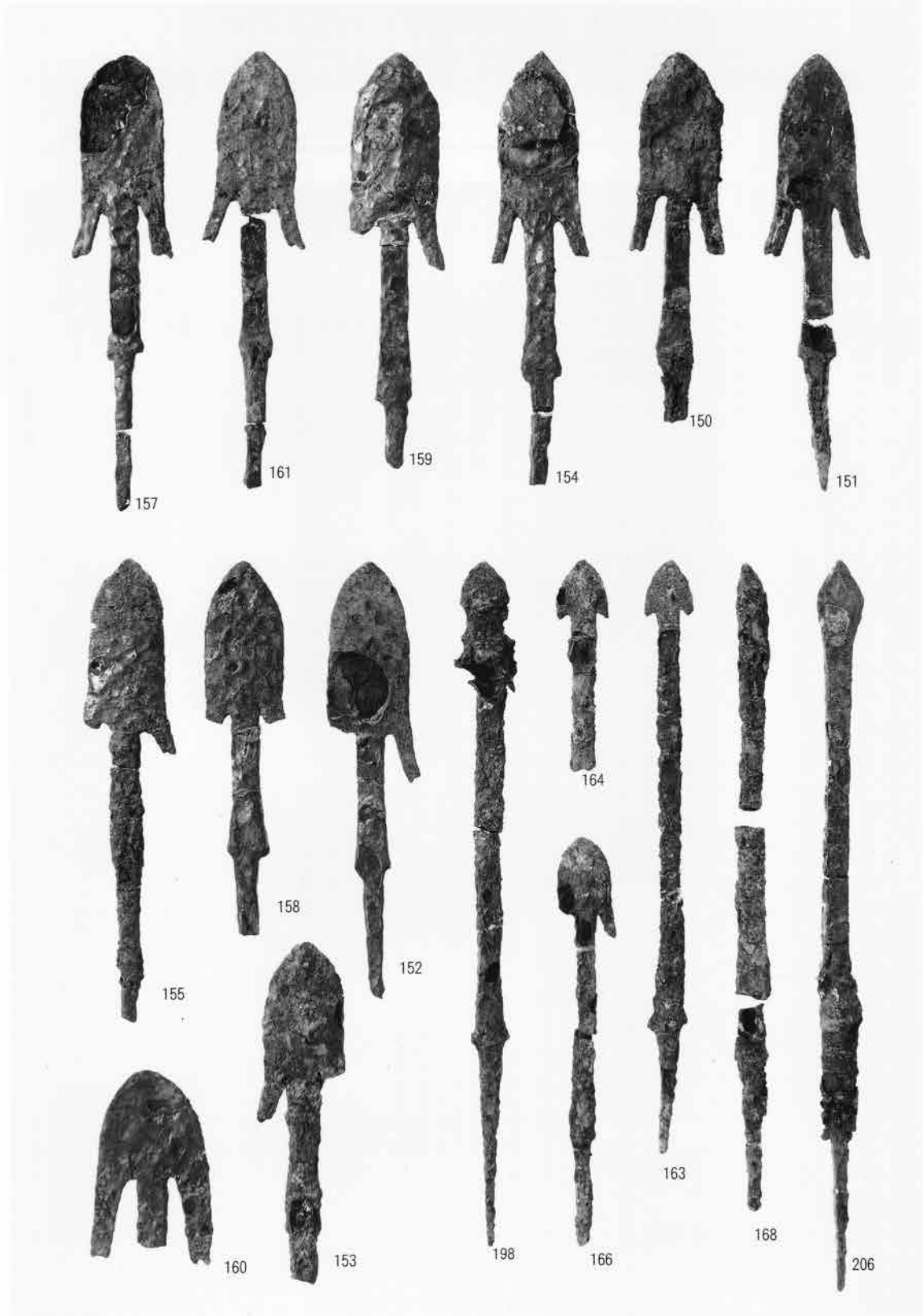


上野1号墳出土鉄製品（馬具・弓束金具・針）

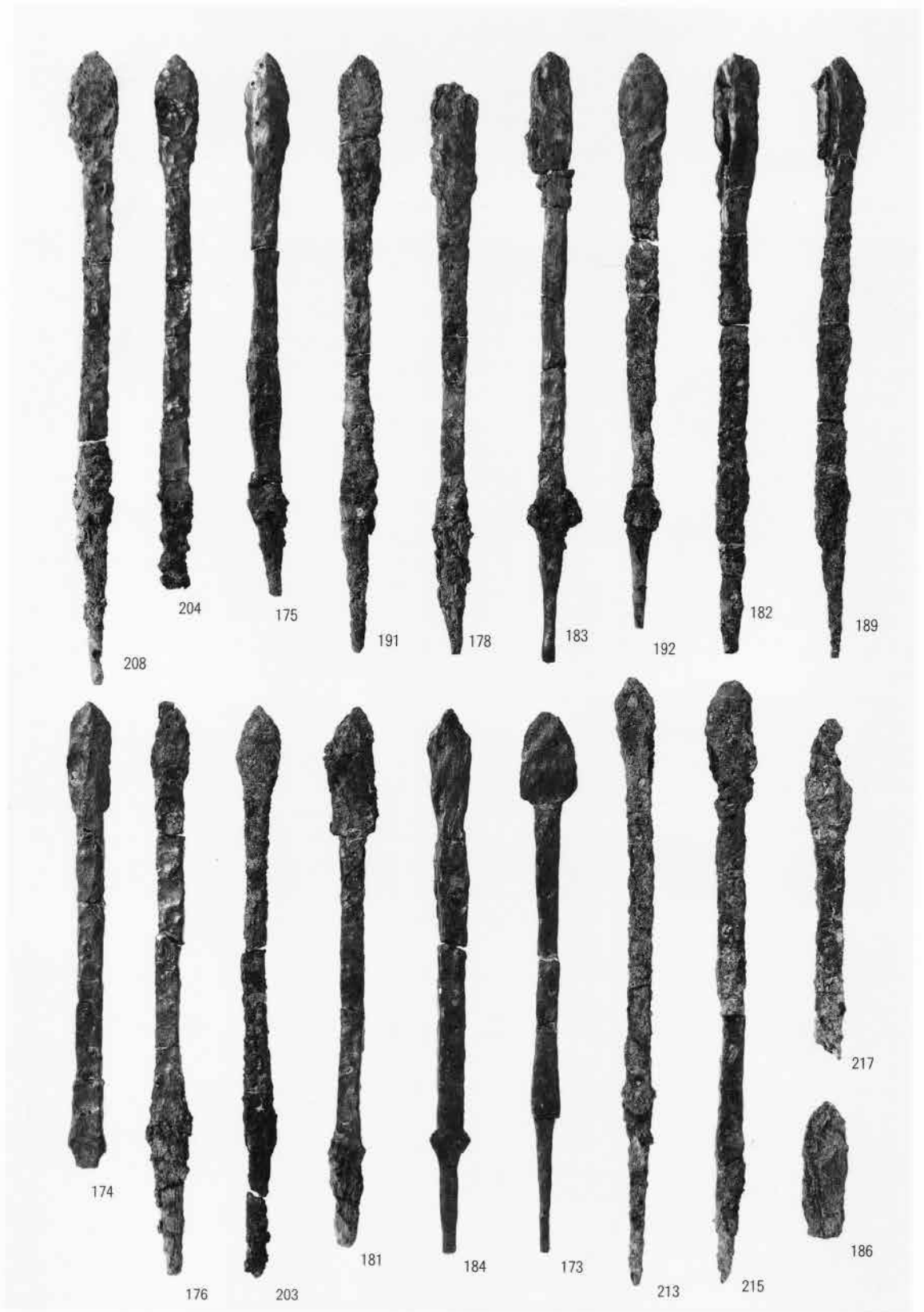


上野1・2号墳出土鉄製品 (刀・刀子)



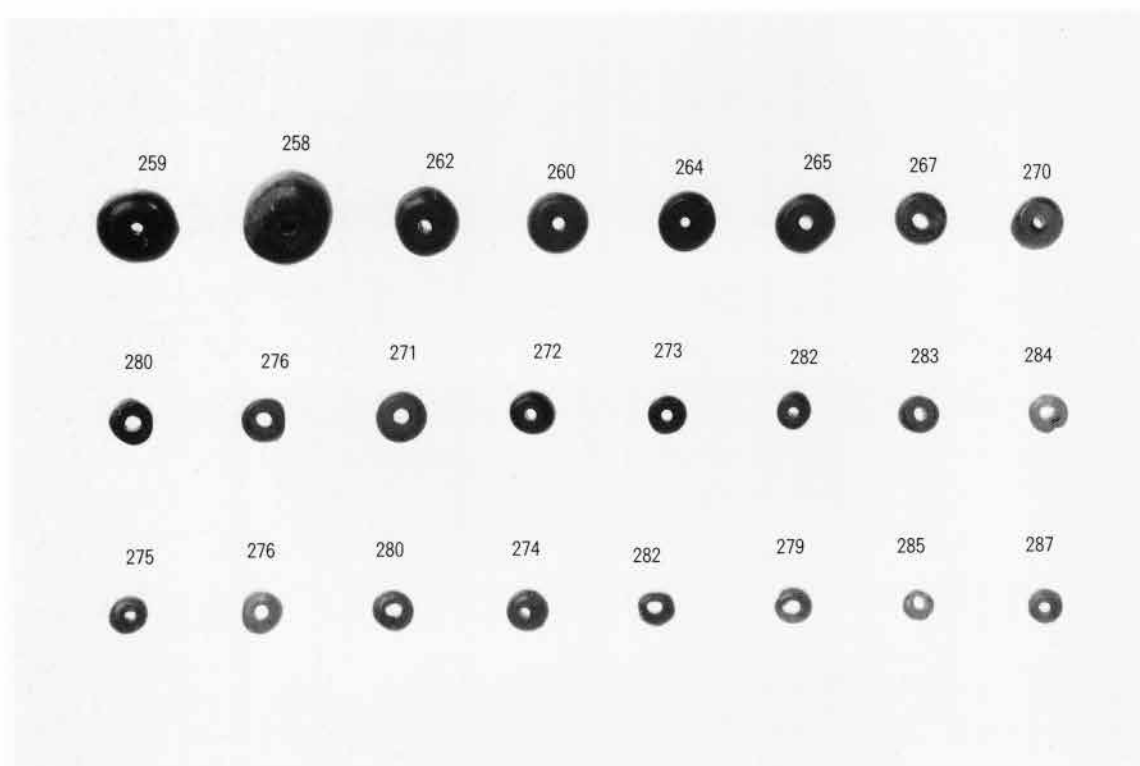
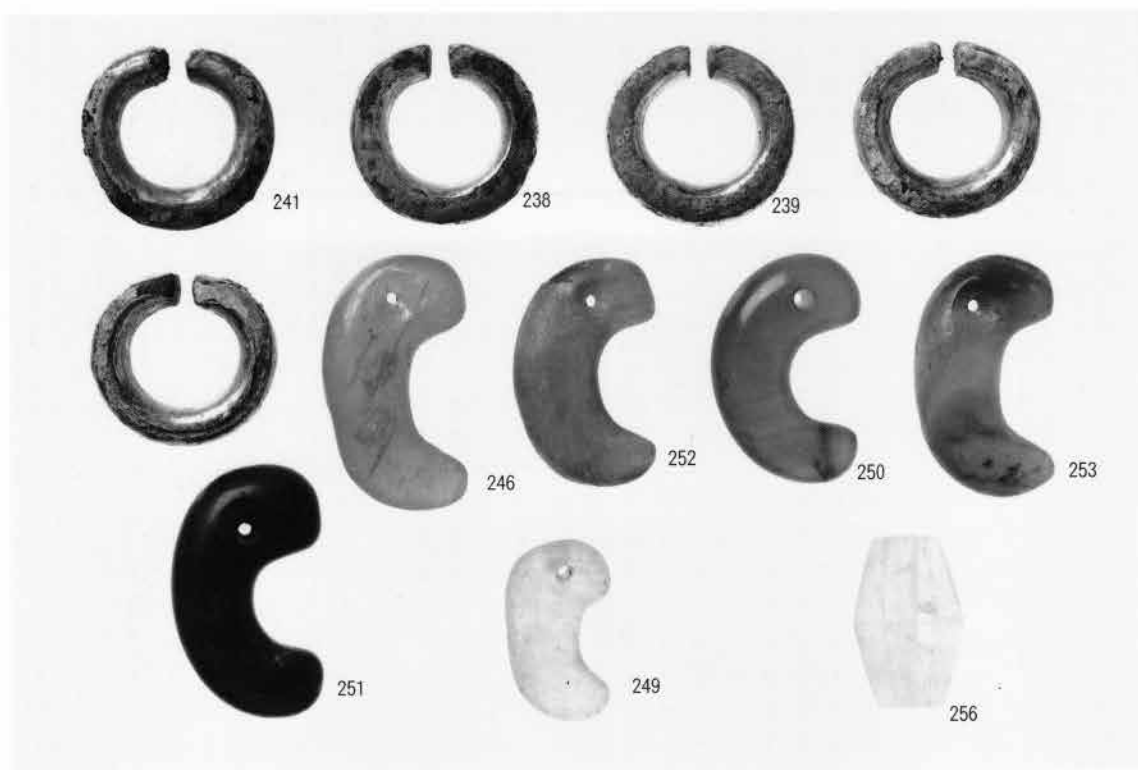


上野1号墳出土鉄製品（鉄鏃）

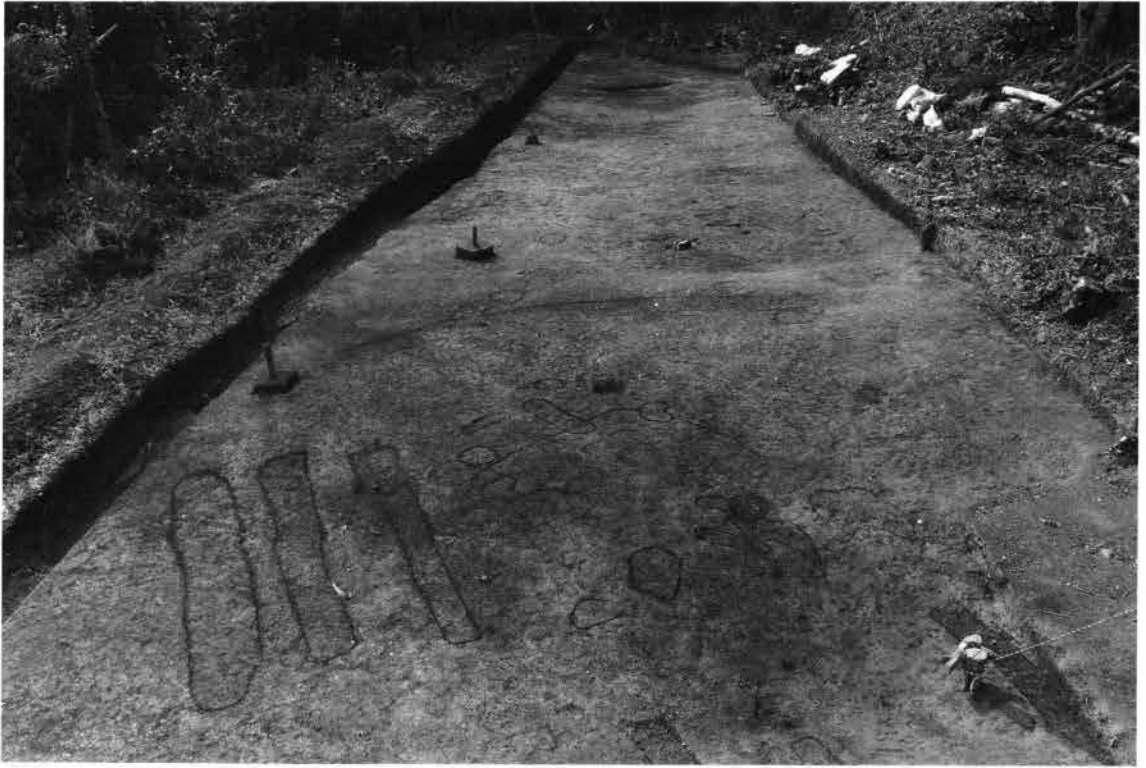


上野1号墳出土鉄製品(鉄鏃)

図版第40 上野古墳群



上野1・2号墳出土装身具（耳環・勾玉・切子玉・ガラス玉）



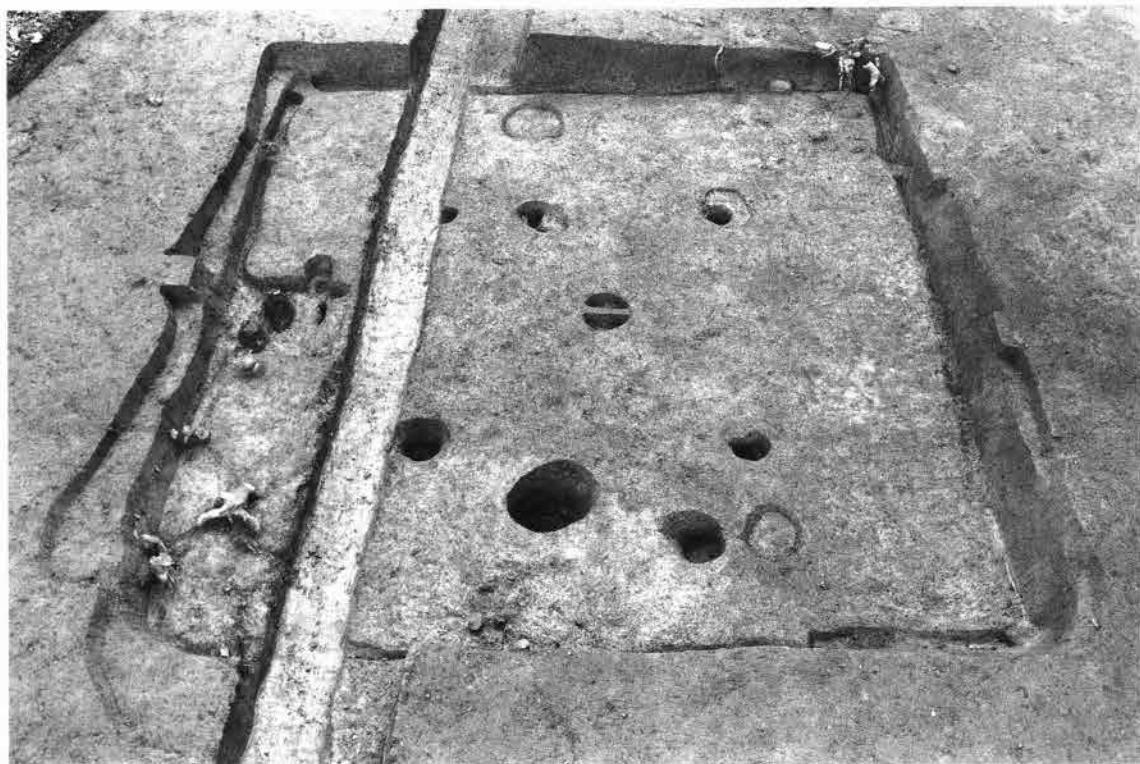
(1) 滝谷遺跡調査前（北から）



(2) 滝谷遺跡試掘トレンチ掘削作業風景（西から）



(1) 滝谷遺跡 SH 01掘削作業風景（北東から）



(2) 滝谷遺跡 SH 01完掘状況（北から）



(1) 石ヶ原古墳群掘削作業風景



(2) 石ヶ原古墳群F地点完掘状況（南西から）



(1) 滝谷遺跡・石ヶ原古墳群現地説明会風景



7



8



10



14

(2) 滝谷遺跡出土遺物

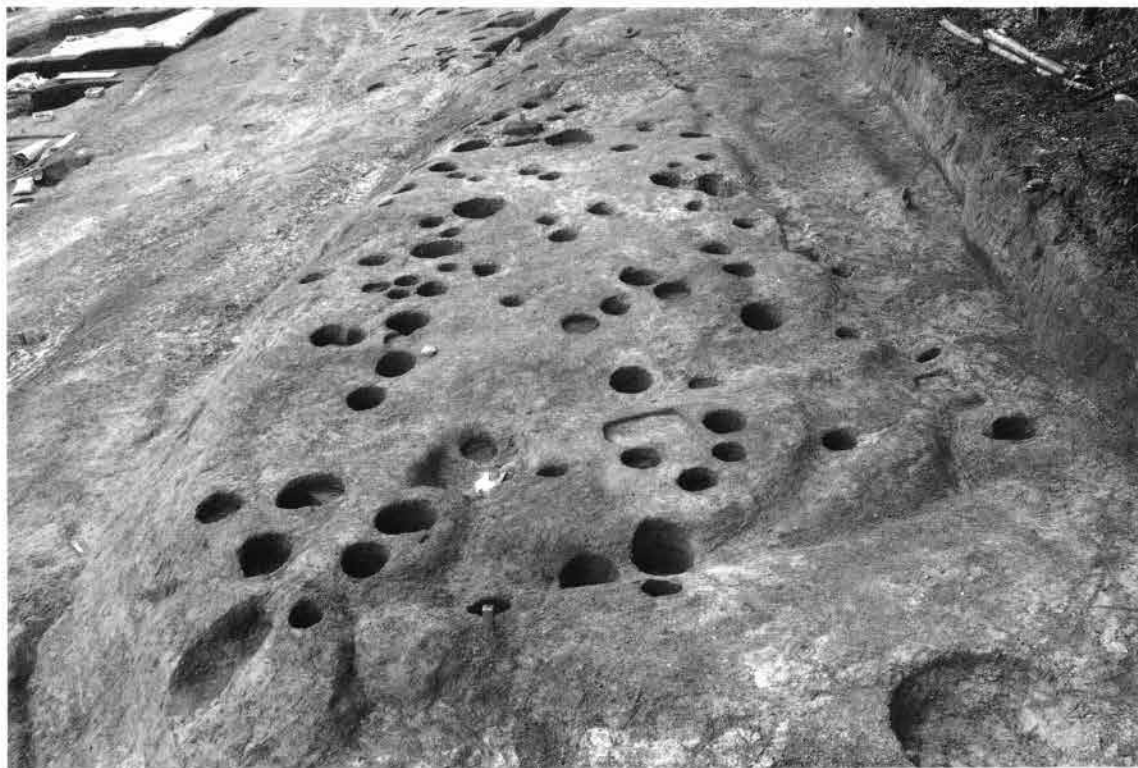


(1) B地区全景（北東から）



(2) B地区住居跡2 近景（南東から）





(1) B地区住居跡19近景(北西から)



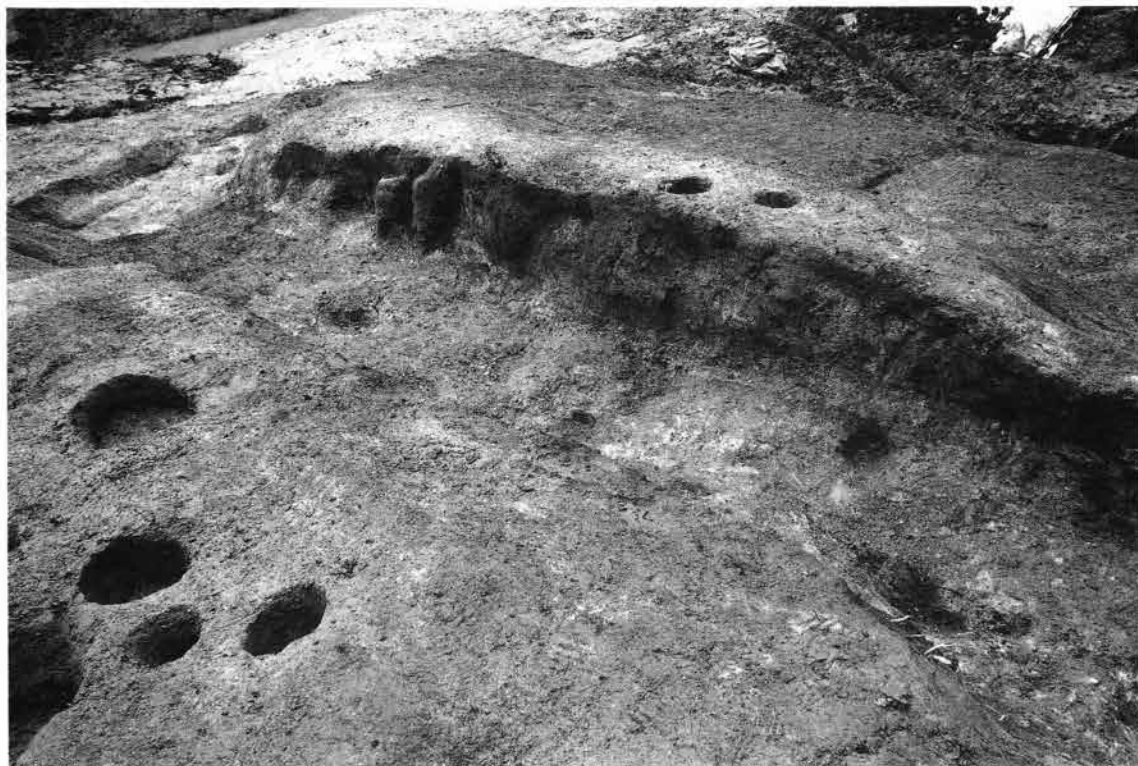
(2) B地区柱穴群近景(北西から)



(1) ニゴレ1号炉調査前検出状況（南から）



(2) ニゴレ1号炉全景（北東から）



(1) ニゴレ1号炉近景(北西から)



(2) ニゴレ1号炉内粉炭堆積状況(南西から)



(1) ニゴレ2号炉近景 (南東から)



(2) ニゴレ2号炉近景 (南西から)



(1) ニゴレ3・4号炉、祭祀遺構全景（南西から）



(2) ニゴレ3号炉廃滓場全景（東から）



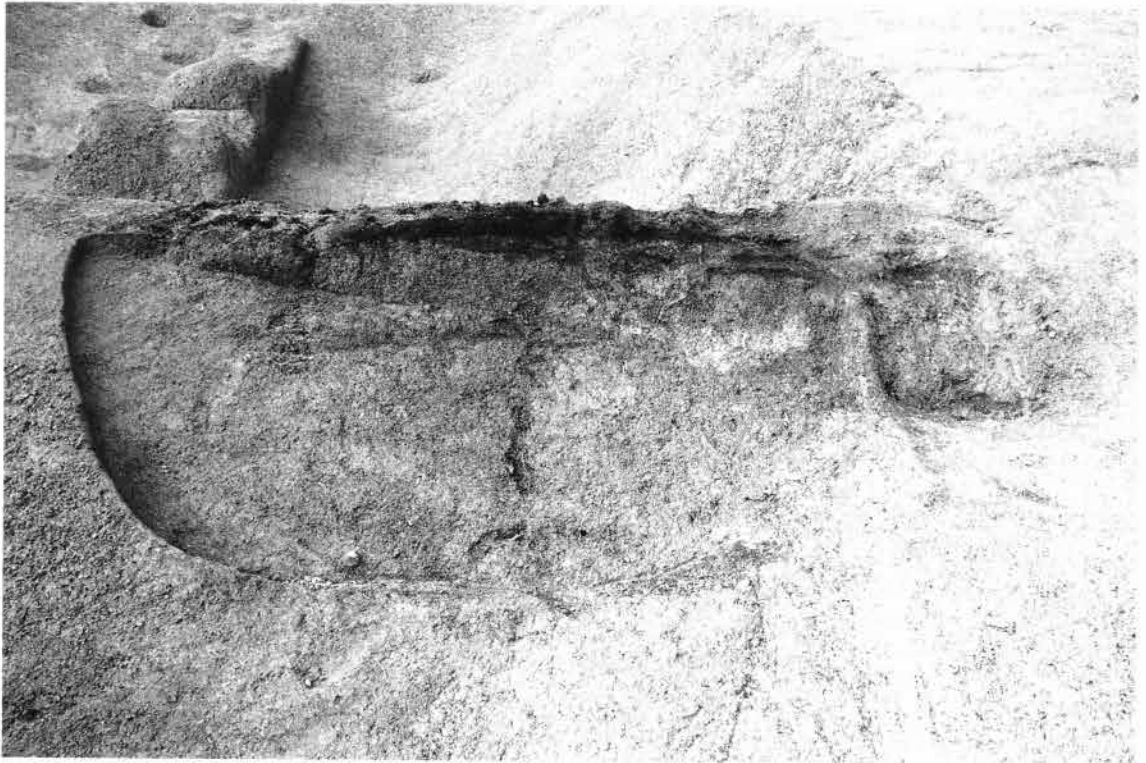
(1) ニゴレ3号炉廃滓場堆積状況(北東から)



(2) 祭祀遺構全景(南から)



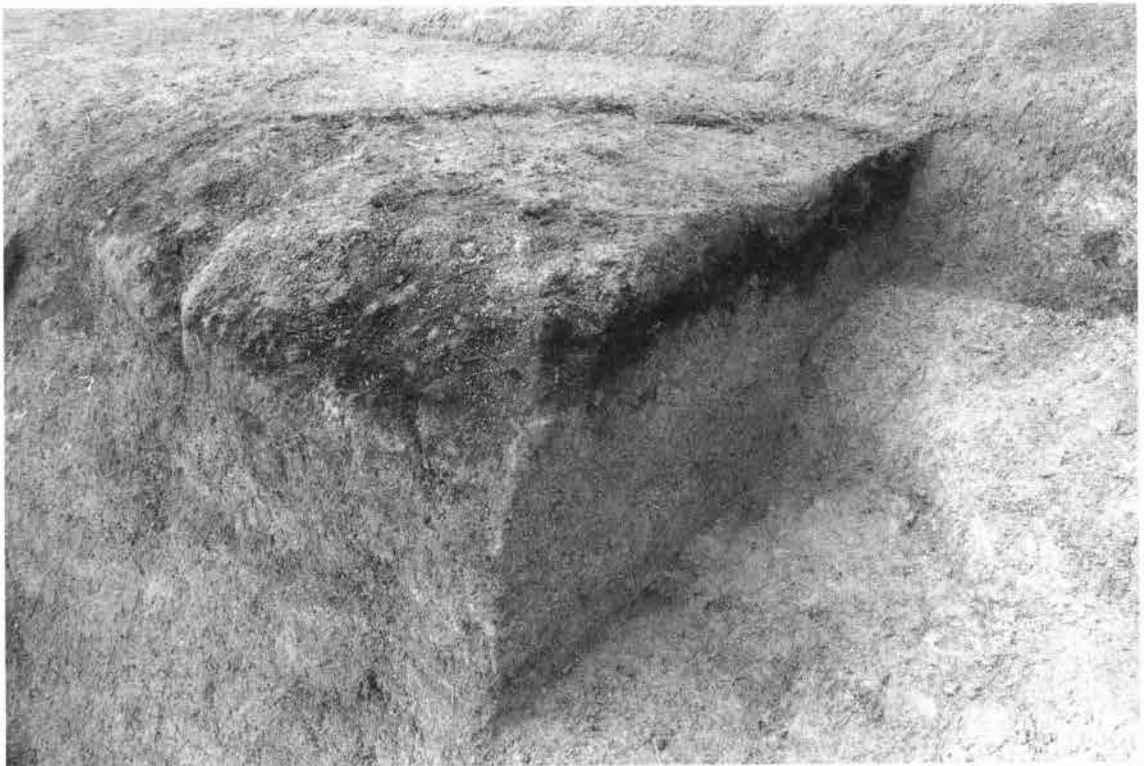
(1) 祭祀遺構近景（西から）



(2) 祭祀遺構近景（南から）



(1) 祭祀遺構内砂鉄堆積状況（西から）



(2) 祭祀遺構内鉄滓・鉄塊状遺物・炭堆積状況（南東から）





(1) 鳥取峠1号墳全景（西から）



(2) 鳥取峠1号墳主体部近景（西から）

図版第55 金谷古墳群（1号墓）



(1) 金谷1号墓調査後全景（上空東から）



(2) 金谷1号墓調査後近景（上空東から）



(1) 金谷1号墓調査前遠景（南から）



(2) 金谷1号墓墳頂部作業風景（北から）



(1) 東側テラス部調査後全景（北西から）



(2) 第1・第2主体部全景（北から）



(1) 第1主体部全景（北から）



(2) 第2主体部全景（北から）



(1) 第3主体部全景（南から）



(2) 第5主体部全景（東から）



(1) 第6主体部全景（東から）



(2) 第7主体部全景（東から）



(1) 第10主体部全景（北から）



(2) 第10主体部墓壇上鉄製品出土状況（西から）





(1) 第11主体部全景（北から）



(2) 第11主体部玉類出土状況（北から）



(1) 第14主体部全景（東から）



(2) 第12主体部全景（北から）



(1) 第15主体部全景（西から）



(2) 第17主体部全景（東から）



(1) 第16主体部土器棺蓋検出状況（西から）



(2) 第16主体部土器棺身検出状況（西から）



3



15



5



19



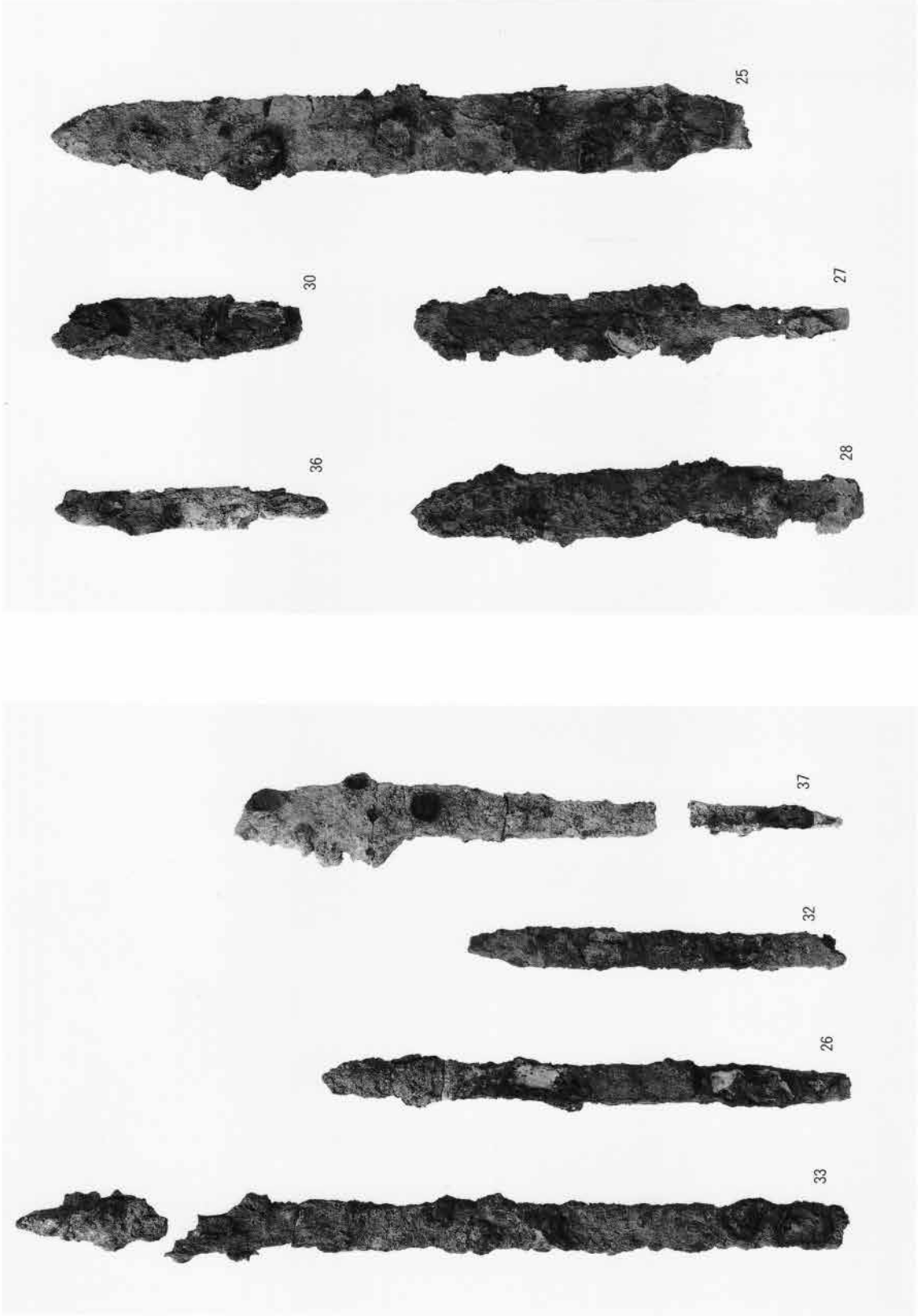
18



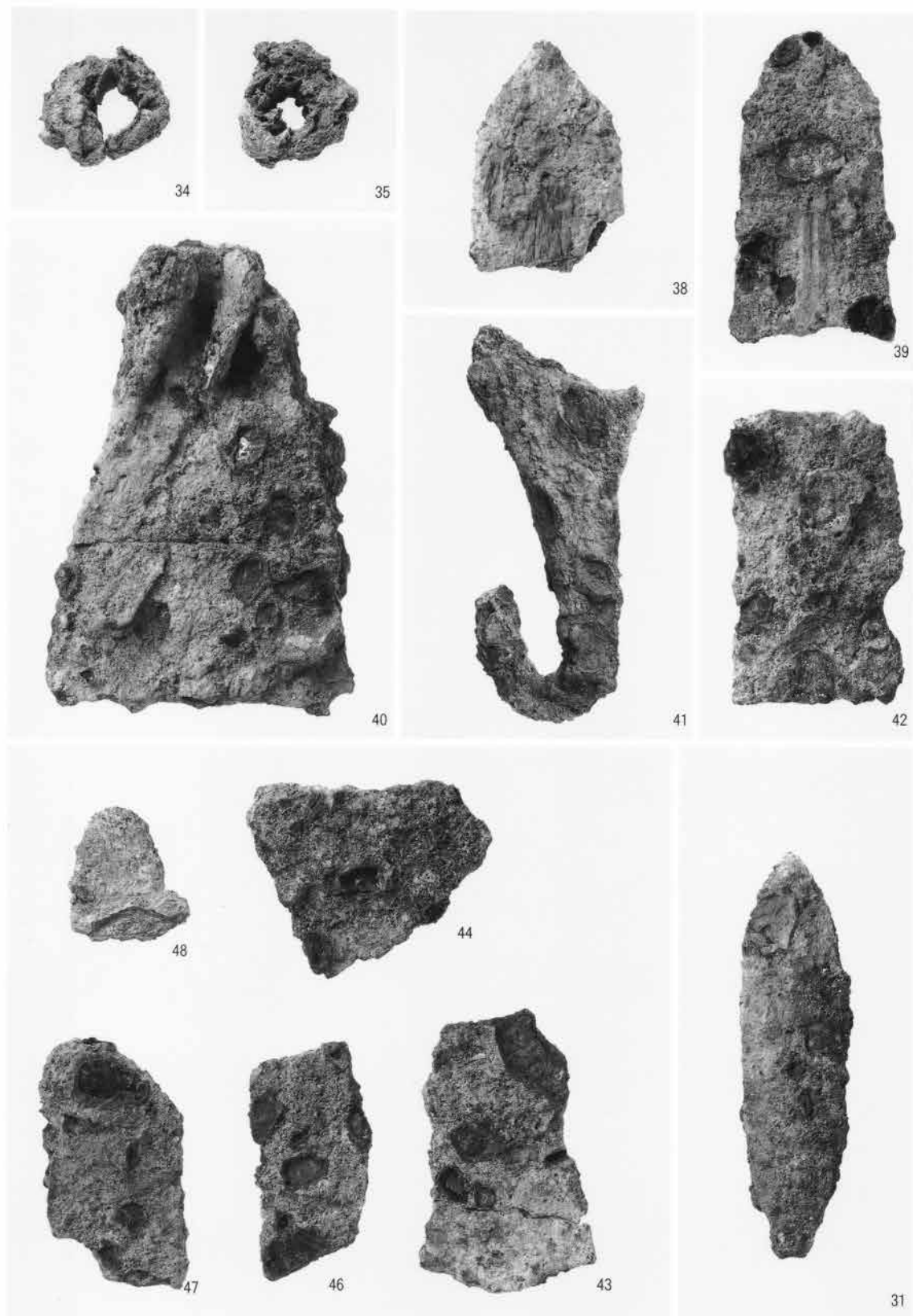
4



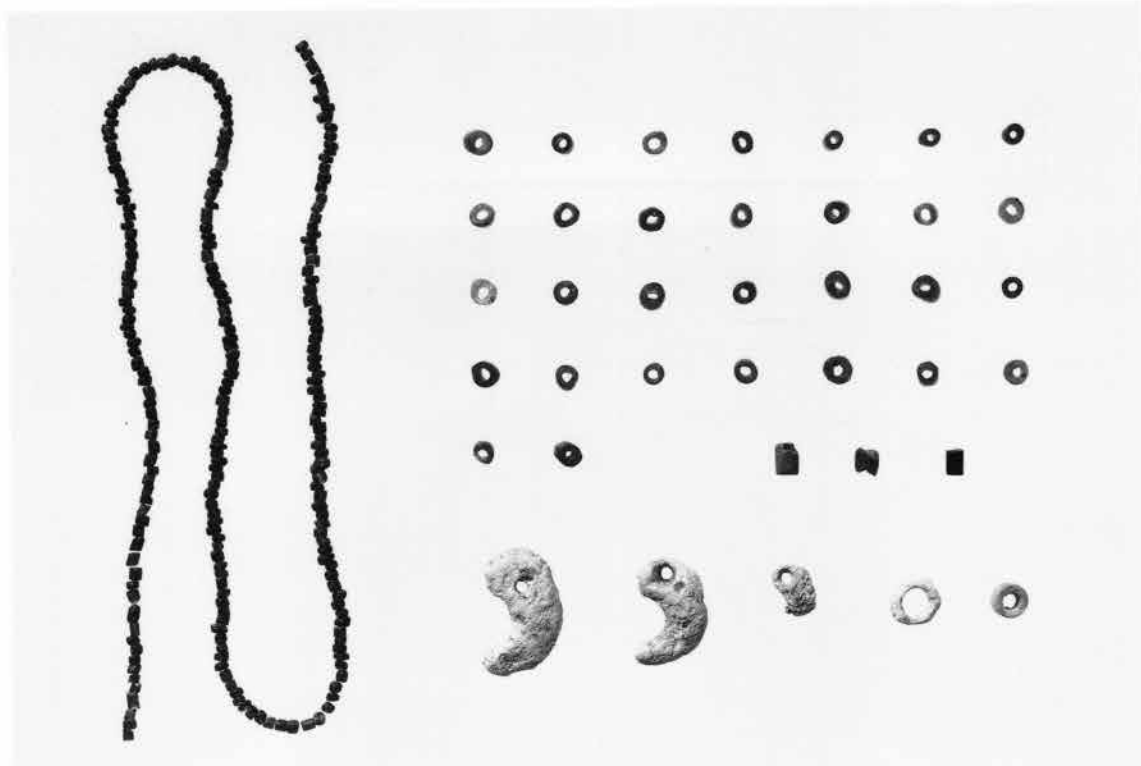
金谷1号墓出土遺物(2)－土器(2)－



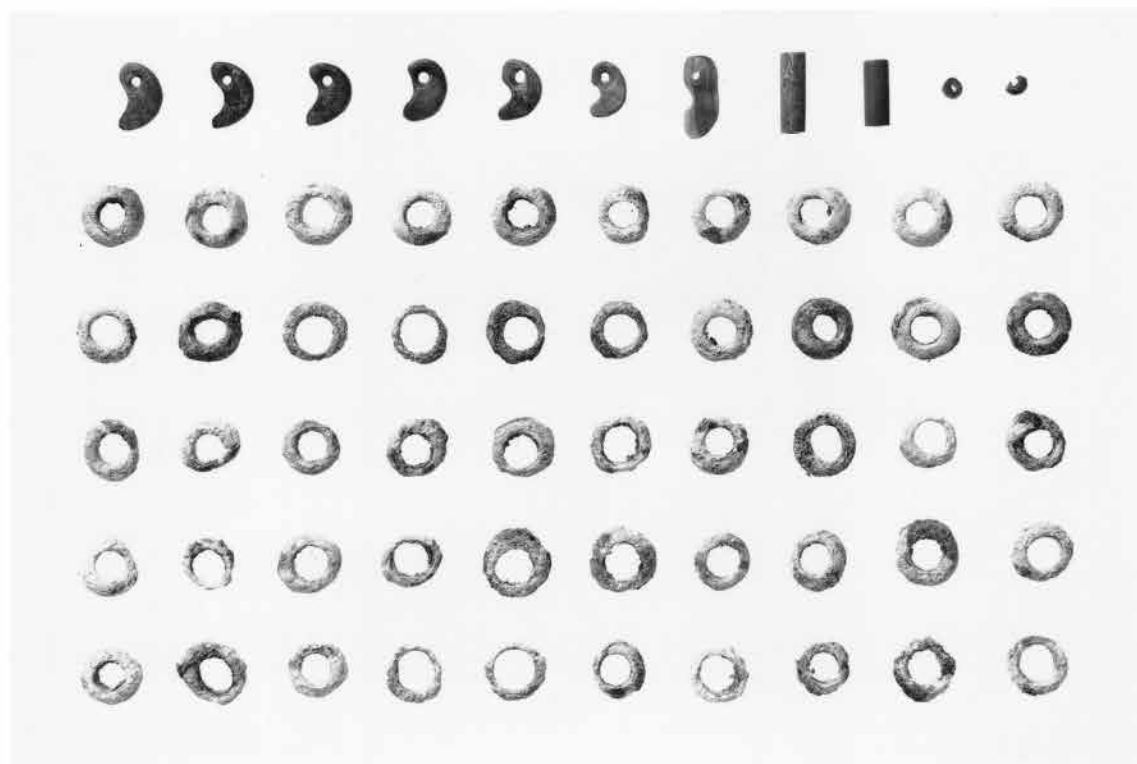
— 金谷1号墓出土遺物(3) — 鉄製品(1) —







(1) 第3主体部出土玉類

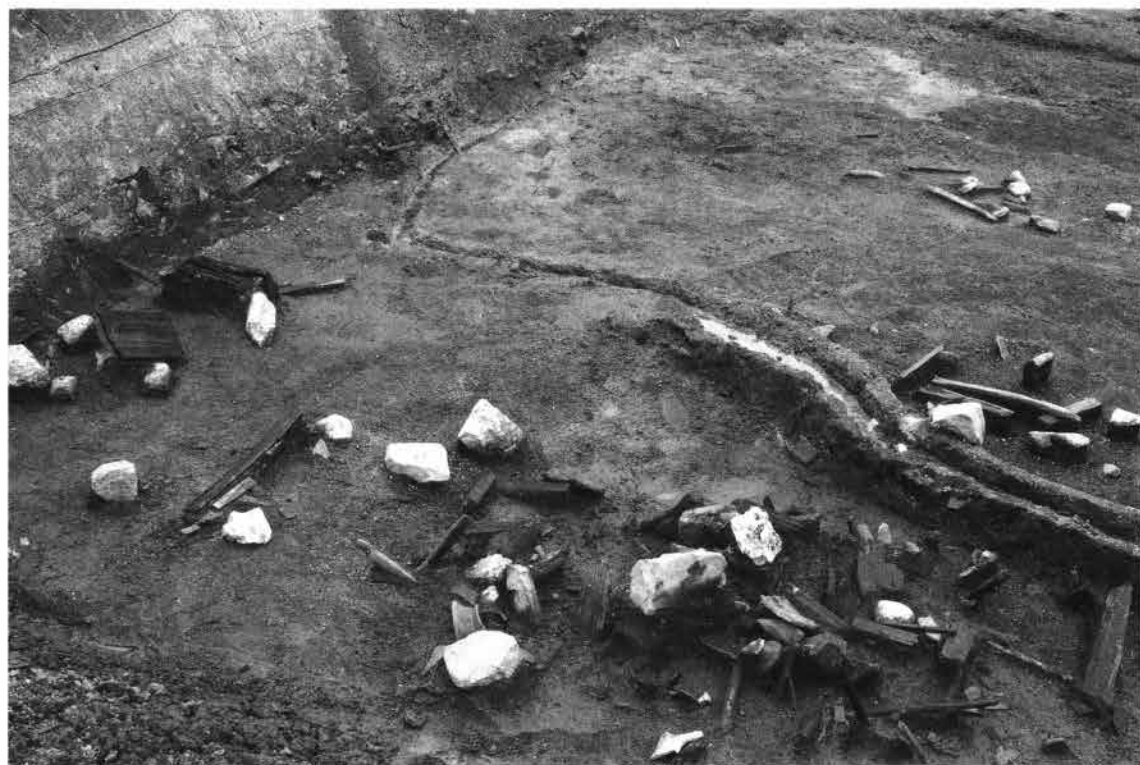


(2) 第11主体部出土玉類  
金谷1号墓出土遺物(5) - 玉類 -

図版第71 定山遺跡第4次



(1) 調査地全景（西から）



(2) A区落ち込み（SX 01）検出状況（南から）



(3) 下駄・須恵器出土状況



(4) 刳物出土状況



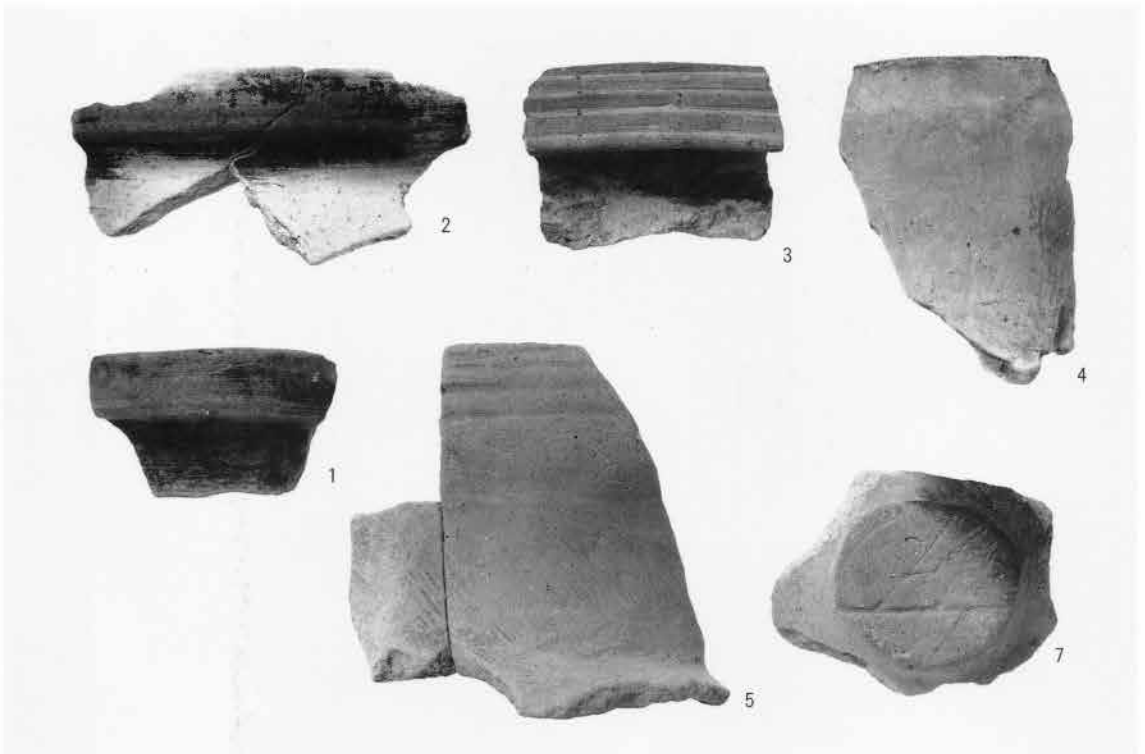
(1) 須恵器出土状況



(2) 須恵器高杯・木器出土状況



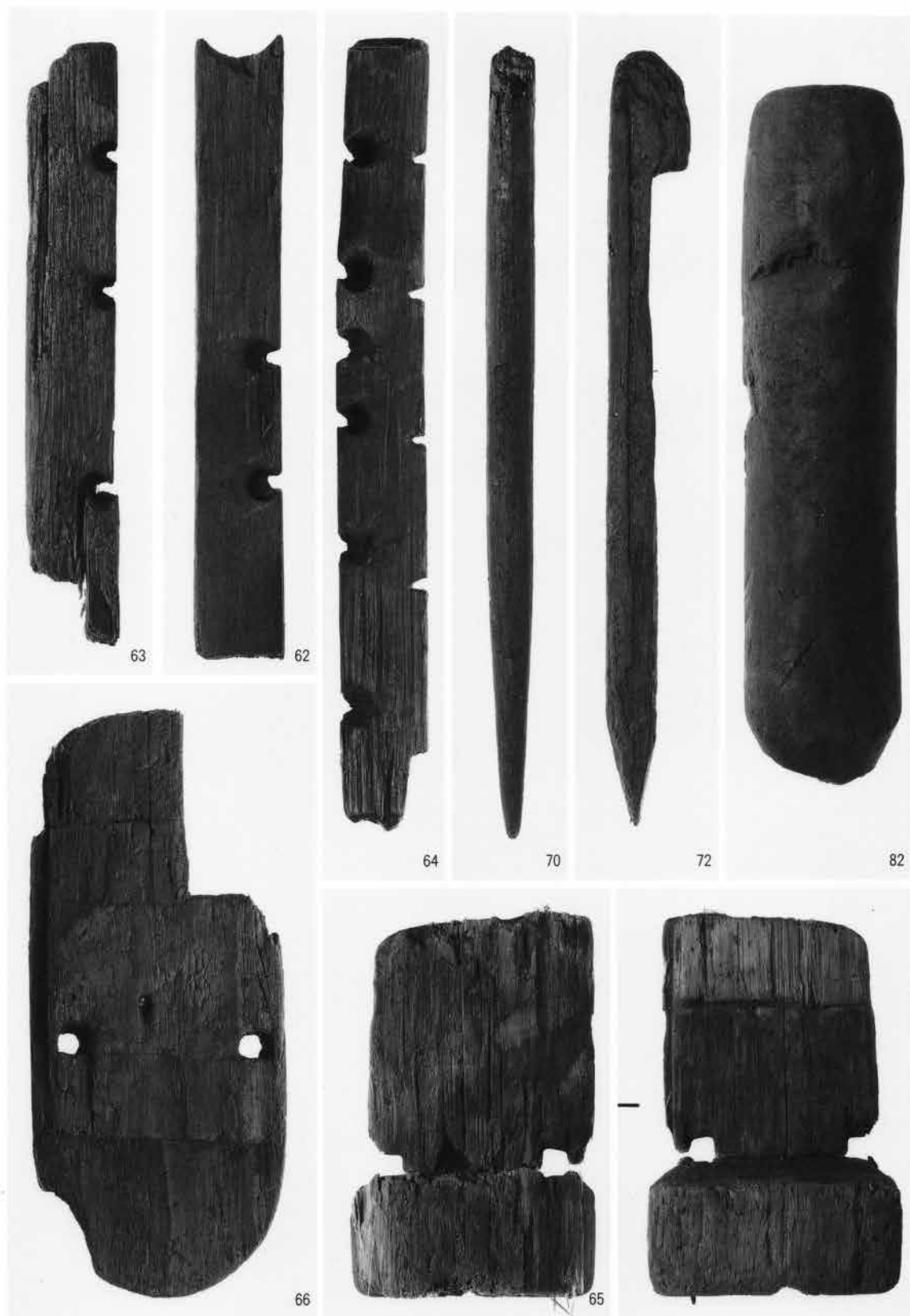
(1) C区完掘状況(東から)



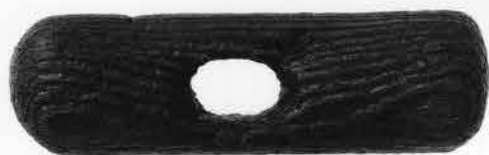
(2) 出土遺物(弥生土器)



出土遺物（須恵器・土師器）



出土遺物 (木器)



67



73



86



89



93



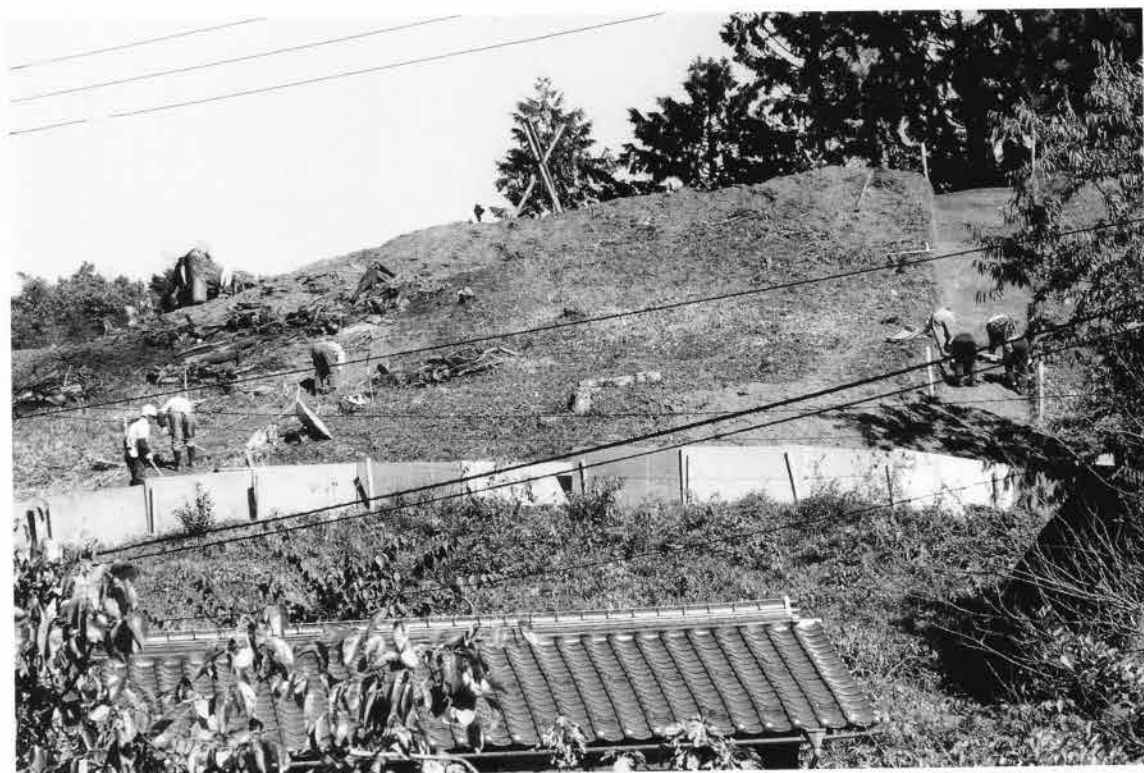
94



97



(1) 調査地遠景 (北西から)



(2) 調査地近景 (西から)





(1) 郭・虎口部検出状況（南西から）



(2) 虎口部検出状況（南西から）



(1) 虎口部掘削状況（西から）



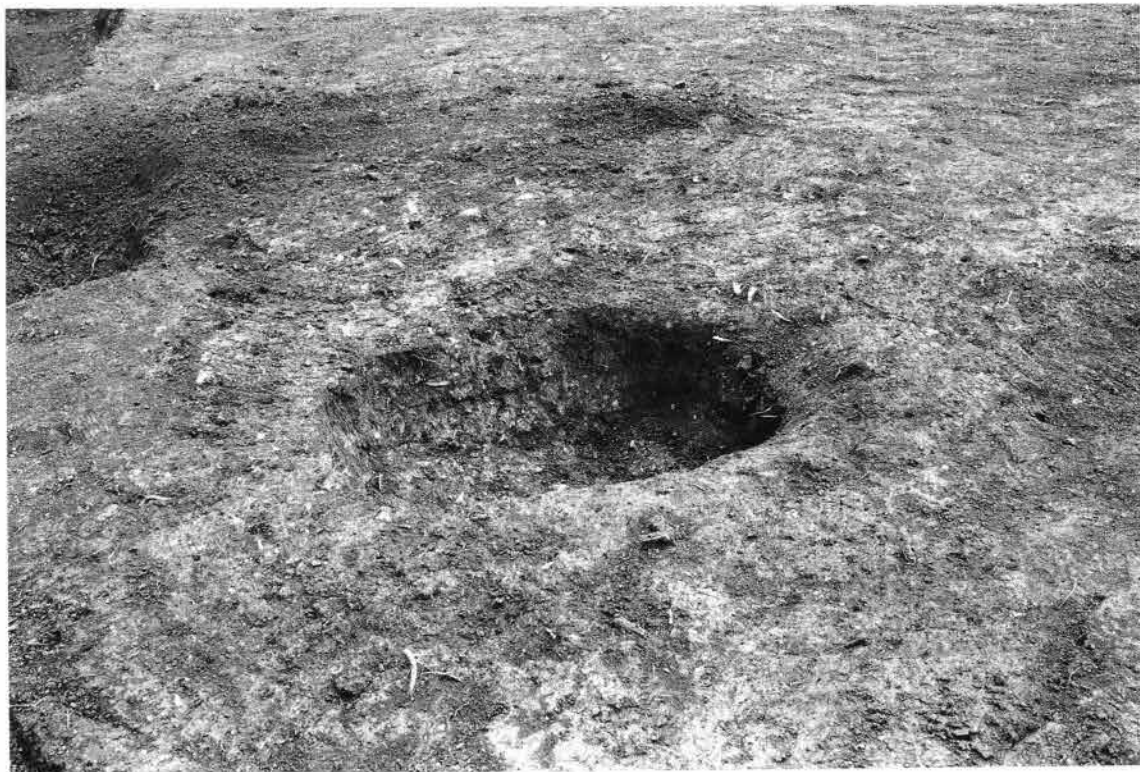
(2) 北斜面（郭）掘削状況（西から）



(1) 土塁・帯郭掘削風景（南西から）



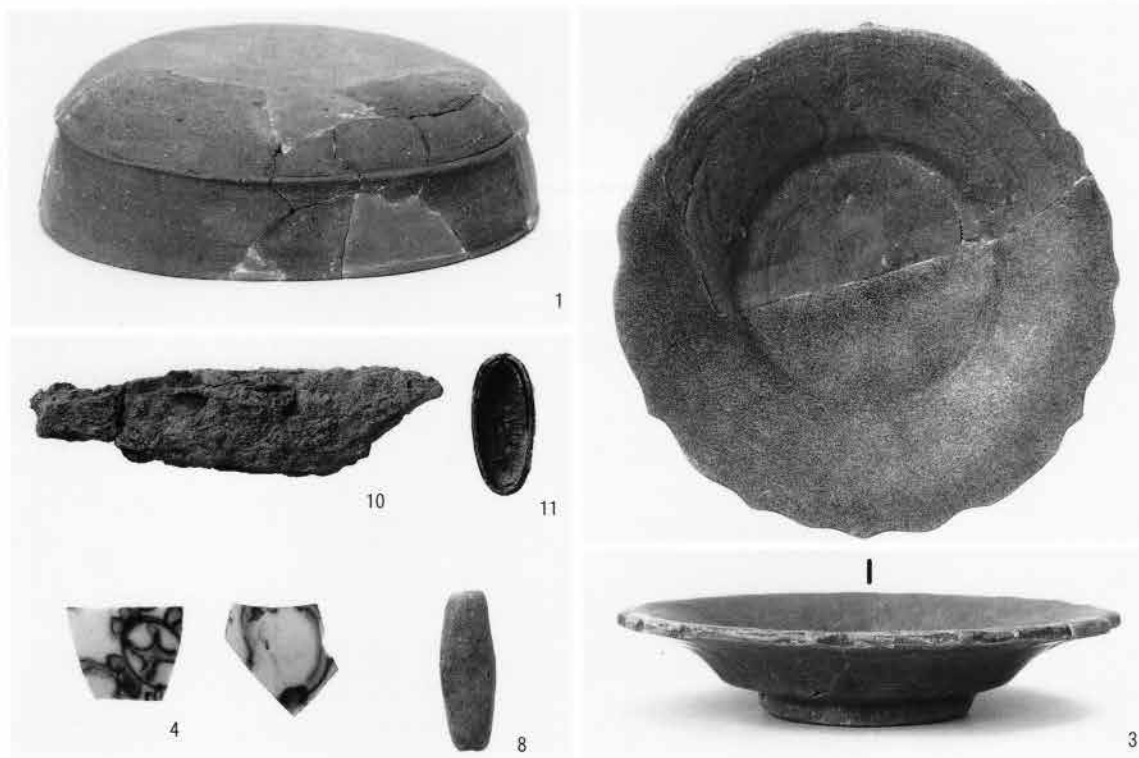
(2) 西斜面掘削状況（西から）



(1) 土坑 (SK 01) 検出状況 (東から)



(2) 土坑 (SK 01) 内染付出土状況



(1) 出土遺物



(2) 出土遺物



(1) 調査前全景 (西から)



(2) 調査地全景 (西から)



(1) 調査地全景（上が北）



(2) 調査地とその周辺（東から、右上隅が本丸）



(2) S A 401 (西から)

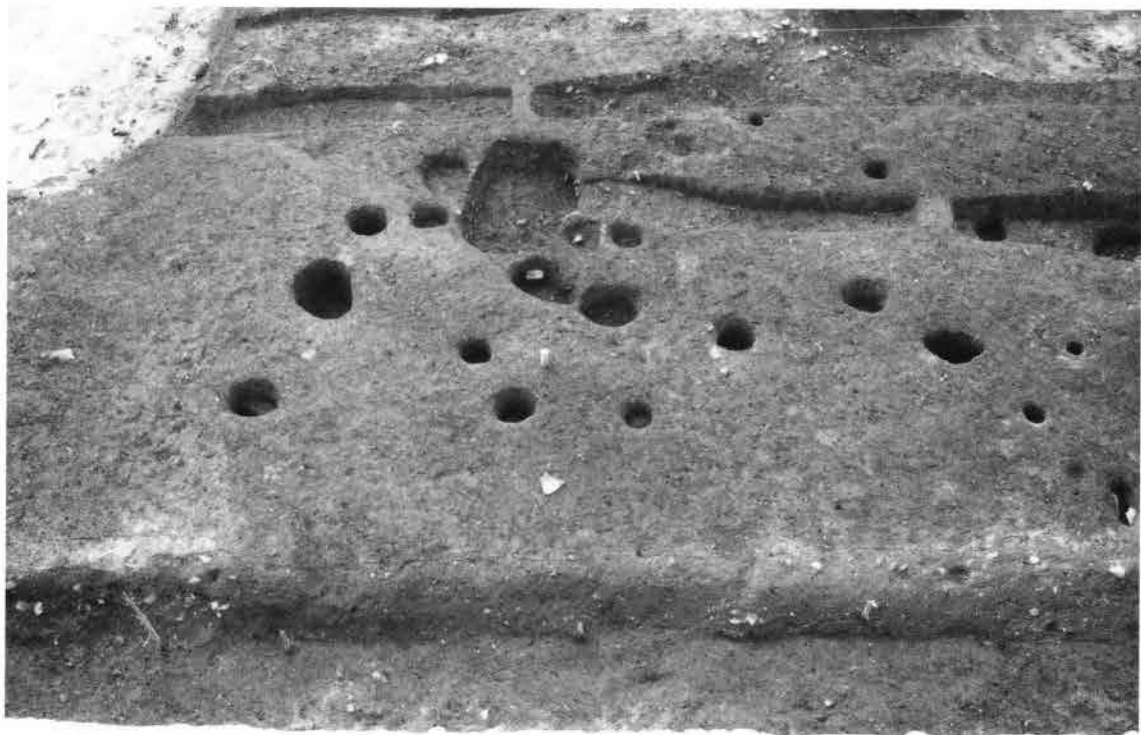


(1) 調査地とその周辺 (下が西)





(1) SD 143 (西から)



(2) SA 402・SD 403 (東から)



(1) 石列（東から）



(2) 石列断面（南から）



(1) SK 188 (南から)



(2) SK 65 (南から)



(1) SK 212 (北から)



(2) SK 212埋土断面 (東から)



(1) SK 212遺物出土状況（東から）



(2) SK 212遺物出土状況（北から）



(1) SK 211 (南西から)



(2) SK 329 (南から)



(1) SK 184 (東から)



(2) SK 356遺物出土状況 (南から)



1. 陶器碗 径7 cm · 高5 cm



4. 染付磁器碗 径9.6 cm · 高5.2 cm



2. 染付磁器碗 径8.4 cm · 高4.3 cm



5. 染付磁器碗 径9.7 cm · 高4.9 cm



7. 染付磁器碗 径9.6 cm · 高5 cm



6. 染付磁器碗 径9.6 cm · 高5.2 cm



3. 染付磁器碗 径10.5 cm · 高7 cm



8. 陶器碗 径12.2 cm · 高4.6 cm



10. 染付磁器碗 径10.8 cm · 高6.1 cm



9. 陶器碗 径12.0 cm · 高4.8 cm





11. 陶器碗 径9.3 cm · 高5.2 cm



16. 陶器鉢 径8.5 cm · 高5.2 cm



19. 染付磁器鉢 径14.7 cm · 高7 cm



17. 陶器鉢 径12.4 cm · 高6.5 cm



18. 陶器鉢 径12.6 cm · 高6 cm



12. 染付磁器蓋 径8.3 cm · 高2.5 cm



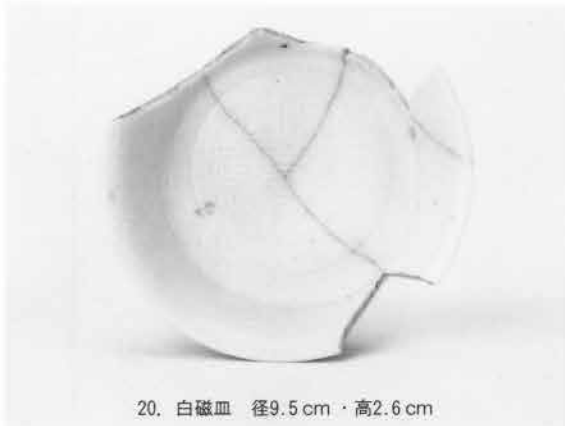
14. 染付磁器蓋 径8.5 cm



13. 染付磁器蓋 径8.3 cm · 高2.5 cm



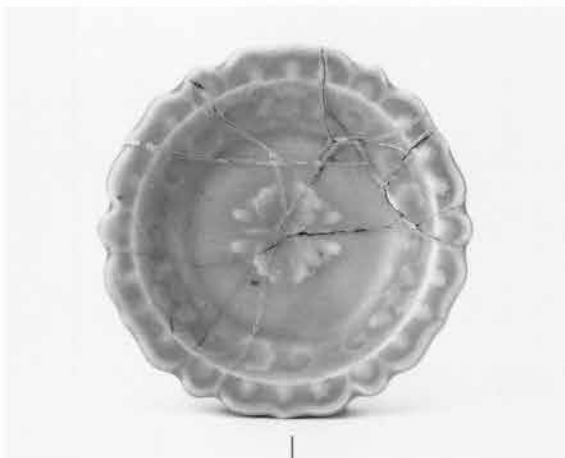
15. 陶器蓋 径8.4 cm · 高2.1 cm



20. 白磁皿 径9.5 cm・高2.6 cm



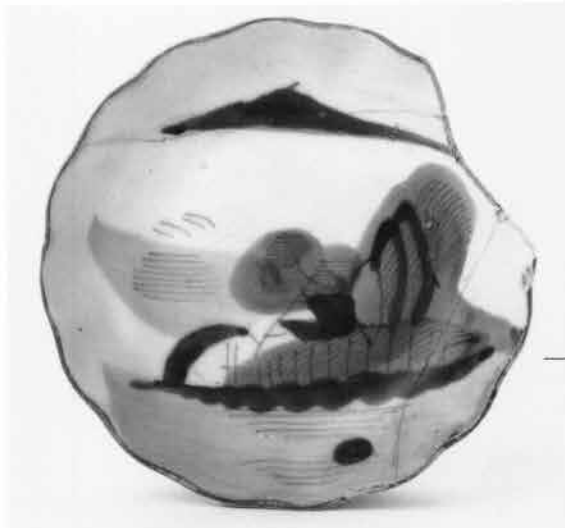
23. 陶器鍋 蓋 径12.3 cm・高3.8 cm  
身 径12.5 cm・高7.5 cm



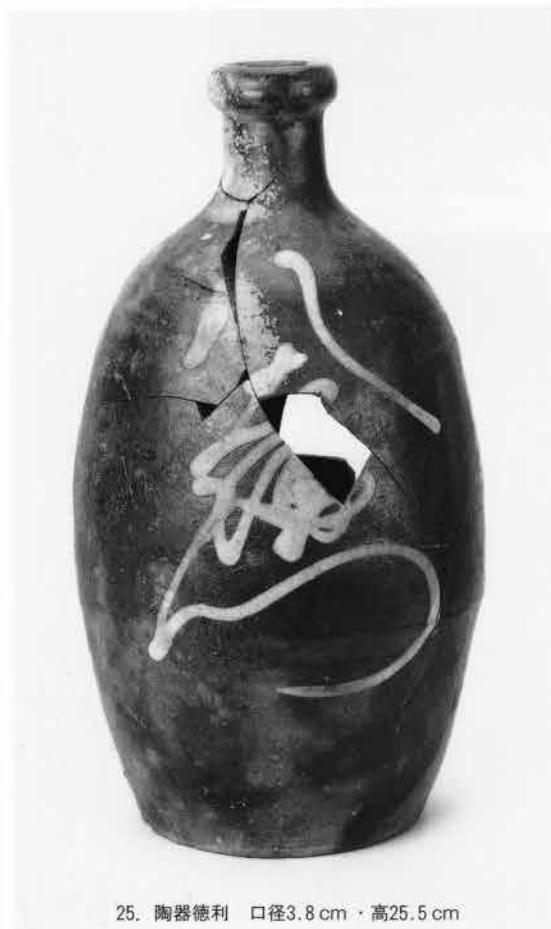
21. 青磁皿 径8.6 cm・高2 cm



24. 染付磁器急須 口径7 cm・高6 cm



22. 染付磁器皿 径14.7 cm・高4 cm



25. 陶器徳利 口径3.8 cm・高25.5 cm



28. 染付磁器小椀  
径6.3 cm・高4.9 cm



29. 染付磁器小椀  
径6.4 cm・高4.5 cm



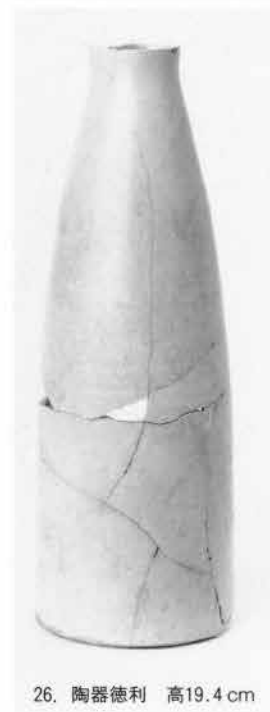
30. 染付磁器小椀  
径6.2 cm・高4.3 cm



31. 陶器鉢 径17.2 cm・高6.6 cm



32. 陶器摺鉢 径22.8 cm・高9.8 cm



26. 陶器徳利 高19.4 cm



27. 陶器徳利  
口径3.8 cm・高12.8 cm



33. 陶器碗 径8.9 cm · 高5.3 cm



37. 染付磁器仏飯器 径7 cm · 高4.2 cm



34. 染付磁器筒形碗 径8.1 cm · 高6.1 cm



38. 陶器香炉 径10.6 cm · 高4 cm



35. 陶器碗 径10.8 cm · 高6.7 cm



39. 染付磁器鉢 高台径9.2 cm



36. 陶器華瓶 高20 cm



40. 硯



41. 陶器碗 径9.5 cm · 高5.3 cm



42. 染付磁器鉢 径9.4 cm · 高6.7 cm



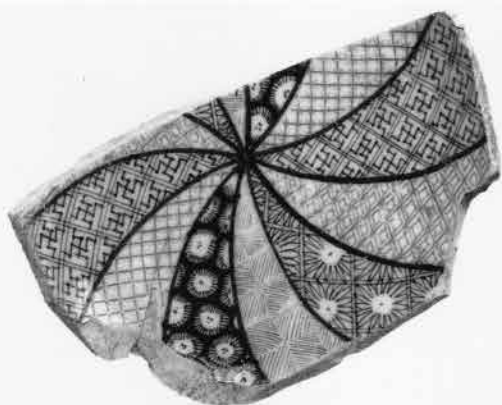
43. 染付磁器筒形碗 径7.5 cm · 高6.2 cm



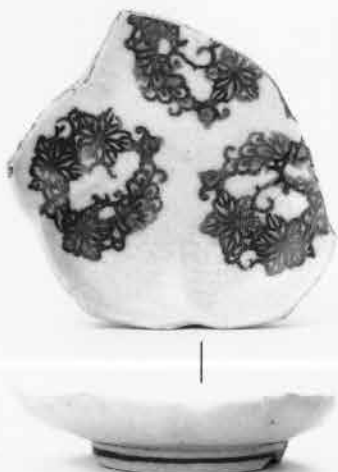
44. 染付磁器筒形碗 径9.6 cm · 高7.7 cm



45. 青磁華瓶 口径8.3 cm · 高16 cm



46. 染錦磁器皿 高台径8.6 cm



47. 染付磁器皿 高台径4.8 cm



48. 白磁皿 高台径5 cm · 高3.2 cm



50. 青磁鉢 径21.4 cm



49. 青花磁器鉢 高台径6.8 cm



51. 陶器皿 径12 cm · 高1.9 cm



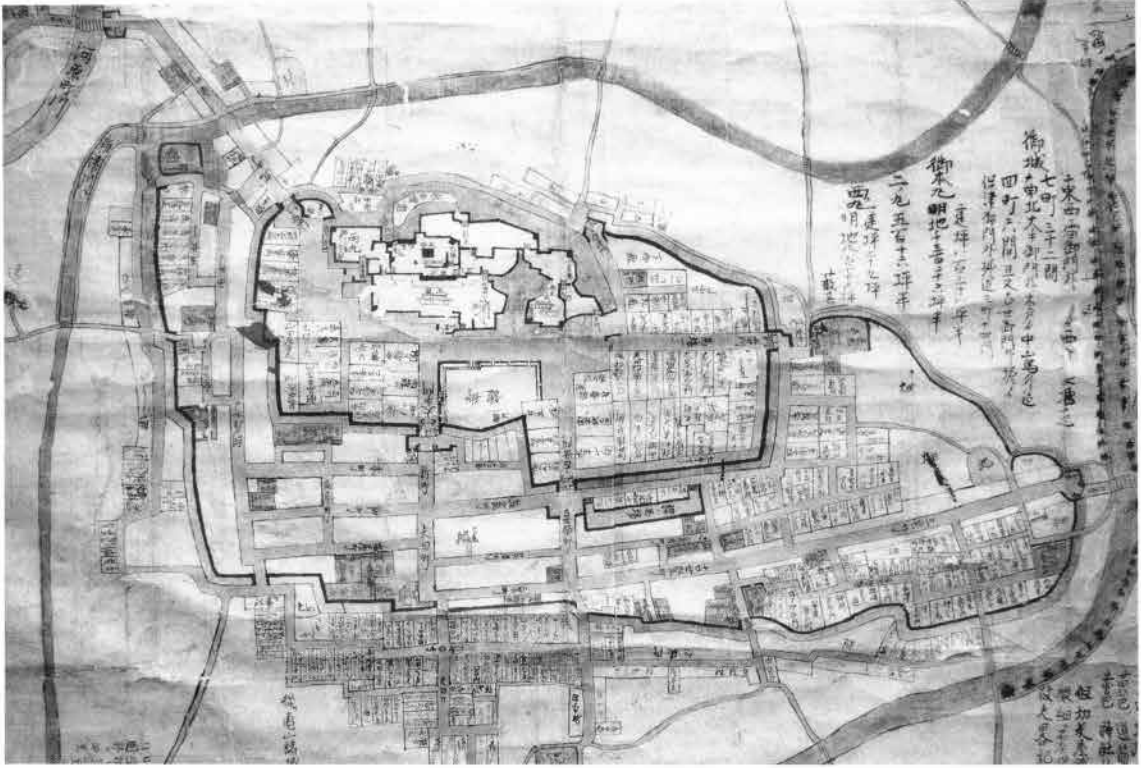
53. 軒丸瓦



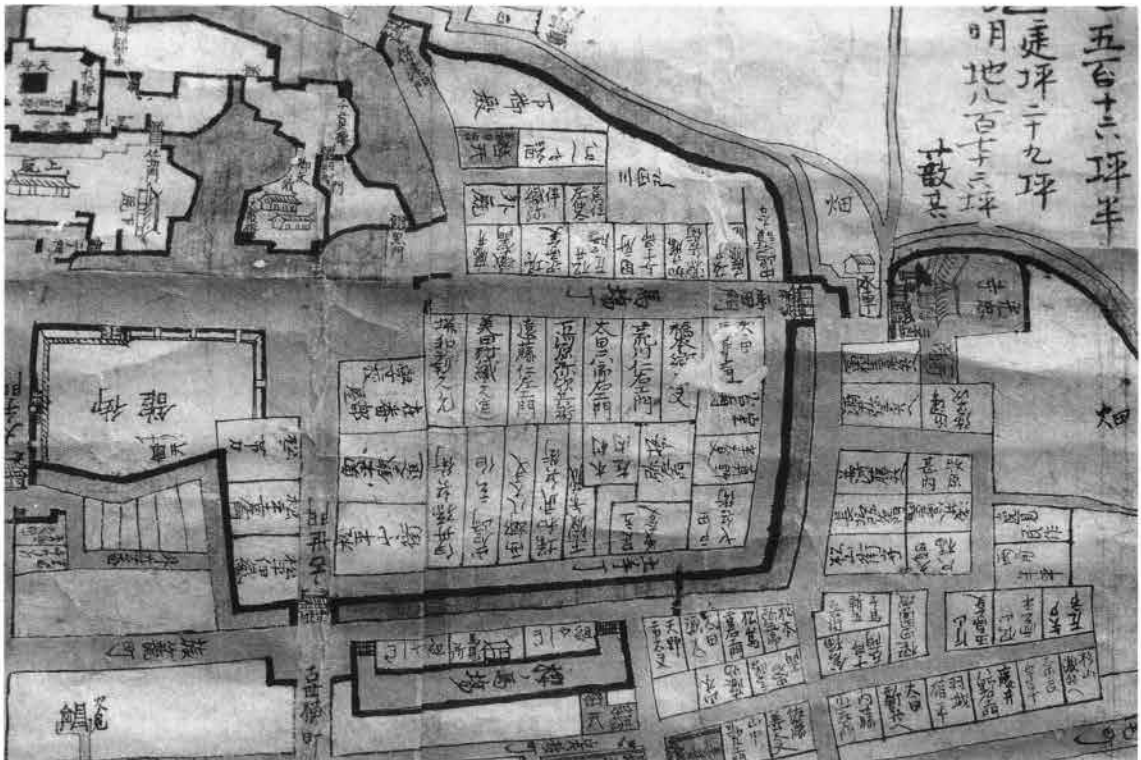
52. 掛け瓦



54. 硯



(1) 山陰丹府桑田亀山図(寛政5年)永光 尚氏蔵



(2) 山陰丹府桑田亀山図部分



(1) 新御殿門（現亀岡市立千代川小学校校門）



(2) 家老屋敷門（亀岡市千歳町毘沙門）





(1) 土塁 (矢田町、西から)



(2) 土塁断面 (京町、北東から)



(1) 1トレンチ調査前近景 (南から)



(2) 2トレンチ調査前近景 (南から)



(1) 1トレンチ SK 05土壙墓



(2) 1トレンチ SK 19出土土器（瓦器碗・土師皿）



(1) 1トレンチ検出遺構（南から）



(2) 1トレンチ検出遺構（東から）



(1) 1 トレンチ SD 474102出土土器



(2) 1 トレンチ SD 474102 (西から)



(1) 2トレンチ SB 474201 (南から)



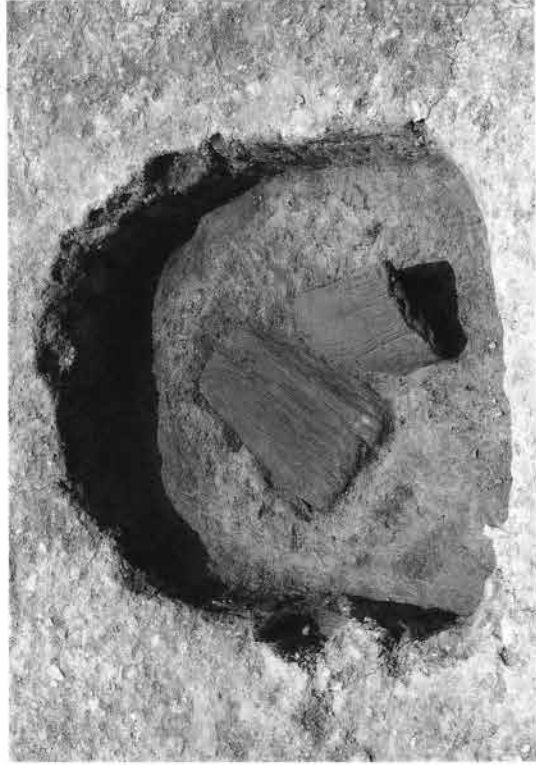
(2) 2トレンチ SB 474201 柱穴15 (南から)



(3) 2トレンチ SB 474201 柱穴15 (北から)



(3) 2トレンチ SB 474201 柱穴6 (北から)



(4) 2トレンチ SB 474201 柱穴7 (北から)



(1) 2トレンチ SB 474201 柱穴2 (南から)



(2) 2トレンチ SB 474201 柱穴2 (西から)



(3) 2トレンチ SB 474201 柱穴11 (東から)



(4) 2トレンチ SB 474201 柱穴14 (東から)

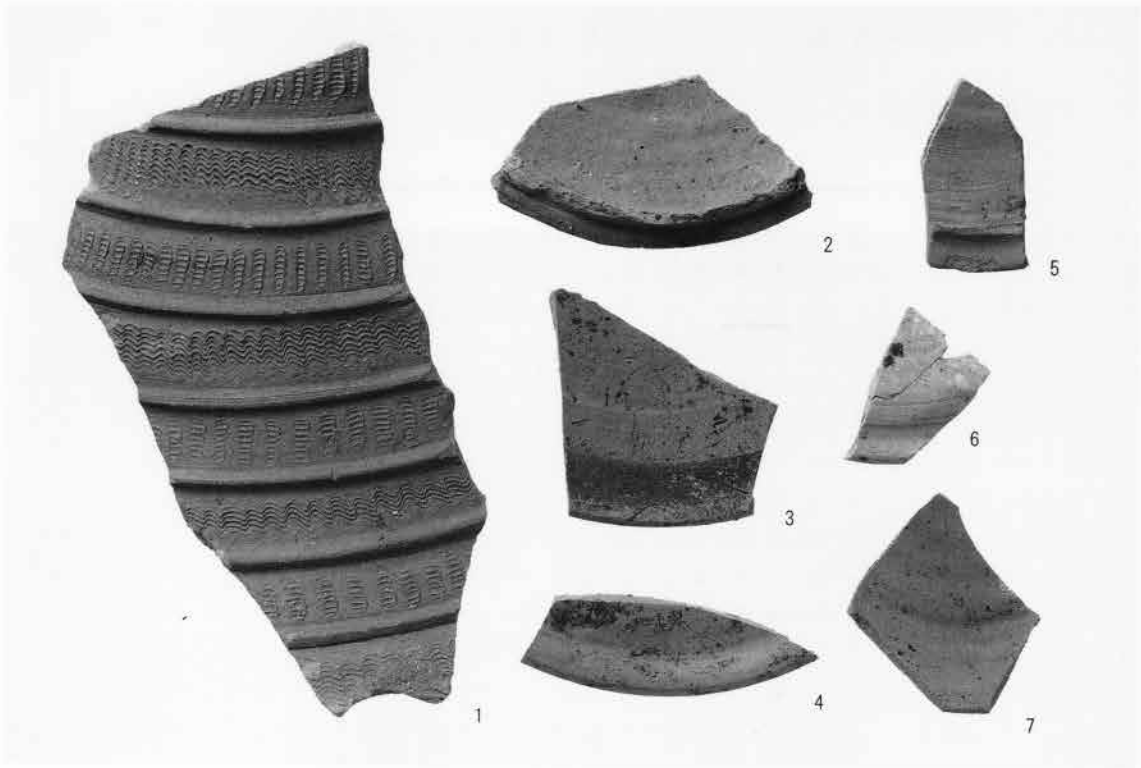


(1) 2トレンチ SB 474201 柱穴8

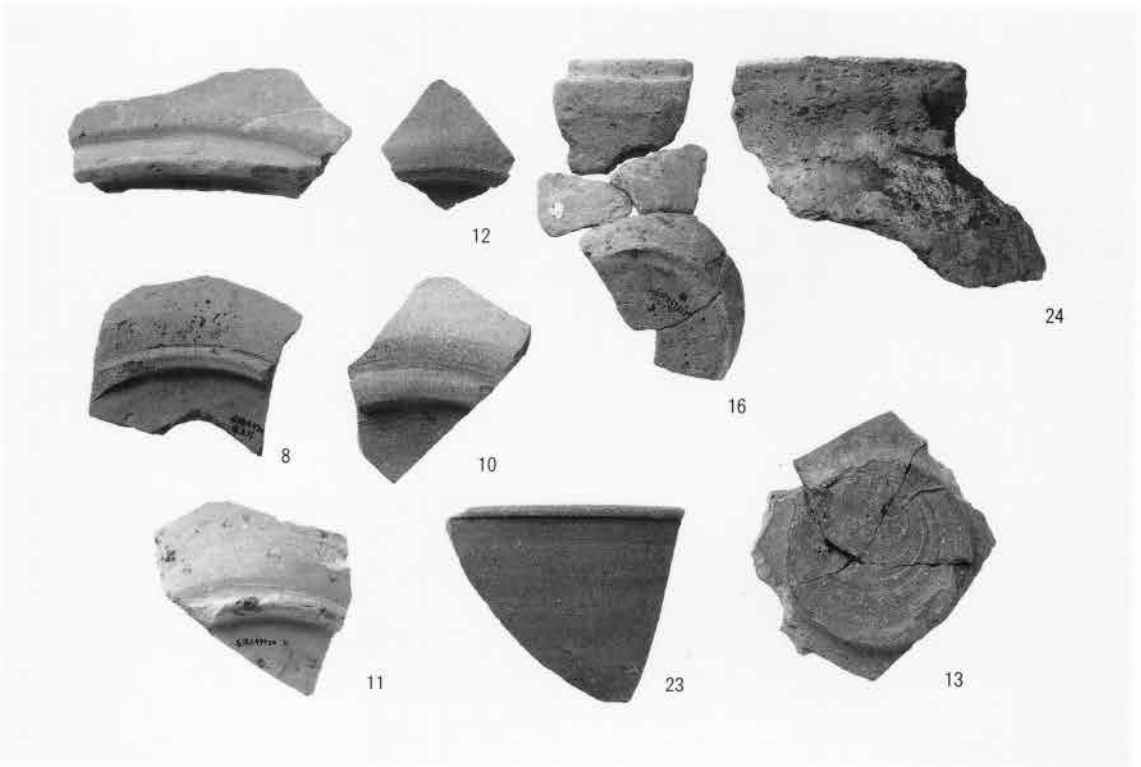


(2) 2トレンチ SB 474201 柱穴10 (北から)

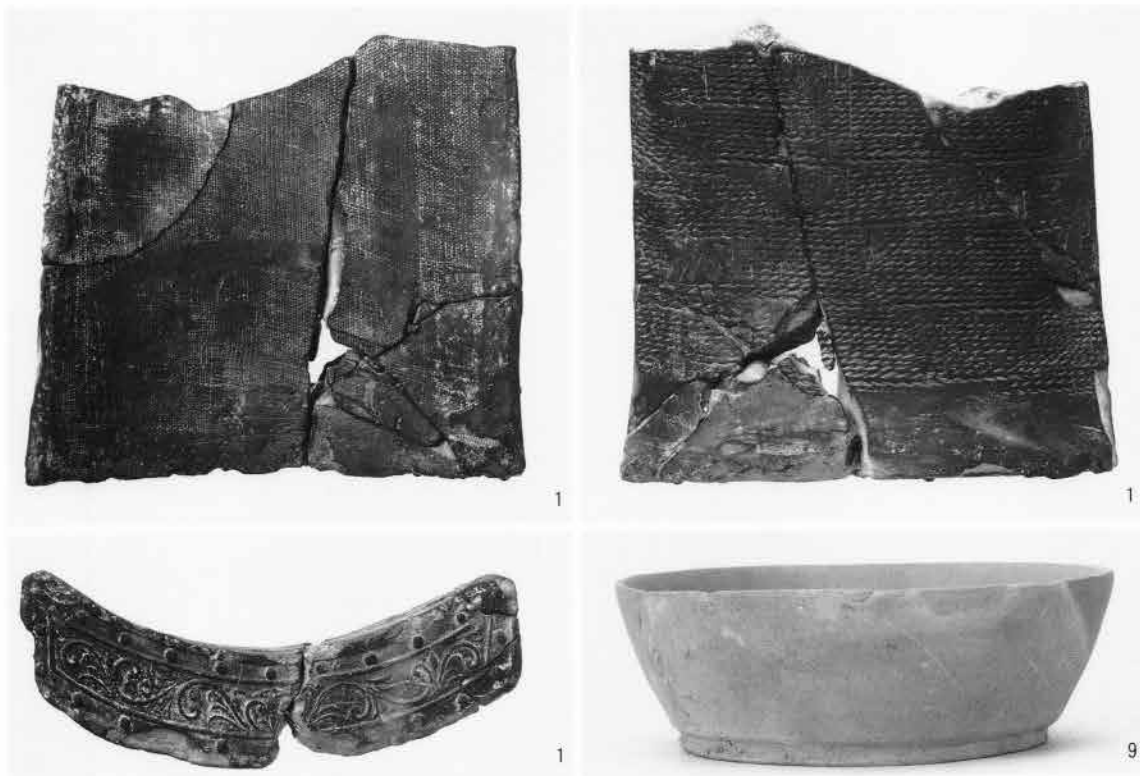




(1) 出土遺物 (土器)(1)



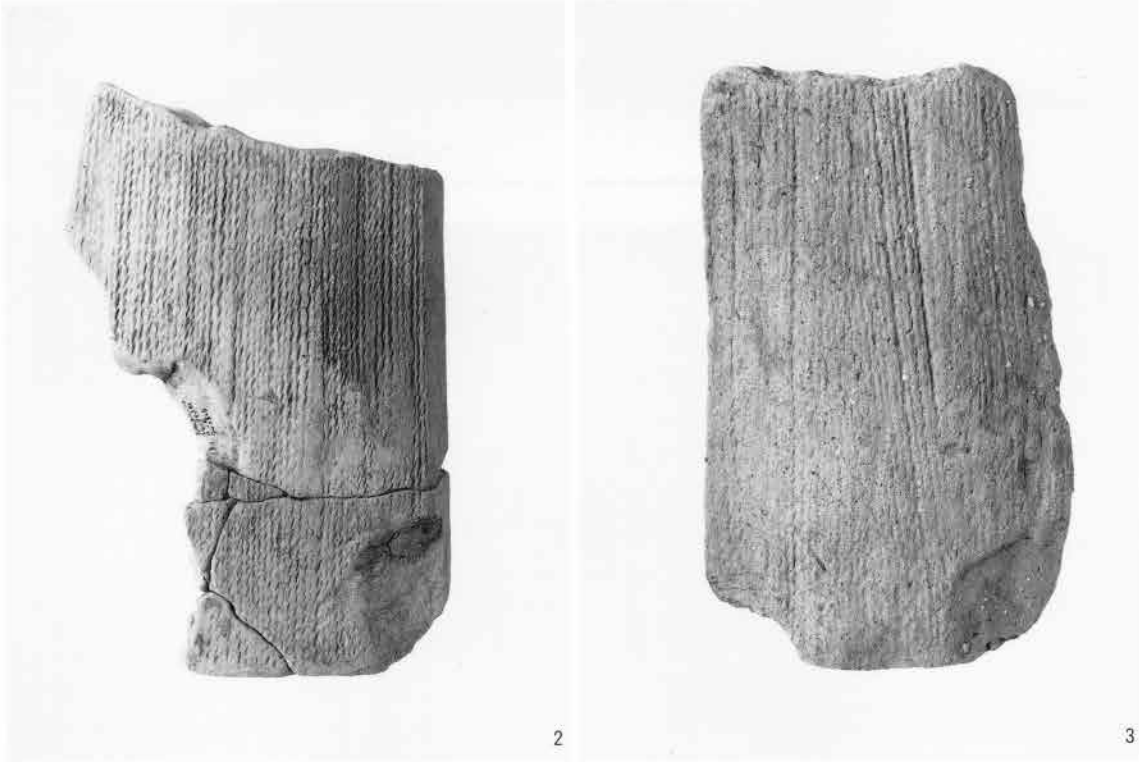
(2) 出土遺物 (土器)(2)



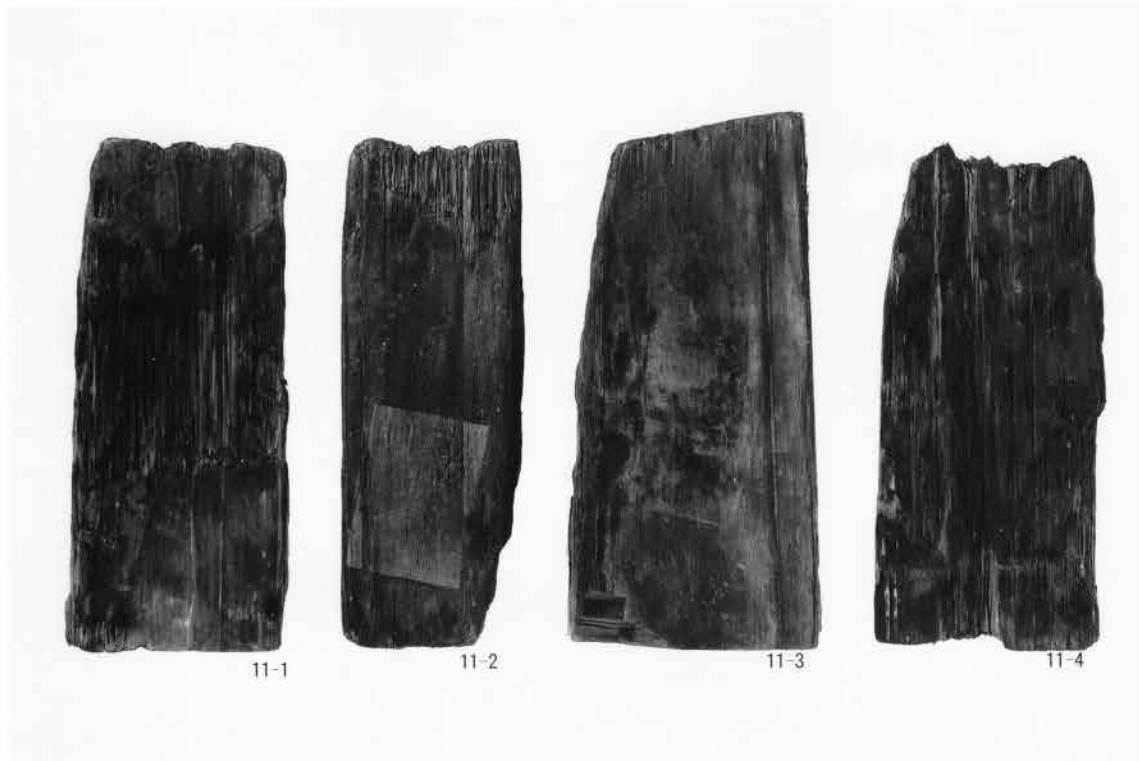
(1) 出土遺物 (軒平瓦・土器)(3)



(2) 出土遺物 (土器)(4)



(1) 出土遺物 (平瓦) (5)



(2) 出土遺物 (礎板) (6)

報告書抄録

ふりがな								
書名								
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査概報							
シリーズ番号	66							
編著者名	河野一隆・筒井崇史・岡崎研一・石崎善久・黒坪一樹・引原茂治・尾崎昌之・野島 永							
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617 向日市寺戸町南垣内40-3 TEL 075(933)3877							
発行年月日	西暦 1995 年 3 月 27 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うえのこふんぐん 上野古墳群	たけのぐんたん ごちょうおおあ ざみやけこあざ うえの 竹野郡丹後町大 字三宅小字上野	502		35° 42' 57"	135° 6' 21"	19930719 ～ 19950224	1,200	農道整備事 業
たきたにいせき 滝谷遺跡	たけのぐんたん ごちょうみやけ 竹野郡丹後町三 宅	502	62			19941007 ～ 19950224	500	農道整備事 業
いしがはらこ ふんぐん 石ヶ原古墳群	たけのぐんたん ごちょうみやけ 竹野郡丹後町三 宅	502				19941007 ～ 19950224	250	農道整備事 業
にごれいせき ニゴレ遺跡	たけのぐんやさ かちょうあざ とっとり・きば し 竹野郡弥栄町字 鳥取・木橋	503				19940418 ～ 19950224	5,400	農業関連施 設建設
とっとりとう げ1ごうふん 鳥取峠1号墳	たけのぐんやさ かちょうあざき ばし 竹野郡弥栄町字 木橋	503				19940418 ～ 19950224	300	農業関連施 設建設

かなや1ごう ぼ 金谷1号墓	なかぐんみねや まちょうあざま すとめこあざか なや 中郡峰山町字鱒 留小字金谷	481				19940425 ～ 19940902	350	国道緊急防 災工事
じょうやまい せきだい4じ 定山遺跡第4 次	よさぐんいわた きちょうあざゆ みのき194ほか 与謝郡岩滝町字 弓木194他	462	16			19940622 ～ 19940723	400	住宅建設
ひきちじょう あと 引地城跡	かさぐんおおえ ちょうやつ 加佐郡大江町矢 津	441	59			19941007 ～ 19941122	500	道路建設
たんばかめや まじょうあと だい4じ 丹波亀山城跡 第4次	かめおかした こせちょう1 ちょうめ 亀岡市北古町 1丁目	206	123			19940921 ～ 19950228	1,700	学校建設
ながおかしよ うあとうきよ うだい474じ 長岡京跡右京 第474次	ながおかしょう してんじん1 ちょうめ13- 7, 15-8 長岡京市天神1 丁目13-7, 15 -8	209	91			19940706 ～ 19940905	240	街路改良工 事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上野古墳群	古墳2基	古墳～飛鳥	横穴式石室2基、外 護列石1	土師器・須恵器・ 鉄製品・玉類	
滝谷遺跡	集落跡	古墳中期	竪穴住居、掘立柱建 物	弥生土器・古式土 師器	
石ヶ原古墳群	古墳	古墳時代後期	古墳	須恵器・土師器	
ニゴレ遺跡	生産遺跡	平安	製鉄炉4基・住居跡 21基・炭窯3基	須恵器・土師器・ 木器・鉄滓	
鳥取峠1号墳	古墳	古墳	古墳	なし	
金谷1号墓	墳墓	弥生	主体部多数	弥生土器	
定山遺跡第4 次	集落跡	弥生～奈良	流路	弥生土器・石器・ 須恵器・土師器・ 木製品	
引地城跡	山城跡	室町(戦国時代末)	郭・帯郭・土塁	須恵器・陶磁器	
丹波亀山城跡 第4次	城館跡	江戸	溝・土坑・柵列・石 列	近世陶磁器・瓦	
長岡京跡右京 第474次	都城、集落	平安・鎌倉	溝・土坑・建物跡	土器・瓦・礎板	

京都府遺跡調査概報 第66冊

平成7年3月27日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究  
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3  
Tel (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入  
Tel (075)441-3155 (代)